

名 称	陸奥宗光文書
標 題	在朝鮮国某外国人ヨリ某友人ニ与テル書

分 類 番 号	
	74
	18

157-66

国立国会図書館

注 記	
--------	--



其一

在朝鮮國某外國人より某友人與ハル書

千八百九十四年十二月十六日仁川ヨリ親愛ト某君ニ呈ス

貴下、朝鮮事情即チ一方兵テハ日清兩國ニ對シ他方ニ於テハ西洋諸國ニ對シ朝鮮ノ關係ニ軌キテ一文ヲ書キ送ランコト余ニ求メ給ヘリ

貴下知給フ如キ朝鮮國現時ノ狀態ハ日清兩國ノ衝突ニヨリ生ミタル結果ナリ然レドモ其衝突ノ影響者ハ終ニ何クニ歸着ソキカ其疑問ニ對シテハ猶豫ナラズ、如ク答ニテ得可シ曰ク東洋ニ起ル可キ種々ノ變化ノ中朝鮮ハ全然其独立ヲ恢復スノ一事ハ確實ニシテ疑フ可カラズト

此問題ニ關シ八月四日ハ北京及天津時事ハ甚タ有力ナル

一文掲載を恐るゝ貴下へ未だ此文ヲ讀ミ終ハケリシナラン  
其一節ニ曰ク

朝鮮二十萬ノ人口ニ糖格蘭ノ二倍半ニ當ル面積ト莫  
大ニ礦山及農業ノ富澤ヲ有スル拘ラス有毫モ自國ノ  
意志ヲ以テ自國前途ヲ左右スル能ハズ今面ノ事件  
ノ破裂衣セシ際吾人ハ清國カ朝鮮ヲ屬邦トスル權利  
ヲ主張スルヲ聞キ日本カ朝鮮ニ於テ商業上ノ利益ヲ  
保護セドモ聞キ露西亞カ朝鮮ノ北境於テ英國カ  
太平洋ニ於テ各々利害ノ關係ヲ有スルヲ聞キ英  
露ノ利害ハ未ダ表面ニ現出セズ隨而未ダ大ニ世人  
ニ上ラズト雖實ハ今回ノ事件ニ於テ重大ノ要素ナ

ナリ諸外國ハ以テ如ク朝鮮ニ對スル權利ヲ主張シ朝鮮ニ於ケル  
 利害ヲ保護セリトスルニ諸外國ノ權利ヨリモ重大ナルコト千倍電  
 ナル朝鮮人民自ラ有ル權利及壓制ヲ脱スルノ權利  
 殆ト世人ノ念頭ニ浮ヒタルコトナリ

蓋シ從來支那ノ朝鮮ニ對スル不確實ナル關係ハ有事  
 日ニ於テ朝鮮ニ干涉スルコト多キニ過キ無事日ニ於テハ之ヲ  
 放棄スルニ顧ミガレヨリ越シテ日本ノ苦情ハ暫ク措テ伺ハザルモ  
 支那ノ對韓策ガ朝鮮人民ノ不幸ヲ醸シタルハ明ナリ  
 若シ支那ニシテ朝鮮ノ内政ヲ整理スルコト得ハ則テ可ナリト  
 雖モ然ラヤハ全ク之ニ干涉セサルニ如カス支那ノ干涉ナクハ  
 朝鮮人民自ラ舊來ノ壓制政府ヲ倒シテ新政府

ヲ立ルカ或ハ舊来ノ政府人民ノ意ヲ迎ヘテ其壓制ヲ和  
ルカ孰レニシテモ朝鮮ノ政治ハ整理ノ緒ニ就キシナラニ然  
ルニ朝鮮ノ人民壓制ニ堪ヘズシテ蜂起スル友邦軍ハ  
朝鮮政府ヲ助ケテ之ヲ鎮壓シ一旦平穩ニ歸セハ之ヲ  
善業ニシテ内政ノ整理ヲ顧ミス朝鮮ノ秩序紊亂ヒモ  
怪ルニ足ラサルナリ今ヤ朝鮮カ輿地圖ノ上ニ於ケル地位ノ重  
要ナルヨリ世所引國ハ其内政ノ紊亂セルヲ默過ス能ハズ  
朝鮮ノ東洋ノ埃及ナリト既ニ世人ノ言ハル所ニシテ自立ノ  
力ナキモ尙ホ列國ノ平和ヲ破ル力ヲ其歴史地理人種  
言語ハ世モ知ラサルモ尙ホ戦爭ノ火ヲ世界ニ點スル禍穢ヲ  
伏藏セリ左ニハ日清戦爭ノ結果如何ナルニモセヨ強硬ノ手

及テ不服ヲ鎮シ同時ニ正義ノ手ヲ以テ殘虐ヲ制シ以テ  
朝鮮ノ内政ヲ整理スハ列國ノ利益上極メテ重要ナリ

然レモ吾人ハ問フ誰カ正義ノ手ヲ以テ朝鮮ノ内政ヲ整  
理ス可キヤト歟疑問ニ對シ英國カ埃及ニ行ヒ政策ヲ朝

鮮ニ行ヘル日本、答ヘテ曰ハリ我レ自ラ之ニ當ラレ而シテ  
其言ヲ實行行ハル爲メ朝鮮ノ首都ヲ占領シ其國王ヲ  
虜ニスルヲ且要求リ答ヘテ今ヤ其公使ヲ經由シテ事實

上朝鮮ノ主政者トナセリ

是ニ素アリ大膽ナル處置ナリ然レモ果シテ賢知ナル處置ナリシ  
ヤ否ヤハ容易ニ斷言スベカラズ余請フ試ミ之ヲ論セシ

第一ニ注意ス可キ日本ノ朝鮮ニ對シ國難ハ英國ノ埃及ニ

對ニ困難ヨリモ大ニシテ日本、朝鮮於テ獲ベキ利益ハ其

ノ埃及ニ於テ獲ル所ヨリモ少キト是レナリ

埃及ニ於テモ朝鮮ニ於テモ極メテ少數ヲ除ク、外政權ヲ有ス

ル階級ハ總テ改革ニ反對スモナリ而シテ兩國ニ於テ改革

ハ利益ヲ知ル人民ハ甚タ少シ

然レモ朝鮮ニ於ル日本黨ハ埃及ニ於ル英國黨ヨリモ一層

少數ナリ而シテ埃及ニ於ル英國黨ハ概シテ國中ノ有力家ヲ

モ朝鮮ニ於ル日本黨中ニハ其國人ノ尊信ヲ受クルモノ

甚タ少シ

嚴密ニ言ハ朝鮮ニ於ル日本黨中ニハ地位ト門閥トモ

ハ殆ト一手ノ指ヲ屈シテ數ヘ盡ス可シ即チ金嘉鎮安

駒壽、趙義淵、李允用、金鶴明、金夏英、數人、其  
 中ニテ金鶴明ハ過日暗殺セタリト説テ朝鮮、於テ日本  
 兵ノ如ク少殺スルニ是等人物ハ民族ニ代リテ政權ヲ握ラシ  
 ガ爲メ日本ト通シ太閤以來、日本ノ野心ヲ助ケセタリトノ  
 嫌疑ヲ受ケ居リ妖嫌疑ト不信用ニ成ル七月廿三日京城  
 事變後、際ニ於テ大島公使處置ニヨリテ一層甚々  
 シキヲ致シ種々風説流布セリ其風説ハ概シテ惡意ヨリ  
 出テタル虚構ナルヲ明シハ余ハ之ヲ記載セザル可キモ朝鮮、  
 日本党ガ如何ナル位置ニ立ツカ之ニヨリテ察スルヲ得可シ故、  
 如キ人物ニ至ハ到底改革ヲ實施スルノ望ナキト云彼等ハ政  
 策ノ機關タル所謂十七人會議（軍國機務處）ヲ起

織を、帝、他ノ地位ト目格アル人物ヲ諸ヒテ之ニ加ラシメ其勢  
力ヲ利用シテ改革ヲ實施セリトセリ然レバ一般人民ハ日本  
黨ニ對シテ嫌惡ヲ十七人會議ノ全部ニ及ボシ十七人會議  
ヨリシテ終ニ國王ノ政府其權ニ及ボセリ蓋シ十七人會議ハ  
政府ニ主腦ナクナリ（戰後）概テ之ヲ參看セシ  
其時ニ當リ國王ハ大院君ハ政府ト人民ノ間ニ調停ヲ試  
ミレバ其勢自ナカリト大院君ハ倒底其言ノ用ナラザルヲ見  
テ最早政治ノ關係セザル可シト決心セリ  
余ハ信ス大院君ノ處置ハ愛國ノ至情ニ當テタルモノニシテ政  
シテ自利ヲ目的トセタルモノニテラザルヲ蓋シ大院君ハ既  
四歲老人ナレハ自利爲メノ政權ヲ握ルノ野心

其五

ニアラス只其名望リ利用シテ円滑ニ改革ヲ實施セント欲シタルニ

大院君ハ十七人會議中ノ多數ヲ重シ且ソ日本ニ對シテ同情ヲ表シタリ然レモ七月二十三日ノ事變ニ際シテ大島公使ノ處置宜シキヲ得ワリシヨリ十七人會議若シハ京城ノ日本公使ニヨリテ改革ヲ實施シ秩序ト進歩ノ新時期ヲ朝鮮ニ開クトハ到底望ム可カラサルヲ知レリ大院君ハ必スシモ日本ガ朝鮮ノ政治ニ干與スルヲ非トスルニアラス只今日ノ如ク日本公使ヨシテ公然朝鮮ノ政治ヲ指揮セシムル策ヲ得タルモノニアラストモ先ツ朝鮮國王ヲシテ内國人若シハ外國人顧問ノ聘セシム一般人民ニ知ラシメラルヤ

ハ其顧問ヲ經由シテ政治ヲ指揮ス可トノ見ヲ懷ケル者  
余ノ見ル所ヲ以テスハ大院員見時務宜シキニ適シタルモ  
・ナリト言テ可カラス

蓋シ朝鮮人民ハ外國ノ干渉ヲ嫌フ其故ニ支那人ハ能  
ク之ヲ熟知シ朝鮮人民ノ感情ヲ傷ケザル策ヲ取リ  
是ニ支那政府及外國政府、記録ニヨリテ証明ス可  
可シ一其一例トシテ合衆國政府、外交記録中ニ六百七  
十二年十二月四日、支那ニ関スル部多ク見ヨ然ルニ今日  
亦ハナシ人會議ヲ經由シ公使朝鮮ノ政治ニ干渉セント  
スル故ニ若シ大院若シテ對然之ニ關係ヲ絶ツニヤラ  
サハ一般人民、同ニ其名譽ヲ維持スル能ハカリシカラシ

或國王其速カニ十七人會議ヲ解散スルニテサハ其地也  
 危クセシ、コナキヲ保セムト云々外國人中ニ朝鮮人ヲ以テ自尊  
 心ナク愛國心ナク殆ヒト大ニ等シキモノ爲スモ、多クモ是レ大ナ  
 ル誤謬ナリ朝鮮人ハ高慢ニシテ愛國心ハ人民ナリ其高慢  
 ト愛國心ヲ發現スルハ他ノ人民ヨリモ永キ時ヲ要ス可シト余  
 ハ早晚其時機、来ル可キコト確信ス而シテ其時機一タニ到  
 来セバ金世助ヨシテ驚嘆セシ程、結果ヲ生ズ可シ  
 若シ日本カ朝鮮人民ノ感情ヲ傷ケザル策ヲ取リシナバ大  
 院委ハ其任ヲ留テ日本公使ヲ助ケ改革ヲ實施スルコトニ  
 盡力セシコト蓋シ日本ニ取リテモ朝鮮ニ取リテモ改革ノ爲  
 ナハ大法院ヲ孰知シタル所ナレバナリ

大院君が日本人と等しく朝鮮の危急を認めタルハ既に久し  
以前より蓋し朝鮮の東亞に於て戰略上極まり重寶  
の地位となり故に攻守島り占有シ之ヲ根據トスル強國ハ  
以テ東亞の何レの部今ニモ容易に侵略ヲ及ボスリ得可  
ク日本ヲ侵略セント欲スモハ必ず先ツ朝鮮ヲ占有セントス  
ハ自然の勢なり然るに此重要ナル地位に於テ朝鮮は惟モ無  
主人、如キ状態ニ在リ若シ之ヲ占有セント欲ス強國アラバ只  
其意、侵サントシ朝鮮は弱國、如キハ朝鮮自  
身ノ危険ナルニナラズ亦タ日本ノ危険ナリ故ニ日本ノ對  
韓政策ハ朝鮮ヲ保護スルと同時に其自衛ヲ目的トス  
ルモタルヲ明ケシ而シテ是等事情ハ大院君ハ凡ソ慮

セル所ナリ然レモ大院君ハ又タ日本ノ政策ハ其目的ヲ達スル能ハ  
ザランコトヲ知リ何トナレハ日本ハ朝鮮ヲ助ケテ之カ力ヲ強クセン  
ヲ欲スルモ今日、如キ政策ニテハ到底朝鮮人民ト親密ノ關係ヲ  
造ルヲ難カルリ朝鮮ノ國力漸ク發達シタルノ曉キ尚ホ依然  
日本ニ對シテ猜疑ノ念ヲ脱セザレハ日本ニ取リテ危險ナルコト  
今日ヨリモ更ニ甚シケレハナリ日本若シ英國ノ埃及ニ施セル政  
策ヲ朝鮮ニ行ワントセハ朝鮮人ハ終ニ其併吞スル所トナ  
ランコトヲ恐レテ益々日本ト遠カル可ク故革ノ計畫モ亦タ  
之カ當ヨニ水泡ニ歸シ去ル可シ假令朝鮮ノ改革ダケハ  
成就スルモ之ヲ以テ日韓兩國ヲ防衛セントスル大院君及日  
本政治家ノ目的ハ固辭ニ歸ス可シ何トナレハ若シ歐羅巴

諸國ニシテ一たび日本カ朝鮮ヲ併吞セント欲スル野心アルヲ疑  
ハシ直ニ聯合シテ之ヲ日本ノ手ヨリ離サスンテ已マサル可ク朝鮮モ  
亦タ日本ノ幫助ニヨリテ養ヒタルカヲ以テ歐羅巴諸國ニ覺ス  
ヘケレハナリ日本人民ノ精力及ビ殆ント絶倫ナル勇氣ト愛國心  
ヲ以テスルモ歐羅巴諸國ノ聯合ニハ敵スベカラズ若シ其場合ニ  
於テ歐羅巴諸國ニ對シテ抵抗ヲ試ミントセハ日本ハ朝鮮ニ與  
ヘタル幫助ヲ無効ニ歸スルミナラズ自ラ再ヒ起ツ能ハサル程ノ傷痕  
ヲ蒙ル可シ而シテ日本カ敗ルノ日ハ即チ朝鮮モ亦タ歐羅巴諸  
國ノ手ニ落ツルノ日ナリ何トモハ日本ヲ占有セント欲シテ朝鮮ヲ  
占有セサルハ猶ホ城砦ヲ占領シテ其入口ヲ橋ヲ占領セサルニ  
等シク歐羅巴諸國ハ此ノ如キ愚ヲ爲サル可ケレバナリ是レ

亦夕日韓兩國の關係を一語ナリトス

日韓兩國の關係果シテ此ノ如クナリトセハ日本ハ何故今日ノ如キ政策ヲ朝鮮ニ施シツアルカ

此疑也ニ答ヘテ或ルモノハ曰ク朝鮮ハ自ラ復起スルカナシ日本力之ヲ幫助シ救匡スルテ予バ今日ノ狀態ヨリ進歩スルヲ能ハスト然レドモ余ハ容易ニ之ヲ首肯スル能ハズ若シ朝鮮ハ自ラ進歩スルカナシトセハ到底獨立國トシテ存在スルカナシト言ハサルヘカラズ既ニ獨立國トシテ存在スルカナシトセハ日本ノ政策が早晚朝鮮併吞ノ結果ヲ生スルハ免レサル數ナリ蓋シ二個人種併存ノ場合ニ於テ劣等ノ人種發達シテ他ノ人種ト同シ度ニ到ルカ然ラバ之ニ併吞セラルハ自然、法則ナレハナリ然レトモ露西亞ハ凌シテ日本が朝鮮ヲ

併吞スルヲ許サスト言明セリ日本若シ到底朝鮮ヲ併吞スルヲ許サレストセハ朝鮮ニ於テ其軍隊ハ果シテ何ヲ目的トシテ戦フベキカ日本カ單ニ朝鮮ノ保護者ト言フ名ヲ博センカ爲メ其軍隊ヲシテ冬陣、苦ヲ忍ハシメ元來怨ミモナキ朝鮮ノ殺民ヲ殺戮スルハ不可思議、怪事ナリ戦争其物ハ元來喜ヲ可キニ非ス況ンヤ利得ト報酬ヲ得ルノ望ミナキ戦争ヲ今日日本ノ爲シツアルガ如ク一方ニ朝鮮ヲ助ケテ其力ヲ強クシ而シテ之レト同時ニ朝鮮人民ノ歡心ヲ得ルヲ免メサルハ只失敗ト自損ヲ招クノ政策ニシテ無謀、極ト言ハサルヲ得ス鬼ヲニ日本政治家、賢知ナルニ拘ラズシテ尚ホ今日ノ如キ政策ヲ執ルニ至リシハ其ノ朋友タル少數ノ朝鮮人ニ誤ラレテ朝

朝鮮人民、眞狀ヲ知ル能ワザリシカ爲メナル可シ

朝鮮人、性情ト傾向ハ寧ろ支那人ニ近クシテ日本人ニ遠シ朝鮮人ハ支那人ト均シク容易ニ政府ノ權ニ服從セス日本人ハ皇帝ノ命令トサヘ言ハ唯々トシテ之ニ服從スルヲ故ニ改革ヲ實施スルモ容易ナレドモ朝鮮ニテハ只國王、命令ノミヲ以テ直ニ改革ヲ實施スルニ難シ朝鮮及ヒ日本ノ政府組織ハ一見甚ダ相似タルカ如キモ實ハ然ラス兩者共ニ君主ヲ以テ神トスレモ君主ハ神權ヲ使用スル方法ハ同シカラス支那及朝鮮ニ於テハ君主ノ人民ニ對スルト尙ホ親ノ子ニ對スルカ如クスルヲ常トスレトモ日本ノ皇帝カ其人民ニ對スルハ猶ホ主人ノ僕ニ對スルカ如シ支那及朝鮮ノ人民ハ侵ス可カラサル權利ヲ有シ之ヲ衛ル

カ爲メニ官更ニ抵抗シ終ニ王室ヲ顛覆スルコトヲ憚ラズ  
シテキンノ教ノ中ニモ其事ヲ記シ支那及朝鮮ノ歴史ニ於  
テハ其實例甚々多シ日本人ハ之ニ及シ近代ニ至ルマテ毫モ權  
利ヲ有セス神道ノ書藉ニモ明記セル如ク普通人民ハ官更  
ノ濫行ニ對シテ苦情ヲ鳴ラズ事スラモ許サレズ只官更ノ恩惠  
ニヨリテ死セザシテ幸トシタリシナリ最後ノ將軍家ノ始祖家康ノ  
遺言中ニモ武士ハ農商ナシ主人ナレハ庶民ニテ武士ニ對シ慮  
外ヲ働クモノハ直ニ斬リ捨テモ妨ケテシト言ハル一條アリ是レ即ケ  
イワクハラビヤ、ジャヴァ、スマトラ、台灣等ノ東洋諸國ニ於テ  
一般ノ風習ナリ日本モ久シク支那ト交通シタルヨリ終ニ其不理  
ナルヲ認メ家康ノ後ニ至リテ此風習ヲ和ゲントシタレトモ其効

ナラ數十年前亞采利加人カ下田ニ上陸シタル時ハ尙ホ之ヲ脱セザリキ  
 支那人カ日本人ヲ倭人ト呼ビハ茲無條件的服從ノ風習アルガ爲メ  
 ナリ蓋シウイリアムスノ字畫ニヨレバ倭ハ投順ナル奴隸ノ意義ナリ  
 ト云フ

余ハ尙ホ日本スト朝鮮人ノ相異ニ就キテ言フ可キコト多シ然レ  
 トモ既ニ述ベタル所ヲ以テ日本流ノ改革ハ朝鮮ニ施ス可カ  
 ラサルエトヲ証シテ餘リアリト信ス日本ハ曩キニ 皇帝ノ余  
 ヲ以テ急激ナル改革ヲ實施スルコトヲ得タレトモ朝鮮ニテハ  
 人民ノ好マサル改革ヲ國王ノ命令ニテ施行セズセハ却テ  
 反抗ノ氣焰ヲ高キク或ハ叛亂ヲ惹キ歟ス如キ憾心ナシ  
 トセス日本ニテハ改革ヲ實施スルノ方法短直ナリ然レモ朝鮮

ニ於テハ永キ年月ト事クノ曲折ヲ經サレハ之ヲ成就スル能ハス日  
本ニテ改革ヲ實施スルニ只不撓ノ意志ヲ要スルノミナレド  
朝鮮ニ於テハ懇切ト忍耐トヲ以テ人民ノ信用ヲ博セサル  
可カラズ日本ガ二十五年前ニ十年ヲ以テ成就シタル改革ヲ  
朝鮮ニ實施スルニ少クモ三十年ヲ要ス可シ

井上伯ハ朝鮮ニ渡来スルニ弟テ是等ノ事情ヲ考究セザリシ  
ナル可シ左レハソリ伯ハ十七人會議ヲ解散セズ又タ大院君ヲ  
用ホスレテ自ラ内閣ヲ指揮シ終ニ二十五年以前、日本ニ於  
テ爲シタ如ク國王ノ名ヲ以テ迅速ニ改革ヲ實施セント試ミ  
シナル可シ伯ハ國王ノ名ヲ以テ新策ヲ立テ新法ヲ敷キタレトモ  
恐ラクハ是皆死文タルニ止リテ實際ニハ何ノ効果モ奏スルコトナカ

ル可シ

或ハ日本ノ政策ヲ非護スモノアリテ曰ク朝鮮人ノ保守的ナル者シ  
 日本ヲ監督指揮スニアリテハ改革ノ計畫皆中道ニシテ癡  
 セント安年護ハ頗ル有力ナル相違ナシ然レモ余ハ未ダ之ヲ首  
 肯ス能ハス朝鮮ノ改革ヲ成就スルニ自ラ其途アリ先ツ經  
 驗ニ朝鮮ノ政治家ト議シテ改革ノ方針ヲ定メ有カニシテ  
 正直ナル外國人ヲ撰ンテ顧問トシ顧問皆外國人ノ長ニモラシ  
 テ其任ヲ盡スニ足ル所ノ權力ヲ有セシメ顧問皆外國人ノ言  
 ヲ聽クイテ條件トシテ朝鮮ノ政治家ト一任セ  
 ヲ改革ノ計畫中道ニシテ癡タル恐レナキハ余ノ確信ニ所  
 ナリ免ニモ爾ニモ日本流ノ改革ハ朝鮮人ノ性質ニ適セサ

ルカ故 之ヲ放棄セサル可カラズ佛蘭西ヲテニスニ於テ施シ  
ル改革ノ方法ハ朝鮮ニ移シテ應用スヘシ十七人會議ヲ編  
散シ他ノ政治組織ヲ以テ之ニ代ヘ大元君ノ人望ヲ利用シテ民  
心ヲ繫ルハ最モ肝要ナリ

若シ今日ノ政策ヲ繼續セハ日本ハ戰場ニ於テ支那人ヲ破リタル  
後外交ノ舞臺ニ登ルニ至テ歐羅巴諸國ノ反對ヲ受ク可シ  
歐羅巴諸國ハ朝鮮ニ於テ貿易上宗教上若クハ政治上ノ  
利益ヲ保護スルカ爲メニ日本ハ朝鮮ノ政治ヲ指揮スルニ反  
對スニシ歐羅巴諸國ハ日本ニ向テ言ハシ貴國ハ朝鮮ノ政  
治ニ干渉セルカ爲メニ朝鮮ノ人民ハ國王ノ權カヲ尊敬セサル  
ニ至リ貴國ハ破壊セルニ至テ建設セサルカ故ニ朝鮮ニ混乱

ノ状態ニ陥リト露西亞ハ特ニ其機會ニ乘シテ日本ヲシテ朝鮮  
ヨリ退去セシメシト主張可シ而シテ露西亞ハ朝鮮ト領土ヲ  
接スル故ニ其主張ス所ハ頗ル有力ナル可シ蓋シ露西亞ハ朝  
鮮ノ内政ヲ改革スルニ同意スルモ寧ロ朝鮮カ今日ノ如  
ク孱弱ナル状態ニ在ルヲ喜ブ理由アルナリ

露西亞ハ従来日本ニ對シテ好意ヲ表シタルモ今後必  
スシモ然ラト思フハ誤ナリ露西亞カ昨年ノ七月日本ノ對韓策  
ヲ贊成シタルガ如キ形跡アリシハ依テ以テ日支兩國ノ爭端  
ヲ助成スルノ趣旨ニ出テシヲ露西亞ハ日支兩國カ戦争ニ  
ヨリテ互ニ傷疾ヲ蒙ランヲ望ムリ左ニハ露西亞ハ英國ノ調  
停ニ同意シタルモ只數言ヲ兩國ノ政府ニ呈セシ外實ニ際

戦争の停止を爲す力ヲ盡スコトナリキ

余ハ其言ハハトテ凌シテ露西亞ノ非難スルコトヲ如何トナレバ

露西亞ハ最近ニテ、經験ニヨリテ日支兩國ノ爲メニ盡

ク無益ナリ知リタレハナリ日支兩國ハ露西亞ヲ恐レ、餘リ

或時ハ其同盟ヲ求メ或時ハ翻テ露西亞ノ敵國ニ同盟

ヲ求メタル故ニ露西亞ハ最早兩國ヲ信用セズ將來露國

ト東洋ニ於テ雌雄ヲ凌ス時他ヲ顧慮スルノ要ナカラシガ爲

メ今日日支兩國ヲシテ相争ハシメ以テ其力ヲ疲ラセシム欲ス

ルナリ

露西亞ノ意向此ノ如クナレハ昨年十月ニ西日ノ、北京及天津

時事ニ、報シタル如ク日支兩國ガ西洋諸國ノ干渉ヲ容レズ

之速ニ今回戦局ヲ結ビ朝鮮ヲ加ヘテ東亞ニ於テ三國ノ  
 攻守同盟ヲ組織セシム言フハ大ニ善シ只遺憾ナル日支  
 兩國カ其ノ思ヒ及ビタルヲ、餘リ遲キヤリ合衆國及獨逸ハ  
 日支兩國ノ講和談判ニ干渉スルノ主張セサルモ太平洋ニ重  
 大ナル利害ノ關係ヲ有シ從テ朝鮮問題ノ解釋ニ重大ナ  
 ル利害ノ關係ヲ有シ英吉利露西亞佛蘭西ハ必ズ日支ノ  
 講和談判ノ與ランヲ主張ス可シ而シテ日支兩國同盟條  
 約ヲ結ビ独逸カ之ニ加入スル如キヲラハ英露佛モ亦東  
 洋ニ於テ三國同盟ヲ造リテ之ニ當ル可シ然ラハ日本ハ何ノ  
 護ル所ナキニ到ラン何トナレハ歐羅巴ト亞細亞ト跨ル英  
 露佛、三國ハ東洋ニ於テ世界ニ他ノ諸國ヲ悉ク敵トス

大院君、余、對ニ車學堂首領、答

十月、初旬、忠清道ノ愛國の兄弟等、謹ニ白ス

賤民等五百年來先王、法ニ則リ先王、教ニ遵ヒ王化ノ惠ニ

沃シ来リ然ルニ近來不忠ノ大臣政權ヲ執リテ人民ノ膏血

ヲ絞リ加ヒニ連年飢饉ノ厄アリテ庶民生活ニ苦シムニ到リ

經ニ曰ク民ハ國ノ本ナリ民富シテ國榮ヘ民苦シテ國害セラル

ト古ヨリ今ニ至ルマテ人民苦シ今日、如クニシテ國ノ榮ハ何ナ

ルヲナシ

我等ハ原野ニ生長シタル賤民ニシテ天地ノ理ヲ知ラズ然レド

モ國家ノ爲メニ赤心ヲ以テ義務ヲ盡スル念ハ鐵石ヨリモ堅シ

我等ハ君側ヲ清ヨク爲メ。鋤リ草薶テ武器ヲ執テ起テリ

我等群ヨリシテ行ク時一羽ノ鳥一匹ノ犬ヲ驚カズモ我等ハ  
全國ノ人民ヲシテ等シク食物ヲ得セシメガ爲メ富ミセヨリ  
取リテ貪ミキモノニ與ヘシム

我等ハ暫ク實行ニ着手スルヲ猶豫シ不臣ノ徒カ自カウ義  
側ヨリ退クヲ待テリ然ル彼等が右側ヨリ退カセシマス外  
國ノ軍隊侵入シ来リテ京城ヲ占領シ王宮ニ四方ヲ圍ミテ  
國王ヲ強迫シ好意ヲ密ニシテ天日暗シ矣、如キ時ニ於テ我等  
ガ憤慨シテ起リハ抑モ非カ我等ハ涙ヲ抑ヒ拳ヲ固メテ  
起ラリ我等ハ一致シテ國家ノ爲メ死ニ赴カンコトヲ誓ヘリ然  
レ氏今ヤ國太公、怨詆ニ奉撫シテ我等ノ義憤ヲ解  
スルヲ得タリ其ノ人民ノ憂憐シ給フコト好、如ク深キ見

誰レカ感泣シテ其餘ヲ奉セザランヤ我等尚お國主ノ至仲  
 安金ナラザランゴトヲ恐ル然レに國太公既ニ我等ニ諭スを常  
 業ニ履スフヲ以テシ給フ故ニ我等ハ今ヨリ靜穩ニ歸シテ  
 救命ヲ待タン  
 頓首萬拜シテ白ス

名称	陸奥宗光文書
標題	朝鮮国王, 改米谷国八, 昭会文書

分類 番号	
	74
	19

157-128

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

256335
2-16
昭和/年/月/日

The United States of America.

The King of Corea acknowledges that Corea is a tributary of China; but in regard to both internal administration and foreign intercourse it enjoys complete independence. Now, being about to establish Treaty relations between Corea and the United States of America on terms of equality, the King of Corea, as an independent monarch, distinctly undertakes to carry out the Articles contained in the Treaty, irrespective of any matters affecting the tributary relations subsisting between Corea and China, with which the United States of America have no concern. Having appointed officials to deliberate upon and settle the Treaty, the King of Corea considers it his duty to address this despatch to the President of the United States.

Dated the four hundred and ninety-first year since the foundation of Corea, being the eighth year of Kuang Hsu (1882).

Great Britain.

Dated the four hundred and ninety-second year since the foundation of Corea, being the twenty-seventh day of the tenth month of the ninth year of Kuang Hsu (1883).

Germany.

Dated the four hundred and ninety-second year since the foundation of Corea, being the twenty-seventh day of the tenth



明治三十二年

The United States of America.

The King of Korea acknowledges that Korea is a tributary of China; but in regard to both internal administration and foreign intercourse it enjoys complete independence. Now, being about to establish Treaty relations between Korea and the United States of America on terms of equality, the King of Korea, as an independent monarch, distinctly undertakes to carry out the Articles contained in the Treaty, irrespective of any matters affecting the tributary relations subsisting between Korea and China, with which the United States of America have no concern. Having appointed officials to deliberate upon and settle the Treaty, the King of Korea considers it his duty to address the Legislature to the President of the United States.

Dated the four hundred and ninety-first year since the foundation of Korea, being the eighth year of Kwang Han 1883.

---

Great Britain.

Dated the four hundred and ninety-second year since the foundation of Korea, being the twenty-seventh day of the tenth month of the ninth year of Kwang Han 1883.

---

Germany.

Dated the four hundred and ninety-second year since the foundation of Korea, being the twenty-seventh day of the tenth

month of the ninth year of Kuang Hsü (1883).

---

Italy.

Dated the four hundred and ninety-third year since the foundation of Corea, being the fourth day of the fifth intercalary month of the tenth year of Kuang Hsü (1884).

---

Russia.

Dated the four hundred and ninety-third year since the foundation of Corea, being the fifteenth day of the fifth intercalary month of the tenth year of Kuang Hsü (1884).

---

France.

Dated the four hundred and ninety-fifth year since the foundation of Corea, being the third day of the fifth month of the twelfth year of Kuang Hsü (4th June 1886).

北米合衆國宛分

大朝鮮國國主

為

照會事竊照朝鮮素為中國屬邦而內治外交向來均由

大朝鮮國國主自主今

大朝鮮國彼此立約俱屬平行相待

大朝鮮國國主朕允將約內各款必按自主

公例認真照辦至

大朝鮮國為中國屬邦其分內一切亦

行各節均與

大國毫無干涉除派員議立條約

外相應備文照會須至照會者

右 照 會

大 國 皇

皇帝又曰君主  
伯理爾天德

大 朝 鮮 國 南 國 四 百 九 十 年 即 光 緒 八 年 月 日

大 英 國 統 治 分

大 朝 鮮 國 南 國 四 百 九 十 年 即 光 緒 九 年 十 月 三 十 日

大 德 國 統 治 分

大 朝 鮮 國 南 國 四 百 九 十 年 即 光 緒 九 年 十 月 三 十 日

大 義 國 統 治 分

大 朝 鮮 國 南 國 四 百 九 十 年 即 光 緒 十 年 閏 五 月 初 四 日

大俄羅斯國宛ノ分

大朝鮮國開國四百五十年即光緒十年閏五月十五日

大法國宛ノ分

大朝鮮國開國四百五十年即光緒十二年五月初二日

名称	陸奥宗光文書
標題	朝鮮政府へ貸付金償却年限延期ノ件 松方外相陸奥宛、伊藤外相松方宛書翰

松方大藏外相陸奥外相へ、照會

分類番号	
	74
	20

157-132

国立国会図書館

登録番号	
------	--





朝鮮政府、貸付金債事年限延期ノ儀ニ付  
何分ノ意見ヲ御案出スルベシトモ、先般省出此等ノ  
五三ノリヲ以テ御案出スルニ趣キ、案致スル所ハ  
最初朝鮮政府ニ於テ、債ヲ募集スル  
キニ依リ、且レ迄ノ間、下帝國政府ヲ貸付  
ノ都合ニ、取次方ニ付、文ニ十年年ニ  
延期ヲ要スルハ、朝鮮政府ニ於テ、公債募  
集ノ計畫ヲ中絶ニスルハ、次方ニ可成リハ  
其邊ノ事情、詳細ニ御案出スルハ、何分ノ  
意見ニ、雖モ、進取スルハ、外務省ト御案  
議、上吏、何分ノ案、御案出スルハ、此段  
今即、御案出スルハ、

明倫彙編

家範典 卷一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

卷一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

其 書 亦 在 世 貞 公 集 卷 一百一十五 內閣修撰 王世貞 書 伊 禮 文 公 集

名称	陸奥宗光文書
標題	公使ノ犯罪ニ対シ國家ノ負担スヘキ 責任ノ程度通例ニ三

分類 番号	
	74
	21

136-13

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

# 第貳号巻照

公使ノ犯罪ニ對シ國家ノ負擔スヘキ責任ノ程度適例二三

公使ノ犯罪 適例二三 輒今外交ノ技能漸ク

巧妙ノ域ニ達シ談笑ノ間ニ國ヲ滅ホシ王ヲ廢

シ弱者ヲ肉ヲ割テ強者ハ腹ヲ肥ヤスモノ比々

皆然リ故ニ公使々々モノ外國ニ使シテ犯罪ヲ

ナスカ如キハ極メテ少シ其例殆ンド絶ヘタ

リト云フシク外交史ノ往時ニ溯レハ歴々トシ

テ其例アリ今其一二ヲ左ニ掲ケ兼ネテ公使ノ

犯罪ニ對シ公使所屬國ノ政府カ如何ニ責任ヲ

負擔セハヤハ觀察ヲ下サントス



(イ) 千六百五十四年美國駐劄ノ佛國公使ドバツス氏

ハクロムウエルノ朝ニ公使タリテ召合エルノ生命ヲ

危フセシメテ隱謀ニ與ミセリトナシテ告訴サハ

ヤ、審問委員會ハ同氏ヲシテ訊問ヲ受ケシメ

ントセハモ同氏ハ之ヲ拒絕シテ曰ククロムウエル

ヨリ直接ニ訊問セラレシバ答フヘシ裁判官ノ

訊問ニ至リテハ之ヲ受クルヲ肯ンセス何トナ

レハ公使ナハラシテ若シ他邦ノ裁判官ノ訊問

ヲ受クルカ如キ事アルハ自國ノ代表スル國

主ノ威嚴ヲ損傷スレハナリト主唱シ終ニ審問

委員會ハ同氏ニ命ジハニ廿四時間内ニ英國ヨ

リ出發スヘキ旨ヲ命ジタルニ止マリ其后佛英

二國間ニ如何ニ交渉アリタルヤヲ記載セサハ

ヲ以テ之カ觀察ヲ下セバ必スヤ重大ノ難問ヲ  
生ヤスシテ終リタルナラン

口千七百十七年英國駐劄ノ瑞典全權ニ使ギレ  
ンボルクハジヨージ一世ヲ廢スルノ隱謀ヲ企  
テタルノ故ヲ以テ逮捕セラレ所有ノ箱類ノ錠  
前ヲ破毀搜索シ一切ノ書類ヲ差押ヘタリ然シテ  
瑞典ハ復讐的方法トシテ在「ストツクホルム」ノ  
英國ニ使ヲ逮捕セリ佛國ノ攝政其ノ一方ノ申  
請ニ依リ仲裁ノ場ヲ取リ英瑞雙方其逮捕セハ  
ニ使ヲ互ニ交換セムヲ得タリギレンホルグノ  
逮捕ハ英國自防自衛ノ方策トシテ必要ナリシ  
ニ在瑞典ノ英國公使ヲ瑞典カ逮捕スルニ至テ  
ハ果ト云フ可キナリ此例ニ依ルニ佛國ノ攝政

ノ件裁ニ依リ雙方逮捕セル公使ヲ交換スルヲ  
得テ落着ヲ告ケタヘカ如クナハラ以テ之ヲ推  
究スレハ又其後瑞典公使ノ犯罪ニ對シ英瑞二  
國間ニ甚タシキ難同生セスシテ止マレハナラン  
（一千七百十八年佛國駐劄ノ西班牙公使セラメル  
前例ト同一ノ理由即チ佛國自防自衛ノ必要上  
ヨリ佛國政府ハ同云使ヲ逮捕シ其書類ヲ差押  
ヘ軍兵ヲ付シテ西班牙國境迄送還セリ本例又  
其後何等重大ノ影響ヲ生シタヘラザルカス  
）一千八百四年合衆國駐劄ノ西班牙公使イルジョ  
金錢ヲ以テ合衆國ノ新聞記者ヲ收攬シ威ニ已  
レノ意見ヲ詭述シテ大統領及國務大臣ノ不利益  
ヲ求シ極メテ困難ヲ感ヤシメタルヲ以テ合衆國政府

ハ斯ノ如キ公使ヲ召喚セシメトシ西班牙政府  
ニ通牒ス西班牙ノ王答ヘテ曰ク何時ニテモ安  
全ナル航海ヲナシ得ハ時期ニ於テ歸リ来ルノ  
許可ヲ公使ニ與ヘ置タリト而シテイルジョー  
ハ其後数ヶ月ニ渡ハテ歸リ去ラズ合衆國ノ議  
會ハ痛クイルジョーノ行為ヲ攻撃セリイルジョー  
ハ答ヘテ曰ク余ハ隱謀ヲ企テ反乱ヲ煽動シ君ハ  
其他合衆國政府ニ反對スル何等ノ異圖ヲ畫ス  
ハモノニアラス苟クモ是等ノ事ヲ爲サハ以上  
ハ合衆國議會ノ去ツカ如キ攻撃ヲ受ノハ苦ナ  
シ余ハ本國政府ノ命令ノ外何等之ヲ奉スルノ  
義務ナク已レノ欲スル所ニ徃来シ已ノ欲スル  
所ニ住居ス可キノミト合衆國政府ハ敢テ重テ

批難ノ書狀等ヲ發セスイハじヨリ自身ノ良心ニ  
於テ悔悟スル所アラシメント欲シタルモ其効  
ナカリシヲ以テ合衆國政府ハ本件ニ関スハ往  
復文書等ヲ西班牙政府ニ送達セシニ西班牙ノ  
國務大臣ハ却テ同國ニ使イハじヨリノ意見ヲ是  
トスル旨ヲ回答セリ其后如何ニ本件ノ落着ヲ  
告ゲタルヤ明カナラサルヲ考フシバ亦甚  
々難同ヲ生ヤサリシカ如シ

(ホ) 千八百四十八年西班牙駐劄ノ英國公使サリ  
エチバハワーハ旅行券ヲ返還シ西班牙ノ土地  
ヲ退去スルコトヲ同政府ヨリ要求セラレタリ  
此時ニ當ツテ西班牙ノ各地ニ一揆起リ同國政  
府ハ英國公使サリエチバハワー氏カ國內シ不平黨

ニ援助ヲ與ヘタルニヨルトナセリ斯ノ如クシ  
テ英西ニ国間ノ外交ノ關係ニ年間中止セラレ  
タルモ「べルジユ」王ノ仲裁ニ依リ全ク落着ク  
告クハ「フ」海タリ

（一千八百八十八年ノ秋華士頓駐劄ノ英國公使  
ロード「サ」ビルハ「カ」リ「フ」ハニヤニ住スハ英國  
生レノ市民ヨリ書ヲ領收セハニ次期ノ大統領  
「接」奉ニハ何處ヨリ撰出スヘキヤニ就キ忠告ヲ  
乞ヒ来レハナリ該書中時ノ政府ヲ批難スル点  
モアリテロード「サ」クビルモ亦該批難ニ同意スハ  
ノ回答ヲ送レリ合衆國政府國務大臣ヘ「ヤ」ート  
氏ハ此英ニ使ノ所為ヲ以テ合衆國ノ内政ニ不  
當ノ干渉ヲナシ其主權ノ威嚴及獨立ヲ脅カス

ノ嫌ヒアハモノナリトシテ英國政府ニ宜シク  
 公使ヲ處分スヘキコトヲ申入レタハモ其効ヲ  
 見サリシカ爲メ英公使ノ旅行券ヲ返還ニ本國  
 退去ヲ請求セリロードサリスヘリーハ本件ニ関シ  
 英國駐劄ノ亞米利加公使ニ告ケテ曰ク公使タ  
 ハモノハ其駐劄國ニ生スル事件ニ関シ一私人  
 ノ資格ヲ以テスルモ尙意見ヲ表彰スルヲ能ハ  
 ストノ原則ヲ置カントスルカ如キハ到底生束  
 得ヘカラサハ事ニアラスヤト且新聞紙ニ談英  
 國公使カ新聞記者ト会見セハ即去ヘル處ノ意  
 見ナリトシテ記載セハ事ニ関シテハ同公使ノ  
 説明書ヲ得テ后ニ回答センコトヲ告ケタリ而  
 シテ同公使ハ右説明書ノ連スル前ニ退去スル

「トハナレリ美國ニ使ハロードサリスベリ」ニ復命  
シテ曰ク新聞記者ト會見セハ節ニ云ヘハ「所ノ  
意見ナリトシテ記載セハ所ノモノハ事實錯誤  
ニ出テタハモノナハ」ヲ合衆國國務大臣ニ通  
牒シアルニモ拘ラス新聞ノ記事ヲ以テ自己ノ  
真意見トナシテ責ヲ歸セシメントスヘカ如キ  
ハ不當ナハモノナリト英國政府ハ合衆國ノ大  
統領及大臣カ美云使ニ對シテ右ノ所爲アリシ  
ハハ必竟大統領榎本ノ執情ナリ生シタハ一個  
人的ノ事ニ止マハモノトシ次期ノ大統領就任  
式ノアルハ英國ニ使館ノ事務ヲ云使館一等  
書記官ニ委任シ終レリ

以上ノ數例ニ徴スハニ公使ノ不當行爲若クハ

犯罪ニ對ルテ必ズ使ノ君主君クハ國ヲ代表シ  
 テ中立不可侵々ハノ權ハ失フモノタハモ該ニ  
 使ノ不當行為及ヒ犯罪ノ結果ニ對シテ使ヲ派  
 出セハ國ニ嚴談ニ及ヒ難同ヲ生シタルノ例ハ  
 殆ント之ナキカ如シ只該ニ使ヲ派遣セハ國ニ  
 シテ該ニ使ノ飽ク迄中立不可侵ヲ主張シ若ク  
 ハ底保ヤントスルハ片始メテ多少ノ難同ヲ生シ  
 紛争ノ種子トナハナキヲ保ヤサハノ之故ニ奇  
 モ云使ノ野為反法ノモノナハ片ハ公明ニ大談  
 國ノ法ニ從テ處スルニ任シ若シ治外法權ノ行  
 ハハ、國ニアリテハ公使ノ國法ニ從テ處分シ  
 駐劄國ヲ満足セシメ本國亦顧ミテ疚ニキナナ  
 キニ於テハ該駐劄國ト金氏何等ノ苦情ヲ我ニ

對し主張し得サハナリ況ヤ英國ヲヤ然ルヲ  
ヤ該駐劄國政府衰し却テ該公使ノ行為ニ對し  
満足ノ意ヲ表スハカ如キ時ニ於テオヤ然レバ  
公使ノ派遣タル之ヲ派遣セハ外國政府ニ  
請ヒ之ニ充分ノ信任ヲ置カレンフヲ希望し一  
見其公使ノ不法行為ニ對シテハ責任重大ナハ  
ニモ拘ハラズ各國間數百年ノ經驗慣例ニ徴ス  
ルニ公使ノ犯罪ニ對シテハ本國政府ニ於テ該  
公使ヲ庇保ヤントシ若シハ中立不可侵等シ主  
張ヤサハ以上ハ責任ハ公使ノ一身ニ止マリ敢  
テ本國ニ係累ヲ及ホサハハモトト謂フベキナ  
リ

名 称	陸奥宗光文書
標 題	

朝鮮事件関係壯士、高靜

分 類 番 号	
	74
	22

157-20

国立国会図書館

登録番号	
------	--

秘

一昨年朝鮮事件：関し退韓ヲ命セラレ并に

在留ヲ禁止セラレタル難波春吉

神奈川縣人治大井  
憲太郎等共朝鮮

い海航し事  
ヲサレトヤし者

佐々正之通称人なる者此頃再々朝鮮、渡

ラレカ為メ身元証明願ヲサセルト運動スルコト

一岡本柳之助カ九州地方ニ赴キタルコト

一昨年朝鮮事件：関し退韓ヲ命セラレタル武

田範之福人新潟縣、滞留せんコト

一新潟縣人大竹貫一上京し此際壯士著書集

必要を以て各地同志へ通信せしコト

一兼テ革命ヲ企テ居ルノ間一己朝鮮人禹範

善滞京に要近頃新潟へ向テ出發せしめんコト

以上、事實に依リ推測スルニ彼等或ハ朝鮮、

渡航シ何カ企テトスルニアラザンカ就テ此等、

對し取締、途之レナキヲサルモ緊急勅令取  
出布、至ラハ輕一層、便宜ノ得ル事ト存ル  
ヲ速ニ取放布取成ニ爲シ云々

名 称	陸奥宗光文書
標 題	

日露交換及びソノ修正電訓

分 類 番 号	
	74
	23

157-146~148

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

接電報

○廿九年三月廿四日、山本公使

○廿九年四月十日接電報

山本公使提出

山本公使提出

山本公使提出

一日夜、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

援う得るが、先づ他ノ

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

山本公使、山本公使、山本公使

ト

タ

タ

而し日本公使「王宮前」

、安否、付其も、於ナキ、是時、夜

ニ在り日本兵ヲ移轉せしメ

公使「欣然」見王ニ向キ王宮ニ還御コトヲ

且つ軍隊及日本壮士、取

動告スヘシ日本公使「日本壮士、取歸付

歸ニ付保証ヲ与フヘキモノ

最モ完全有效ナル處置ヲ執ルヘシトノ

トス

保証ヲ与フヘシ

二、治安秩序ヲ恢復シ

邦二現存ノ内、其大正ニ在リ王隨意

且之ヲ維持セシガ為メ、確ニ

ニテ保証セシメヘシモノ、其内多クは自

ラニ且能力アル政府ヲ置ク

由進歩主義ノ人ナリトシテ知之居レリ、近頃

コト必要ナルニ因リ、日露西

裁判上ニ於テ証明セラル、ル、ル、國

王公使、帝ニ玉王ニ勸、温

王及現在、國王、帝、實典ヲ

和ナル人移ラ大五ニ任、命、セ

施セリ

シメ又、司法權ヲ得此、竟、所

ノ復仇、目的、濫用セシメ

サラン、フ、トラ、努ムヘシ

三、在、京城、日本軍隊ヲ

オ、三、釜、山、京城、間、電、報、係、係、度、為、リ、駐、屯、ス、ル

各二百名ヲ成、ル、二、個

日、露、軍、隊、間、城、連、ニ、テ、協、退、ス、ル、代、リ、ニ

中隊、城し東城に於てん

憲兵ヲ以テシテ左ノリ配置ス一即十六邱、五十人

右軍隊兼に釜山浦及

可兵、千人其中心十個を、中央、各十人、トス右配置ハ変更スルコトヲ得然レモ憲兵ノ

元山に於てん各一個中隊

各朝鮮政府、停、安寧秩序、回復セシムル

由、全ノ半、總に、帰スル

ト信ス朝鮮國ノ平和、爲メ、計ハ、日本國ハ、改電線

迄、駐在セシムル、トス

合、若、電線、懷波、侵略、付、日、韓、西、政府、間、

四、東城及釜山浦間、電

此、朝鮮人ヨリ、萬一、叛、變、野、子、對、シ、京

仁、浪、仔、度、爲、ニ、置、カ、レ、タ、ル

城、及、開、港、日、本、人、居、留、地、ハ、僅、僅、ス、ル

日本軍隊、電線附近、在

爲、ニ、東、城、ニ、二、個、中、隊、仁、川、元、山、各、一、個、中

此賊徒離散せしむる上の直

隊、日本軍隊ヲ駐屯せしむる得尤

ニ撤回シ憲兵ヲ以テ交代

該軍隊ハ右詔衣撃テ虞ナキニ至

セシメたノ如ク配置スヘキモ

リ次第撤退せしむべシ露國公使館

ノトス即チ大邱ニ五十名

及順寧館ヲ保護スルニ守衛兵

百員ニ五十名ハ中間十箇

ヲ置クハ又露國政府ノ隨意タシ

取ノ屯營ニハ各十名トスベシ

但シ此配置ハ宜更スルコト

アルベシト露トモ同意スル

杖必ス二百名超サシノ

シ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

○廿九年四月廿六日村長供へ電訓

家公供指事に對し修正

一 日本公使も國王に還御し

勅告スヘシ (一二三ノカ)

二 將來内閣に當更し事とす

合に日露兩侯に過和を要し

人物ヲ採用スヘキトは國王に



ト  
タ  
目

其内、執事ヲスベシ

（ノ一節  
ウカフ

三

電信線路を、要スル部ハ新

二

陸上ノ可トス然レモ右ノ部

ヲ込メニ此等ノ陸上ノ部ハ

ニハ若シ電線線路價格付昇

西政府、同ノ折合、付カサル場合ニ

於テ、ノ部ヲ割除スベシ

四

朝鮮、留シ置スヘキ我軍隊ノ件、

ニ笑シ雀山ニ駐在セシムヘキモ

ノミ甘テハ何事ノ極ニナシナキ

事ウ加フベシ又夜無駐在ノ

件ニ付テハ其智ハ我共秘ニ起シ

過セザル様ニ極ニ具ハ朝野ノ

事態平穩ニ保シタル上ハ極兵ニ

ヘテ極ニ極ムヘシ

148

廿年三月二十日 吉本

平政委員侯爵の回覧

三、此の件は、内閣の決定に依りて

一、朝鮮國王の旨、出東得るに

認、次第王宮、還御せられ、

コト素より隨意より而して露

國代理公使、決して之を

姑たざらん



勸告を以て稔かたの閣臣ヲ

臺用已其臣下對已寬

大ノ害ヲ施スコトヲ以テス

卷之四

三、黨、代表者、電報係度

、为ノ今日尚ホ床々外ニ軍

隊ヲ要スルヤ若シ果シテ之ヲ

要也何と云ふに於テ何程

軍隊之要スヤ之ヲ西調ス

し

四兩國代表者又必要ノ

場所於テ西國公使館及領

事館係置ルベシ概ヘキ措

置ト付キ打合テ付クヘシ

五本港別ニ双方互ニ和

三才の道・天・地・人  
衰精神の衰へたるを云ふ

天・地・人・三才の道  
天・地・人・三才の道

地・天・人・三才の道  
地・天・人・三才の道

天・地・人・三才の道  
天・地・人・三才の道

地・天・人・三才の道  
地・天・人・三才の道

天・地・人・三才の道  
天・地・人・三才の道

地・天・人・三才の道  
地・天・人・三才の道

天・地・人・三才の道  
天・地・人・三才の道

地・天・人・三才の道  
地・天・人・三才の道

名 称	陸奥宗光文書
標 題	露国代理公使談話、概要

分 類 番 号	
	74
	24

157-150

国立国会図書館

登録番号	
------	--

東洋義経公使訪話概要

五月十四日朝鮮京城に於て日露両王代

表者、同に於て協商一件首尾終結

シタルに時勢外務大臣、余に因りて上

京に於て代理公使、意に満足し、意を表

シ併せて同公使、甚だ謝意を為し、おこすべし

ヤ、おこすに訪向じ、この日、おこすに感、

朝鮮、東洋、大仲、向、起、付、左、



通うは未だ

おのれは、おのれの問題、極く少問題、

おのれの問題、おのれの問題、おのれの問題、

おのれの問題、おのれの問題、おのれの問題、

おのれの問題、おのれの問題、おのれの問題、

おのれの問題、おのれの問題、おのれの問題、

おのれの問題、

おのれの問題、おのれの問題、おのれの問題、

新問題ニ對スル日露協商ノ件ニ付英

國政府ノ於テ干涉ヲ試ミコトスルノ意御ア

ルカヨリ見ユルニ因リ余ハ倭國侯爵ニ美

言ヲ於テ第一本ニ對シ何カ提議スル所

アリハ日本ハ之ニ應ジヘキヤ否ト尋ネタルニ

倭國侯爵ハ之ニ答ヘ目下日露交渉ニ

提議中ノ件ニ付テハ他五ツ干涉ス

ヘキ紀事ニモアツヤンヘコト云ハルニ因リ余

之に對し目下恢復中ノ件ニ系シテハ  
固ヨリ他島ヲ於テ平定スルハキニ先モナシトモ  
朝鮮ニ系スル大體ノ問題ニ付テハ英王ヨ  
リ豫メ容ルヤモ計リ難シク又俄ニ據合  
スルヲ果シテモ何莫クハ市面問題ニ系シ  
日露両主カ相同一致スル如クサレハ稀ラ  
候リス故ニ之ヲ難問スル爲メニハ百方カラ  
入ルヘシ然レモ實ニ於テハ朝鮮問題ニ

果してハリキハ恨儀ヲ為スハ外法ニテ来

ミエハ干渉ヲ許サレバ法ニナリ故ニ美玉ヨ

リ美玉ハ何等ノ提議アルモ美玉ハ又此ノ

ニ成サレハ此ノ点ニ果シテ美玉ハ美玉ハ

リ美玉ハ知ラシメ置クコトハ又美玉ハ美玉ハ

因リ之ヲ知トシ申上テ置クト候ハルニ候

美玉ハ美玉ハ知ラシメ置クコトハ又美玉ハ美玉ハ

提議スルニ又日高ハ提議ハ件ニ付テハ

志相成りん因り余も大ニ安心ノ念ヲ生  
じ早速ニ之ヲ申上ル所ニ神告し置キタリ  
云々

廿九年五月十五日

女中 徳

名 称	陸奥宗光文書
標 題	対韓処分提案

分 類 番 号	
	74
	25

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

第一



朝鮮事変ニ付テハ  
速ニ其亂民ヲ鎮壓  
スルヲ但我政府ニ成  
ルハ支那政府ト戮  
力鎮壓ニ從事セシ  
メシ希望ス

第二

亂民平定ノ上ハ朝鮮  
ノ政治ヲ改良セシムルヲ  
目的ニ列舉スル目的  
ヲ以テ日清兩國ヨリ

東京各

政治ヲ改良セシムル為

ニ在リ引擧スル目的

ヲ以テ日清兩國

常設委員會ヲ設キ

先ク其取柄ニ從事セ

シム

一財政ノ取柄ニ從

用庫費ノ取柄ニ從

確也

事

一政府及地方官吏

ヲ淘汰スル事

一必要ナル教育修養

ヲ設置セシメ國內

一必要ナル款を徴兵  
ノ設備せしメ国内  
ノ治安ヲ保持セ  
ルニ  
一歳入ヨリ歳出ヲ省  
思召せしメ剩餘ヲ以  
利子ト爲し七厘貸  
出ル國債ヲ募集  
集めしメ其金額  
ヲ以テ道路改其地  
國益上利便ヲ興  
ルニ足ルモノ爲ス  
支用せしめん

是以前首相伊藤侯、自筆傳  
前外相陸奧伯が大磯、養病中  
編述せられし蹇々錄第四章、言フ所  
伊藤總理、某日内閣會議ノ席に於  
テ親ラ一紙ニ記スル、前掲ノ數項ヲ以テ  
之ヲ我政府ノ提案トシテ清國政府ニ  
商議スヘキヤ如何ト閣僚ニ示シテ閣  
僚孰レモ之ニ贊同セリ余モ亦之ニ對シ敢テ  
異議アルニ非サドモ第一、此一事、我外交  
地位ヲ被動者ヨリ主動者ニ變セシメサルヲ  
得サル結果ヲ生スヘシト思ヒ又今日ノ時勢  
於テ清國政府ハ尚ホ容易ニ我提議  
同意スヘクモアラスト想ヒ而シテ若シ同政府が  
之ニ同意セサルトキ、臨ミ我將來ノ外交政略  
如何ニ繼續進行スヘキヤト考ヘ且伊藤  
總理カ閣議ノ席ニ公然言明セサレトモ  
日奧里ハ凡ソ一葉ヲヒトニテハリ、百里

之同意セサルキ臨ニ我將來ノ外交政略  
如何ニ繼續進行スヘキヤト考ヘ且伊藤  
總理カ閣議ノ席ニ公然言明セサトモ  
同總理カ此提案ヲ起草セシム別ニ胸裡  
深ク決スル所アルヘキヲ察シタリ故ニ余ハ之  
對シテ可否ノ決答ヲ與フル爲メ尙ホ一日  
考慮ノ時間ヲ得ニトラ請ヒ退朝ノ後  
終宵熟慮シタトモ帝國政府ノ最早  
外交上權宜ノ進動ヲ移ラサルヲ得サルノ  
時期ニ達ヤリ又清國ハ十中八九マテハ  
我提案ニ同意セサルヘシ然レトモ清國政  
府ノ同意ナシトテ我ハ空シク我提案ヲ  
古紙篋裏ニ投スル能ハサルハ勿論ノコト  
ナレシ故ニ大要同總理ノ提案ニ從フ  
外別ニ良圖アルヘシト思ハサレトモ若シ清  
國政府ニ我提案ニ同意セサル場合ニ  
於テ我國自ラ單獨ニ韓國內政ノ  
改革ヲ擔當スヘシト決心ヲ爲シ置カ  
サハ佗日或ハ彼我ノ意見見衝突シタル

國政府ニ我提案ニ同意セサル場合  
於テ我國自ラ單獨ニ韓國內政ノ  
改革ヲ擔當スヘシトノ決心ヲ爲シ置カ  
サレ他日或ハ彼我ノ意見見衝突シル  
時、及ヒ我外交上ノ進路ヲ阻格スルノ  
恐アリト思料シタリ故ニ余ハ翌日内閣  
會議ニ於テ伊藤總理ノ提案ニ在ル  
條項ノ外更ニ清國政府トノ商議ノ  
成否ノ拘ラズ其結果如何ヲ見ルマデハ  
目下韓國ニ派遣シタル我軍隊ハ決シ  
テ撤回スヘカラス又若シ清國政府ニ於テ  
我提案ニ賛同セサルトキハ帝國政府ハ  
獨カラ以テ朝鮮政府ヲシテ前迷ノ政  
策ヲ爲サシムル任ニ當ルヘシトノ兩項ヲ添  
加之ヲ閣議ニ提出シ決定ノ上内閣  
總理大臣ヨリ上奏シテ  
裁可ヲ得タ  
リトスルモ即チ是ナリ明治二十七年六月  
十六日ノ夜伯ハ清國使臣汪鳳藻ヲ其  
官邸ニ招キ胸中ニ一旦破裂ニ至ルモ

加之ヲ閣議提出シ決定ノ上内閣  
總理大臣ヨリ上奏シテ 裁可ヲ得タ

ソトスルモ即チ是ナリ明治二十七年六月

十六日ノ夜伯ハ清國使臣汪鳳藻ヲ其

官邸ニ招キ胸中ニ一旦破裂ニ至ルモ

廟廊已ニ成算アリトイフ最後ノ利害

ヲ貯藏スルハ不弛張操縦所謂外

交上妙術ヲ盡シ懸河ノ辯ヲ奮テ

滔々萬言專ラ日清兩帝國ノ利害

講シ或ハ由テ生スル世界ノ大勢ヲ説キ

諄々焉トシテ勸ルカ如ク教ユルカ如ク樽俎

間ニ折衝シ會議午後八時ヨリ翌日午

前二時ニ至ル此間汪鳳藻モ亦事端一

タニ開ケテ収マラサルトキハ其結局如何ト申

心憂慮スル所アルカ如ク殆ト畢生ノ力ヲ

彈シテ我提議ヲ阻遮セムト努メタリト

雖モ伯ハ廟議ノ決スル所ニ從ヒ一步モ

之ヲ枉クルヲ容サス其後尚ホ數次東京

北京ノ間ニ外交談判ヲ重子タルモ其極

竟ニ日清ノ平和破裂シ兩國禍福ノ

彈シテ我提議ヲ阻遮セムト努メタリト

雖モ伯ハ廟議ノ決スル所ニ從ヒ一步モ

之ヲ枉クルヲ容サス其後尚ホ數次東京

北京ノ間ニ外交談判ヲ重クスルモ其極

竟ニ日清ノ平和破裂シ兩國禍福ノ

運百年ノ毀譽ヲ異ニスルに至リタル實ニ

此一片ノ紙數行ノ字ニ胚胎セムハアラス

余頃伯ノ囑ヲ承ケテ東牘ヲ收拾スルニ

當リ之ヲ篋底ニ發見セリ余ヤ時ニ之ヲ

伯ノ秘書官ニ承ケ電勉職ヲ奉シ此

紙片ノ如キハ當時親シク一見セシ所又

前記伯ト汪トノ會議ノ如キモ親シク其

席ニ在テ傾聴セシ所ナリ今之ヲ觀ルニ

及テ往事ヲ追懷シ轉々今昔ノ感ニ

禁ヘス其久クシテ湮滅ニ歸セムコトヲ恐レ

伯ニ勸ルニ之ヲ一巻ト成シ貯藏セムコトヲ

以テセリ伯乃チ余ニ託スルニ其顛末ヲ記

セムコトヲ以テス因テ緣由ヲ附記スルコト此

如シト云爾

前記伯ト汪トノ會議ノ如キモ親シク其  
席ニ在テ傾聴セシ所ナク今之ヲ觀ル  
及テ往事ヲ追懷シ轉々今昔ノ感  
禁ヘス其久クシテ湮滅ニ歸セムコト恐レ  
伯ニ勸ル之ヲ一巻ト成シ貯藏セムコトヲ  
以テセリ伯乃チ余ニ託スルニ其顛末ヲ記  
セムコトヲ以テス因テ緣由ヲ附記スルコト此  
如シト云爾

明治三十年六月二十四日

外務省政務局長

五位勲四等中田敬義

謹識

名 称	陸奥宗光文書
標 題	伊藤侯手書 對韓政略

分 類 番 号	
	74
	26

国立国会図書館

登録番号	
------	--

我對韓、政界其

獨立ヲ認メ清國

ノ屬邦ヲ主張スル

ノ說ヲ排除スル

其獨立ノ實ヲ舉ゲ

シメントスル在リ密威

日清文藝ノ起因主

リ茲ニ胚胎シ而シテ

我孰捷ノ結目焉清

王ヲシテ完全ナル

之ヲシテ德義ヲメ

ノ毛



神就捷ノ結局焉清

玉ヲシテ完全ナル物

之ヲルシテ徳藏ナルモノ也

目且霞玉ノ~~鑑~~我

心具我ニ向テ谷實

共ニ其相立シテ看認

セシテ求メ之ニ對シ

神恒来ノ政界ニ基

キ~~團~~<sup>面</sup>宣言セタル等

ノ事由ニ依リ將來

對稱政界ニ成ル

ク干渉シ息メ朝

年~~々~~目~~々~~也

共ニ其ヲ立テ看認

セシメテ求メ之ニ對シ

和恒来ノ政界ニ基

キ<sup>表面</sup>團宣言ニタリ等

ノ事由ニ依リ將來

ノ對稱政界ニ成ル

ク干渉シ息メ朝

野ヲ之ニテ自立セシム

方針ヲ執ルヘシ故

ニ他動方針ヲ執ルヘシ決ス

大決議結果トシテ日國錦道電信件

就中強テ實行セサルヲ期ス

是ハ日清戰役後、對韓改  
策ニ關シ外務大臣ヨリ廟議ヲ求  
メラルルニ當リ時ノ首相伊藤侯<sup>カ</sup>  
自ラ筆ヲ執テ其意見ヲ書カラル  
ナリ而シテ廟算ハ竟ニ之ニ一歧シタル  
ヲ以テ侯ノ秘書官花房直次郎  
氏議決ノ趣旨ヲ末尾ニ附記シタル  
ナリ僅ニ一小紙片ニ過キズト雖モ我  
國外交歴史ニ關係スル緊要ノ  
手續ナレバ茲ニ裝ヒテ二卷ト爲シ  
以テ後世ニ傳フト云可

明治三十二年八月

從四位勳四等中田敬義  
謹識

名称	陸奥宗光文書
標題	郭

朝鮮去光機関ト中央ト往復電文綴

分類 番号	
	74
	27

157-11

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

其年七月八日釜山発同九日着

朴泳孝李圭完申應熙三人今朝四時御用船富  
川ニテ仁川発當地ヲ経テ馬関ニ向フ筈保護ノ道充分  
手配シ置キタリ

加藤領事

外務大臣

卜  
務  
省

其年七月八日仁川發同九日着

昨旨朴泳孝李圭完申應熙三人難ヲ逃レ龍山ヨリ  
我小燕流ニ下仁ス其前杉村公使ヨリ同人等ヲ保護  
シテ本邦ヘ逃レシムル様取計方電訓アリ依テ彼レ等ヲ  
民家匿シ置キ堂船便ニ商船都合ヨキモノナク一方ニ  
ハ朝鮮政府同人等ノ捕縛方ニ急ナルヲ以テ御用船富士  
川丸ニ便乗セシムルコトシ今朝午前一時乗船同時金  
山ヘ向ケ出帆セリ京城ヨリ陸路急ニ派遣サレタル朝鮮巡  
査等ハ多人数波止場ノ附近ヲ徘徊シタルモ幸ニ無事  
ナルヲ得タリ

山座

原外務次官

廿年七月八日京城祭日九日接受

稍し信スヘキ竹肋ヨリ得ル報告ニ依リハ朴泳孝ノ隱謀ヲ佐ヘ木  
某ヨリ之ヲ「カンザイエキ」ニ筆談シ「カンザイエキ」ハ之ヲ「シニソク」ニ  
ニ告ケ「シニソク」ニハ國王ニ密奏スルニ國王甚々驚カシ如何ニ  
キヤト問ハレタレハ「シ」氏ハ前總理金宏集ヲ召シテ少相談ス  
ル外良策ナカルヘシト奏上シタレハ國王ヨリ急使ヲ派シテ  
金宏集ヲ召セタリ金氏ハ本月六日午後四時以迄内シタルニ  
國王ニ深リ既往ノ不明ヲ謝シ悔悟ノ状ヲ顯ハサレタレ後ナ  
朴泳孝處分ノ事ヲ執コレタリしが金宏集ハ申等事命  
吾澹守村人ヲ招キ手談ヲ定メるゝ國王ヨリ他大臣ヲ

召せし初半後出願封う警務使に任じ訓練大隊長う  
交迭せしノ翌七日未明より雪ふに取れ掛りたり云つ同  
日朝五時前金外部大臣、来館して其沙弥う本友に  
通じ是ッ朴氏ヲ逮捕せん、因じ日本人之ヲ姑尋せん様  
面談ヲ為す、依れり同大臣ト対談中朴氏突お其ノ  
席より来りしに付金大臣ハ暫う解う交へて立ち去り朴  
氏本館う去りし後ハ政府より巡査及兵隊ヲシテ其處ヲ追  
ハセり、同リ將又王宮ノ方ニテハ金虎集主トナリ事ヲ  
執り七日昼頃ハ徳光親王降ろし外各大臣打揃へ兵  
隊巡査ヲ以テ嚴重ニ王宮ノ内外ヲ警戒備ししハ城内

別ニ不穩ノ事ナリ徐光範ヲ始メ朴氏一門ノ人々皆之ヲ  
ナリ昨日申實善免職ト允用拘リノ事電報ニタルハ  
誤リナリ又昨日康大院君ヲ召サレモ病ヲ稱シ入闕  
セサリレ由抑モ本件ノ起リヲ探悉スルニ宮中又旧黨ノ  
内ニ深キ計慮アリレトモ思ヒス尤モ近來朴派ノ舉動  
ニ付キ終ラ康スルモノアリ衆目モ其ニ集マリレ康偶然  
ハ愛憎ヲ接シタル情モ期シムルヲ相恨同シ以テは當分  
ヲ決行シタルモノト思ハル今日ノ模様ハ至極平穩ナリハ  
上ハ早ク金甌集一派ノ人ヲ以テ内閣ヲ組織シ以テ閔氏  
カエシニ乗スルヲ防ギ行ヒ奉リシ改革ノ順序ヲ逐テ

進行也。或ハ却テ堅固ノ内閣ヲ主ツルヲ得ルキカ否ヨ  
誠ニ肝要ノ場合ニ付本官内々其助ノ人ニ向ヒ早ク  
金岩基内閣ヲ作ルコトヲ勸メ張レリ。今回ノ事ニ付充分  
探偵シタレトモ外五トノ関係ハ更ニナキ模様ナリ

杉村

西園寺外務省代理

進行セハ或ハ却テ堅固ノ内閣ヲ主ツルヲ得ルキカ否ヨ  
誠ニ肝要ノ場合ニ付本官内々其助ノ人ニ向ヒ早ク  
金岩基内閣ヲ作ルコトヲ勸メ張セリ今四ノ事ニ付充分  
探偵シタレトモ外五ノ關係ハ更ニナキ模様ナリ

杉村

西園寺外務省代理

外務省

電受第九二七號

（明治二十八年八月二日午前十時一分發）

三浦公使任所命やうしや當方ノ報告アリ早ク  
お返しなす

井上公使

西園寺大臣

電受第九三三號

（明治二十八年八月十日午前十一時三十分發）

三浦公使ノ件ニ付テハ本友既ニ大君主ヘ内奏シ  
満意アルセラルルコトナリトナリテハ本友ハ之ヲ速ニ任  
所ニ命ジ赴任セシメ官當方ノ輕介宜シ同公  
使任リ以出奔スルヤ返電ヲ待ツ

井上公使

外務大臣

外務省

電送第六四五號

明治廿八年八月十日發

三浦公使赴任ノ件ニ關シテ赴任前種々有紳魚  
お中より多き事ト之アルニ付サテテ有都人ニ依リテ  
出奔陵サヤ又見入ニテ在月ニ付様察力五四  
号付カ以テト進ミテ新ニ關ニ有都人前リ以  
關ニ有都人乾永積尤ヤ又三浦公使ハ何リ以出  
奔スルヲ關ニ有都人希望セラルヤサテ有都人越  
以テ三浦公使ニ命シサ出奔ノ時期ヲ有都人  
ハシ○三浦公使ニ命シサ出奔ノ時期ヲ有都人  
ハシ○三浦公使ニ命シサ出奔ノ時期ヲ有都人

西園寺大臣

井上公使

外務省

電受第九三九號

（明治二十八年八月十日午七時十八分發）  
明治二十八年八月十日午七時三十分着

三浦公使に命ぜられしや、早う出發せし  
メラレタし當地移る事有アリ、故に公使署に  
上川鐵道ノ為メ十以上降参、必要アリ云々急色  
電待ッ

西園寺大正  
井上公使

外務省

電送第六十七號

明治廿八年八月十二日發

三浦公使、來二十五丁、以出之、運ニ改スヘシ  
地ニ直ニ令、令ノ、漢ヲナスヘシ

西園寺大府

井上公使

電受第九四一號

號

明治二十八年八月

日午

午後二時五分

分發

樞密第五四号老行ヲ成ムセリ旧信中、韓城ノ  
情況ヲ穩ニ歸シタリト申シ難シトアリ右ニ如何  
ナルヲ極ニ平穩ニ歸セスト認メラハヤ本友ハ  
毫毛モ不穩ノ事ナシト認ム

又左ノ言ヲ三浦ニ傳テシヨ

老行ヲ成ムセリカ其地ニ於テ片言想像ヲ以テ  
色々ノ注文ヲ為シタリトモ又当地ノ事情モアリ兎  
ニ用早ク赴任セラルシヨ其上ニテ篤ニ相談スルコ  
ト依テ何リ必要スルヤ確拔セヨ

西園寺大良

井上公使

杯蜜

電送第五四號

明治廿八年八月二日發

國に帰任之際、後任者として三浦中將を金權公使に  
 任ず、件は先般既に電報を以て及所被知す。因  
 り九軍了済す。何時そ其地に赴任す。要するに  
 此共、公使より國に占り出る。此中其の趣旨又  
 國に帰任後、情状を今より稟報し、歸りしと  
 雖、申す所を、常々公使赴任義、暫時具左セ  
 國より其地、情状と共に赴任、時期より赴任  
 事上より其地、情状と共に赴任、時期より赴任  
 又、其地より其地、情状と共に赴任、時期より赴任

西周季子良

井上公使

省 務 外

外務省

電受第九四六號

明治二十八年八月十三日午十二時三十分發

當地、却入ア、付、是、非、其、廿、日、以、上、之、其、地、  
ヲ、出、之、セ、シ、メ、元、ノ、様、度、ニ、タ、シ

井上公使

西園寺大員

廿年七月七日京城癸巳八日接受

探偵ノ報告并ニ佐々木留藏ノ口供ニ據シハ朴泳孝

ノ謀反トハ玉妃ヲ弑害セントシタルコトニテ三四ノ日

本人モ加ハリ多少ノ隱謀アリシ事ヲ右佐々木ニ於テ

聞込ミシツタソシヲ以テ之ヲ朝鮮人カンサソイエキニ告ゲ

カンサソイエキニ金宏集ニ告ゲ夫ヨリ國王ヲ許シ達スルコ

トミナリタリ又朴ノ反對ニハ金宏集申箕善趙義洙

等氣脈ヲ通シ更ニ舊派ノ人々ヲ以テ内閣ヲ組織スル計

畫アリト云フ尚ハ探偵ニヨリバ昨日午後四時金宏集

参内引續キ申箕善愈々濇尹致昊ハリコウシヨク

朴定陽リカエイ等参内夜半安駟壽ヲ召シテ警務使

ニ任セラシ李允用ヲ拘引シ訓練第一大隊長申應慤ヲ

罷メテ申大休ヲ以テ之ニ替ヘタリ本日晝頃徐光範ヲ除

ク外各大臣何レモ参内シ居ント云フ依リテ考フル此度ノ事  
件ハ今王<sup>宮</sup>室ヨリ起リシヤ又ハ舊愛、企謀ニ出テタルヤ  
若クハ朴泳孝等実ニ隠謀アリテ之ヲ促シタルモノナリヤ  
未タ判然セザル所アリ目下探偵中ナリ朴及ヒ李圭完、  
申應然等今朝七時頃洋服ニテ京城ヲ出テ直ニ龍  
山ヨリ乗船シ仁川、於テ本日出帆、汽船ニ乗込シ日本ニ  
赴クベシ徐大範ハ在京ナリ同人及ヒ金嘉鎮、權在衡  
ハ三人ハ危険ノ虞アリト云フ只今迄ノ所ニテハ外國トノ  
關係アリトモ見ヘズ

杉村代理公使

西園寺外務大臣代理

電受第八三六號

共年七月

七日 午後二時五十分 奏  
八日 午後二時五十分 奏

朴泳孝不軌ヲ謀リ事露ルニ免官逃走ス嚴重  
ニ乗船ヲ防キ搜索セヨト京城外部ヨリ當地  
其分助ヘ電信ニテ命令アリタリ御参考ノ為  
御内報ニ及ブ

彦山

北藤領事

外務大臣

電受八三四號

己未七月

七日午前九時平名奏  
八日午前主時五合看

昨夜王宮ニ各大臣ヲ召集セシ（朴徐二人ノ外）

俄カニ朴永孝ノ官ヲ免シ且ツ謀反ノ嫌疑ヲ

以テ之ヲ捕縛スヘキ旨諭旨發令セリ

リタリ右ニ付朴ハ今朝潜カニ仁川ニ赴キ同地

ヨリ日本ヘ潜行スベシトイヘリ朴永孝謀反ノ

嫌疑ニ付テハ探偵書類多ク國王ノ手許ニ

蒐アリシ由ナリ其内日本人佐々木留造之

モノノ筆談書ハ重クナリト聞ク申箕善

李允用ハ其職ヲ免セシ安駟壽ハ警務使ニ

任セタリ其他ハ聞込次芽電報スベシ

京城

西園寺外務大臣代理  
松村代理使

其年六月廿三日京城発同廿五日着

義和宮ハ日本特派大使ニ任セラレタリ地方制度改正  
本日発布相成リ義和宮ノ任命ニ付王妃ハ大分異議ヲ  
唱ヒラセタル由ナルモ内閣論議テ裁可ヲ乞ヒタルヤ聞ケリ

杉村臨時代理公使

井上公使

不通延着

電受第

八〇〇號

明治二十八年六月三日午後七時三十分着

不月延着

櫻間集酩酊、上朴泳孝卿、於子乱暴し、  
予実たり右、早速に派し、領事ヨリ退轉し命  
せり、按て將來、取歸り、関し、目下、飲多トモ、  
誤中ナリ、右、件及他、予を本、外務大臣ニ電報  
せり、

杉村陸海軍公使

井上特命全權公使

廿年六月二十日京城発回廿五日着

左ノ電信ヲ齎<sup>レ</sup>藤ノ求メニ依リ閣下ニ轉達ス但シ朴泳  
孝ノ申スニ王妃ト露西亞公使トノ往來頻リナリト云フコ  
トハ充分ニ探偵スルヲ得ス思フニ近來王妃ト朴泳孝トノ  
間隔離ノ兆アルニ依リ朴氏ハ露公使ニカツケ我カ公使ノ  
應援ヲ求ムル為メナルヘシト思ハル

朴泳孝曰ク王妃ト露西亞公使トノ往來近來益々  
頻リナリ誠ニ困リタルモノナリ井上伯再ヒ來ラレヌコトナラハ誠  
ニ致方ナシ何卒地位ト名望トアル新公使ノ至急來ラル、  
コトヲ望ム

朴ト王妃ト間近来餘リ面白クナキ模様ニテ義和君  
日本行ノコトヲシテ決行シタル如キモ亦西人不和ノ新タル媒ハ  
トナルヘシ係シナカラ朴ノ話ニハ内閣ハ愈々一致鞏固ナリト  
又朴ト魚允仲トノ間モ尔来好都合ト見ヘ朴ハ已レノ  
股肱トシテ魚允仲ヲ徐光範ノコウニ算ヘ居ル程ナリ

杉村

井上公使

電受第七九號

戊午年六月

是日午後一時  
廿六分至四十分  
止の電受

玉通延着

去ルナ者、夕日、極同要ニ即ル者、故碎ノ餘、  
短銃、刀ヲ帶ビテ、朴内部、万數、入り、込ミ、刀ヲ拔  
キ、庭ノ木ヲ切り、其、種、紅、暴、動、ケリ、や、人、  
家、驚、恐、顔、拘、ル、セ、ラ、シ、タル、ガ、領、事、ハ、引、取、ノ、上  
退、却、。電、也、又、此、日、夕、景、有、馬、尾、次、ル、者、當  
外部、大、兵、迫、リ、見、掛、キ、其、連、ヲ、押、止、ン、大、兵、胸  
ガ、ラ、ヲ、取、リ、テ、注、束、ニ、引、キ、込、シ、帽、ヲ、打、掛、フ、等、老、キ  
醉、狂、ヲ、行、ヘリ、月、人、モ、同、ジ、ク、驚、恐、顔、ヲ、引、キ、取、リ、ノ  
上、退、却、。電、也、是、日、此、ノ、夜、も、未、事、朝、鮮

人々我民に對し大なる戒を告げ起しんべし  
ナラズ豫て人々を動かさんて其の機を失はんとす者なり  
テ著しく厭嫌の度より高メシメント欲ス

近來我人民の商地、の東より西に多岐ナルヲ以  
テ我民爲地を治る力ニテハ到底充分ノを歸ラ  
ルスコト難シ是れハ内地に於テ海權多例ヲ制  
定スルカ又ハ他ノ方法ヲ定メテ我人民取り別ケ今後  
業者ノ海權ヲ尊重ス重シムルハニアラセハ今  
後ハ何なる事ナラシムルヤ又計ハ難キニ付ハを多  
ク何ハ其歸情ヲ設ケラレハコトハ然シタリ我民

事等於<sub>レ</sub>平常我人民<sub>カ</sub>朝鮮人<sub>ニ</sub>對スル<sub>レ</sub>爲  
ノ<sub>レ</sub>上寛大<sub>ニ</sub>過<sub>リ</sub>ルヤノ嫌ナキニアラズト思惟  
ス<sub>ル</sub>身<sub>ニ</sub>此際國下<sub>ニ</sub>有<sub>ル</sub>各領事<sub>ニ</sub>ハ我人民<sub>カ</sub>朝  
鮮人<sub>ニ</sub>對スル<sub>レ</sub>不正<sub>及</sub>粗暴<sub>ノ</sub>行為<sub>ニ</sub>對シテハ嚴  
重<sub>ノ</sub>取締<sub>リ</sub>ヲ爲ス様所<sub>ニ</sub>相成<sub>リ</sub>タシ

京城

松村

西園寺外務大臣代筆

電受第八〇一號 其年月日  
廿三日午後七時發  
其旨事當可手看

不道無着

朝鮮政府ハ勅令ヲ以テ木浦 テンナンボヲ開港スルニ  
内定シル旨昨日當外務省ヨリ内報アリタルニ付  
本良ハ該件ニ甘キ同ニ政府ヘ同意ノヲモアルニ付  
テ何カノ取合ナラ得ルニ暫ク其決行ヲ猶豫セシメ  
シト申込ミ置ナリ本件ニ甘テハ井上外相ハ所意見アリ  
且ツ其類一切據テ市お成リルニ付是協儀ノ上至  
急何カノ決断スアリシ

事務  
松村

西園寺外務省代理

事務 旨

廿八年七月九日仁川癸同十日着

朴ハ乗込ミタル御用船富士川丸ニテ昨八日午前  
四時出帆釜山ヲ經馬関ニテ檢疫ヲ受クル苦自  
由党熊本縣人田中ケンドウ及ヒ其書生二名モ  
同行ス

山座

西園寺大臣

廿八年七月九日京城癸同十日着

昨日以來、模様ハ内閣員ハ當分従前、終、据置ク  
由ニテ朴定陽モ出勤シ政令ハ宮中ヨリ出ルト云ヘハ此  
終傍觀スルトキハ閔氏派追々宮中ニ集マリ政權ヲ左  
右スルヤモ測リ難シ依テ此際及フ丈ケ金宏集内閣  
ノ成立、尽カスヘキヤ又ハ傍觀シテ自然ノ成行ニ任  
スヘキヤ返電ヲ乞フ

杉村代理公使

西園寺大臣

名 称	陸奥宗光文書
標 題	外務大臣ト英公使ト、対話大略

分 類	
番 号	74
	28

114-43

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

五月四日

外務大臣ト英公使ノ對話大畧

寒暖挨拶終り

外務大臣

ラウサリ君

此程

了 手文<sup>セラ</sup>貴國政府提

案ニ対シ我政府面答ヲ為ス<sup>ニ先キ</sup>一應責<sup>ニ</sup>付

就キ

意見<sup>ニ</sup>示<sup>シ</sup>形<sup>ヲ</sup>保<sup>ツ</sup>キ<sup>ニ</sup>事<sup>ヲ</sup>供<sup>ス</sup>ラ<sup>ニ</sup>經<sup>テ</sup>貴國政府

府<sup>ニ</sup>意見<sup>ヲ</sup>示<sup>シ</sup>形<sup>ヲ</sup>度<sup>ニ</sup>事<sup>ヲ</sup>柄<sup>アリ</sup>ス<sup>ニ</sup>付<sup>キ</sup>態<sup>ト</sup>

由<sup>テ</sup>我<sup>レ</sup>門<sup>ノ</sup>先<sup>キ</sup>ヨ<sup>リ</sup>日<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>京<sup>ヲ</sup>乞<sup>フ</sup>ハ<sup>シ</sup>譯<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>之

外務省



抑、朝鮮、独立ノ名義國ニ於テ保(担)ス(レ)ト

提議、昨年十月貴國ニハ「トレンチ」著

任「トキ」此ニ貴國ニ府ノ提議「レ」テ「承」ス「コト」セ

ドモ其頃、恰モ日清戦争ノ最中、自キ其事

(朝鮮問題ニ付)

ノ実行リ見「ン」及「バ」ザリ「シ」「コト」ナリ其後朝鮮ノ事

来「ル」事、本「ト」モ貴國駐劄ノ我「ニ」候「テ」シ「テ

(中略)

貴國ニ府ノ意見「シ」モ「形」合「シ」「ル」「コト」アリ「タ」レドモ

貴國ニ府ノ於「テ」ハ「何」カ他ノ事情若ハ關係「ヲ」為

ワースベール侯ハ目下美  
 國ニテ朝鮮問題ニ對シ  
 別ニ確カ所見モ有リガレド  
 モ若シ日本政府ノ意思  
 見ヲ聞クコトヲ得ハ最モ  
 喜ブ所ナリト答ヘラレタ  
 ンモアリ又新聞ノ報  
 道ニ據ル貴國現  
 大蔵大臣ハ甚處ニ於  
 テ此際東方ニ不凍港  
 ヲ有セシムモ英國ノ意  
 別ニ害スル所ナシト演説  
 セラレシコトモアリ

然ルニ

△他ノ時ニ於テ加藤公使ニ對シ露國カ平和的手段ヲ以テ東方ニ商業港ヲ有スルニ  
 至ルモ美國政府ニ於テ敢テ之ニ對シト云フハ限ニ非スト云ハシタリ

當初カレシモ是ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

此ノ事ニ對シ  
 確カニ是ノ事ニ對シ

ト云フ

ノ曲答ラス以前に左ノ件々付キ美国政府ノ

見

決意ヲ知致し

書出未得ハ

手未出キ

知致

英國使

（考ス先ツ）

尋ノ趣ハ至極美ヲコト、思<sup>ハ</sup>事トハ如

味方カ有ハ無キカ、依テヤ<sup>ハ</sup>本否ヲ

トスギフ<sup>ハ</sup>是故貴國、於テ英國政府ガ現ニ

執リテ<sup>ハ</sup>トコロノ方針ヲ聞キタシトモ考テ拙

者ニ於テ十分了解致シタル故早速本國政府

ニ面會セタル上<sup>ハ</sup>何事モ答テ<sup>ハ</sup>然レ<sup>ハ</sup>但し近頃

新聞紙ニ據<sup>ハ</sup>テ貴國ト露國ノ間ニ於テ何カ

トモ言フ

朝鮮ノ事ハ付キ由協議中ノ由モ承知ス

付キ無端ノ事ハ秘密ニ爲スギテ承知ス

ト申ス事ハ無之トモ昂今貴國ノ於テ既

ニ日露ノ同ノ協議中ノ事トモ他ノ邦國ニ向

別ニ新案ヲ由協議中ノ事トモ付テ六ヶ數様ナ

●事柄ハ有人トモ同ノ事

外務省

日露協同ノ事ハ付テ反對新聞等ハ種々

風沙リ書ヲ得ニ  
ネ 今更ニ  
今日更ニ  
等將來ニ

向ニ日露兩國間ニ  
一室ノ約束ヲ  
為スルヤ  
イフ如キ

事柄ノ進行シ  
凡ソ此ノ  
難ヲ  
口トロ  
ツシ  
也  
歸

國前朝鮮  
上  
日露  
兩國  
間ニ

何カ將來ノ  
爲メ  
為ス  
事  
也

急ニ  
角ニ  
現在ノ  
形勢ニ  
對シ  
一時ノ  
處分

ス  
ス  
ウイ  
ヒ  
チ  
イト  
シ  
テ  
目下ノ  
取極  
ヲ  
爲

ス  
コト  
必要  
ナリ  
ト  
シ  
テ  
我  
國  
府  
於  
テ  
モ  
目下  
ト  
省

棄措キ難キ事柄、付テ、初双方相決中、  
有之~~事~~、其事柄ハ一、國王カ王宮ニ遷御  
スベキコトヲ定ムルカ、或ハ日本守備兵カ朝鮮  
ノ平和恢復スルマデハ、~~其~~人民ヲ保護スル為  
メ駐在セシムルカ云フ位ノ事としテ、~~其~~相決ハ  
現ニ事柄於テ兩國公使ノ間ニ進行中ナレド  
モ元来露西亜ガ日本ニ對シテ、~~其~~而望ム所ハ  
朝鮮ノ独ニシテ名實共ニ侵害セザルハ保証

ヲ得タニト云フコトヲ以テ大主我トシテ日本ニ本朝

解シ侵略スルコトノ意思甚々又無之ニ非ニ主

義シ基礎トシテ議論中ニ在ル故ニ若シ此主義

ニ對セザレバ日本ハ多クは相対シテ事ある

何事ノ願慮ヲ要セサルコトナリト信ス然レドモ

露國政府ハ亦ナサントモ表面上作事果

議スルヤシハ思ハルニ俟テ事ヲ得ニ付日本ハ

今何事ノ事件ニ付テハ朝鮮事ハ自ラ率先

的行動ヲ為スコトハ好マサルニ故ニ更前ニ

外務省

見う前ヒタハ

貴國政府ノ事ハ如貴國カ今

率之地位ヲ執之我國ハ他諸國ニ均シ

招誘ハルハ平等位置ニ立ムコトヲ欲ス

美國ニ付

我國付了本官前今文面ニ據テモ

英國政府ハ今固無端ニ率先的ノ位置ヲ

執リ得了ナルニ相違ナト推量ハシ居レドモ

尚其

皇太子ハ政府ノ意見ヲ確シテ上更ニ善

ヲ申上ベシ

名称	陸奥宗光文書
標題	覚書

分類 番号	
	74
	293

157-151

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



安んずる疑懼を抱く及ハザレト云テ

還御、忠告スベシ又日本主代表者

日本主士ハ所歸、自キハ願志ナク置ラザル

今様云リ其ノ

二現主内、大主ハ陛下ガ自由、意思思フハテ

任命セラルモ、此テ多クハ過ルニ二年間内

大臣ヲ知ル他、野籾ニ在リテ自由思想ヲ

有シ且温和ナル人々ナリト知ラレ居リ日、予

其代表者陛下が自由思想の有具  
溫和なる人物ヲサ、臣位命及サ、臣民  
亦テ寛大ノ交呈ヲ施サントウ陛下ニ勸  
告スルコトヲ以テ常ニサ、目的ト為スベシ

三、其代表者老ノ駐一付キ全ク日本國代

表者トス見テ、曰フス即チ朝鮮ニ現況

其山主域向、憲行線、保三渡ノ必、或協

交、日古、其律兵ヲ置テ、必要アルベキコト及現

三中队、兵丁ヲ以テ但成スル所、該所  
兵ハ可成速ニ撥回シテ之ニ代フルニ意兵ヲ  
以テ之ヲ以テ之ニ配置スベシ即チ大邱ニ五  
十人可與ニ五十人釜山至城間ニ在ル十個可派  
出所、各十人トス尤右ノ所至ハ愛更スルコト  
ヲ得ベキモ憲兵ノ総數ハ必ス三百人ヲ超過ス  
ベカラズ而シテ此等憲兵モ將來朝鮮政府於  
テ治安秩序ヲ回復シタル後ニ漸次

撤回スベキコト

四、朝鮮人ヨリ萬一難名輕手セラハ、情面ニ對シ

京城及冬ノ開港場ニ在ル日本人ヲ留メラ

ルコトヲヘシ

五、復スルオノ京城ニ一中隊釜山ニ一中隊

六、又一中隊日本兵ヲ置クトル得ル但一中隊

人員二百名ヲ起召スベカラス該兵ハ各

々多岐母家ヨリ屯營スベク而シテ前記難

名輕手ノ虞ナキニモリ決策之ヲ撤回スベシ又

韓公使館及冬領了館以保漢元  
武義公使館亦在冬領了館日本兵人數  
起召兵士置於冬領了館而止  
補兵內地全歸漢歸漢茅之  
撥回冬領了館

冬領了館人冬領了館  
冬領了館人冬領了館

名 称	陸奥宗光文書
標 題	伊藤首相宛 大石駐韓公使署翰

分 類 番 号	
	75
	1

9812-15

国立国会図書館

登録番号	
------	--

李正人



固多論ヲ待ク而シテ已自ラ内ニ顧ミ

於テ漢學短才ニテ將來為スルニ足ラズ寧

知今更史歲月ヲ繕リ遊學ヲ欲求ニ試

タル日足タルヲ悟リ是レ即チ今臨辭職決

心ヲセシ本旨ナリ然レバ頃日已ノ對韓

意見ナリトシテ世ニ流傳スル所アリト雖モ古

一、刻し、前時已、閣下、且、陳せしところ、今

更、業、解、要、且、新聞紙

上、虚構、百出、傳説、對し、今更、正

誤、年、出、笑、所謂、狂者、西奔、狂

者、夕、并、多、西奔、所由、徒、終

論、生、出、是、今、正

是、生、出、是、今、正

誤心方ヲ執ラズ又心已ガ對韓策ヲ

我邦將來ノおカ計畫シテ閣下ノ

参考ニ供シタルモノニテ其條件中得ニ即

今断行スベカラザンモノモ亦多シ而シテ已

今思辭職ラ乞フ所以ハ即チ前述ノ如ク今

一面欧米諸國ニ遊學シテ學識ヲ增長セ

陰

ト欲スル外決シテ他意アルニ非ラズ故ニ世

上ニテ西也ノ進退ハ献策ノ採否ニ關スルモ

ノ如ク一言ニ爲セトモ是今ノ一種揣摩意

測見ノ過キハ今ノ無辭表ヲ提出スル同

時ノ其理由ヲ主明シテ意ヲ東ヲ披瀝スル

如此等ノ故具

明治廿六年一月廿七日

辦理後方事務

內閣總理大臣伯爵伊藤博文殿

名称	陸奥宗光文書
標題	陸奥宗光宛 大島圭介の書翰

分類番号	59-1
	75
	2

国立国会図書館

登録番号	
------	--

256219

昭和7年/月/日

十月廿一日 今朝如常  
安可也 市況も悪  
諸内田之社と市況  
在り 錦平 以任田  
杉右ハハ使役書記  
予等も有る長  
以下も有る長  
書記官との職  
能、お前  
予等も有る  
誠、担任  
於今、重  
安、一大  
恒流、

誠、振仕之、外中、廣、  
於、一、重、中、之、路、回、光、  
晏、一、大、有、原、之、夫、  
恒、晚、一、子、之、中、之、現、今、  
於、浦、之、鎮、之、鎮、四、之、官、  
定、恒、抗、一、每、年、前、  
公、使、館、庶、出、以、年、  
第、一、收、年、之、鎮、之、鎮、  
詢、一、談、論、之、之、取、取、  
之、之、之、之、之、之、  
書記、官、一、恒、抗、  
官、有、重、之、之、之、  
一、子、於、浦、之、之、  
之、之、之、之、之、  
朝、朝、之、之、之、  
之、之、之、之、之、

人 戸 下 以 之 看  
新 領 子 事 子 殿  
只 妻 子 之 悔 玉 耳 的  
朝 領 正 心 之 侍 相 本  
是 家 子 子 子 子  
實 之 便 館 諸 官 院  
秩 之 結 地 子 子  
多 親 之 之 及 先 氏 子 子  
郭 永 邦 好 子 妻 子 子 子  
是 之 巡 查 之 付 息 子 子  
只 之 破 互 之 後 用 之 被 録  
海 子 子 子 子 子 子  
王 子 子 子 子 子 子  
平 子 子 子 子 子 子  
以 之 先 子 子 子 子 子  
董 勤 子 子 子 子 子 子

玉<sup>り</sup> <sup>物</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>ふ</sup> <sup>に</sup> <sup>因</sup> <sup>て</sup> <sup>便</sup> <sup>に</sup> <sup>終</sup> <sup>る</sup>

平<sup>に</sup> <sup>於</sup> <sup>て</sup> <sup>内</sup> <sup>言</sup> <sup>を</sup> <sup>以</sup> <sup>て</sup> <sup>按</sup> <sup>ず</sup>

<sup>以</sup> <sup>て</sup> <sup>先</sup> <sup>に</sup> <sup>現</sup> <sup>在</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>く</sup> <sup>古</sup> <sup>碑</sup>

重<sup>に</sup> <sup>勸</sup> <sup>み</sup> <sup>方</sup> <sup>希</sup> <sup>世</sup> <sup>を</sup> <sup>生</sup> <sup>か</sup>

為<sup>す</sup> <sup>然</sup> <sup>る</sup> <sup>愚</sup> <sup>者</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup>

稱<sup>を</sup> <sup>勢</sup> <sup>一</sup> <sup>多</sup> <sup>様</sup> <sup>な</sup> <sup>か</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>義</sup>

以<sup>て</sup> <sup>音</sup> <sup>の</sup> <sup>見</sup> <sup>の</sup> <sup>通</sup> <sup>り</sup> <sup>に</sup> <sup>一</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup>

得<sup>る</sup> <sup>又</sup> <sup>現</sup> <sup>在</sup> <sup>の</sup> <sup>通</sup> <sup>り</sup> <sup>に</sup> <sup>一</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup>

西<sup>に</sup> <sup>川</sup> <sup>を</sup> <sup>交</sup> <sup>し</sup> <sup>流</sup> <sup>を</sup> <sup>く</sup>

と<sup>題</sup> <sup>を</sup> <sup>勵</sup> <sup>意</sup> <sup>を</sup> <sup>通</sup> <sup>す</sup> <sup>於</sup> <sup>て</sup>

考<sup>へ</sup> <sup>他</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup> <sup>缺</sup> <sup>く</sup> <sup>を</sup> <sup>以</sup> <sup>て</sup>

人<sup>を</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup> <sup>古</sup> <sup>の</sup> <sup>如</sup> <sup>き</sup>

セ<sup>テ</sup> <sup>耳</sup> <sup>を</sup> <sup>耳</sup> <sup>に</sup> <sup>中</sup> <sup>に</sup> <sup>通</sup> <sup>す</sup> <sup>の</sup>

古<sup>の</sup> <sup>文</sup> <sup>を</sup> <sup>解</sup> <sup>する</sup> <sup>な</sup> <sup>は</sup> <sup>な</sup> <sup>い</sup> <sup>と</sup> <sup>思</sup> <sup>ふ</sup>

十月十日

阿比



名 称	陸奥宗光文書
標 題	陸奥宗光宛 大島圭介の書翰

分 類 番 号	59-4
	75
	3

国立国会図書館

登録番号	
------	--

19-4

廿二年二月廿五接

お前が身内敷く次とらむ時  
了情一実、思来月の中、  
紙、お前、うき、あま、  
書、お前、お前、お前、  
い上、お前、お前、  
お前、お前、お前、  
お前、お前、お前、  
お前、お前、お前、

二月十七日

大島重太郎

陸奥守光昭

お前、お前、お前、  
お前、お前、お前、  
お前、お前、お前、  
お前、お前、お前、

内報

當國政府内政ノ紊亂賄賂横行、甚シキ時、國權  
長ク不存申、國王ト雖權更ヨリ金穀ヲ勤索シ  
テ賞罰ヲ施シスルコト決レテ日本人ノ推量スル  
能ハカレ所ナリト生モ内外政事ノ萎靡上下人心ノ  
腐敗極度ニ達セシコト曾ラ聞及ヒシトモ今更  
際ニ就キ之ヲ見聞スルハ事々物々異外ニ出テ具  
類敵ノ形勢筆第ノ盡ス所ニアラス近來國民中  
ニテ多少志アル輩ハ革命ヲ希圖スルモノ頗ル多キ  
由ナリ  
今東洋ノ政海ヲ保安スルニ當國政府ヲシテ早ク  
大改革ヲ行ハシムルコト大急務ナレトモ今日、後  
國主暗弱姦臣横恣唯一日ノ安ヲ苟且スルノミナ

萬恢復ノ策ナキコト實ニ明白ナリ

即今同族中ニ相和ス泳駭泳煥歟ヲ相煥キ

且勢変シテリ若キ駿良キ煥出ツシハ多ク政務

ヲ改良スル所アリテ本邦ノ文際ニ對シテハ少

利アルベキニ似タシトモ到底全白ヲ一變シテ面目

ヲ新ニスルコトハ望ムヘキコトアラハ故ニ同族リ内証ハ

傍觀シテ其結果如何ヲ注視スルハ外別ニ手段

アルコトナシ

近頃探傳ノ報告ニ據シハ今般素世凱ノ建議ニ

從ヒ清國ヨリ護國大臣ナシモノヲ派遣スルカ或ハ

大院君ヲ奉ケテ之ニ護國ノ權ヲ授ケ富國ノ政事

ヲ改正スルムンノ策略アリト云流ノ真偽固ヨリ

分明ナラサレトモ國王王妃并ニ同族ハ大ニ不安ノ

ノ念アリト聞ケリ過日閑泳幸ニ面會ノ郎日本  
清國英國ニ相謀リテ朝鮮政府ヲ改革スル  
ノ舉アリト聞ク信ナリヤト問ヒシモ此邊ノ凡聞ヨリ  
起リシモノナラム而シテ又大院君世ヲ遁シ閑居ス  
ルモ不平滿腔ニテ時モアラハ光復ノ伎倆ヲ一試ス  
ルノ懿念ヲ懷ク一雷テ所聞ニヨリ諒察スヘシ  
今清國ヨリ新ニ護國大臣ヲ派遣スベシトノ說ハ  
信用スヘカラス其故ハ李鴻章持論ニテモ朝鮮  
内政ニ喙ヲ容シスト唱ヘ居リ且今殊ニ大臣ヲ出シテ  
内事ニ交渉スルモ上下人心ノ帰服スベキ理ナケレハ  
ナリ而シテ大院君ヲ立ニ出カムトノ方畧ハ全ク無根  
ト謂フヘカラス其處ノ議論ハ朝鮮人有志華中ニ頗  
ル勢力アリハ生ノ威名ニ影響者トシ事モナキニアラス

近來モ同様ノ風説は是流布セリ大隈君ニシテ一ト  
タヒ政柄ヲ握ルノ期至レバ一應ノ改革ヲ実行スヘ  
キ権力アリベシト察セラル

諸大隈君愈々之ヲ顯ルモノト假定スルハ李翁ノ指揮  
ニヨリ袁世凱カ之ヲ決行スルハ勿論ノ事ニテ清國ノ  
勢焰ハ之ニ由リテ更ニ增長スルニト疑ヒ日本國ハ之ニ  
對シ如何ナル方針ヲ取ルベキカ唯袖手傍觀スルハ利モ  
ナク害モナキ体ニ見ユレトモ若し清國ノミカ事ニ拘  
レテ勢威ヲ増ストキハ大ニ日本國光ヲ減シ他日何  
事ニモ益巡スルノ大害ヲ蒙ルベシ

因テ惟フニ此敗北ノ國政ヲ改新スルハ何人モ望ム所ナ  
シ其何レノ手段ニ出ツルモ之ヲ妨グルノ理ナキコト當  
然ナリ然ラハ冥々裏々之ヲ周旋シテ清國ノ策謀ヲ

賛成シ且大院君ノ意中ヲ忖度シ機ニ失テ暗ニ  
其歡心ヲ博シオキ事成ルノ日利益ニ均霑スルコ  
ト一奇策ナラム

而シテ此變ニ臨ミ露國ハ何ノ方畧ヲ取ルカ是レ細心  
逆算スベキ一大事ナリ露國トテモ朝鮮ノ内政革  
新ヲ嫌フモノニハアラザンベシ但大院君ニシテ權力  
ヲ有スルニ至レハ王妃ノ危殆閔族ノ衰亡目前ニアリ  
故ニ閔族ハ其機ヲ察シ窮迫ノ餘終ニ露ニ投シテ  
救援ヲ請フナラム是事已ニ先例ヲ推シテ先知  
スベシ

然レハ日本が清國ニ同意シ大院君ヲ推薦スル一奇  
策ナレトモ露國カ現王家并ニ閔族ノ依托ヲ永ク  
之ヲ庇護スルモノトスレハ之ニ對シ拮抗スルノ位置

ニタガリハカラス是亦吹毛索瘢ノ患アリ故ラ鬼  
ト以テ省ミ緩急得失容易ニ断定スヘカラス

愚按ニテ此事莫ニ起ルトキニ至リ清國ハ断然  
處分ヲ為スベキモ我國ハ直ニ殿面ヲ脱シ毅然  
ト王家ヲ庇護スルノ急策ヲ取ルトナカルベシト信ズ  
因テ日本ハ莫々裏ニ清國ヲ幫助シテ改革ヲ行ハ  
シソ假令ニ我國が王家ヲ救フニ至ンモ之ニ抵抗ス  
ルノ圭角ヲ露カハルヲ無難ノ謀略トスベシ

右ハ稍大早計ニ似タリト雖事ノ後スルニ臨ミテ  
躊躇スルトキハ時ヲ失ヒ臍ヲ噬ムル患アリ因テ  
預ソ綢繆ノ寸意ヲ記ス

明治二十七年二月十四日 於京城 述介

名 称	陸奥宗光文書
標 題	陸奥外務大臣ヨリ前朝鮮国代理公使宛書翰

朝鮮公使館滞留、朝鮮人召換ニ関スル  
申付

分 類 番 号	
	75
	4

157-126

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

明治廿七年四月二日附達稿

命朝鮮王代理公使

陸軍省務大臣

以主官公使  
陳八貴公使館瑞函貴國人推東壽權

在壽ニ對シ尋同スキ廉有之ニ付甚勸ノ召喚ニ應

シ候様由達相成度旨數回由面談及ビ尚又一昨日

最後ノ由面會ノ節ニモ昨朝ハ時迄ニ奉大旨ヲ

差生シタ茅廿五號<sup>書</sup>據翰ニ對シ由面答無之狀

又ハ由面答有之也共由日未由面談ノ節由辯解ニ

相成候事ヲ同様ニ繰返シ候様ノ由由答ニ接ス

下  
貴使に於て此萬國普通慣例に本意を

請求する全う拒絶相成候義に相認る外無之旨

由面談に及び貴使に於ても由義諾の上由歸致

相成候義に有之候處第五號貴藩二月

廿五日即ち我曆三月二十一日日附に相成居候

得共本大臣の旨に由送附相成候に昨朝九時

過る有之候事、昨朝八時迄に貴公使館に

金澤殿氏より回答延期断り左の如し、差

本大臣官

遣<sup>ニ</sup>使<sup>ハ</sup>候事実<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>判然<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>之候故<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>臣ハ

既<sup>ニ</sup>由<sup>リ</sup>約諾<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>相<sup>ツ</sup>違<sup>フ</sup>候事故<sup>ニ</sup>金<sup>ノ</sup>々<sup>々</sup>貴<sup>ニ</sup>傳<sup>ヘ</sup>於<sup>テ</sup>

ハ本<sup>ノ</sup>臣<sup>ハ</sup>請<sup>ム</sup>求<sup>ム</sup>ヲ由<sup>リ</sup>拒<sup>リ</sup>絶<sup>ス</sup>相<sup>ツ</sup>成<sup>ル</sup>候義<sup>ト</sup>諾<sup>ベ</sup>キ

道理<sup>ハ</sup>萬<sup>々</sup>有<sup>ニ</sup>之候<sup>ハ</sup>共<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>臣<sup>ハ</sup>が事<sup>ヲ</sup>由<sup>リ</sup>面<sup>ニ</sup>議<sup>シ</sup>及<sup>テ</sup>候

通<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>西<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>存<sup>ス</sup>文<sup>ニ</sup>証<sup>ヲ</sup>傷<sup>ム</sup>害<sup>セ</sup>ル<sup>コト</sup>ヲ免<sup>ル</sup>

允<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>更<sup>ニ</sup>明<sup>ク</sup>朝<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>迄<sup>ニ</sup>由<sup>リ</sup>回<sup>リ</sup>答<sup>ス</sup>延<sup>ビ</sup>期<sup>シ</sup>使<sup>ハ</sup>我<sup>ノ</sup>

便<sup>ニ</sup>益<sup>ヲ</sup>國<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>餘<sup>リ</sup>地<sup>ヲ</sup>存<sup>ス</sup>間<sup>ニ</sup>右<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>迄<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>ト

ニ由<sup>リ</sup>回<sup>リ</sup>答<sup>ス</sup>有<sup>ニ</sup>之度<sup>ニ</sup>抑<sup>テ</sup>又<sup>モ</sup>權<sup>ニ</sup>東<sup>ノ</sup>封<sup>ニ</sup>權<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>壽<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>節<sup>ヲ</sup>

ニ尋問スル李逸植ノ事ニ関シ裁判上順序ヲ履

行セシムルニ有之ル事追々李逸植朴泳孝等

凡問

ヲ尋問致候所權東壽權在壽共李逸植共

謀ノ罪犯有之義ヲ警察上・認定し早ヤ已ニ

裁判所求刑候運ニ相成居ル就テ權東壽權

在壽ハ最<sup>果</sup>初人ノ資格ニ充テシテ犯罪被害<sup>果</sup>人ノ資格

ト相成愈々我國ノ裁判手續上此三人ノ裁判所工

召喚スル義ハ更ニ重案ト相成候付世上遷延致ル

召喚ニ應じたる様は應云

列傳卷之六

第

卷之五

卷之四

177

木在

百

付已ニ本人共ハ其旨相達シ置候ニ其本國ニ歸ラ

其踪跡不分明ニ付我番本年正月廿日本同人等

行衛由査探ニ下其様由願申上置候義ニ有之

之ニ對シテ未タ何モ由回答無之ニ云々ト御申

越候處已ニ書中ニ有之如ク其踪跡不

明ナ付奉大臣ハ同人等ノ所在ト思考ス地方

官ハ訓令致置候ニ其其節所在不分明付別ニ

由回答ラ申<sub>運ニ至ナリシ義</sub>有之<sub>又由來</sub>

主中  
自由主義の刻  
る豫示を以て義天有之此の警察

署員の本館に来り尋問せらるる不苦災云々  
中絶候得共

正義の義書中始り陳述に相成り義の災

萬國公法の例を案する各國駐在の外國大使若く

は使の如き身外貴き人対して其時として其駐在國

の警察官が之使館に就て尋問する例え有之

（其今更に如き二）  
特刑事、社告人對し

我警察署員が貴之使館に就て尋問する例ハ

ト  
等  
自

未曾見是也

(三言之升就之)

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

其後之使館之亦如權利之

有<sup>セ</sup>ヤ<sup>セ</sup>ガルカ故ニ終<sup>ニ</sup>貴國人<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>貴國<sup>ニ</sup>於

テ犯罪者<sup>ハ</sup>疑<sup>ハ</sup>ルモ<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>トモ之<sup>ノ</sup>貴<sup>ニ</sup>使館<sup>ニ</sup>護送<sup>シ</sup>

若<sup>ク</sup>貴<sup>ニ</sup>使館<sup>ニ</sup>拘留<sup>セラル</sup>モ<sup>ハ</sup>如<sup>キ</sup>權利<sup>ヲ</sup>有<sup>セ</sup>ル義<sup>ニ</sup>

付<sup>テ</sup>如何<sup>ニ</sup>貴<sup>ニ</sup>使<sup>ノ</sup>請求<sup>有</sup>之<sup>ル</sup>共<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>長<sup>ハ</sup>

貴<sup>ニ</sup>我<sup>ノ</sup>條<sup>約</sup>以外<sup>ニ</sup>貴<sup>ニ</sup>使館<sup>ノ</sup>權利<sup>ヲ</sup>擴張<sup>ス</sup>

トスル如<sup>キ</sup>對<sup>シ</sup>テ<sup>ハ</sup>無論<sup>ニ</sup>同<sup>意</sup>難<sup>シ</sup>ト<sup>ス</sup>

貴<sup>ニ</sup>使<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>貴<sup>ニ</sup>我<sup>ノ</sup>條<sup>約</sup>ハ<sup>ハ</sup>熟<sup>考</sup>スル<sup>ニ</sup>如<sup>キ</sup>

由<sup>テ</sup>請求<sup>ノ</sup>難<sup>シ</sup>成<sup>ル</sup>義<sup>ハ</sup>明<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>ト<sup>ス</sup>存<sup>ス</sup>

付別録に國名及ハザリ義有キ

要之今面ノ如キ請求ハ前書ニ申進如ク力國

普通ノ慣例ニ付在シ此所見ヲ吳ニシテ

西國間交誼ヲ損傷スル極ノ事有之タラ奉大

臣ノ<sup>尤</sup>道憾トスル所存是迄數回貴<sup>下</sup>注

意ヲ促シ奉<sup>レ</sup>遂ニ今日ヲ至<sup>ル</sup>迄義ニ付<sup>レ</sup>會

明朝<sup>心</sup>時迄ニ奉<sup>レ</sup>長クシテ満足セシム<sup>ル</sup>丈ノ由

存無之<sup>大</sup>上<sup>大</sup>時<sup>大</sup>事<sup>大</sup>煩<sup>大</sup>重<sup>大</sup>ト<sup>大</sup>ニ<sup>大</sup>成<sup>大</sup>ト<sup>大</sup>存<sup>大</sup>也

付此段更ニ生注意ニ及生更ニ考ム

名称	陸奥宗光文書
標題	

金王均遺骸=由之陸奥外務大臣  
岡本柳之助 佐後書報

分類 番号	
	75
	5

157-125

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



人 信 受

發

局

着

局

第

月

付 受  
午

信 受  
午

印 附 日



報 局 號

日 號

分

字

分

日本政府電報送達紙

定指

人 信 發

着 第

事 記

Handwritten telegraph code in katakana, organized in columns. The code appears to be a standard telegraphic shorthand used for transmitting messages efficiently. The characters are written in a dense, vertical arrangement, typical of telegraph codes of that era.

人 信 受

局 着

局 發

印 圖 日

受 午

付 午

第

月

時

時

號

局

報

分

字

分

日



定指

日本政府電報送達紙

事記

着第

號

ヤ  
エ  
フ  
ク  
ト  
レ  
ル  
ス  
ノ  
イ  
ガ  
イ  
ハ

人 信

明治 年 月 日  
廿年 四月 五日  
起草  
日發遣

主任

秘書課長 志氣

電送第五〇號  
明治廿年四月五日  
午後三時

兵庫新道 オトワカカン方 陸奥

同本龍之助宛 陸奥 宇志

都合して行ヶアトテ 話し聞ク上海ヲ知ラセテ 據

レバ遺骸受取ル見込ナシ

ト 陸奥 宇志



名称	陸奥宗光文書
標題	陸奥宗光宛 大島圭介の書翰

分類番号	59-5
	75
	6

国立国会図書館

登録番号	
------	--

[illegible]

予ち切しめしる言  
より又何し多き主裁  
中々急遽運命之  
漸く水島次役取反死  
甲子改し子年未だ  
卯五月吉日仁川恭  
丁未年卯月君が  
又急無煥く又急  
事おしめしる  
其子  
ある子  
然る  
徳陽王次弟  
四月十六日  
除き上し失策と  
免職之  
結解  
宋徳王  
後、  
正府  
之  
説  
合  
れ  
文  
分  
内  
結  
取  
多  
美  
西  
国  
日  
其  
頃  
上  
良  
親  
王  
無  
事

[illegible]



名 称	陸奥宗光文書
標 題	東字虎鎮定、為×韓岳出征、件

分 類	
番 号	75
号	7

157-53

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

大車心

大車

廿五年五月十九日

主管 政務局

印

機密第四一五號

本三二

通商局長

...

東學党鎮定、為之林兵出征、

中隊、昨午、接計、少靈、調、趣、對、大略

同、秋、電、行、以、及、各、隊、只、通、了、南、地、之、壯、衛、言

兵、七、萬、金、石、人、夫、之、併、之、一、百、余、名、出、勞、一、概

ハ、此、連、之、以、右、朝、鮮、兵、ニ、シ、テ、支、那、兵、ニ、シ、テ

ハ、出、兵、ハ、南、日、支、那、巡、査、ラ、シ、キ、十、餘、名、銃、ヲ

肩、南、大、門、に、據、テ、任、何、方、向、に、赴、キ、タ、リ、テ、報、知、シ、

テ、付、由、因、由、ハ、不、明、ニ、シ、テ、南、日、支、那、兵、ニ、シ、テ、

山、道、に、入、リ、テ、右、方、向、に、進、ミ、テ、右、方、向、に、

中、日、兵、と、交、戦、シ、テ、直、接、目、撃、シ、テ、右、方、向、に、

又、在、任、所、能、留、留、シ、テ、報、知、シ、テ、支、那、兵、乘、取、

ハ、其、主、手、ハ、是、得、テ、右、方、向、に、進、ミ、テ、支、那、兵、

機密 受第六四三號

事上

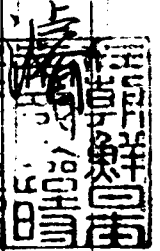
古及其板

之

明倫七年五月十六

王主修

臨時代姓使於



外務大臣陸奥宗光

名 称	陸奥宗光文書
標 題	外務大臣陸奥宗光宛 駐鮮代理公使梅村濬電文

分 類 番 号	
	75
	8

157-51

国立国会図書館

登録番号	
------	--

日本公使館

明治三十七年五月廿五日、以管理後村藩  
在任

外務大臣 齋藤實

退る本月三日、  
一、次ノ裁スヘアリ

以、慶尚監司李容直狀、  
九、既而民變、  
以法、  
書、  
傳、

名 称	陸奥宗光父書
標 題	陸奥宗光宛 大島圭介の書翰

分 類 番 号	59-6
	75
	9

国立国会図書館

登録番号	
------	--

[illegible]

まゝ

大動山を大車に

と節をすくふ所

通見をたしむる

中後小四内人

沙を折る如く

重情を便にす

斗必西の

若生を以て天

山はふく地を

主域を平にす

を一洗し心法

を免はるるを

此日精を

生を了るを

界を有るを

動力を有るを

以一を

以一を

五月三十日

可也

清也

清也

清也

清也

界にありては  
動力を以てする

一、又、その  
二、その

五月三十日

可也

諸君大

可也

高知の  
市街の  
風景

名称	陸奥宗光文書
標 題	陸奥宗光宛 太田至介の書翰

分類	59-7
番号	75
号	10

[illegible]

少兵二万今二度し  
軍船泊走

陸軍兵隊四送し  
取恥用彦

兵糧原年用彦  
天幕用彦

年候甲一軍一可丸

三十日一觀後

安最切要十日後彦

清玉天候一兵兵

凡二宣相三仁川

達スベし而して和兵

隊門司と直に彦那

スルモ四書相安了

可中召さるる光

分ち交相さふや

彼先教う者ケラ

ノ患るる召付候

子と陸軍大長所

順訴すべし

あきと兵隊交る

彼先教ヲ著ケラル、  
ノ患ミヨリハハルハ  
子と陸軍大臣、  
順訴ヨリ一ニ

海陸兵備交々整  
有つ外交上之益  
了スル即時ニ是  
一と徳力を正し

五月三十日  
石田公定  
子ノ父  
五月三十日

陸軍大臣  
石田公定

日記

朝野東子童ノ氣焔愈  
猖獗ナリハ風ナク後ハ新  
周上ニ整戴セリ  
諸市新聞ノ記事ヲ録カキ  
實ナリト認定スルニキ  
我廠を

# 録

朝鮮東子童ノ氣焰愈  
猖獗ナリク風ノ後必新

周上ニ登載セリ

諸右新聞ノ記事ヲ以テ分カ事  
實ナリト認定スルノ中ニ我廠を  
ノ折ラモ之ニ對スルノ榮光ヲ  
今日秘密ニ講求セオカザルハ  
カラズ

東子童ノ民乱僅カニ全羅忠清  
西道ノ一二部ニ止ムモノナリ別  
注意スル程ノ事ハアラズト雖

若シ益具効力ヲ加ヘテ遂ニ

京城ニ侵入スベキ形情ヲ得

ルニ至レバ決シテ袖手傍觀ス

ベキトアラズ故ニ屢ニ代理公使

ニ電訓シテ其事情ヲ子細ニ

探偵セシメ刻ニ電報セシム

テ其ニ必要ナリ或ハ特別ニ

探偵人ヲ該地方ニ派出シ其

情ヲ探索急報セシムルヲ決

シテ懈ムベカラズ

若シ東子童意勝ニ乘シ入京ス

テモアラムニハ我國之ニ對スル

計畧上ニ於テハ頗ル喜ブベキ

レテ悔んべカライ

若し東字堂勝ニ乘レ入京ニ  
「モアラムニハ我國之ニ對スル  
計畧上ニ於テハ頗ル喜フベキ  
概ニテ決シテ憂フヘキ事ニ  
非サルナリ」之ニ氣スルノ策當テ  
得シハ東洋政界ノ一新天地ヲ  
開キ面白キ一大演劇ヲ生スベシ  
爰ニ東字堂破竹ノ勢ヲ以テ  
入京スト預定スレハ之ニ當ル  
手段ヲ分テ二段トナス如左

第一 林陸軍

五百名ヨリヲ直ニ  
一千名マテヲ直ニ

出發スルノ準備ヲ整ヘオキ次ニ  
清國政府ニ照會シ彼國ヨリモ  
大船回數ノ多ク出サシメ合國シ  
テ東字堂ヲ鎮壓シ且民乱  
ヲ平定スルニテリ其事決シテ難事  
ニアラス但出兵ノ期我先ッ探知  
シテ我ヨリ彼ニ照會シ速ニ彼ヲ  
誘導シ彼ノ照會ヲ待テテ後  
始メテ動カガン「所謂問答ヲ  
容レガリノ概ナリ

亦ニ東字堂ヲ鎮壓スルニ  
西國ノ合力ヲ以テスルトキハ數  
日ヲ出テスシテ功ヲ奏シ別ニ交



名 称	陸奥宗光文書
標 題	大島圭介宛 陸奥宗光の書翰写

分 類 番 号	
	75
	11

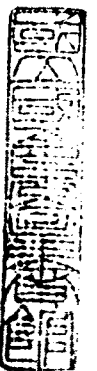
143-(B)4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

廿七年二月廿六日 亥

昨今由着任内外多忙と奉察り、邦内形勢は出衆前ト別、相異り多義を無之也(昔)今面政府、是等、稍、右派派、意外、出ラる如き観より、此、兎も角も、此、難ハサキ方、安ハ併何テス、角、シテ、此、難シ付、世中、故、向、後、種、様、依リ、如何、ニ、変、態、シ、生、シ、多、我、豫、計、新、録、更、尤、果



豊後鎮壓ノ事今古那兵之ノ手ニナリ我  
ガ兵ハ一発モ打出其降國ニ様ニ成ルハ大伴  
上至極ノ事ト存ス共邦内幾論ハ何トナク不  
平ヲ起シ種々ノ詭計ヲ捏造スベシ亦出衆前出  
内訌申付通り何トモテ朝鮮政府ヲ援兵請  
求セシメ手放有之ヌハ頗ル妙カト存ス併ニ  
是ハ金ヲ老兒ノフリフルチニ一任申ス外無  
之也然レモ若シ其事行ハズ得ハ此際對韓

善後ノ事は一講ニシテ如何若シ因循ニ

行ハル見込アレバ袁世凱杯トモ由熟議有之也

又朝鮮政府部内ノ支那援兵ニ反對者固

詠駿ニ反對者ノ中ニ詠セン輩アレハ之ヲ利用

スル一策ナリ然ルニ萬一モ何モカモ行ハズ我兵

ハ空シク帰國スベシト事ニ志ス此際迄来「ベンジ

ンクエー」シヨシ「六日韓文涉事務ヲ一切片付

ケル様ニ由訖判相成サシク強ハモテ「海軍」

付被成る。若し其場合、及へば金玉均死  
倭侮辱ノ一浩鐘宇登用ノ一金ノ家族誅戮  
ノ一等我カ政府がヒウマニチーノ點ヨリ好意勸  
告し、一切用ヒサリシフナトラ列舉シイヤミ  
ヲ言フモ亦策ナレ。兎ノ角今回ノ如キ大兵ヲ舉  
グる結果トシテ何ノ利益モナク退兵スル甚シ不妙  
ト存ス。

昨日來電報ニテ申上立。通リ清國政府ハ

我が出兵ノ速カ<sup>カ</sup>リシ<sup>ニ</sup>モハ<sup>ハ</sup>少々意外ノ様ナ<sup>レ</sup>バ

彼ノ<sup>レ</sup>陸邦論ナ<sup>ド</sup>カ<sup>キ</sup>出シ<sup>シ</sup>云々スル程ナ<sup>レ</sup>バ彼ハ

或<sup>ハ</sup>連ニ退兵<sup>シ</sup>テ我<sup>ニ</sup>連ニ退兵セ<sup>ン</sup>ヲ要求ス

ルヤ<sup>ニ</sup>雅計然<sup>レ</sup>氏我<sup>ニ</sup>退兵ハ如何<sup>ニ</sup>モ場合<sup>ニ</sup>テモ

我が政府ノ訓令ヲ待<sup>ツ</sup>ガ<sup>ル</sup>可<sup>ク</sup>カラ<sup>ス</sup>ト<sup>ノ</sup>一本槍<sup>ニ</sup>テ

お<sup>ハ</sup>差<sup>ハ</sup>サ<sup>レ</sup>ス<sup>コ</sup>ミ<sup>ツ</sup>ト<sup>セ</sup>ガ<sup>ハ</sup>様<sup>ハ</sup>注<sup>意</sup>有<sup>リ</sup>之<sup>ノ</sup>度

久<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>他<sup>ノ</sup>種々申上<sup>テ</sup>度<sup>ア</sup>レ<sup>氏</sup>筆上<sup>ニ</sup>種々<sup>ノ</sup>請<sup>フ</sup>

由<sup>ニ</sup>美<sup>ノ</sup>断<sup>ト</sup>ト<sup>ス</sup>ル<sup>事</sup>致<sup>ス</sup>

此書以院後大中府縣以上

又々奉文ノコトニテ論ヲ提出ス（増合）例ノ

執道論又々京金匱信論其他朝鮮國

港論ナトラカギ出ス之天一軍ナニ到底夫

之ノ取捨之由一任事人

二月十七

宗文

大島英之

七月廿二日 詔ノ由書 拝 統 彌 臣 仕 使

依 所 重 存 之 今 國 事 件 之 付 之 以 下 筆 紙

尽 ス 方 々 人 丈 之 由 配 重 唐 有 之 義 義 之 方

々 之 業 之 申 上 之 竟 之 今 日 之 地 令 之 到 之

義 之 今 老 之 人 由 事 中 津 之 感 謝 之 事 也

集 事 之 即 今 老 之 人 如 之 地 位 之 之 之 之 係 觀 老

之 之 種 々 之 注 文 之 受 之 又 種 々 之 批 雅 之 事 之 之

義 之 免 之 之 事 之 之 之 共 之 之 老 之 之 老 之 之 之



諸既往ノ事、既往ノ事トシテ将来ノ事トシテ尚

要成互ノ責任ハ隨分重大ナル事ニシテ本邦ノ

妙ハ事、<sup>結句</sup>餓、<sup>結句</sup>永リ及ス甚ク不利ナル事ニ

ホ表生シ

然一昔如斯行懸ハナリ故我國ノニ於テ是

甚去リトテ

何カレキハするノ件ナレ故

カニ法島ヲ着ケ得キヤ否ヤ甚ク無覺束縛

事、松ノ未ルヲ待ツ外無キ

斯リホ必し上

後

第一鬼<sup>ノ</sup>國ト一大決戦ヲシス上ニ決

スレバ何カノ如キホ附ケ難キ而シテ

此決戦ハ東亞<sup>法王</sup>ヲ仕懸テ来ル誠ニ都

合ニ之共例ノ支那政府ノ事故我ニ

始メテ得ルカ計ニ不叔我ニ始メ

テ事々々今日ハ萬年ノ平標上

關係ニ此事如何ニ作戦方畧ヲ用

ルヤ豫メニ知ル共海軍ノ勝算

之ハ之ニ上ル已ニ得ル路ヲ朝鮮ニ

リ旅順口着ル盛京ニ出ル外<sup>有</sup>之

間敷左へバ我大兵ハ時朝鮮ニ輜集

セカルヲ

不才ハ才也ヲ得ル其義ニ就ク老ハ

位切トシテハ煩ハルヲ難題ハ事ト存スル其

萬已多過サレテ中ニ在ル結テ余日種

算多ク先ッ本年中位ハ相掛ラサレ到

底平和回復ト申譯スル多ク難題

カレベク

第二 右中ノ如キ有様ナカ故ニ朝鮮

日清間

改革モ直ニ實現セ行ハレトスルニ在リ大正戦

ト

寄

ハ

ノ後、此等朝鮮地、故に戦場なり

ハ戦場ト云へキ通路、如ナル平時ハ<sup>毛事ノ日</sup>改訂ハ

行ハ<sup>ハベキ様</sup>存ス（其去リ、<sup>ハベキ様</sup>文治リ

其体、<sup>金ノ</sup>打棄置ス、譯ニモ<sup>ハベキ様</sup>難ケル

精々出来得、文ノ改革ハ<sup>ハベキ様</sup>改訂ノ

内外、対シ日本ノ干渉シテ改革ヲ行ハシメ

ス、効能ヲ<sup>最モ</sup>著シ、事必要ト

存ス、夫等ハ<sup>ハベキ様</sup>當ノ<sup>ハベキ様</sup>文ニ有ニ<sup>ハベキ様</sup>生

これに  
本はたに  
お應へ申さ

第三

前述べた通り、  
本中書に述べる如き事、  
或は誤り

平和回復を申す、  
尚ほ

久しに及ぶ其間の戦場、仕事、  
或は

キリシタン日本が大兵ヲ發シ多額ノ費

消

トシテ

用ヲ費シたる結果何を得ん所と云ヒテ法

局ヲ法フて考へる事、他り平和回復ノ

後若く平和ヲ回復セシトスル時保

ト

等

ハ

衆議ノ及對テ更ニ見セシト申事ハ今ヲ

議テ申付近<sup>生</sup>クコトリアリハ<sup>ハ</sup>的ノ政事

案ヲ日本ノ手ニ取<sup>レ</sup>テ直ニ實行スル

得<sup>ル</sup>ヤ<sup>ハ</sup>朝鮮政府ト約束シ其約束ハ  
假<sup>シ</sup>設<sup>シ</sup>

今ノ朝鮮政府カ顛覆スル言換<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>

万々<sup>ハ</sup>清國<sup>ハ</sup>政府カ再<sup>ニ</sup>朝鮮<sup>ニ</sup>干<sup>ス</sup>ヤ

又<sup>ハ</sup>日本ノ權利上<sup>ニ</sup>テ請求<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>的

東<sup>ニ</sup>テ<sup>ハ</sup>西<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>ル<sup>ハ</sup>必要<sup>ナ</sup>ク<sup>ハ</sup>鐵道<sup>ハ</sup>

電線、礪山南探、城北、日本政府若く日本人

民、チヤ―多、リテ約束サスルカ又電線

ノ如キ、軍用電線ヲ直ニ永久ノモノトシ

或ハ軍限中ニ日本ヲ管理シ他日朝

鮮ノモノニス法ト云フ如キ始末ヲスル可ナリ

又其筆鋒法ニテ鐵道モ軍用の建

築スト云フ名義ヲ用ヒ以テ取ラる可ナ

カルハ欲何ニシテモ日本ノ眼ヲ見テ日

本ノ利益ナリト（其ノ利益ニ非カニ）想像シ

得ルモノナリト事業ヲおこなフ必要ナレバク

又仁川填立地ノ如キ此隆ヲ折テハ老

之ノ一言ノ下ニ多ク本得ルモノナリト考テ同

隆車ト受テ得ル杯ニ一車ト有テ之

第四 朝鮮ニ對シテハ恩威並行ナルノ政畧

ヲ執ルハ必要ナルモ（今日ノ如ク高年ノ）廢藩置縣ノ政畧ヲ

執ルハ實ニ蹊蹙ノ物ナレバ退テ一歩ニ出ル

其故ニ當方内ニ思フモ寧日威ヲ示ス

之附テ出テ了ル必要ニ有之百變哉併シ此

等ノ義ハ實際老父ノ世深慮ニ任カス

ハ又牙山兵追討ノ朝鮮政府ニ依頼

支那領内廢棄事業ヲ新大

クトモ大院君政府ニ最早清國ニ

左祖ニ得ル人形勢故ニ様ニ乘

シ今切以テ本年夏時様ニ之

ラ東傳レテ  
而シテ政府ヨリ日本ノ利益トナルベキ約束ヲ取立

平素我々有之タリ

第五 朴泳孝ハ近リ帰國<sup>州人</sup>久由未<sup>三</sup>日本

人中種々ノ山所在<sup>國</sup>際<sup>ル</sup>ル所<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>久由未

其<sup>中</sup>林<sup>君</sup>福<sup>子</sup>相<sup>佐</sup>主<sup>上</sup>多<sup>ク</sup>朴<sup>泳</sup>孝<sup>ハ</sup>

單身ニテ歸<sup>ル</sup>ハ法<sup>ニ</sup>準<sup>ジ</sup>テ去<sup>リ</sup>テ<sup>ハ</sup>然<sup>ル</sup>ハ十<sup>數</sup>

年<sup>目</sup>本<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>テ久<sup>ク</sup>閑<sup>居</sup>セ<sup>テ</sup>或<sup>ハ</sup>其<sup>中</sup>

種々ノ<sup>日</sup>本<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>ナ<sup>リ</sup>テ<sup>ハ</sup>ナ<sup>ク</sup>ト<sup>モ</sup>有<sup>ル</sup>ナ<sup>リ</sup>

其<sup>中</sup>朴<sup>泳</sup>孝<sup>ハ</sup>三<sup>福</sup>子<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>テ

老父ト相沿スベシト申すノ實ニ由ニ付  
是亦老父ノ近所ノ域<sup>テ</sup>利用<sup>ス</sup>ノ年ト存  
久

第六 茅一改革上朝鮮政府財政團

新大ニシト思ヒテ存西政ス入天因ノ案ハ  
思ハレ

●老父ノ裁決ニ任カセ朝鮮政府ノ貸

金<sup>金額</sup>ニ由ル申述生ズ右ノ由ニ由

計<sup>計</sup>本<sup>本</sup>共<sup>共</sup>裁<sup>裁</sup>中<sup>中</sup>ハ<sup>ハ</sup>今<sup>今</sup>昔<sup>昔</sup>看<sup>看</sup>朝鮮<sup>朝鮮</sup>  
係<sup>係</sup>額<sup>額</sup>一<sup>一</sup>三<sup>三</sup>毛<sup>毛</sup>今<sup>今</sup>ト<sup>ト</sup>イ<sup>イ</sup>フ<sup>フ</sup>旨<sup>旨</sup>

政府が難覆し支那法、政府出才多

テモ何時モ徴り出才多約束取

続じ

事必要ナリ

附生出才多約束取又以上同政府に於テ

金田方面ノ事ニアラズ外國債ヲ發せし

メ其スルヲ而シ今日ノ勢ニモ他、既末

諸君モモ

事其國債ニ應スルモノ有し而シテ

其日本ニテ隨分ニ之ニ應スル者モ有之ト

存多又シ前般ニ申上ル礦山若ク鐵

道ヲ日本ノニ更許セシムル其更許料

トシテ多ク財源ヲ求メ得ル事トモスベシ

假令バ礮山ノ何十年稼取ルカおもコ

免件料

又十年稼取金トシテ若干

前金トシテ若干カ四ノ朝鮮政府工納

計等ノ事ス可然哉ト存ス

第七 改革多國 形勢 逐々 電信 以テ 申

上ニ通リ日本開闢以來如メテモ真白ノ外

諸君ヲ行ヒタルナレハ其間ヤ生じ

文ニ成リ執リ多ク困難ニ至ルハ其今日

ヲ際シテハ其

所<sup>使</sup>言<sup>ハ</sup>西<sup>ハ</sup>里<sup>ヲ</sup>降<sup>ル</sup>外<sup>ニ</sup>未<sup>ダ</sup>差<sup>ガ</sup>當<sup>リ</sup>深<sup>ク</sup>心

美モモ遂ニ外中ニ立テ布告セシムル也

配<sup>ス</sup>元<sup>元</sup>無<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>唯<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>結<sup>ス</sup>為<sup>ニ</sup>饒<sup>ニ</sup>永

遣リ付ケヤ

引<sup>リ</sup>及<sup>テ</sup>ハ如<sup>ク</sup>何<sup>カ</sup>亦<sup>モ</sup>變<sup>ハ</sup>態<sup>ヲ</sup>起<sup>ス</sup>スヤ不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>及

故<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>生<sup>キ</sup>持<sup>テ</sup>誦<sup>ス</sup>最<sup>モ</sup>早<sup>ク</sup>今<sup>レ</sup>日<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>六<sup>ツ</sup>戰<sup>ハ</sup>ノ大<sup>キ</sup>小

ヲ論セズ

小<sup>シ</sup>矣<sup>ナリ</sup>申<sup>ス</sup>唯<sup>ニ</sup>戰<sup>ハ</sup>時<sup>ニ</sup>永<sup>ク</sup>力<sup>ヲ</sup>サ<sup>シ</sup>ス<sup>ル</sup>ヲ<sup>モ</sup>誓<sup>ヒ</sup>泊<sup>リ</sup>王

テモ論シ其ニ層上方ナリ勸ヘモ

罷<sup>シ</sup>至<sup>リ</sup>之<sup>レ</sup>甚<sup>ク</sup>旨<sup>ニ</sup>内<sup>ニ</sup>関<sup>ス</sup>未<sup>ダ</sup>末<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>申<sup>ス</sup>坐

上ケ

想<sup>フ</sup>子<sup>ノ</sup>ハ<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>

芽<sup>ハ</sup>八<sup>ツ</sup>種<sup>ノ</sup>々<sup>々</sup>光<sup>リ</sup>日<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>渡<sup>リ</sup>韓<sup>ニ</sup>種<sup>ノ</sup>々<sup>々</sup>面<sup>ニ</sup>倒<sup>リ</sup>ん<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>元

賣

可相之此際ハ餘ノ色氣ヲ集ル程ノ必要

又布之古皮以爲布若シ老ムコトヲ邪魔シ

大ト思フモノ有之メ下官民ノ已別リ諱セ

不何時也故逐ナサレタリハヤリ又々老ム

助ヲトナシ者アル官民ノ已別無之何時

テモ古皮頂リ来故次第可差生ス

芽九有体ニ申スバ信分隨テ老ムニ対シテモ多

サノ批評ハ有之メ共小生ハ確然オモ

ト

家

小

カス衆論ヲ批撃<sup>ヲ以テ内外ノ批難ニ對シ</sup>シ老心ト事ヲ成敗リ

昔ニスルノ實境ニ失<sup>テ</sup>テ<sup>テ</sup>擇<sup>テ</sup>内<sup>ニ</sup>策<sup>ヲ</sup>次<sup>テ</sup>

論<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>内<sup>ニ</sup>用<sup>ヲ</sup>批<sup>テ</sup>者<sup>モ</sup>小生<sup>一</sup>身<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>志<sup>ス</sup>る<sup>者</sup>

是<sup>レ</sup>時<sup>モ</sup>有<sup>リ</sup>之<sup>ク</sup>保<sup>シ</sup>過<sup>リ</sup>、故<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>切<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>

餘<sup>レ</sup>移<sup>リ</sup>批<sup>テ</sup>雅<sup>ノ</sup>聲<sup>ノ</sup>、傳<sup>フ</sup>之<sup>ク</sup>、其<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>

如何<sup>ニ</sup>流<sup>シ</sup>言<sup>ハ</sup>ス<sup>ル</sup>中<sup>ニ</sup>傳<sup>フ</sup>者<sup>モ</sup>お全<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>

ヤ<sup>レ</sup>付<sup>リ</sup>新<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>、其<sup>レ</sup>老<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>批<sup>テ</sup>者<sup>モ</sup>ナ<sup>シ</sup>シ<sup>テ</sup>

由<sup>リ</sup>懸<sup>ニ</sup>念<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>、之<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>決<sup>シ</sup>新<sup>ニ</sup>、然<sup>レ</sup>ウ<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>

種々中上なる事有之共其皆叶煩ひ多

忙殊

秘官に口授

一 國同移ハ病氣来子了龍リ在

病本

執筆

セシメツ 在墨の斯 久

秘弟

4つ 楓 老いん

名称	陸奥宗光文書
標題	陸奥外務大臣宛 小村駐清公使宛 英文電文

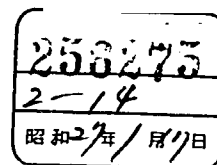
分類 番号	
	75
	12

114-50

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

外・597



15/14 7'1894.

Mentou, Tokio.

(12). The Powers have not yet presented note to the Chinese Government on the pending question but I have reason to believe that England is taking the initiative in inviting other powers to join in intervention. German Minister has already received instructions to act in concert with his colleagues to effect peaceful settlement. As to Chinese warlike preparations nothing definite is known except the appointment of 劉 恩 綏 as commander-in-chief but there is no doubt the Chinese Govt. will be forced to declare war by the pressure of public opinion among official circle delay will give time for European concerted action and Chinese extensive preparations at this juncture the only course left for us to pursue is to send ultimatum demanding withdrawal of Chinese soldier on the ground that their presence interfere with reforms undertaken on the sole responsibility of Japan. I ask for immediate instructions.

Komura, Peking

電受第

號



21/20 11. 94.

Muten,

Tokio.

電受第

號

(8) I have no doubt that the bases suggested by British Minister are the result of interview between 李鴻章 and interpreter of British Legation who was sent to 天津 on secret mission. I have no confidence in sincerity of 李鴻章 in accepting such bases which he must be aware will never be approved by the Government at Peking. British Minister telegraphed to his Government your reply to 在口年英-王 陽時代 理公使.

Komura,

Peking

29/28 7'94.

Huntin,

Tokio.

電受第

號

12. British Minister is strongly in favor of joint-occupation by China and Japan as a preliminary arrangement based on 1. our troops to evacuate 日本. 2. Chinese soldiers in 日本 to remove to 日本 and 3 the number of our troops to be reduced in proportion to Chinese forces; the idea was no doubt suggested by British Minister himself though he says that it originated from his Government. Chinese Govt will no doubt agree to the arrangement as it is a great advantage to them strategically as well as diplomatically. British Minister telegraphed to British Minister for Foreign Affairs to discuss the question with 英國 in the hope that recommendation of the latter will have weight on the Japanese Govt.

Komura.

Peking.

名 称	陸 奥 宗 光 文 書
標 題	小村駐清公使宛 陸奥外務大臣宛 英文電文

分 類 番 号	
	75
	13

114-49

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

17/7/94.

Komura, Peking,

電愛第

號

(9). British Minister to China telegraphed to 在日本英國臨時代理公使 to the effect that tone of your note 七月十四日 to Chinese Government has formally incurred them and they construed it to mean that friendly negotiations are broken off; that British Minister to China has been requested to ascertain whether Japanese Government really had this intention and that negotiations may still be resumed if I send conciliatory assurances.

I answered that Japan has consistently maintained conciliatory attitude towards China and it was the latter that created the present situation by rejecting our proposal, that nevertheless Japan would still be disposed to entertain a conciliatory proposal if it comes from Chinese side through proper channel; but that Cuan reforms have progressed so far we can not now go back to the original basis of our proposal.

Hutton.



19/7/94.

Komura, Peking.

電送第

號

(14) 在日本英國代理公使 received telegram from British Minister to China that Chinese Government are willing to negotiate on the following bases. Main points are 1. To suppress revolt. 2. joint commission for reforms appointed but not force King of Corea to adopt them. 3. To jointly guarantee integrity of Corea. 4. Japan and China to have equal rights commercially in Corea. Word politically to be left out. Withdrawal of troops to be arranged at commencement of negotiation.

Question of suzerainty not to be raised.

China's intrigue and delay made the situation so critical that Japan would have rejected Chinese proposal because there is hardly any hope of amicable settlement but in view of good will of British Government and British Minister to China I proposed the following amendments. main points are:

1. Joint labor of Chinese commission to be confined to future and not touch with works Japan taken up already. Both Governments to pledge to

make King of Corea adopt reforms by all means  
2. Word politically to remain china to propose  
in five days, if not Japan not to entertain  
chinese proposal. In the meantime despatch  
of Chinese troops to be considered as a menace.  
Mutsu.

電送第

號

4-674

July, 22, 1894.

Komura,

Peking.

電送第

號

15. British Minister for Foreign Affairs confidentially informed 英公使 that upon his recommendation Chinese Government is disposed to accept the idea of joint occupation of Korea by Japanese and Chinese troops. Ask British Minister to China particulars regarding nature of occupation, and also if Chinese Government really agree to it.

Muten.

Komura,

Peking.

16. 在日本英國臨時代理公

使 brought me telegram of British Minister for Foreign Affairs as follows:-

The new demands of Japan (see my telegram of 14) are inconsistent with and exceed the bases Japan stated to be willing to adopt for negotiation, that refusal to give China voice in matters already taken up by Japan independently is disregard of spirit of treaty 1885; that Japan will be responsible for consequences if this policy led to war.

I will answer in the following sense. The new demands neither inconsistent with; nor exceeding said bases, because the

present Chinese proposal differ from spirit of the above bases in the following respects.

1. Mere advice is of no use because Korean Government being under strong influence of China the latter while outwardly may join with Japan to offer advice, will be able to secretly induce them to reject the reforms.
2. Chinese Representatives enjoying special privileges can exercise undue influence much prejudicial to Japan's interests. Therefore, it is necessary that Japanese Representatives receive equal treatment at Korean Court.
3. China compelled Japan to act independently. Therefore Japan can not go back to ori-

gual situation unless China will recognize our proposals for which Corea already expressed appreciation. Treaty of 1885 determines only procedure of dispatching troops to Corea and does not find contracting parties to consult each other respecting Corean Affairs.

Such being the case Japanese Government would deem it very unfortunate if British Government should hold them alone responsible for consequences.

Had Chinese Government accepted Japanese proposal at the beginning and not so boldly rejected said bases presented through good-offices of British Minister to China, situation would

4.

not have assumed such grave  
aspect.

Mutou

July 22 '94.

1- a.m.

July 27. 1894.

Komura. Peking.

電送第

號

17. By invitation of British Government, Italian Government instructed 在日本伊公使 and 七月廿五 he came with 在日本英國公使 and presented memorandum regarding our modifications twice made to proposals presented to us by as stated in my telegrams 14 and 16 main points as follows: 1. China to examine Japan's proposals to Corea and Japan to explain objects of works taken up independently. Delegates of both powers to convene immediately not in 京城. 2. If more advice is of no use then nothing short of coercion would answer. Friendly pressure, by Japan and China would induce the King of Corea to institute voluntarily mixed Commission of Japanese & Chinese advisers to execute reforms. 3. To avoid suspicion word politically to be omitted and instead to enumerate points of equal treatment Japan requires. 七月廿六 I answered substantially as follows: we cannot

definitely answer solely because actual situation of affairs necessitates some reserve. Repeated rejection of Japan's overtures make it impossible for Japan to formulate new proposals or to say what modifications would be acceptable. We want some knowledge of actual views of China first before announcing Japan's present attitude and foreign powers may do well to exercise upon China some measure of diplomatic urgency to define her position exactly and in a conciliatory spirit

Muten.

名 称	陸奥宗光文書
標 題	外務大臣ヨリ大島公使宛訓令

分 類 番 号	
	75
	14

157-13

国立国会図書館

登録番号	
------	--

字

帝正政府ハ朝鮮政府ニ對スル行為ニ義府ニ在リ九  
 日秘密送付三七七号信アリ及訓令ニ義府有之  
 及此即今ノ形勢ニ就テ言フハ帝正已ニ清土ノ交  
 戰中ニ在リ之而シテ軍界上ノ者ハ其ノ總テ陸兵ニ在  
 山ニ在リ上陸セドモシテ銀橋ニ輕騎ヲ由リ過リニ尚  
 今及戰鬪ニ進リ依リテ軍ニ其志ニ在リ清  
 土軍兵ノ回土境外ニ驅逐スルニ止ル或ハ道ヲ回ル  
 假リテ本年ニ清土疆域ニ攻進スル已ムヲ得サレバ人  
 ノヤレ不待計ニ義府ニ對シテ朝鮮王位ニ見付



西より戦場若く戦場達する道路、如き深きみち  
 之を封じし金と年相付に於てんが如き、あつた執成る  
 能はる、いふ諦義、有之及び其本問題ニ関して  
 帝と政府とは、必ずしも政府に向ふ、然る言ひ、  
 所て有之及び其外交上及び年々上、りゐる、  
 右等々、いふ言ひ、其義を任せて、得ざる外交上、  
 テモ得る年々上、に於て、其義を任せて、  
 執成るが如き、いふ言ひ、其義を任せて、  
 うざ義、有之、大なり、格、  
 由、  
 戦闘、設、  
 又、  
 有、

改革を遂げしむれば権を行使し、他の方を於て國  
際公法ノ常軌ニ循せしむるべし。時に或る牽制する生じて不  
得に威を以てサカスべし。去中又之が爲に他後を非  
難し、故に事必以て存するに強し。其の辭に其方如き地位に  
陷るゝは、其の決る事を得るべし。無之を要するは、其の  
土地に我が國を置くに無之を以て終始の士に  
府及人民の歡意を多し。然るに起せる様は、其意を加  
ふる。是を肝要者之又分る。我に於て、其の存する様は、其  
に公認し、其の其疆土を侵界する意を以て、其意を以て上  
言ひ、一は、其の保つる其様は、其意を以て、其意を以て毀損

そんがキリ動及甘壙土ヲ實際裏にえカ弊形跡  
可成之ヲ辭々我軍隊運動、弊を總テ朝鮮政府  
ト商量得えカ者、朝鮮政府ト一体運動ヲ為  
カ、實テ革命ノ肝要有之又帝王政府ニ於テ朝  
鮮政府ニ向テ其政治上、改革ヲ勸告スル付テ、單  
純ニ勸告ト止ムズシテ時宜ニ依リテ多少強勸勉  
後モシケンモ可有之又軍ニ上ニ於テ之種々補助ヲ  
要求スル場合モ可有之乃得共以此、勸告要求モ時  
ニ依リテ政府又人民ニ於テ場合得サル、感ヲ生ズル、恐ナ  
シトモ無得今ノ所ニ依リテ政府モ到我我ニ倚ルセザ

ふ其独まゝ保全する能ふと観念する有るモノ如く  
に我勧告我請求に對して萬る勉強しておるを  
其相違無之及び其我要求過度に至る彼等  
は得ては不在意なるを惜み他歐洲各國に駐在  
する我勧告求むる形勢と若くは進展せしむる求むる  
至らざるを保せず殊に或は政府、如きは至る常と其乘  
ぶべき機会を待たず、判斷せしむる一旦は採  
用するに決する此の必らず巧みに朝鮮政府に施  
行し意に日韓の關係を轉じて其に歩む關係  
トヤし朝鮮政府に代りて我抗議し試みるなり

ナキヤニ雖計執子ハ以際帝ニ政府ニ格ニ務キ事  
ヲ慎重シテ分三カニテ客是客略干渉ノ端ヲ得ヤ  
ラシムル様宜意ヲ加フク肝要存左記ニ三條ヲ布  
大臣ヨリ閣ニ又當守衛ヨリ世玉ハ後唐陸汝平  
總指揮友ハ各訓令ヲ發スベキ様嚴決意主  
事ナリ

分一 苟ニ朝鮮ノ独立權ヲ侵害スルガ如キハ  
ニ事ト上不便若クハ不經濟ニ涉ルヲ人民  
ニ本之ヲ避クベキナリ

分二 朝鮮政府ニ對スル請求ハ時ニシテ得ザル

場合可及之、至見其請求程度、新政府  
様之体面、對<sup>及</sup>新設政府に伴、經濟上實  
係對<sup>し</sup>堪得<sup>る</sup>程度、今限<sup>し</sup>意、新政府  
府<sup>に</sup>對<sup>し</sup>我要求<sup>の</sup>堪<sup>へ</sup>ざる、感<sup>を</sup>起<sup>さ</sup>せざる  
様之を注意<sup>を</sup>せ<sup>る</sup>事

并三、新設我國國<sup>に</sup>對<sup>し</sup>部<sup>を</sup>求<sup>め</sup>る、因<sup>に</sup>公<sup>に</sup>に  
て、斗<sup>り</sup>上<sup>に</sup>及<sup>び</sup>其代<sup>の</sup>必要物<sup>を</sup>ある、成<sup>り</sup>其  
後<sup>に</sup>之<sup>を</sup>代<sup>の</sup>償<sup>を</sup>其<sup>の</sup>決<sup>し</sup>て、侵<sup>を</sup>掠<sup>る</sup>形<sup>に</sup>跡<sup>を</sup>無<sup>く</sup>  
之様<sup>に</sup>深<sup>く</sup>注意<sup>を</sup>せ<sup>る</sup>事

前述、由<sup>り</sup>新設決定<sup>の</sup>旨<sup>に</sup>は、其<sup>の</sup>存<sup>を</sup>當<sup>た</sup>該<sup>の</sup>耳

街より其山出馬陸地等總指揮友綿窓十  
訓令可省之等之旨之能く左殿集、在  
所に送く等之旨之能く左殿集、在

此及訓令之故具

寛政七年八月

外務大臣

大島公使

名称	陸奥宗光文書
標題	

井上馨 朝鮮特使=閣下電文  
(任後)

分類 番号	
	75
	15

157-22

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

秘

電文 八八三號

電文 謹

明治三十七年十月九日午後四時五十分、接受

在廣島

陸奥外務大臣殿

伊藤總理大臣

吾々井上伯ヲ特派辦理大臣ノ資格ヲルテ派遣  
スルコトニ同意シ井上伯モ同職ヲ承諾シ西三日中、  
出發スル用意整正シ居リ候テ貴大臣カ適當ト  
認メラルベキ依リ俾委任状ヲ連ニ付地へ送ラシメ  
當分杉村ノ代理公使ヲ勤メサシメ（此旨里田伯  
通セヨ

海  
官

大  
臣

閱了

Mutsu

Tokio

We all agreed to dispatch  
Count 井上 in the capacity of  
特派 辦理 大臣 and count 井上  
has agreed to accept the same  
post and is ready to start in  
two three days - so send <sup>here</sup> at once  
credential in such form as  
you think best. 杉村 may act  
as Chargé d'affaires for the  
present. Inform Count 里田 of  
this.

Ito

Hiroshima Oct. 9 - 1894 4-55 p.m.

Received " " " 5-30 p.m.

宣  
讀  
八  
八  
三  
號

50 wds

至急

暗號

大臣系知

外務省

電受第四五七

號

(明治二十七年十月九日午後五時二分發)

自今、意見

減せられり此際

已ムラ得ざる意シテ、龍子、高島修一郎

ニ至急當地へ出張スル、松田下中アリタレ

本多、一人格装用、為ノサケ(先キ此)降ス

廣嶋

井上伯

陸奥外務大臣

明治三十七年十月九日芝電

在廣島

伊藤總理大臣殿

陸奥外務大臣

井上伯ヲ辨理大臣トシテ派出スルコトニ就テハ拙者ハ  
未タ何事ノ準備モ爲シ居ラス故、拙者力今一  
應電信ヲ差出ス近因伯ノ任命ヲ延引セラル  
コトヲ深ク希シマス

大臣  
認

電送第八五〇号

Nabeshima

Hiroshima

Communicate the following to  
總理大臣 at once.

I am not ready to dispatch  
Count 井上 as 新宰相大臣.

earnestly advise you to wait his  
appointment until my further  
telegram.

Mutsu

October 9- 1894

明治三十七年十月九日芝電

在廣島

伊藤總理大臣殿

陸奧外務大臣

拙者、特派辦理大臣トハ如何ナル性所具ノモノナルヤツ  
了解スニ苦ム若シ之ヲ常時駐劄ノ大使ト解ス  
ハ朝鮮ノ如キ小國ニ對シ左程ノ高等外交官  
ヲ送ルコトハ余ヲ島國ノ慣習ニ反對スルモノトス  
若シ之ヲ一時特別ノ大使ト解スハ時期ニ於テ  
最不得策ノコトハ斯ノ如キ任命ハ  
直ニ諸外國ノ猜疑ヲ招クコト必然ナリ況ニヤ此  
既ニ英國ノ誘通ニ應ジ諸強國カ日清兩國ノ  
間ニ干涉ヲ試ムトシテ注目最ム且此ノ時ニ於テヤ

外務省

尚又拙者ハ朝鮮事件ニ就テ特命全權公使トシ  
テハ為シ能ハス是非共特派大使ヲ派遣スルノ必要  
アリトスル理由ヲ見出し能ハス故ニ井上伯ヲ特命全  
權公使トスルコト對シテ如何ニモ同伯ノ氣毒ナリト  
理由ノ外之ヲナシト思フハ感情ニ就テハ拙者モ至極  
同意ナルカ故ニ若シ右ノ如キ理由ナラハ何卒拙者ヲ  
特命全權公使トシテ派遣セラルベシトモ拙者井上  
伯ノ如キ才幹モナク経験モナキコトハ拙者自ラモ之ヲ  
如何ナル場合ニ於テモ閣下カ御提案ヲ仰  
断リサル前ニ拙者ニ對シ充分ノ其必要ナルコトヲ仰  
明ニ下サルコトハ當然ナリト信ス依テハ電信ニ對シ  
御回答ヤル近ハ拙者ハ大島公使ヲ召還スルコトヲ俟  
テ又同公使ノ後任者ニ對スル委任狀ヲ附々備セサル

大臣  
記

Nabeshima,  
Hiroshima

Communicate the following to 總理大臣  
as soon as possible even midnight.

I am at a loss to understand the exact  
nature of 特派井理大臣, if it means a  
resident ambassador it is entirely against  
the usage of nations to send such high  
functionary to a small country, if it  
means a special ambassador it is  
the most unadvisable measure, for it  
will at once raise suspicions of the other  
countries, especially at the present  
moment when the attentions of the great  
powers are called by England with  
the view to intervene in the present  
war. Besides, I fail entirely to see  
the reason necessitating the despatch  
of the special ambassador for there  
is nothing in the Koreans affairs that  
cannot be carried out by 特命全權公使  
therefore the only reason of 井上伯  
appointment to such post seems to be  
the aversion to the appearance of degrading  
him, with this sentiment I quite sympathize.

電  
八  
五  
二  
瑞

and if this really the case. I offer my service  
as 生命全權公使 Though I am aware  
I am not to be compared with 井上氏  
in respect of abilities and experience  
In any case I trust you will not  
<sup>carry out</sup> ~~adopt~~ <sup>you propose</sup> the measure, without first  
convincing me of its necessity, Until  
I hear from you again I do not  
take steps to recall Otori nor make  
out the credentials for his successor.

Mutsu

October 9-1894

名称	陸奥宗光文書
標題	都憲命吉濬氏、金總理大臣、内命ヲ 帶ヒ渡航、件

分類 番号	
	75
16	

157-46

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

大臣

次官

機密 受第 二 六 〇 號

昭和十一年十月廿四日

主務 政務局 明

機密 一九七號 本二八

都憲俞吉濬氏、金總理大臣、内令、

第一、派航、件

今般報聘大使、口行、中、部、赴、游、覽

朝士、四、俞、吉、濬、氏、十、余、年、前、東、京、慶、應、新

塾、在、日、英、兩、學、修、畢、後、米、國、派、航、三

十、年、程、滞、在、由、此、頗、知、外、事、情、通、

朝、韓、紳、士、中、之、歷、驗、人、物、以、此、為、參、

大、臣、金、宏、集、氏、内、令、之、後、中、部、派、航、

赴、

第一、新政府創立之後、現狀、亦、遂、改、革、矣

行、用、難、事、情、

第二、國債、興、之、付、帝、王、政府、所、意見、

第二回 政事顧問官招聘ノ事

三少條、大々中に出、又福田氏、中に出、顧問  
官中議政府ノ顧問タル人（昂々、総顧問官ノ  
役目ヲ有ル人）我總任大任ヲ補翼し上ハ大隈  
專横（若し中ノ勲ニアルキ）ヲ抑、下ハ各衛門ノ顧  
問官ノ制ニテ、偏私ノ失、及シテ、其ノ人物ヲ要  
ス、今ケレハ、地位若輩トモ、第一流ノ人、タラサニ、カ  
朝鮮ノ智癡、トシテ、枚舉、何、長ク居ルモ、地位高  
カラサレハ、尊敬セラレサレハ、此、其、付ラハ、充分、其、意  
ヲ、其、深、込、シ、中、出、又、福田、金、總理、大臣、ノ、意、見  
ナリ、ト、夫、將、来、若シ、總、顧問、官、ト、日、本、ニ、使、顧問、不  
利、ノ、生、シ、相、互、ノ、軋、ス、ル、事、アリ、ラハ、朝鮮、為

名 称	陸奥宗光文書
標 題	陸奥宗光宛 大鳥圭介の書翰

分 類 番 号	59-3
	75
	17

国立国会図書館

登録番号	
------	--

第十七

大鳥圭介氏

七

あふれ、多利、里、面、の、の、の、  
あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

あふれ、里、面、の、の、の、

漢一主武備者一先

導者。如趙主之武備

固之政。漢夏之紀。如

利。殆非心。若。所

其。自。友。台。主。進。以。月

言。之。如。也

又。昭。今。一。時。中。打。拔。一。讀

以。一。多。城。一。新。始。一。大。日

孫。援。一。張。陳。一。金。王

一。王。一。一。井。伯。劇。諸

一。王。一。大。受。君。一。退。臣

一。孫。李。坡。張。一。省。碑。一

地。一。大。臣。一。省。碑。一

一。延。田。前。一。解。大。後。一。王

一。北。一。和。合。一。戶。誤。一。以

一。辛。一。大。後。君。一。一。致。和

一。辛。一。一。年。一。之。一。一

一。一。一。一。一。一。一。一

一。一。一。一。一。一。一。一

一。一。一。一。一。一。一。一

[illegible]

一、中事者、三斗、  
 中の強、弱、良、悪、  
 事、是、と、云、お城、入、来  
 り、大、院、の、御、家、に、由、り、延  
 し、老、臣、に、上、進、し、い、ふ  
 と、お、海、軍、に、る、もの  
 の、これ、た、ろ、し、う、素、直、に  
 策、に、功、十、一、に、十、二、に、終、に  
 拾、取、る、一、千、九、百、の、頃、に、  
 一、方、の、死、を、お、も、は、す  
 大、院、に、退、く、一、米、たり、延、長  
 そ、と、思、ひ、ト、キ、遠、く、お、こ、し、  
 故、途、に、ル、カ、又、日、々、に、近、く  
 り、何、れ、瓜、一、種、者、に、切、交、  
 通、と、總、て、止、に、到、ら、せ、し、  
 且、禍、根、を、支、障、ス、ヘ、カ、ン、ズ  
 實、に、お、金、に、改、変、し、官、ん、ア  
 リ、テ、利、十、七  
 之、を、能、く、た、ん、と、ら、い、つ、お、佛  
 采、に、立、し、P、止、へ、面、し、や、政  
 一、以、ち、數、年、を、治、し、  
 之、を、調、り、お、ま、な、し、

りて利を  
之を能く  
策を盡し  
一以之  
之を謀る  
所を以て  
所を以て  
海に  
貿易の上  
清く  
美し  
たは  
水に  
一  
田  
出  
大



名 称	陸奥宗光文書
標 題	陸奥宗光宛 金允植の書翰他

分 類 番 号	97~1~3
	75
	18

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

訓令 議政府都憲俞吉濬

此次朝鮮與日本義在同盟務通實情  
茲著本府都憲俞吉濬前往日本國務  
輸我政府實心兼辦所授訓令各條

一顧問官延聘事

二士官延聘事

三國債論辦事

開國五百三年九月十四日

大朝鮮國議政府總理大臣金弘集



議政府敬奉我

大君主陛下勅旨今當政治改革之時宜延  
高明博達之人資講治道須自政府  
留心採訪致敬延聘以備顧問朕將  
待以賓師之禮等因特派議政府都  
憲俞吉濬前往躬勸起駕

開國五百三年九月十四日

奉

勅

大朝鮮國議政府總理大臣臣金弘集



敬啓者久懷御李尚遲減荆陽風  
蔽邇延佇為勞近因電郵望來憑  
檄

鼎茵舊祐樽俎著績所歷何似允植碌  
無能謬掌文際值此時事艱棘之會  
憂之建枋尸素為愧茲者報聘使行  
遙派紳士共作遠勝政府都憲俞吉  
濬乃心公忠具有學識我政府之所緩信  
也此次前往

貴國專為延訪顧問官一事但外人聞  
見不廣禮節踈慢恐不足以致望實  
得隆之人素知

閣下傳忠不倦無分畛域乞

費神代籌妙簡其人俾資治道以敷兩  
國之誼用副我

大君主側席求賢之惠不勝禱盼順請

勛安諸維



得隆之人素知

閣下得忠不僇無分畛域色

費神代籌妙簡其人俾實治道心數病

國之誨用副我

大君主側席求賢之急不勝禱盼順請

勛安諸維

台照不備

金允植頓

我曆九月十五日

外務大臣陸奧閣下

名 称	陸 奥 宗 光 文 書
標 題	鉄道電信條約 1 件

分 類 番 号	
	75
	19

157-135-

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

寫  
機密送第一三号

# 鐵道電信條約件

鐵道電信條約件、同し五月七号、衆電信ノハテリ

越ニ越スル未示シ、鐵、依ハ朝鮮政府ニ於テハ、鐵道建

設ノ義、付テハ、別ニ異存モ、今ハ、得テ電信讓渡ノ義、有テハ

同意セサル模様相見、ハ、由ル、本大臣見、所、依ハ、將來

ノ政界上電信丈ハ、是非トモ、此際我手、取テ置、ハ、必要

ト信、ハ、ハ、未電中戰時、ハ、為メ、ハ、秘密条約、ハ、義、ハ、ハ、

ハ、ハ、得、ハ、他、ハ、戰爭、ハ、起ル、ハ、當、ハ、朝鮮國、ハ、ハ、ハ、我、ハ、ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

ハ、

必要に存し、付、朝鮮政府に對シテハ、可然に認別せられ、概か  
 必要に先般及、運出置、条約案、之に承蒙、面々（電信案  
 約案其九条）將來朝鮮政府、於テ相商、代價、支拂、上ハ  
 電信線ハ、終テ同政府、區付、可、規定、お成、之、付、署、し、強  
 テ異議、不、出、テ、大、年、限、ノ、短、縮、致、シ、事、ハ、本、大、臣、於、テ  
 之、別、異、存、在、無、シ、付、此、以、テ、之、置、置、シ、必、以、且、又、前、任、大、臣  
 公、使、ト、金、允、植、ト、向、ニ、締、結、せ、成、先、暫、定、書、中、ニ、於、テ、  
 用、電、信、ハ、將、來、保、存、シ、置、ノ、標、規、定、を、成、せ、し、す、之、以、得、  
 ハ、他、ノ、電、信、線、ヲ、モ、我、政、府、に、於、テ、管、理、せ、し、ト、テ、外、見、上、に、於、テ、ハ  
 美、英、主、ニ、違、モ、明、シ、テ、お、り、付、此、等、斷、然、執、行、シ、入、手、を、存、  
 本、件、に、付、テ、ハ、總、理、大、臣、ト、協、議、上、主、張、法、制、局、長、官、曰、  
 リ、所、下、ニ、委、細、一、部、通、策、に、お、高、可、官、ヲ、以、同、取、お、成、不、  
 此、等、事、也、

名 称	陸奥宗光文書
標 題	井上公使到陸奥外相宛 秘密電信約案二箇ニ上申

分 類 番 号	
	75
	20

157-136

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

寫

機密分一六号

秘密電信約案に關し上申

本月二十五日電通及置通の通り本斗機密電信  
 第四号より送附相成りたる鐵道建築電信線  
 布設及開港の關する條約案の同日松村書記  
 官より派し當外務大臣提出するに處同大臣は鐵  
 道條約案に就て格別異議無之の様子に於て是  
 電信條約案に就て彼等意を向て容易に同意する表  
 せられ様に見受かり且つ同大臣より鐵道ノ敷設ノ如  
 き目下急迫するに於て我國力に其負担堪ふ  
 一戰モノアリしは堪ふ貴國ノ力に依る之ヲ建設せられ得  
 唯電信ニ至りてハ不充分に於て從來我國に於て生徒  
 不養取扱ハレシ事也今後トテ取扱ノ出来ヌコト

有之問敷ト存リ且從前我義州電線系清國  
 於之管理シタル時ノ如ク貴國人ヲ始メ諸外國人等ハ朝  
 鮮ノ獨立權ヲ毀損セラルトリトテ之ヲ非難シタルハ非ヤ  
 然ルニ今日再々此ノ如ク貴國ト條約スルニ至リテハ恰モ又  
 那ラ答ノテ之ヲ倣フニ類スル者ニテ我内閣ノ同意ヲ得  
 ルト如何哉ト甚メ案セラルヘキ中ニ立タル由ニ有之ヌ  
 依之本官熟考スルニ自今我國ノ朝鮮ニ於ケルヤ  
 我々恰モ監督者タリ保護者タル地位ニ立居ルハ我勢  
 威ニ依リ如何ニ要求スモ朝鮮政府ヲシテ承諾セシ  
 ムト雖カラサル如シト云ル我々鐵道ヲ我手ニ取リ猶之  
 以テ電信通モ悉皆我手ニ取入レトスルハ朝鮮人  
 ノ感情ヲ害スルハ勿論外見上ニ甚メ宜シカラズト被  
 信スルハ我政府ニ於テ此際熟ト諸外國トノ關係ヲ甚

考セラレ何分ノ所詮議相成ヌ様致度ト存ヌ鄙考  
ニ我軍用電線ハ朝鮮政府ニテ財政ノ整理成リ維持  
ノ見込相立テ次第終テ之ヲ讓渡スコトナシ讓渡後ニ  
於テ猶我電信技手若干名ヲ雇入レサセ通信取扱  
方ニ付不都合ナキ方法ヲ立レシメ而シテ別ニ秘密條約ト  
シテ將來戦争其他ノ事変等ニヨリ同電信ノ本邦ニ  
取リテ必要ニ場合ニ於テハ臨時我官員ヲ派シテ之  
ヲ管理スル約束ヲサハス分ナル（シト）相信シヌ就テハ  
右電信条約案及同秘密約案相添差進ニ至間  
何分ノ所詮議相成ヌ様致度此段上申ヌ也

明治廿八年三月一日

在京城

特命全權公使伯爵上野

外務大臣子爵陸奥宗光殿

電信條約果綱領

- 一 釜山ヨリ京城ニ至リ義州ニ達シ并ニ仁川ヨリ京城ニ
- 六達スル日本軍用電線ハ朝鮮政府ヲ財政ヲ整理シ
- 之ヲ維持スル見込相立テモ時ハ日本政府ヨリ相当ノ
- 代價金ヲ之ヲ讓渡スルハ不支費好意ニ爲スベシ
- 二 第一条ノ軍用電線讓渡以前ニ在リ京城元山間
- 々朝鮮電線ハ之ヲ日本政府借受テ前条ノ軍
- 用電線ト連絡スルヲ取扱フベシ此ノ爲メ釜山
- 本線階入中間線ニ接スル修繕ハ日本政府ノ
- 責ニ負擔ス大修繕ハ朝鮮政府ノ責ニ負擔スベシ
- 三 第二条ノ電線範載線ハ各線ノ片本政府ニ於テ取扱
- ハル朝鮮政府ノ管轄ニ無料ニ取扱フベシ此ノ爲

四 日本政府、朝鮮技術者ヲ養成充實スルヲ以テ各

三 電信局、可成テ朝鮮技術者ヲ使用スルヲ以テ各

五 第一條ノ軍用電線ヲ朝鮮政府ニ讓渡スル後ハ

全政府、於テ相當ノ電信技術者ヲ養成シ電信

建築、通信業務ヲ適當ニ施行シ得ルニ至ル迄ハ金山

ヨリ京城ニ至ル義州ニ達シ及仁川ヨリ京城ニ京城ニ

二 元山ニ達スル電線ヲ適當ニ取扱ヒ若シ破損アルハ

迅速ニ之ヲ修補セシメ且日本電信技術者若干名ヲ

雇用スルニ由ルニテハ日本電信技術者若干名ヲ

六 京城、平壤、全州、及仁川、經釜山ニ達スル旧線ハ之

一 修補、修理、均テ通信ヲ取扱フ可シトシ、且仁川、

七 仁川、京城、釜山ニ達スル電線ヲ通過スル日

本政府ノ官報、旧新兩線トモ明治十八年十二月

二十一日訂結ノ海底電線設置條約統約第四  
条ニ從ヒ半價トス可シ

# 電信秘密條約案

釜山ヨリ京城ヲ至テ義州ニ達シ并ニ仁川ヨリ  
京城一京城ヨリ元山ニ達ス電線ハ將來朝鮮國  
ニ於テ國內若クハ外國ノ戦亂興リ日本國ニ干係  
シタル時ハ何時ニテモ日本政府ヨリ各電信局ニ官  
實ヲ派シ軍用電信ヲ取扱フコト朝鮮政府ニ於テ  
豫メ許認ス

名称	陸奥宗光文書
標題	

貸付金貸与一陰之井上公使へ内訓

国立国会図書館

分類 番号	
	75
	21

157-134

登録 番号	
----------	--

回顧スレハ昨年六月二日朝鮮東學党之反乱アルハ為メ出兵之  
廟議ヲ一決シ突然一旅團ヲ京城ニ派遣シ一轉シテ朝鮮改革之  
議ト作リ再轉シテ日清交戦ト作リ爾來殆ト一周歲連戦連勝  
今ハ將ニ大舉其根據ヲ衝キ最後ノ全捷ヲ占メントスルノ域ニ到  
達セリ此間内治外交經濟之事時或ハ至難之境遇ナキニア  
ラサルモ一方ニ於ケル軍事ノ為ニモ痛痒ヲ感セシメタルコトナク  
幸ニ今日迄ニ達セシムコトヲ得タルハ實ニ邦家之大幸尚此  
上最終ノ局ヲ結フニ當リ縱令百艱ニ遭遇スルモ之ヲ排除シ  
尽シテ大目的ヲ達スルヲ得ハ我帝國ノ國光ヲ宣揚シ宇内ノ大

國ト比肩併立所謂維新當初ノ國是方針其全ヲ得ト云ニ至  
 ルベシ朝鮮國將來ノ地位ハ極東之大勢上戰爭以前ニ於ケル  
 ヨリモ尚一層ノ關係ヲ二三大國ニ有スルヤ論ヲ待ス支那ハ最  
 早口喙ヲ朝鮮ノ事ニ挾ムヲ得サルモ英魯ノ如キハ却テ容喙ニ易キ  
 形勢ヲ顯セリ之ニ對シテ毎ニ責任ヲ肩擔シテ對峙スルハ独リ日本  
 ノミ日本ニシテ名實其独々ヲ保護シテ野心ヲ現スコトナクハ他國  
 ヲシテ容易ニ指ヲ淫メシムルコトナキモ朝鮮ニ於ケル我ノ處置其當  
 ヲ得サルアラバ忽チ之ヲ非難攻撃ニ隨テ一ノ朝鮮問題ヲ諸強國  
 ノ間喚起スルに至ル瞻トシテ火ヲ睹ルカ如シ閣下赴任以來朝鮮王  
 家及其政府ニ對シ施設スル所其當ヲ得改革ノ初步トシテ國王

之意思ヲ定メ政府ノ應ニ執ルヘキノ方針ヲ確立シタルカ如キ順序ニ於テ尤  
モ宜シク行政百般之事此軌軸ニ依リ御着手可相成ト確信スルニ餘  
リ只懼ル所ハ乱後ノ疲弊財政上到底出入相償ハ不可期事コレヲ  
一旦改革着手之上経費統ニ相嵩外債ヲ支拂フニ外債ヲ以テ終ニ  
不可救済ニ至ル事ニ有之候間ハ邊御注意肝要之事ト存候兼  
埃及云々之御議論有之候得共同國ハ惡因惡果ナルコトヲ能ク御  
鑒考有之度候本大臣固ヨリ朝鮮ノ前途五年十年ノ未前ヲ豫論スル  
モノニアラス今日我々朝鮮ニ對スル政策ハ殆ド此國ノ未々異議ヲ容レ能  
ハサル所ニシテ其處置ノ奈何ヲ將來ニ注視セントスルモノ、如シ故ニハ即貸  
與スル金額ノ處置ニ至テモ主客ノ位地ヲ明ニ國際上ノ關係ト私法上

夕 彩 夕  
、契約ト別々混同ナク様致度候百事詳細ニ末松江申聞置  
候間御取可被下候为其勿々頓首

三月三日

井上全權公使閣下

再白 大本宮及東京政府、事情等及詳報度トハ  
共昨今少々夙邪且出帆之時期已々切迫乍迄臆懼  
筆

名 称	陸奥宗光文書
標 題	井上公使列 伊藤・陸奥宛電文

朝鮮公債貸付金二箇列要清

分 類 番 号	
	75
	22

157-133

登 録 番 号	
------------------	--



名称	陸奥宗光文書
標題	陸奥外務大臣宛 井上駐鮮公使電報

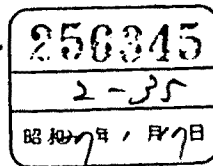
分類 番号	
	75
	23

166-110

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

41-279

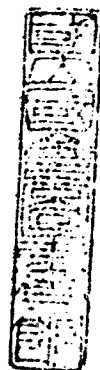


110

Mutsu,

Tokio

Received your telegram concerning interview of 杜鰲國公使 I am alive to Russian susceptibility about our doings here but by act of Government questions of railway and telegraph and opening of new ports etc. have received undesirable prominence. You are well aware that with how much zeal I have combated against such possibilities. Japanese advisers have been put into all Departments except the Royal Household and Foreign Affairs which were purposely left off. Many things have been carried out in the presence of foreign jealousy and many yet remain on the table some becoming subject of joint protest by foreign representatives. As I already have reported



while on the other hand Korean Government by no means have gained stability. Plots and counter-plots are constantly going on. ministerial crisis of great importance is passing. 朴泳孝 party fighting against the opposition on the issue of dismissing 趙 Minister of war for breach of duty with the object of taking portfolios in his hands. 朴泳孝 and others secretly memorialized some day to the King and Queen on the matter and as a result special council of Ministers convened both parties met but reconciliation absolutely impossible therefore Council of Ministers in the presence of King was held 辛巳 甲子 乙丑 where His Majesty has severely reprimanded 朴泳孝 as the head of party opposing dismissal in consequence 朴泳孝 is reported

to resign and if it is so Minister  
<sup>Finance</sup> <sup>Minister for</sup>  
for Foreign Affairs will resign likewise.  
He is chief actor who is actively  
engaged in consolidating his party  
take every advantage of confidence of  
the King Queen. A crisis may pass  
over but another will follow I do  
not know what is could be done  
Coreans are smart enough to see  
that as soon as peace has been  
declared Japan alone cannot have  
free play if interfere with and  
give pressure on either party they  
will surely look for help to foreign  
representatives. Both parties are  
equally wrong, they merely strive  
for personal ascendancy such being  
the case I am quietly looking what  
is passing interference impossible with-  
out anticipating consequences to meet  
these exigencies it is necessary to

determine degree of interference that  
is general line of policy for Corea. (1)  
doubtless there are opinions of Govern-  
ment and I have my own. Under  
these circumstances I think it is  
of imperative necessity that I shall  
return on leave of absence in order  
to consult of our future policy besides  
I am still suffering from rheumatism,  
Answer immediately

Greene

Received 19. May '95.

名 称	陸奥宗光文書
標 題	

本野光 杉村清書翰字

分 類 番 号	
	75
	24

157-24

国立国会図書館

登録番号	
------	--

朝鮮内閣の分裂と皇室の地位

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

朝鮮内閣の分裂は、皇室の地位に重大な影響を及ぼす。

より出ルヲ以テ君主政ノ本意ハ爲スニシテ況ヤ此  
遂ニ旧派ヲ作ケタリト雖此之下ト曰轉ニ國王王妃ノ  
我侯旧ニ復シテ將來必ラス制スヘカウサルニ至ンヘケ  
レハ是より閔氏ヲ採用セラルヘシ豫算ヲ打破  
セラル下リ官制ヲ蹂躪セラル可クト亦存ス朴氏  
ハ其教然日本多傳ノ忠告ニ背テ此ニ出ノタルモノハ  
旧派ニ押サント蓋ニ同論見シテ計畫ニ徐ニ歩  
ミ進ミ驕ニ席ニ勢自制ス下リカウサルニ至リト并ニ  
之使ハ政府ノ移ラコソ始カアルモ本意ハ日本政府ハ  
薄弱ナレバ日本人民ノ人望ニサレ背カサントキハ  
當然ナリ自今日本ニテ約束ニシタニ後援アリト頼  
ミタニト外ニ近來金州半島ノ返還ニシテ露西  
カ隱國王ノ許ニヤ入レタリナリ由ナレバ之ヲ軟シ

テ日本政府何ヲ能ク為スニアラシム。固膠構ク  
トノ三事、外ナラズ。楊て外ニ、東學堂既ニ平  
キ大法院閉セシムルニ因リ、曷子日本政府ノ  
力ヲ借ル。然ノ事、以テ多鋪トノ事、彼等胸笑  
中ニ以テ、コトトモ存ス。

新田五派ノ争、當リ我輩何ナク内ニ讓倫一  
ナラス。此後名家宗本楠瀬ハ旧派ノ存セサシ  
トキ、日本利差ト面目ヲ失フ。ナシトモ張シ、齊  
藤星著、和食方、左袒シ、ハ杯子トシ、一時  
熱心ヲ論シ、ハ事サヘ智シ。隨ノ齊藤星著ハ  
少使、情シモ和食ノ助ケテ深ク、韓廷ハ喰ハコ  
トスル野心アリナド、云テ之ヲ攻撃スル者サヘアル  
ニ至リ、却テハ和食ヲ深ク計畫アルニアラ

サレハシ彼此ノ計較シテ我々ノ利益アルヘシト見  
込リ他ノサイドニ傾キシトハ斥ス要之朴  
武新ノ新田阿祖儀ニ正リト爲メ来々所害ハ  
朝鮮ニ於テハ

國王多妃、秘心ヲ買ハシカ爲メ君權收復  
ヲ唱ヒ百奉兩陛下ノ意思ニ左右セラレ端緒  
ヲ開キタルヲ

日本ノ第ニテハ

俄使ノ甘言ヲ後援トシテ日本ノ使ノ忠告ヲ  
拒絶シタルヲ

東京先相樞密院若殿、際リ我ノ服  
從シテ偏シ其力ヲ借リタルモ此ニ大患ヲ除キ  
タルト同時、傲慢ノ心ヲ生シ我恩義ヲ顧シ

サレド

彼ハ日本ヲ侵メ威怖ヲ蒙ルニ至リ日本在野党  
ノ歎心失失ニ其ハ敢テ日本ヲ背キタムコトヲ云フ  
日本政府ノ協力ハ微弱ナルニ至リト同僚互  
ニ揚言シ我政府ノ関係ヲ絶タレトシタルヲ  
等ニ与シタル抑ハ朝鮮内政改革ノ是ハナキ  
知悉シ至秘中ニ以テ同感ニテ折々以テ訴  
西國者大ニ使ミテ少シハ計慮見込ムコト  
トシテハ然リサレバ今更驕クテ多ク在野  
井ニテ使メ名姓ト敏腕ヲ以テ半年間経テ  
シタリ朝ハ一朝ニテハ王子(近衛親王)曰ク  
打破シテハ貴族ヲ第ハ以テ今後ノ對韓  
方針ハ何處ニ定ムルハナキヤ實ニハ案々若

未だ試験ノ豪傑出ラハ我々ツ一臂ヲ振ヒ主派、  
改革ノ実効ヲ奏ラカシト、議論ヲ立テ政府ハ  
之ヲ採用シ試験ヨリ格モ派遣セラル、格ノ半  
アリテ、蓋シ日韓ハ互ニ互ニ關係ヲ相損シ早  
固難ク相損ス可クト存ス

朝鮮改革事務ノ舉ラセハ方法ヲ惡シキニア  
ラズ此腐敗ノ格ノタニ人民ノ根底ヨリ改良  
セサルモ上ニ事務ノ舉ヘハ其具ハナキハ以テ承知シ  
通リナリ故テ少カクモ十年程ニ費用ヲ投シテ教  
育セザン可ラス然レニ時勢ハ之ヲ待ツ可ヤ左  
レハ改革ハ云フコト世間ハ申譯半分ヲ致セ  
ソソ可トスベシ若シ朝鮮國主及臣民皆自カ我  
勸告ヲ用ヤサニ、格ヲ以テ之ヲ辭物トシテ手ヲ引ク

モリナランカ去タリテ手ヲ引ク中ハム

勢。我顧問官ニテモ到カレシサルヘカウサン都合  
興ルベシ左マ時ハ他ノ外人代ヲ入ルモ難ク故  
ニ此ハ利害ヲ計較シ終令効能ノ有無ハ  
暫ク余ヲ裁人ナハ張シ至ク方得策ナラシ  
今日日本ヲ執ノ来夕冷カウザン間、ト云ハ丈日  
本若者ヲ輸入スルノ可トス或ハ生徒ヲ誘出  
シテ日本ニテ教育スルノ可ナラン

鉄道電氣ハ名義ヲ朝鮮、譲リ大抵、示  
ニテ早ク訂約スルノ可トス條約ヲ訂結スル付  
先ハ、我利益ヲ損ノントセバ彼ヲ躊躇シテ  
應諾セス中間、外人ノ客縁ヲ来スル往ハ然  
リ何卒今ハハ好相ヲ維持シテ數年ヲ送り  
以テ再ニ時機ヲ待テテ專断スル所ナラン

後日朝のちいふ事上の方針を極力  
なじ一日千秋の如く早く決定せうとして侍  
下り  
中々毎々器具

六月二日

清秋

本野元虎松八

所中書と金と永く天新味之新内

同名に感懐知友の恩上る月来

ト取エハノミナラズ心苦敷事仕ても可恨

ハハト早ク貴ヤウに喜ビに成しそ我ハ之を

為感ナレバ之を以て貴ヤウに代りてサハク侍

此ハ代理様様と云ふ人コト々々多クハ推察

止らん

名称	陸奥宗光文書
標題	内田領事より外務大臣宛 英電

朴办存子件

分類 番号	
	75
	25

157-69

登録 番号	
----------	--

256365  
1-1  
昭和1年1月1日

69

Seoul, July 7<sup>th</sup> 1895 6.0 PM.

Rec'd " 8<sup>th</sup> " 10.15 "

Gaimudaijin

Tokio.

— " —

I have ordered deport of three Japanese residents in fear of breaking local peace and one of them stated that some Japanese advisers to the Korean Government are implicated in the plot of Bokuyeika to assassinate the queen. I have suggested their names to Sugimura and requested him to take immediate steps to dispose of the matter properly. Some twenty more will be ordered away in a few days.

Uchida

電受第

號



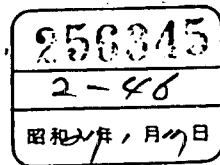
名 称	陸奥宗光文書
標 題	本邦駐劄露国公使 西園寺外務大臣 会谈

分 類 番 号	
	75
	26

126-121

国立国会図書館

登録番号	
------	--



The Russian Minister called at the Department of Foreign Affairs on the 31<sup>st</sup> July 1895 and declared as follows to Marquis Saionji according to the instructions of his Government:-

"The affairs of Korea seem to be quiet at present and the King of Korea is disposed to make the necessary reforms. But he fears that his authority would be lowered in the eyes of his subjects in consequence of the interference of the Japanese authorities. Consequently the Imperial Russian Government recalls to the Imperial Japanese Government the declaration which they formerly made regarding the independence in fact and name of Korea and hope that the Imperial Japanese Government would be pleased to conform their acts to their declaration."

Mr. Nitrovo then said that though such were the instructions of his Government, he thinks personally that the Japanese Government,



to avoid future misunderstanding, would do well to come to an understanding on this subject with the Russian Government by giving Mr. Nissi instructions to that effect.

Marquis Saionji replied that he officially acknowledges what Mr. Nitrova has just declared to him in the name of his Government, which he will refer to his colleagues in the Cabinet.

As regards an understanding with the Russian Government to avoid future misunderstanding relatively to Korean affairs, the Marquis, so far as he is personally concerned, shares the views expressed by Mr. Nitrova; but he thinks that, for the moment, as the Imperial Government are waiting for Count Inouye's reports on the actual situation in Korea, it will only be after the receipt of these reports that he would be able to form an exact idea of what would be expedient to do for the future.

名称	陸奥宗光文書
標題	西國寺院時外勢大臣宛 西駐露公使電報

分類 番号	
	75
	27

166-65

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

Saionji

8/9 8'95

Tokio.

電受第

號

井上

3



71. I saw Speyer who was formerly 駐露公使館書記官 and lately has been appointed Russian Charge d' Affaires and Consul General in Corea in the place of Weber who was nominated Russian Minister to Mexico. At this change Weber forwarded to his Government the desire of Korean King that he will remain there with promotion to Russian Minister but this application disregarded. The appointment of new representative owes to the intention of Russian Government to become more active in their action in Corea. Speyer said to me that he has not yet received any detailed instructions but on the way to Corea he will proceed at first to 東京 in order to consult with 駐露公使, about Corea and that as concerning Korean independence Japanese and Russian Government are quite agreed in their views he does not expect in his doing to

meet with any difficulties but will receive assistance from the hands of Japanese Representative. He will leave here in September and arrive in Tokio in November.

Nissi.

(Mrs Speyer said to be very pretty but not so clever as Mrs Weber - Sato.)

名称	陸奥宗光文書
標題	小村前長 引 外務大臣宛 電文

分類 番号	
	75
	28

157-91

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

256365

1-23

昭和7年1月7日

91



外務省

電受第一〇九六號

（明治二十八年十月五日）  
明治二十八年十月五日 日午七時二十分發  
日午七時四十分着

外務大臣

小村 外長

昨日發電訓後手ハ本官今朝八時安藤  
事~~及~~海陸軍士官ト共ニ京城ニ行キ憲兵  
一時當地ニ止メ置テ<sup>トコラト</sup>三木艦ニ震艦モ  
仏艦モ艘<sup>ニ</sup>居テ<sup>ニ</sup>震艦<sup>ニ</sup>浦墮<sup>ニ</sup>向テ  
発電シタル由ニヤ<sup>ニ</sup>述ビ<sup>ニ</sup>數重ノ震艦<sup>ニ</sup>入港ス  
事ト推察ス

外務省

電受第一二〇一號

（明治二十八年十月五日午後二時十分發）  
明治二十八年十月五日午後七時七分着

玉

廣島ニテ

西園寺方臣

星 亨子

船遅シ今夜八時汽車ニ乗り明后朝八時  
着

名 称	陸奥宗光文書
標 題	西公使より西國寺院の外相宛報告

朝鮮問題並ニ露國極東政策ニ  
ツケテ

分 類 番 号	
	75
	293

157-161

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

161

樺太第1号

曾、西郷公使館書記官トシテ東京へ在勤  
被、其後ハ同官ヲ以テベルンヤハ在勤政務及シ  
ペル氏義立朝鮮代理公使並ニ総領事ニ任  
セラル而シテ目下彼地へ在勤ノウヰベルン氏ハ在  
タリシヨ亦理公使轉任シ且ツ右交代ニ付間  
及テ事ヲ承テ自第7才テ号電信ヲ以テ申  
進ニテ其旨告返シ又右ニベルン氏トハ身内々  
話トシテ承タルニ此間ウヰベルン氏ヨリ電信ヲ以テ朝鮮  
國王ヨリ仁川左勤ノ當國領事ラスボロホフ氏ヲ



雇入波トノ所均王ヲ傳へ来リ當國外務省ニ於  
テハ初メ石ニ對シ差支ナキ趣ヲ以テ電訓シタルモ後々  
人シベル氏ノ注意ニテ今少ク彼國ノ事態定見近見  
合ハス事トありテ前訓令ハ取消シクル由ニ致

奉人シベル氏ノ考ニテハ朝鮮ノ事ハ現今ヲ轉ニテ在東亞ニ  
在リ京城ニ於テハ何事ヲモスヘカニズ故ニ其ハ注するハ  
必ス東亞ヲ於テ之ヲナシルヘカラスト當國外務省ノアジヤ  
局長亦其意見ニ奉人シベル氏ニ傳へ先ツ東京  
ニ赴キ馬トビトロウ公使ト打合セ日本ノ意見見テモ慥  
ムヘキヲ以テセリト申サタカモ政界ノ方針ニ付テハ訓令

ハ未ク得サルモ日本ト朝鮮事件ノ談判ハ多分ハ  
人ニ委任スル成就スル本人ニ東京ノ顯官中  
某人モアル内閣ニ相談スルモ出来又將來支國  
為ノ都合ヨリ極ニ相談ノ纏リ得んヲ希望シ居ル  
ノ説ニ改シ及ニ付拙官ニ若シ露國ノ朝鮮ノ  
所望ナル強ク其獨立完全ヲ保存スルニ在リトモハ  
又條ノ意見具ニ於テ兩國既ニ合フトコトナルヲ以テ  
人談判ノ好結果ハ期シ得ルベシト申答又本年ハ  
今日迄常國外務省ニ於テ朝鮮論ヲ考究シ  
トノ話アリシニ由リ拙官誠ニ悶ヲ露國ノ見顯ニテ

是迄自今、朝鮮に於て安否上如何ナル非難、  
 アルヲ我見エシヤリ以テ之を三人ノ著カニ一、  
 ハ清必見贖負、ヒトヨクモ、一日、日本、見贖負ノ見頭、  
 報告シ具意見各、偏ス所アル如ク思ハルモ、京城  
 ヲリノ報告アリ、其年、ラ、不愉快、感、  
 スル旧大石公使、與手動ニシテ此任撰タル人、  
 又、大石鏡ヲ以テ烟硝藏ニ入レシタル思ハサレ、  
 近時、事ニ至テ、日本公使ヨリ改筆ヲ勸メタル内ニ  
 當矢ニ補スル外國人、唯、日本、人、限ルトシ、  
 意、又、既ニ彼ノ國事モ略ハ整頓、

日に至リ猶日本ヨリ猶其内政ニ干渉ノ事實アルヲ  
見ル不快トスル所ナリ等ノ語モ有之拙官ニ亦人追テ  
彼地ニ公平ヲ見頭ヲ以テ事情ヲ目撃シ上ハ斯ル報  
告ノ不當ヲ認メラル事モアルト申至テ又位ニテ別ニ  
本問題ニ入リ不申失着シ其間ニ亦人へ訓令  
ヲ要領シ聞得共ハ電報ヲ被ル

現今朝鮮論ニ変シテ實ニ日露間ノ問題トナリ  
其決着ニ考慮容易ナラカトモ我ニ於テ先ツ  
當露必ハ勿論法案係屬此論ニ於テ見頭ヲ  
公ニ講究スルヲ以テ第一ト存シ此間拙官経験ノ意

見大畧ソルニ中陳大

露國ハ爲ラシク我疆土大ナリト雖モ西南北自由出  
入ノ海港ナレ苟モ一億以上ノ國民ニシテ豈ニ自由出  
入ノ海港ヲ永世得ハ能ハルノ理アルヤ是ニ於テ力  
意ヲ東方ニ注ギ凡ソ之獲ルト欲スルト云々地所ヲ豫定シ  
セシメテ茲ニ四年アリ然レモ其地所ナル朝鮮、唐、朝鮮  
ニヨリ我隣邦ノ清國ノ保護ノ下ニ在ル國ナリ之  
ヲ獲ル容易ナリサルニテ、アジヤノ諸國ニ内亂時  
ニ起リ其國運ノ变迁多シ且ツ我國民東進ノ  
勢ニ自ラ遏止スヘカラサルモノアルニ由リ他日我疆威

太平洋海岸ニ布及スルに至リテハ彼地方自ラ動キ尋  
常平和ノ手段ニ由テ我々所望ノ實ヲ收メ得ル様會  
自然列強スヘイト期シテ徐ニウスリ地方ノ強民ヲ  
業ヲ注言スル間ニ其近隣之ヲ實ヲ清國ハ滿  
洲ノ守備ニ着手シ日本ハ朝鮮ヲ自己ノ勢力ニ服  
屬セシメテ之ヲ固ク手裏ニ掛リタリ然レニ日清各々  
地理上ノ便ヨリ其目的ニ達スルノ速ニ我々追ヒ  
及ハカレ勢トナリシニ由リ我々於テハシベリヤ能ク、建築  
ヲ企テシニ速ニ変テ激成シテ日清戦争トナリ而シテ今  
日ノ結果ハ日本其目的ヲ達スルカ如シト云ヒ可ク實

然ラス日亦亦ク暮ク之ヲ思フらん如何トナレハ若  
シ彼ヲシテ其目的ヲ達セシメハ我太平海岸へ黑  
海ノボスホム、峽ノ險ヲ設ケント曰一ニシテ我ニ於テ唯  
獨リ向坂我ニ威ヲ制制及滿少ニ布及し東  
洋ニスラ種族ノ繁盛ヲ因ン能ハスニオス全シハ  
リヤノ出口亦タ障ヘラルヘシ是豈ニ我ノ堪ユル所ナラシ  
ヤ又彼若シカラ以テ之ヲ争ヒトスルカ我ハ僅續キミテ  
直ニ境ヲ接シ彼ハ海ヲ隔テルニヨリ到底彼ハ我ヨリモ  
不利ノ地位ニ在リリ今假リニ彼ノ海軍ノ勢力ハ速  
ニ増進シテ我ニ勝ン者トスルモ我鐵道全通ノ曉ニ

我ニ於テハ彼地方ハ自在ニ必要ノ兵ヲ送クニ得クシ彼  
之ヲ与シ得クヤ否ハ競争ナル海軍ニ始リトモ  
陸軍ニ終ルニ至リ勿論トモハ彼ニ勝テオノミツテ  
加之彼既ニ朝鮮ヲ清國ヨリ引離シ清國ヲシテ  
共ニ保護ノ義務ヲ解クシメ以テ我々來ノ陸軍  
ヲ撤去シタル以上ハ勝敗ノ數既ニ決セシ者ト云ハ  
ルヲ得ス我國ヨリ日本ヲ我々好ミ非ス日本ハ島  
國ナリ其國ノ任地ニ安シ自己ノ權威ヲ西南滿  
島ニ及ホスハ唯其欲スルところモ大陸ニ向テ我々  
發達シ妨クルニ至テハ兩國ノ衝突ハ自ラ免レタ所

アリ然レモ自存ノ朝鮮ニ於テ夫ノ欧米諸邦ニ於  
テ稱藩スルカ如キ朝鮮ノ年明ニ誘導ノ切實ニ我  
ノ認ムヘキヲ非ルモ既ニ歴史ノ縁アリ又高麗ノ  
要領大ナレハ日本ヲシテ其既ニ得タル高麗上ノ  
特權ヲ專有セシムルハ可ルモ政事上ノ特權ニ至  
テ向後我ノ專有ニ歸セサルヘラス唯我オノ其  
時未タ至サルニ由リ今暫ク日本ヲシテ嚴ニ朝鮮  
ノ内政ニ干渉セシメサルニ如クス  
然ル時ニ朝鮮ニ依然旧朝鮮ニ存シ其間ニ我ノ  
勢力漸ニ彼ノ地方ニ布及スルヲ得テ朝鮮國

王亦戰ハスシテ、ブカラ王ノ位地ニ移スベシ

傷ヲシテ前ガラ王ハ屢、ロシヤ兵ト中亞細亞ニ戦  
ヒ敗リ取テ、サマンカト近モ失ヒ逐ニロシヤ軍ヲ保  
護シ受クンニ至リ、ロシヤ其内地ニ干渉ス唯  
ト要ノ土地ハ借入リ以テ名トシ自在ニ鐵道ヲ  
通シ居村ヲ設クン今モ、ブカラ王ハ其世子ヲ常  
府ニ移シ子セシメ、諸事兩國ヲ字ヒ常々牌  
等ノ制ヲ設クンニ至リ、此次回、ブカラ王ハ露  
國ノ士官タルヘシト傳フ

右ハ重ニ當國政府内部轉申外、其意ハ思ヒ

ノ大際ヲ西キタル積リノ憂當府ニ一ノ老漢學者  
アリ千八百四十年代ヨリ十餘年ヲ占、北京ニ百學  
シ其後久シク當府ノ大學ニ於テ東方語ヲ教授シ  
而テ外務省ヘミ急リテ其官ニミヨリタル人近  
旧ノ語ニ清國ニ長髮賊ノ亂アリシ時本人既ニ朝  
鮮總領ノ策ヲ尙政府ニ獻言シタルモ行ハズ其後  
ニミ度々其意見ヲ外務省ニ陳ヘタルモ毎ニ清國ヲ  
顧ミテ決スル能ハカリシカ返シ又日存リ顧ミサルヲ得カレニ  
至リシニ遺憾ナリト又ヨリ露國ノ東方外交家ニ謂ヘリ  
我若シ朝鮮ヲ占エト欲セバ直ニ取リ得ヘキモ之ヲ得ル

ヲ欲セザルニ日存トモ之ヲテリ我ニ日存ハ直モト此モ  
之ニ價値ヲ付ケスト是亦所近頃露露ノ在方ニ於  
ケル進取政果活動ノ影即昔ト見テ可ク猶別紙  
新年再通信ノ誤シモ之ヲ考ヘシ

他ノ諸國ノ意見見ニ至テハ拙官ノ故ヲ當ル所非ン之實  
元モ今試ニ諸國内外ノ新舊雜誌ノ説ト二三ノ改テ  
ニ経族兄英武人ノ説トモ之ヲ之ノ言モハ英武人因  
リ露國ノ進取政果多ク好ム其在洋ニ不永ノ港  
灣ヲ得朝鮮満洲ヲ掌握シ太平洋海ノ海軍ノ勢力  
ヲ増加スルヲ得ん如キハ英國ノ畏モ忌妬スルコトナルモ

若し之ヲ問フニ之ヲ抑制せんと欲シテ其主田中ニ満足  
シタル製産國業ヲモ一時犠牲ニ供シ政教ノ關係  
ヲモ顧ミスルヲ露ト戦ヲ決スル程ノ利害見ヤラシムナシ  
ト云フし之ニ加フルニ露國ノ海軍如何程在洋ニ盛  
ナラ得ルコトニ逐ニ英國ノ海軍ニ及ビテハ勿論  
印度支那ノ海軍防衛ニ香港リシニカプルアリ別  
ニ深ク懼ルニ至ラス尙府駐劄ノ英國大使活シ  
タルアリ曰ク露國ノ在洋ニ不氷ノ港灣ヲ得ニト  
欲スルニ至スルノ所望ト認メテハ得ズト  
相違及米ニ至テモ畧者曰格たハハ其在洋ニ於テ

利害ノ系係英國より少キヲ以テ之ヲあへしむ  
府駐在ノ獨逸大使也日一日條ニ注シテリト云フヲ  
聴クニ目下日存人ノウラゲワストクヘ出稼キ或ハ商賣  
ニ出懸ケ十分ニ其業ヲ営ムヲ得テ満足スルノトモハ  
從令朝鮮ニ露領ニ歸スルトモ日本ノ經濟上ニ於テ  
別ニ損害ヲ蒙ルノナカハヘシト是等國より一世人ノ説ナ  
ク其國ノ外交家衆中思想ノ一班ハ伺フニ足ルヘシ夫ノ  
イタリヤ如キハ金々利害ノ關係ナキヨリ其言フ所唯  
情ニ任セテ一時ノ自感ヲ表スルニ過カンモノト見エソ得ス  
我ト利害關係ヲ曰シ露國ニ對シテ我自然ノ同盟

國タルヘキハ唯獨リ清國アルニシテ他彼國事白ニ非  
ニ似テ朝鮮ノ如キハ其復タ思フニ暇アラハル所ナシ

若シ以上ノ見頭當ル者トシ且我ニ於テ何事近モ朝  
鮮ノ獨ミテ維持スル者トモハ第一露國ト決戦ハ免  
カレハカラサル一第二在ノ場合ニ至ツテハ我ニ於テ現今ノ國  
勢ニ藉リ如何モ外交手段ヲ用ズルモ前陳各國  
ノ見頭ヲ動かスル能ハルヘキニ云フ近モ然レ但シ若シ事  
変政變ニ及ビ更ニ禍を至トナリ自己立接ノ利害ハ  
由リテ露ト隙ヲ構ヘル場合ニハ各々我ニ同盟ヲ求ムル  
フアルヘキモ若シ之ト反對シ我自カラ主トナリ東方ニ於テ

露ト間戦ノ場合ニハ 彼等ノ我ト盟ノ決ニ應スルモカ  
ルヘキ之ヲ近來ノ事蹟ニ徴シテ年明カルヲ以テ其ニ何  
感ノ流勸告モ和戦ノ決近ニ止ルモト見先ヲ得ズ  
然ラハ我ニ於テハ如何之ニ為シテ可ヤリ問題ニ移ル  
ニ當テハ固ヨリ好意<sup>悪</sup>感情ニ任セム一ニ現在ノ實情  
ニ至ヤ我將來ノ利害得失ヲ以テ案ヲ着クハ勿  
論ノ要之ヲナスニハ前迷關係諸國ノ意見見ノ諸案  
モ未タ以テ定シリトセム又我國力衰進ノ程度ノ豫  
算並ニ清ニ將來ノ見頭ヲモ算ル之ヲ審カニセザンハカ  
ラカシモ其全假ヲキリ以テ今假リニ我ニ於テハ今日ノ行掛

リ上出来得ん丈ハ我勢威ヲ朝鮮・保テ其約ニシテ維  
持スル事ニ決セシ然ル中ハ第一ニ清必ト曰盟ノ案出ラサ  
ルヲ得ス若シ清必ニシテ其國力止ム・回復ノ望ミアリ  
且ツ彼自ラ善ク満州ノ危キヲ自衛ノ爲メ朝鮮  
保護ノ所望ノ切ム我ニ復讐スノ念ヲモ投ケ与テ止ムニ  
我ト曰盟ヲ結ビ事見時ニ三四萬ノ兵ヲ蒙古ノ北境  
ニ出シテシベリヤノ中路ヲ扼スルノ氣カアリ勢力凡ニ至ルモ  
ノトモハ彼我互ニ實際曰盟ノ利益ヲ得んノ大ナルヘキハ  
露國亦タ動クヲ能ハカニ至ルヘケレハナリ是最モ露  
國ノ懼ル・所ニシ以テ之ヲ妨クル・術ハ尽スヘケレ清

國ニ於テ斯ル實カラ貯ヘ得肖ニ利害ノ内ニヤトコロ  
自ラ我ニ与ニスルニ至ルヘシ然レバ若シ實際清ムノ時  
来ニ斯ル望ミアツテ唯朽リ朝鮮ノ保護ヲ思フ  
能ハスノミナズ自國ノ保護モ覺来ナク依テ彼トノ曰  
盟ハ我ニ於テ一難題ヲ負フニ過キサルヲトセハ第三露  
國ト朝鮮ヲ南北ニ分割ノ案出ツ此海ニ決シ易キ  
ニ似テ其實難シ如何トナレハ露國ニ於テ滿州朝鮮  
ハ其將來ノ所領トシ取ラント欲ムハ何時ヲモ之ヲ取  
ルヲ得ントノ見頭ヲ所謂スル卧榻ノ傍ニ他人ノ肝  
睡ラ容ルノ感ヲ以テ之ニ接スルハ猶キ遼東半島ニ

於ケル如クニシテ容易ニ之ニ應セサルヘシ故ニ是ハ最後ノ  
一手段トシテ第三前述諸國係國ノ見頭ハ固ヨリ事  
ヲ極端ニ及ホシテノ話ヲ其此ニ至ル迄ノ間ハ英米  
獨者ニ平和手段ニ由テ出来ル丈ハ露國ノ大企望  
達セサル極朝鮮ノ獨立成ル極我ニ保護ノ助力ヲ  
与フヘキハ蓋シ疑フヘキニ非ルヨリ我ニ於テ之ヲ利用シ露  
清ヲ加ヘ共議シテ朝鮮獨立保護ノ方法ヲ定ムル  
亦一策トス然レニ其施行甚ク困難ナルハキハ第一ニ露  
之ヲ欲セサルヘシ第二ニ夫ノ欧米ニ於テ之ニ類セシ條件ヲ  
以テ國ヲ成シ居ル自耳我、瑞西ノ中立ハ内自ラ立ツヲ

得テ唯外面ノ強迫ヲ禦クニ止ルモ朝鮮ノ内自カラ立  
ツ能ハカル病人ニシテ醫師ノ定メラル方劑モ看護夫  
ナシラハ服藥スルヲ得カレハキニヨリ其難問ハ即チ右ノ  
看護夫探ヒニ在リ然レハ案タル者ニ委細ノ計畫  
善ク調ヒ且ツ我ニ於テ唯高賣上ノ利益ニ安ニスル  
事トスルニ至テハ行ハカン事ニモ非ルヘシ

右ノ外此地ニ於テ拙官ノ考ヘモ付直ニ付暫ク出  
シテは矢ク考ニ供シ里吏敬具

明治廿八年九月廿日

右露特命全權公使西德二郎

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵西園寺公望殿

尚、本年六月三十日付私信ヲ以テ奉聞  
ニ付陸奥外務大臣へ申進ニ付大義存之及間其  
趣ヲモ信スルモノナリ又ハ此ノ法聞取ニモ感心ヲ有ス  
又ノ初ニ傳スルベル氏義ハ来んナリナリニヤルセリ  
ヨリ日下へ航シナリ昔日過東京へ来リ伊藤  
總理大臣へモ面会ヲ求ム積ナリトテ活ニ有之矣  
間此書面ハ大臣ノ一讀ニモ供シテト夜積

# 別紙

モスコフ新聞紙本年第二百二十四号八月十四  
日付ヲ以テペテルブルグヨリ外務省ニ関シテノ通信  
ヲ掲ケタリ其大畧初ノ日奉トノ關係ヲ述ベ  
遼東問題モミナシテ西ヲ日奉兵引拂ノ  
相談モ纏ムヘシト云テ此次ハ朝鮮ヲ引拂ノ順  
至ル露國ハ飽迫之ヲ要求セザルヘカラス日奉ハ  
此要求ニ應スヘキノ義歟カアルヲ論シ協シペル朝  
鮮ノ代理公使ニ任セシタルヲ傳ヘテ此人ハ純粹ナル  
露人ニシテ曾テ日奉及ペルシヤニ在リ励精及強

梗々以テ既ニ顯シタルニ由リ其露國ノ名譽言フ  
重ニ有蓋ノ効力ヲ致スハ俟ツヘキナリ右ノ次第  
ニテ我外交家自ラ其目的ニ信スル深クナリ且ツ  
之ヲ進ムフ旧時ヨリモ果斷ニナリシハ吾輩ノ快  
トスルトコロナリ云々

名 称	陸 奧 宗 光 文 書
標 題	警視總監 園田安賢宛 武久克造 書翰 字

分 類 番 号	
	77
	6

157-43,44

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

謹啟 昨日不取敢由報仕夫以後ノ狀況ハ左ノ通ニ御座候

趙義淵 俞吉濬 張博及金仁植(內部長) 趙法部刑  
事局長等ハ我ニ使館ニ通レ或ハ助ケテ連レ来リ現ニ  
公館ニ潜居致居候

昨日安駟壽ハ出獄ヲ許サレ昨夜警務使ニ任ヤレ夫

昨日日本人一名道路ニ於テ毆殺セラレ夫是ハ人氣荒立

本邦人ニ對シ感情惡シキヨリ生レタハモノニ有之小生ニ於テモ昨

日事變ニ際シ乘馬ニテ彼是ニ往返中群集蟻ノ如キ中

ヲ通過スル時ハ敵意ヲ示シ動ススルハ無禮ヲ仕掛ケントハ

勢モ有之而シテ夜半ニ至リ警務廳ハ到リシ頃ハ肅然トシテ

戶外ニ出ハモノモ無キ有様ト相成申夫

昨日勅令ヲ發シ斷髪ハ自由勝手トナシ又地方ニ暴徒討伐  
ノ為メ出兵ノ軍隊ニ直ニ引揚ノ命令ヲ發セリ是ヲ以テ  
見ハテ地方ノ暴徒ハ内ヨリ煽動シタルヲ知ハニ足り申矣  
昨日小村公使ハ露館ニ赴キ國王ニ謁見セシ趣ナレ其様  
様ハ公使ヨリ聞クヲ得ス

抑々今回ノ事變ハ元カ豫防ニ得ラハニモ拘ラズ怠慢ヨ  
リシテ此ノ失敗ヲ引起シタルモノニ有之ハ併若シモ國王  
カ大國ヲ適シ出ルコト能ハサハ程ノ警備アラハ露兵一百五

十餘名

(内平名ハ曾テ出京談話館ヲ警備シ  
百名ハ一日入京ヤシタルナリ)

必ス王城ヲ襲ヒ去八十

月八日

ニ舞

ヲ演シタル

ニ相違

無之如何

トナレハ

現今韓

兵ハ地方ニ派遣

ヤレシテ京城

ニ駐スハ

モノハ寒々

晨星ノ如

ク之ニ對抗

防禦スハ

ニハ其力足

ラサハ

姿ト相成

リシテ

以テナリ

國王ヲレテ通常一般ノ人ヨリモ知識ニ乏キ處アリト假  
定スハモ今固ノ事ハ朝一夕ノ企ミアラズシテ王妃崩  
御ノ後ハ金命ノ如キ王室ノ事ニ深ク干渉シ國  
王ヲレテ非常ニ不快ノ念ヲ感セシメ加之宮内大  
臣タハ李載冕等ニ於テモ露未雨ニ鑑ミ潜居スル輩ト  
秘番ニ關係ヲ有スル等ノ事ハ李範晉李允用等ヲ  
入獄ノ安駟壽ニ密通スル所ヲ生ハシテ探知シヤ村便  
及俞内部大臣等ニ内報シテ注意ヲ促ルタルモ彼等半  
信半疑ノ間ナリ否深ク疑ハリシモ先カハ豫防ノ道ヲ  
施サリシカ為メ遂ニ此ノ失敗ヲ招キタル事ト云ハレ  
得サル次第ニ有之候且ツ安駟壽ニ對シテハ國王ヨリ内令  
及内賜ノ金品アリシ事ト云ハレ探リ得テ通シタルモ不拘教言  
戒ニ怠リ此ノ大恥事ヲ湧出セシタルト遺憾ノ至スル處

今日ヨリ察スレハ露人ノ決心ノ程モ大ニ顧ミサハ可ク  
モノト思科仕候彼ハ今般ノ舉ツテ去十月八日ノ事  
變ニ比スル時ハ其名義ノ尤モ正シテ其行為ノ比較上  
不法ナラハコトニハ自得スル處ナレバト雖モ去リトテ  
日本守備兵ノ大數數歩ノ前ニ嚴然警備  
スハニモ拘ラス僅モ去百五十餘名ノ海兵ヲ以テ其  
事ヲ遂ケントスルニハ素ヨリ日本兵ト戦端ヲ啓  
クノ覺悟ヲ決シタル上ニ出タル行為ナリト認  
ス

當國ノ事今日以後コソ實ニ大ニ活眼ヲ用テ  
注意ヲ要スル所ト相成中矣其ノ事變以後  
我カ對韓策コソ當否者ノ技能ヲ施スヘキ  
時ト相迫リ矣種々愚考胸裏ニ湧出文

往來しテ憂念措ク所ヲ知ラサハ事ニ以テ社美  
書外讓後便勿々謹言

二月十二日

克造

園田總監閣下

名 称	陸奥宗光文書
標 題	寔々録原稿

分 類 番 号	
	66
	5

国立国会図書館

登録番号	
------	--

緒言

一、此書ハ明治二十七年四月ノ文朝鮮東學黨

ノ亂起リシ以テ清ノ大舉其功ヲ奏シ尋テ

露獨佛三國干涉ノ事アリシニ翌二十八年五

月八日ヲ以テ遂ニ日清講和條約批准交換ヲ

行フニ至リシ迄其間外文政畧ノ概要ヲ記ス

ハモノナリ

二、余ハ本年六月以來養病ノ為ノ賜暇ヲ得テ大

## 緒言

一、此書ハ明治二十七年四五月ノ文朝鮮東學黨  
ノ亂起リシ以來征清ノ大舉其功ヲ奏シ尋テ  
露獨佛三國干涉ノ事アリシニ翌二十八年五  
月八日ヲ以テ遂ニ日清講和條約批准交換ヲ  
行フニ至リシ迄其間外交政畧ノ概要ヲ記ス  
ハモノナリ

二、余ハ本年六月以來養疴ノ為メ賜暇ヲ得テ大



儀ニ在リ本年十月中旬巳ムヲ得サハノ要務  
ノ為ノ一時歸京シタハカ為メ頓ハ病勢ヲ再  
發シ醫言甚メ嚴ニシテ再ヒ此地ニ休養スハ  
ニ至レリ本書ハ乃チ其頃ヨリ起艸シ今夕ニ  
至リ之ヲ脱稿ヤリ故ニ記事多クハ余カ胸臆  
ヨリ出タシ一々引證ノ書ニ由ラス間々或ハ  
誤謬ナキヲ必ヤス然レトモ本記事中重要問  
題ニ至テハ當時余カ蹙々匪躬經營苦心ノ存

スル所深ク脳裡ニ印象シ今尚ホ消磨シ去ラ  
サハモノアリ是レ即チ余カ實歴實行ノ事蹟  
ヲ記述スルモノニ係ル亦矮人觀場ノ比ニ非  
ハヲ信ス

三、本書元來記事ヲ主トシテ議論ヲ主トセス然  
レトモ記事中心ノ事實カ如何ナハ原因ヨリ出  
テタハカヲ明瞭ナラシメムカ為メ間々或ハ  
多少ノ議論ヲ挿入スハコトアリ是レ本書ノ

議論ハ恰モ其記事ノ註釋トシテ視ムコトヲ望ム

四、本書ノ記事ハ大体外務省ノ公文記録ニ基ク

コト論ヲ待ツス但總テ外交上ノ公文ナハ者

ハ一種含蓄ノ意味ヲ文外ニ存シ皮相ヲ寫シ

テ骨格ヲ露ハサス一讀往々嚼蠟ノ感ナキ能

ハス本書ハ總テ事實ノ顛末ヲ解剖シ亦其祕

奥ヲ覆藏セス之ヲ譬フレハ公文記録ハ猶ホ

實測圖面ノ如ク山川ノ高低淺深其尺度ヲ失

ハサハモ何トナク精神ニ乏ク本書ハ專ラ寫  
勢繪畫ノ如ク山相水姿ヨリモ寧ロ山勢水情  
ヲ寫出スハコトヲ勗メタリ然レハ本書ヲ讀  
ム者ハ亦公文記錄ヲ讀ミ彼此對照スルニ非  
レハ山水ノ形姿ト其情勢トヲ併得シ能ハサ  
ハベシ

明治二十八年除夜

大磯別墅ニ於テ

陸奧宗光追記

蹇々錄篇次

一 東學黨ノ亂

二 日清兩國軍隊ヲ朝鮮ニ派ス

三 大島特命全權公使歸任及着任後朝鮮ニ

於ケル形勢

四 朝鮮ノ内亂ヲ平定シ并ニ其善後ノ策トシテ

同國ノ内政ヲ改革スル為メ日清兩國共同

委員ヲ派出スベシトノ提案

五 朝鮮ノ改革ト清韓宗屬トノ問題ニ関スル

總論

六 朝鮮内政ノ改革第一期

七 歐米各國ノ干涉

露國ノ勸告

英國ノ仲裁

米國ノ忠告

他ノ列國ノ關係

八 六月二十二日以後開戦ニ至ル迄ノ間ニ於ケ

ル李鴻章ノ位置

九 朝鮮事件ト日英條約改正トノ關係

十 牙山及豊嶋ノ戰鬭

十一 朝鮮内政改革ノ第二期

十二 平壤及黃海戰勝ノ結果

十三 領事裁判管轄制度ト戰爭トノ關係

十四 講和談判開始以前ニ於ケル清國及歐洲強

國ノ舉動

十五日清講和ノ發端

十六廣嶋談判

十七下ノ閑談判(上)

李鴻章頭等全權大臣トシテ派来ス

一 李鴻章遭難及休戰條約

十八下ノ閑談判(下)

講和條約ノ調印

十九 露獨佛三國干涉（上）

此事變ニ對スル政府ノ措置

二十 露獨佛三國干涉（中）

干涉ノ由來

二十一 露獨佛三國干涉（下）

本篇ノ結論

西青本、曾祿、高平、加藤、

栗野、林、各公使宛

伯爵陸奥宗亮

拝啟陳者別冊謄々録ハハ生昨年大磯ニ

病養中借備忘之為ノ執筆致候記事ニ

シテ今度假ニ印刷為致候ニ付一部差上候尤

書中祕密ノ件ヲモ記載致置候間謝下限リ

此内覽モ本度將又右ノ未定之稿ニ付自然

誤謄之廉可有之存歟就之由覽中  
士氣付相成多事可有之校訂之資  
為之無生志慮其点之舉之未示也  
之樣致黨望之教具

五月二十日

雲住

忍之五冊二部差出又同一部本文次

第被申添山縣大使之手文之本度

癸

下ノ調談判  
全權大臣トシテ  
又

廣嶋談判不調トナリ、張邵兩使臣歸國ノ後、欧米

強國カ日清事件ニ對スル注意ハ轉々緊急ヲ加

（現龍）  
（威情）  
（層）  
（切）

ヘタルカ如シ張邵携帶ノ全權委任狀不完備ナ

ラサ  
ル為メ日本政府カ彼等ト談判ヲ繼續スルコト

ヲ拒絕シタルハ論理上何人モ異議ナキ所ナレ

ドモ元來清國ノ行為ハ國際公法<sup>往々</sup>的定規ヲ以テ

律ス可カラサル國柄タルハ夙ニ欧米各國ノ默

外務省  
小指



認スル所ニシテ今回ノ事モ其理論上ハ鬼毛角

モ事實上ニ於テハ殆ト欧米各國ガ視テ以テ決

シテ非常ノ珍事ト做サスル事ナル清國政府

淺陋

ノ頑迷無識ナルヲ嘲笑スルヨリハ寧ニ日本カ

斯ル口実ヲ以テ講和ヲ拒絕シタルモハ別ニ何

同  
隱謀ノ存スルアル

深意アルサレバレトノ邪推ヲ生シタルヤ

如シ

固ヨリ

見ハタリ去レトモ彼等ハ論理上之ニ對シ表

上

論  
ヲ有セス

面固ヨリ苦情ヲ鳴ラスベキ根據ナキガ故ニ沈

視聽

黙ハ間隙<sup>其猜</sup>々<sup>心ハ日々ニ</sup>疑懼ノ余ヲ增長シ日本将来ノ牽動

對シ

ニ深ク注意ヲ惹キタルモノト<sup>カ</sup>如シ<sup>其</sup>惟モ此頃各

恰モ

國政府ハ殆ト申シ合セタルカ如ク其在東京代

表者ヲシテ本々我政府ニ向ヒ清國ニ對スル要

寛容

求ハ可成丈ヶ節限シテ正當ノ程度ヲ超越セス

旨

平和回復ノ達成ヲ望ムト忠告ヲ申込ニ来レリ

然レトモ此各國ノ忠告ハ孰レモ抽象的ノ言詰

主持スルモノナリ

ニシテ一モ具體的ノ案件ヲ請求シタルモノナラ

尤

尤最モ某々ノ外國公使ハ日本カ清國大陸ニ於

テ割地ヲ要求スルニ至レバ歐洲強國ノ中キハ

異議アルヲ免レザルベシト暗ニ微意ヲ洩スモ

ノナキニアラサレトモ是トテモ彼等が確實ニ

其政府ヲ代表シタル正言ニモアラス亦タクイ

ム至新聞社屈指ノ通信者在巴里「ブロム」ウヰツカ

其本社ニ

シテ

係ル通信中露國政府ハ其在外大使ニ訓令シ

欧米強國ト連合シテ日清事件ニ干涉ヲ試ム

トシ但其時機ハ清国ハ自ラ戦敗ヲ認メテ誠実

ニ和ヲ乞フノ時ヲ俟ツベク又ク日本ナリ内キハ

清国大陸ニ推テ寸土モ割棄セシムルヲ歐洲

各國ノ許諾セサル所ナリトハ報告ヲ因新聞ニ

顯ハレタルモ亦ク此頃ノ事ナリシ

歐洲強國ノ形勢ハ右ニ述フルカ如ク何トモ不穩

ナリ余ハ曾テ廟議決定ノ如ク嚴ニ事ヲ

日清兩國ノ間ニ制限シ第三者ヲレテ事前ニ何等

交渉ヲナ

故障スヘキ餘地ナカラシムルノ方針ヲ堅持シ得サ

能ハ

ノ如シアリト思ヘリモリトテ今ニ至テモ方針ヲ變更

方針ヲ變更

方針

ニ歐洲諸國ノ内諾默認ヲ得トスル時様既

ニ後レタハノミナラズ彼等ノ未モ何等公然タル故障

ヲ言ハレタル

我カ既定ノ方針ヲ變更スルハ亦タ

ナキモ我ヨリ鼻息ヲ窺ヒ難托ス所ヲ云フハ所謂

事情ノ許サレル形シルヲ我カ義務ノ結果

以テム

糖ヲ膏チ其ニ臣ハノ憂サレ生カサルヲ得キ以テ思

自故余ハ如何ニシテ清國政府ヲ誘ヒ連

等ノ

引リテ

講和使臣ヲ再航セシメ先角日清戦争ヲ

孤

連ニ

平和回復ニ  
東洋平和ニ

テ日清兩國關係

スルニ

息止シ世界ノ面目ヲ一新シ妖素ヲ掃スルニ如ク

料  
シトモ斯クセムトスルニハ

ト思量シテ然生今日迄ノ如ク清國政府ニ対

シ總テ我カ請求スベキ条件ヲ總括トシ軍ヲトキト

清國政府ヲシテ再ヒ全權使臣ヲ簡派スル前ニ際メ

再々金權使臣トシ其本國廟議ヲ生

ス所ヲ知悉シテ再ヒ使臣ヲ轍リ船ニ

至ンヤモ計ニ不敷ト北京政府ヲシテ月カ我政府

條件中

ニテ決心スル所アラシメ

カ請求スベキ木勘意ヲ會得セシメ同時ニ申

要件

金權委任状ノ完備スルヲ求ムル為メ豫メ

ト  
ハヨ

○他日其使臣再來ノ時ニ於テ彼我

ノ意思先ツ理會シ居ルハ會商モ

某主任狀ニ付裁ス我政府ノ東野セシムニ外カ

ホク幾許ノ達成ヲ望ムヲ得ヘキニ依リシセ

ト思ヒスニ依リ二月十六日ニ於テ在東京及ヒ

北京兩國ニ使ヲ經由シ左ノ實書ヲ清國政府

ニ傳致シタリ「日本國政府ハ清國ニテ軍費賠

償金ヲ支拂フ事ヲ朝鮮ノ完全ナル独立

ヲ認ムル<sup>事</sup>外戦争ノ結果トシテ土地ヲ割讓シ

及將來ノ交際ヲ律スル爲メ確然ナル條約ヲ

締結スヘフトヲ基礎トシテ談判スヘフトヲ得

へキ全權ヲ具備シテ来心ニ兆<sup>ニ兆</sup>ハ<sup>ハ</sup>決<sup>ハ</sup>更ニ且議

和使ヲ派スルニ全ク無益ニ屬スヘキコトヲ聲

明<sup>ニ</sup>世他尚ホ某重要ノ度以上諸件<sup>ニ</sup>決<sup>ハ</sup>

事項アリ是<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>商議決定スルコトヲ要ス又日本

國政府ハ今後何時ニモ必要ト認<sup>ル</sup>又<sup>ハ</sup>筆<sup>キ</sup>

キト思<sup>フ</sup>考<sup>ヘ</sup>ス<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>ハ世上更ニ要求ヲ提出

ス<sup>ニ</sup>キ權利ヲ保有ス<sup>ル</sup>然<sup>レ</sup>ハ世<sup>ニ</sup>農<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>行<sup>ハ</sup>常<sup>ニ</sup>

在<sup>ニ</sup>北京<sup>ニ</sup>米國<sup>ノ</sup>使<sup>ハ</sup>在<sup>ニ</sup>東京<sup>ニ</sup>米國<sup>ノ</sup>使<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>

事、日本國政府、修造、大橋、電、信、ヲ

其概要

送致上清國政府  
在使求在在事

日本國政府、傳真、主、據、國、下、休、賴、又

頭等全權大臣

内閣大學士李鴻章任命

セシ然ラシ全權ヲ附與セシテ用氏宗樂トスル

翎  
董馬袂及漢戴人景  
英也子子同氏本

月十九日 德賢事 裕引謙于北京而歸

牛馬之土、目下当地、身著之下、清國

日本國が何レノ地ヲ以テ其國全權委實今令

地ト云メえや成ルベシ其ニ實チアラムコトヲ請

ヘリ。李鴻章ハ條約ヲ締結シ之ニ調印ス

ル全權ヲ附與セシメ所ノ任任狀ヲ第

有スレ而シテ同氏ハ數日內ニ此條約ヲ

ス(日)此代表ハ亦其責重極ムル事ナリ

此上日本政府ニ通達ラセリ

其ヤシメシコトヲ總理衙門ノ請求ニ應ジテ

頭等

最優ニ其國全權章が全權大臣ト

ト云フイヨ

リ然レモ 清國政府ニ於テハ 實ニ...

シテ事航ス所 確報未 播トモ 不 樂ト

電ニシテ意 十分ニ貫徹シタル上ニテ...

モ主ト 龍氏二月十日 茂電 惠書ナ

ニ保 擔シモ 主航ナリ 復 何等ノ 知

果ナカルベシト思ヒタ

ナキナレバ 迷ハ 故余ニ更ニ 清國政府ノ意ヲ

促カス事ナリ サント欲シ

確ナルノ 必要アリ 龍氏二月十九日 ラテ 在東

京ト京西 未國ニ使ラシテ 更ニ 左ノ 軍事

經由

カリ電報ニヨリ

清國政府ニ 傳達ナシ 在 北京 未國ニ 侵

本年十一月 震行中 清國政府 求

先王勅命

先王所命之旨、先王日本國政府

清國政府より、奉命全權奉旨、本年十月十七日

日本國政府より、要旨中ニ掲記スル事

条件ニ遵フシ、依其全權大臣ヲスル旨、ト云ヒ送りタルニ對シ保記シ

得ルコトヲ欲シ、又々責任状ノ件裁キ熟ス

奉使ヲ經由シテ、此後復々奉旨

稱、國府長官並、即、在府責任状ノ件裁

スルコトヲ知リ、且、日本政府より、豫告スル所

ハ、

就東二月二十一日ヲムテ在ル事未國ニ使

總理衙門王大臣等が同ニ候ニ保証シムコト

何文元震知シリ其概要ハ「画致」月并昔「請

求上鷹ニ其使ハ茲ニ本月ニテモ漢文ニテ書

送セリ所ノ書類ニ英譯文ヲ閣下ニ震送ス。因

本月十七日及二十日ハハ日トア附日本國未震シ

本衙門ニ送付セシ候ニ閣下ニ經リテ本國

ハ全權委員ニ任セシリ本月十七日附日本國政府

奉愛牛各種ノ同起ヲ商議スルヲ望ムアリ

李氏ハ世等ノ任務ヲ執行スキ全權ヲ帶有

セリ希々ハ密下ヲ之ヲ日本國政府ニ傳達セ

タシ云ヒトアリ 清國政府ノ決意漸ク一定シタルヲ見ル故ニ耳後ハ

日本國ハ付シ地ニ於テ其國全權無異全權

場所ト定メヤリ何合セ且李氏カ適宜ノ

時間及テ中表スルヲ得ル為メ成人ノ建

震行ニテ面表スルヲ求メテ之ヲ金面勅

書ハ其ノ文意日本國ニテ後ヤレト同一

茲在華文館ヲ開キ國貨ヲ傳シ且之ヲ

本國ノ實效ニキキヤ否際下ノ考ヲ加ス

附註

キヲモカシ斯ニ集ル本國使ヲ經由シ清

國政府ニ電報ヲ復後ハ本政府ハ全圖

(大臣奏)

下ノ國ヲ以テ西國全權會合土地ト撰定シ

ル旨ヲ電報シテ休シ去鴻章ハ三月廿日

ヲ以テ天津ヲ發シ下ノ國ニ直航スルコトヲ確

シ来レリ翌十五日ニ於テ

報ヲ傳シ伊藤内閣總理大臣ト余ト共



十日ニ於テ西國全權大臣會合ヲ開キ而シテ

ミテ各々

有スル所ノ全權委任状ヲ交換ス<sub>旨</sub>キヲ通

牒セリ

翌二十日ノ會合ノ才一着ニ於テ<sub>兩國</sub>全權

互ニ其全權

ミタル後

委任状ヲ交換セリ而シテ清國欽差頭等

全權大臣ハ一ノ實書ヲ出シ講和条約ヲ合議

商

スル前ニ當リテ兩國海陸軍ト連レ休戦ス<sub>事ヲ議定</sub>

セムコトヲ

身

國

要求セリ其意盡ノ概要ハ大清欽差頭

等全權大臣、現ニ講和条約ヲ用議スル始、  
於テ兩國ノ陸海軍、直ニ一律ニ休戦シ以テ  
和約條款ヲ商議スル地步ト為サムコトヲ請フ此  
議ハ已ニ數月以前、亦北京駐紮米國公使  
ヨリ東京駐紮米國公使ニ傳達シ貴國政府  
商議セシニ貴國政府ハ亦國全權大臣在座  
時ヲ俟テ如何ニ休戦ニ和ヲ滿スニキヤラ言明  
スヘシト云々云々ナリ今ヤ本スル講和条約

ヲ締結シ之ニ記名調印スル全權ヲ奉有  
スレハ切ニ我朝廷ヨリ委子スル所ノ重任ニ肩力ナ  
ラムコトヲ願ヘリ因テ特ニ重子ニ前議ヲ提出  
ス思フニ清フ所ノ休戦ノ事ニヤ諸和条  
約ヲ妥成スル第一要義ナリ右旨ヲ申明シ  
且貴族ヲ乞フニ因テ我カ全權大臣伊藤伯  
卿ニ之ニ対シ明日回子ニ其ツヘキコトヲ約シ  
リ本目ノ全權ハ此ニ略結シタレト是伊藤

合 表面 茲

李鴻章

ノ驚識ナリ

總理ノ驚識ナリ天津ノ驚識ナリ李鴻章ノ驚識ナリ知ノ驚識ナリ

彼ノ名ヲ聞リヤ久シ談緒再開シテ殆ト數時間ニ亘リ彼ハ

余モ亦シノ驚識ナリ李鴻章ノ驚識ナリ人物ノ驚識ナリ

津張王ノ驚識ナリ破ノ驚識ナリ改ノ驚識ナリ暫多新話ノ端緒ヲ

用ノ驚識ナリ聲ノ驚識ナリ事ノ驚識ナリ古稀ノ驚識ナリ以上老翁ノ驚識ナリ仙ノ驚識ナリ不ノ驚識ナリ長ノ驚識ナリ

(ニシテ曾國藩ガ百歳ヲ自辭令ラシテ人ヲ憐(憐服セシムル

身魁偉ノ驚識ナリ言語壯快ノ驚識ナリ流布ノ驚識ナリ清國ノ驚識ナリ元ノ驚識ナリ一ノ驚識ナリ後ノ驚識ナリ

風采アリ

人物ノ驚識ナリ失ノ驚識ナリ風采ノ驚識ナリ然ノ驚識ナリトモ合面ノ驚識ナリ使節ノ驚識ナリ

ニ軒ナス

結テ

蓋

置

共

共ヘリ彼ハ老翁

彼が為ノ驚識ナリ基ノ驚識ナリ不利ノ驚識ナリ地位ノ驚識ナリ身ノ驚識ナリ承ノ驚識ナリ承ノ驚識ナリ

トモ其語ノ驚識ナリ自多平素ノ大言壯語ノ驚識ナリ

ト交リ

目

我輩ニ諷カルルキ

樓ハハニ仙ハハニ不ハハニ稍ハハニ柔順媚々ハハニ李ハハニ可ハハニ一ハハニ毒ハハニ

咬字

十千能ハ又被ハ

事不若我國進步風教之羨望也特此

伊藤信理、功績之著揚、  
志願ヲ達ス、  
肯否トモ

事<sub>ニ</sub>然<sub>レ</sub>其<sub>ノ</sub>間<sub>ニ</sub>諧<sub>ス</sub>諷<sub>ス</sub>放<sub>ス</sub>表<sub>ス</sub>以<sub>テ</sub>其<sub>ノ</sub>意<sub>ヲ</sub>

表裏年同辱<sub>シ</sub>身<sub>ヲ</sub>露<sub>ハ</sub>サ<sub>レ</sub>ス

痕ヲ藏シ曰其

詠老猶然之所なりト感じり唯

談話中、春日清西國、亞細亞洲内、

西大帝国ニシテ年輔軍相傳、唇齒

相<sup>輔クベキ</sup>助<sup>ルヲ説キ</sup>スル之弟国ヲ事サシムル其付今因我

年息止ニ帰スルトキハ帝ハ将来ハ本<sup>交際</sup>軍

軍<sup>友国ヲラサル</sup>係ヲ恢復スルノミナラズ更ニ一層親密ナル

交誼ヲ進歩セシムルカスルナリ日本軍隊ハ

洲<sup>赤</sup>海ノ改革ヲ仕儀ニスラシメ我カ黃色人

種<sup>種</sup>因<sup>種</sup>テ白色ノ種ニ敵對スルヲ得ノ後候<sup>証</sup>

此<sup>終ニ</sup>日清兩國ハ同盟親善ヲ事スベシ

言<sup>終ニ</sup>海軍<sup>終ニ</sup>今因ノ戦争ハ終ラ彼ハ二個

終ニ  
終ニ  
終ニ

夕 系

大通悟入得<sup>道</sup>りハ日本が歐洲<sup>流</sup>主義軍隊

組織<sup>改革ニ</sup>成<sup>レ</sup>ル<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>黄色人種<sup>ニ</sup>自<sup>レ</sup>包<sup>ル</sup>

人種<sup>ニ</sup>對<sup>シ</sup>懷<sup>ル</sup>ハナキヲ示<sup>シ</sup>テニ清國<sup>ニ</sup>年六

國<sup>ハ</sup>日本<sup>ニ</sup>對<sup>シ</sup>怨<sup>ハ</sup>恨<sup>ヲ</sup>懷<sup>キ</sup>居<sup>ル</sup>者<sup>アリ</sup>ト云<sup>フ</sup>彼<sup>ノ</sup>今<sup>ハ</sup>

日<sup>本</sup>ノ戰<sup>争</sup>ハ為<sup>ス</sup>清國<sup>ノ</sup>長<sup>キ</sup>睡<sup>ヲ</sup>覺<sup>セ</sup>サ<sup>ル</sup>

ハニ付<sup>テ</sup>實<sup>ハ</sup>不幸<sup>中</sup>ノ幸<sup>ト</sup>考<sup>フ</sup>ル<sup>ハ</sup>不<sup>幸</sup>事<sup>ナ</sup>

事<sup>ニ</sup>敗<sup>者</sup>ノ地位<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>ハ已<sup>ム</sup>年<sup>ノ</sup>改<sup>メ</sup>辭<sup>ス</sup>ル<sup>ニ</sup>相<sup>得</sup>

帝<sup>ナ</sup>ラシ<sup>ト</sup>モ<sup>ニ</sup>滿<sup>州</sup>和<sup>平</sup>條<sup>約</sup>締<sup>結</sup>シ<sup>テ</sup>金<sup>權</sup>大<sup>臣</sup>

ノ亦<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>當<sup>テ</sup>初<sup>ヨリ</sup>非<sup>義</sup>論<sup>ヲ</sup>主<sup>張</sup>シ<sup>タ</sup>リ<sup>ト</sup>ハ強<sup>ク</sup>ト掩<sup>テ</sup>身<sup>ヲ</sup>盜<sup>シ</sup>鈴<sup>ノ</sup>類<sup>ナ</sup>レ<sup>ル</sup>○

我ヨリ清國政府

会面コン

眞実ニ和議ヲ求ムヤ如何

ノ意確然

ナレバト  
イ事何ハニ対シ<sup>彼</sup>李鴻章<sup>ハ</sup>清國ガ眞實

ニ和議ヲ求ルノ意アルニ非サバ敢テ本大臣

ヲ派来セシメサルベシ又<sup>ハ</sup>本大臣モ果シテ清

國政府<sup>ニ</sup>眞心<sup>實ニ</sup>和議ヲ求ム<sup>欲ス</sup>ハノ意アルヲ知

カスムバ<sup>ハ</sup>重任ヲ承諾セザルニシ<sup>是</sup>テソラ

清國政府<sup>ハ</sup>眞心<sup>實ニ</sup>和議ヲ求ム<sup>切ニ</sup>ラ

推量セラ<sup>ルベシ</sup>ト<sup>之</sup>事<sup>ハ</sup>彼ガ自己

ト<sup>ハ</sup>力<sup>ハ</sup>ナシ

7000  
 500  
 1000  
 600  
 200  
 100

身分ヲ榷テ

各將資望ヲ賭ニテ以テ我カ信任ヲ得ハト  
 博シ

フルガナハ

箱

力欲ニシテ其語氣多少自肩ノ重キナルヲ  
 推知スルニ足ル

流石ニ世故ニ練熟スル者相可ヲ見ルニ足ル  
 一大物ナリ

⊕

推知スルニ足ル

タチ

外キハ彼方自己ノ身分ヲ權テ以テ我が信認ヲ

博セムトスル如キハ流石ニ世故ニ練熟ナル老

猾十大物タルヲ見ルニ足ル其他要カサル

談話ニ基キ筆記ナルノ必要ナク翌三十一日我

全權辦理大臣ハ昨日清國全權大臣ヨリ交付

タル覽書ニ對シ回答ヲ興ヘタリ其概要キ申

日本帝國全權辦理大臣ハ戰地ト相距ル

遠遠ナル當地ニ在テ休戰ヲ約定スルヲ以テ議

和談判ノ妥局ヲ結フ必須ノ要義ト視做ス能ハ

スト雖モ若シ兩國ノ向チ均等ノ利便ヲ擔保ス

ルニ足ル條件ヲ附本ルニ於テハ休戰ヲ肯諾ス

サニアラヌ

ルコトサルバシ日本帝國全權辦理大臣ハ目

下ノ軍事上ノ形狀ヲ察シ條々々彼此交戦ヲ中

止ムルニ因テ此ノ結果如何ヲ顧ミ在リ

條件ヲ附スバキコトヲ聲明ス日本國軍隊ハ大

沽天津山海関並ニ該所ニ在ル城壘ヲ占領スル

△交戦中止ノ結  
果ヨリ生ズル被地  
ノ利便ヲ均等ニシ  
ムルニ足ルヲ  
條件ヲ附加セ  
ルヲ清國ニ於テ

事。前記各所ニ在ル清國軍隊ハ一切ノ軍器、軍需

ヲ日本國軍隊ヘ引渡スル事。日本國軍隊ヲ

天津、山海関間ノ鉄道ヲ支配スル事。休戦期限

間、清國ハ日本國ノ軍事ノ費用ヲ負擔スル事。若

シ以上ノ條件ニ異議ナクハ休戦ニ實行

スル期日、其ノ期限、清國軍隊ノ經費、總ノ其他

細目ヲ直ニ提出スベシ。李鴻章ハ此

四本ニ接シ顔色頗ル動キ一驚ヲ喫シタル如ク

自ラ之ヲ徹固ルルノ外莫カシト思ヒタリ

故、休戦條約案ハ得カ。還酷ナリト叫ガセシニ

最悪ナリトニ相違ナシ

嚴密タムルハ豫期ノ事タリ而シテ李鴻章

全權委員トシテ只管ニ休戦條件ノ

ト此休戦條件中未津大沽山海関ハ未タ日本軍

隊ニ推テ攻取シタムル土地ニモ斯ルモ休戦

ノ擔保トシテ占領セラルルコトヲラハ恰モ北

東ノ関門ヲ明テ渡ル事ノ如ク清國政府ハ到底

之ニ堪ヘ得ベカラヌ今更ニシク寛大ナリ條件

以テ休戦ヲ許諾セラレムコトヲモテ

棄換セラレタシト人意味ヲ取テ南ニ哀告シタ

是レ彼ノ苦衷スルハハナリ我々  
作ル線新スル所ニテ固  
ニテ確信セシメテ之ヲ示ス

レトモ我々在テハ是ヨリ寛大ナル別案ナシモ若  
クハ我々

レトモ伊藤全権ヲ急シ本緊  
別ニ此ニ

レ清國使臣ニ於テ之ニ對シ又新案ヲ提出スル  
カ方ニ

ハ更ニ詳議スルレドモ我々連シテ之ヲ更  
ニ代

用スル別案ナシト  
更スルコト能ハス

只今全書  
易ニ休戦

彼ハ唯ニ休戦ノ條件ヲ輕減  
我々再考スルモ本案ヨリ輕減

ハ之ヲ拒絶スルコトヲ續述  
為ニ其特問

最難再考ノ餘地ナシトモ彼ノ請求ヲ拒ニ彼我同ノ事實ヲ異様  
言語ヲ以テ及西復スル

人々最末ノ最後ニ彼ハ休戦條件ヲ談判ハ  
言語ヲ以テ及西復スル

時中止シ置キ我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ  
之ヲ

之ヲ  
我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ

之ヲ  
我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ

之ヲ  
我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ

之ヲ  
我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ

之ヲ  
我々講和條約ヲ提案ヲ聞カムコ

（三）

トヲ請ヘリ伊藤全権ハ我國ニ於テハ初日ヲ休

（三）休（自）戰必モ息戰ハ國權ニテラテ故ニ

戰條約ヲ締結スルノ必要ナレト思ヘリ故ニ戰

（四）

事ハ戰事トシテ締結スル間ニ茲ニ講和條約ヲ

用テスルモ固ヨリ（三）然レトモ（三）テテ金ヲ

締結シテ何等ノ差支ナレモ清國使臣キレテ

休戰條約ノ問題ヲ全ク撤去スルニ至シカ直ニ

講和條約ノ談判ヲ開始スルコトニ異議ナシ

（五）然（然）問題

雖レ休戰條約ヲ全ク撤去セザル間ハ講和條

（六）我ヨリ（四）

（七）

約ヲ提出スル能ハス下（八）（九）（十）（十一）（十二）（十三）（十四）（十五）（十六）（十七）（十八）（十九）（二十）（二十一）（二十二）（二十三）（二十四）（二十五）（二十六）（二十七）（二十八）（二十九）（三十）（三十一）（三十二）（三十三）（三十四）（三十五）（三十六）（三十七）（三十八）（三十九）（四十）（四十一）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（四十七）（四十八）（四十九）（五十）（五十一）（五十二）（五十三）（五十四）（五十五）（五十六）（五十七）（五十八）（五十九）（六十）（六十一）（六十二）（六十三）（六十四）（六十五）（六十六）（六十七）（六十八）（六十九）（七十）（七十一）（七十二）（七十三）（七十四）（七十五）（七十六）（七十七）（七十八）（七十九）（八十）（八十一）（八十二）（八十三）（八十四）（八十五）（八十六）（八十七）（八十八）（八十九）（九十）（九十一）（九十二）（九十三）（九十四）（九十五）（九十六）（九十七）（九十八）（九十九）（一百）

（十一）（十二）（十三）（十四）（十五）（十六）（十七）（十八）（十九）（二十）（二十一）（二十二）（二十三）（二十四）（二十五）（二十六）（二十七）（二十八）（二十九）（三十）（三十一）（三十二）（三十三）（三十四）（三十五）（三十六）（三十七）（三十八）（三十九）（四十）（四十一）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（四十七）（四十八）（四十九）（五十）（五十一）（五十二）（五十三）（五十四）（五十五）（五十六）（五十七）（五十八）（五十九）（六十）（六十一）（六十二）（六十三）（六十四）（六十五）（六十六）（六十七）（六十八）（六十九）（七十）（七十一）（七十二）（七十三）（七十四）（七十五）（七十六）（七十七）（七十八）（七十九）（八十）（八十一）（八十二）（八十三）（八十四）（八十五）（八十六）（八十七）（八十八）（八十九）（九十）（九十一）（九十二）（九十三）（九十四）（九十五）（九十六）（九十七）（九十八）（九十九）（一百）

清西國文戰中ナハハ敵ニ日本ハ清國ノ親

部令中收取スル此國日、其權利ナルドモ事ナ

カヲ元来日清西國ハ天然的同盟國ナリ若シ日

本政府中於テ誠實ニ永久ノ平和ヲ欲スレハ少

トシ清國ノ名譽ヲ存留セラレムコト得策ナラ

ムモ今日ハ日本ハ清國ニ對シ如何アル要求

ヲモ為シ得ベキアレドモ右ノ事情ニ鑑ミ相

當ノ制限ヲ超越セラレザルコトヲ望ム若シ之

夫、天津大沽  
 山海関、ハキ島々  
 北京、関門、ハキ島々  
 各所、ハキ島々、日本軍、  
 在領、ハキ島々、ハキ島々  
 ハキ島々、ハキ島々、ハキ島々  
 有、ハキ島々、ハキ島々  
 日本軍、ハキ島々、ハキ島々  
 ハキ島々、ハキ島々、ハキ島々  
 抑、ハキ島々、ハキ島々  
 元、ハキ島々、ハキ島々  
 件、ハキ島々、ハキ島々  
 ニ、ハキ島々、ハキ島々  
 該、ハキ島々、ハキ島々  
 中、ハキ島々、ハキ島々  
 同、ハキ島々、ハキ島々  
 二、ハキ島々、ハキ島々

程度

ヲ起越シタラムニハ日本ハ清國トノ名義上

ハ實ハ利也 能ハサルベシ

平和ヲ得ルモ莫業平和ヲ得ル能ハサルバルト

ハ對シ伊藤全権ハ吾々ノ提議ハ總テ左程ニ

不正當ナルモノト思ハザレドモ今日ノ場合ニ

於テ之ヲ討論スルハ及ハズモハ唯

戦争ヲ息止スルヲ以テ日清兩國特ニ清國ノ為

一日モ早く息戰ノ急

必要ナリト思フ又天津其他ノ保拒占領ハ

亮一時ノ保護ニテ清國ヨリ其城市ヲ破壊スルノ意思ヲ有スルモノニ非スト

必ズ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

議ルカ如ク清國ハ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

議ルカ如ク清國ハ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

議ルカ如ク清國ハ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

議ルカ如ク清國ハ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

議ルカ如ク清國ハ之ヲ速ニ撤去スルベシトハ講

斯レ彼我ノ推問合續返レシル

和條約訂結、上ハ根據トシテ之ヲ占領スルノ

必要ナルハナリ斯レ如ク議論ヲ反覆シタム

後李鴻章平テ休戰條件ハ如何ニモ過酷キナリ

到底服従スル餘ハス然レニ吾々ノ第一ノ目的

平講和ニ在テ休戰ニ非ラス日本ニ於テモ吾々

トモ同様ナル感情ヲ懷キ居ラル、日ナラシ

信ス伊藤全權平テ然ラズニ於テモ速ニ平和

ノ回復アラコトヲ希フノ外ナレ然レ氏休戰



○  
 本會大抵之ヲ  
 前日  
 會合終了セリ

問題ノ論

問題決定セザル以前ニ講和ヲ談判ニ及ビ難

ト云ヒタルニ由リ  
 ハ竟ニ考量スルガ人数日ノ稍際ヲ得ハコトヲ望ミ

シ故ニ清國使臣ニ休戰條約ノ提議ヲ撤回

我々全權大臣ハ考量ノ時間ヲ許スコト妨ケナケレトモ今ヤ兩國人民

地ノ通人講和談判ヲ開始シテ差支ナシト彼

國ノ軍談判ノ結果如何ヲ觀察應際ナレハ故ニ可成大々敏速ニ

遂ニ次會ニ於テ其休戰ノ請求ヲ撤回セシム

吾人休戰ノ果スコト亦タ吾人當然ノ義務ナリト信ス故ニ大抵三日間ニ確答

月日二十四日清國講和使ハ遂ニ休戰

アラムコトヲ望ムト云ヒ  
 別段ハ月ノ會合ニ於テ清國使臣

提議ヲ撤回シ直ニ講和條約ノ談判ヲ開カ

問題ヲ撤回シ直ニ講和談判ニ取り掛ラムコトヲ望マリ因テ我々全權大臣

ホトヲ望ムト云ハ我々更ニ之ヲ明日ノ會合

明日ヲ以テ講和條約ノ案ヲ提出スルコトヲ

始ムト云ハ紛シタリ此日ノ會合ハ格別緊

提議

領ヲ引テ

ト  
 及び  
 目

ト難トモ

要ノ記事ナシ但李鴻章ハ茲ニ一事ノ提議アリ

和シ

日本政府ガ提出スルニキ講和條約

案

ハ何事モ

條件中ニ作テ他ノ外國ノ利益ヲ錯乱スベキ様

項ヲ挿入シ

各個條ナキヲ信セント欲ス語ヲ換ヘテ言ヘ

別以テ

講和條約中

條

個性

ハ諸外國ノ感情ヲ激動ス下キ如キ者無キヲ要

何トナレハ

一ニ

ス吾々ハ平和回復ノ問題ハ金ナ日清兩國ノ間

効ナラ

避ケル

ヲ要ス

ニ止テ他國ノ干涉ヲ防グコトニ就キ頗ル注意

ミナリ

大ノ事思ハナリト

〔此外見好キ

言詰ハ亦々掩耳盜鈴ノ<sup>以是彼人</sup> <sup>佛目</sup> 昨幸以

未彼ハ<sup>如何ニ</sup>政米強國ノ干涉ヲ要求スル為ニ如何

身心ヲ勞レルヤ其事跡一ニシテ足ラザル

且ツ他日彼ハ我政府ノ提案ニ係ル講和條約

底本ヲ接守スルヤ四月一日ヲ以テ直ニ平

總理衙門ニ電達シ其電文ノ後段ニ日本政府

提議スル詳悉ニ各國公使ニ告知スベシ但日本

一時効乞勿庸告知各國恐見其可利可而彼將協而謀我ト云ヒ

擬<sup>ハ</sup>可<sup>ル</sup>通商新約詳細節目ハ一將各國ニ陳

今特傳狀即  
出勸令

○又夕四月二日總理衙門ハ李ニ度電シテ德使初七日未署、(中略)近接外署

救シ置タム然ルガハ各國ハ最惠條款ニ從

電、已電駐日德使、會同英俄、從中勸解、德使亦以於初二日向英外務部言

ト利益ハ兩活皮ヲ得シカ為、連和シテ我ニ迫ル

トアリト同リ到底

ト云ハ人見是ニ由テ觀シハ彼ハ苟モ各

ヲ辭ケサルノミナラヌ事ヲ觀望スルノ意ナキニアラズ

國ノ干涉ニシテ自己ニ對シテモ人々毫モ之ヲ

然、還付、回頭

避ケサルヲ見ルベシ被レヒ彼ノ遼東半島一併

起ル

キ有露獨佛三國干涉ノ事アリ、後我カ國人

又ハ、強國アリシニ

中ニハ往々李鴻章ハ豫ノ露國其他ノ密約ヲ

非サルカト疑ヒ、至テハ李ハ

請在使ヲ航シタルモ、疑フモノナレド

○下

李中書

文中

不可

兄弟

祥之地

處如被

以為

軍駐足

可以

國民

日本

地以

為

計是

永遠

去

且此

馬関ヲ去ルニ望ミ咲然古ヲ吐ケリト云フニ至レトモ

是之レ必竟根據ナキも疑念タルヲ免レス何ト

最モ

談判ニ於テ

如何ニ論セシヤ四月五日

ナレハ奉天有割地ノ事ハ始終痛ハ抗議レタム

△

議和

談判ノ困難ナルニ及ビ彼ハ

四月十一日ニ於テ御方總理衙門ニ

電照シタル文中ニ「英廷已坐視未知俄廷意見何

同ク是ニ由テ之ヲ觀ル

如トアリタリト云ハ彼ハ講和條約結了時

尙ホ露國意見何如スラモ知ラサル程ナレハ彼

が天津出發ノ頃ニ於テ何等モ密約モアリ得

空申畫機ノ類ヲ免ズ

伊藤全權ハ直ニ之

ト

モハシイ具中寄主類ノ言

山一風一

右ノ題字ヲ覆ス

前北京琉璃廠

電氣ヲ自己ノ

齊東野語

萬里腹中

萬不能讓日本。

不將擬家兵中軍

不將擬索奉

天南地北一

刑去和必不

能成兩國情

單張力、立、

一、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

中官甲子真

算平

二 本問題ハ全ク日清兩國ニ関シ敢テ他國

ノ際、繫ヲ千山ニキ毛ノニ遊ス、故ニ五七々ハ勿論

卷而して

外國ノ事ヲ要スルニ意ナレト云ヘリ而シテ

將

山ノ李鴻章水會議所ヲ去リ其後詎ニ帰ラムト

コソ

スル途中ニ於テ一  
珍事起リ  
即チオホシノ

1

上

外子

李鴻章ノ遭難ニ休戦條約

昨日西國全權李鴻章會合了り各自主張出たり

余ハ明日提議出ス事議和条約ノ件ト付

豫メ打合セ置クハキ必要アルニ因リ本經方ヲ以テ

勸慰坐密港ノ折柄ハアリ元ヲ拂シテ入事

唯今李鴻章帰途ニ於テ暴漢ノ為ニ狼狽手

セテ重傷ヲ負ヒテ暴漢ノ直ニ捕縛サレ

タリトイ事報告セリ余ハ本經方ニ其意外ノ事

喫驚ニ

得ル極ノ事既ニ事係屬ニ故余

李経意ニ對シ此痛以逃歎ス三才十キ出奉事連モ未何

其痛惜至ニ堪モ義後ニ事策ハ吾儕力及テ

大ハ限リ子限リ是限リ下ハ願シハ取速ニ放モ早能テテ

乃ズノ看護ヲ盡セタシト云々相別テス

余直々伊藤金権ヲ就萬ニ往ニヲ語事ニ関シテ

軍要東ノ諸流準備ヲ為シト共ニ不傷同伴相共ニヲ

旅銀ヲ訪ヒ行キ一鷹ノ具舞ヲヲ為シ後テ李鴻章

花報



遭難新國國內船中驚愕痛惜

其ハ

トシキ即チ多ク日多ク人部方稍産要

觀ヲ目シテ死ト国辱ト

感念ヲタテニ事ノ是タリ先報塵島行

深ク聖德ヲ驚カシ奉リタルヤ

在所ニ達スルヤ我々天皇陛下ハ直ニ軍醫館

下ノ関ニ来ラレメ給ヒ特ニ佐

臨在申出患急藤生ハ商派サレ事ニ至ハ

傷痍ヲ醫療スルコトヲ勅命セテ又ハ皇仁

陛下より珠著遺妹ヲ形カシ具御製

下賜セラレハ同時ニ看護婦ヲ遣ハシ

緬著ヲ賜進メヤスル者煩ハ鄭重御待

ハヨ

業

ヲ其ヘシ  
區ノ東ニ基望ニ十五日ヲ以テ左勅書シ書セ  
布シ給ヘ  
日ハ

朕惟ニ清國ニ我ト現ニ交戦中ニ在リ然レモ  
已ニ其ノ使臣ヲ簡派シ禮ヲ具ヘ式ニ依リ  
以テ和ヲ議セシメ朕亦全權辦理大臣ヲ命ジ  
之ヲ下ノ國ニ會同商議セシム朕ハ固ヨリ國  
際ノ成例ヲ踐ミ國家ノ名譽ヲ以テ適當ノ  
待遇ト發シ衛トラ清國使臣ニ其ニサヘカラス

「ハ」  
「ハ」  
「ハ」

乃々特々有司。命之官也。所方之。ム  
而シテ不幸。危害ヲ使長。加ハル。次徒ヲ  
出ス。朕深ク之ヲ憾。ミトス。其ノ如ク。有  
司。因テ法ヲ按シ。處罰。シ。假借ス。所  
ナカヘシ。百僚。臣庶。夫シ。亦更ニ善ク。朕カ  
意ヲ体シ。嚴ニ不逮。テ戒。ソ。以テ國吏ヲ  
損ス。勿カラムコトヲ努メヨ

勅意天<sup>正</sup>明<sup>心</sup>國<sup>平</sup>使<sup>事</sup>長<sup>理</sup>威<sup>明</sup>三<sup>新</sup>也<sup>十</sup>

○  
代表スル者若シハ一個人  
ノ資格ヲ以テスル者ニ  
論ナリ

ベシ又カ  
トラス  
頤心  
我國民  
ラシテ  
頤心  
羞恥  
惜  
夕  
我

[illegible]

不食及私書時代惡之又不各國形之實格

李鴻章手書

又辨吏之天下閑士出處不<sub>レ</sub>者アリ又多<sub>レ</sub>責

信者不郵便之由之其意志之志者虎

先漢ノ處所ナリ  
國事全國一般ニ及  
民全

意誌を以て清國使臣に對してハ勿論

内外番國ニ表明ハ得ルモ如何ニ其意

ナルバク其意志ヤ居カミスベキハ此處ノ事ナレトモ果テ行動作人止後カ  
手康ノ道ヲ幾ヤ其山幸寺中思心ヲ默然ニ奉リ伏テ黙シテ現ニ

下  
○スル事

溢美し諛辭類  
心言語ヲ

シキハ李が既往ノ功  
業ヲ列挙シテ

平生東方國將來  
危ハ李カ死生ニ係ル

モノ、ヤク云フモノアルニ  
至リキ

李ノ遺難  
李ノ遺難

李ノ遺難  
李ノ遺難

李ノ遺難  
李ノ遺難

李ノ遺難  
李ノ遺難

李ノ遺難  
李ノ遺難

李ノ遺難  
李ノ遺難

開戦後 李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
清國官民ノ短所 李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
韓多感スヤ云々 李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論  
李カ遺難ニ就テハ我國ノ各新聞紙ハ勿論

人情交動ノ極是肌ナ  
手次ヲト云ハ少ク言甲斐  
ナキニ驚カラル得ス  
△

シ彼が使命ヲ半途ニ止ム國スノ事ナリ

内外形勢ヲ見ニ今日ハ最早米角又講和条

継続スルヲ許サ

約ヲ訂結セサカサカ時様ハ白了ナリ

君シ去鴻章ニシテ世間鋪張ノ要事ナリ

シ彼ハ國ニ

君シ去其身ノ肩傷ニ託シシ使命ヲ半途ニシテ

シル上程ニ

帰國シテ市ノ事國ノ後点政本右國ニ宣言シ

具

再々彼等ノ干渉ヲ要求スルハ由々敷大

容吸シ来ルベキハ強ト一疑ヲ容レス而シテ日新ル場合ナリ一回歐洲強國

事ニ至ルハヤモ計リ難ク尤モ畢竟此ハ理ナリ

居仲周旋スルニ至レハ我カ清國ニ對スル要求ハ更ニ大ニ譲歩セザルヲ得ナル

合ニ至ケルベク最モ單純ナル理論ニテハ

平等言ハ今曲ニ犯罪ハ至リ允漢所為ニ基キ

国全体

戦争

ニ非カルガ

該

政府ハ勿論我人民ニ對シ關係スル事事故ニ以テ罪

人ニ對シ相當ノ罰責ヲ加ヘバ彼等亦對シ政府

国民ハ

引キ受クル

罰責モ責任ヲ負フ及ハストノ義諦スルベシモ現ニ

此ニ我國人ノキヨリタル事柄ニシテ

矢戟中特ニ勝者ス我國内部ニ起リ又ス斯ノ如キ

ニ對シ相

抑々ニ於テ敵國ニ使セテ適當ノ待遇ト保護トシ

集スルト人自ラ國際ニ生シ成例集テ有リ此點

ナレバ

ナル所ナリ

弓云ハ我政府モ亦我多ノ遺憾ナキ能ハスベシヤ

ト

文

目

位置名記主ニ論ナク特ニ彼ノ

李鴻章ノ年齡トモト不地使田名望トモ他

外國ノ同情ヲ沸カシ煩易ニ言ハス

ノ如キ時金ニハ兎角、情感ガ鋭端ニ打勝ツイ場

合カ故ニ各強國ガ以事ニ美ス注目甚ク疑懼

干堪ナリ況ヤ若シ或ハ強國中干渉ヲ求メ

待テん者アリトスレバ強國ヲ求メテ請求スルハ

彼等ニ對シ煩ハ通好ノ口實ヲ供スル者ニナラ

因テ余ハ伊藤全權共此事ニ對シ癡ヲ譯シ我人上云フ

仔細ニ協  
ヲ悉シタル

理端牛勝敗、自ら他日一定ス（キコトミナシ）日

理端牛勝敗、自ら他日一定ス（キコトミナシ）日

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

初、今、完全無敵、勝つ能ハサレシ也、我政府責

ラト或ハ難カラム<sup>ラト</sup>アトラ<sup>ラ</sup>恐<sup>ラ</sup>  
ムハ<sup>ラ</sup>主<sup>ラ</sup>事<sup>ラ</sup>人<sup>ラ</sup>ベ<sup>ラ</sup>キ<sup>ラ</sup>州<sup>ラ</sup>領<sup>ラ</sup>主<sup>ラ</sup>鴻<sup>ラ</sup>章<sup>ラ</sup>ヨリ<sup>ラ</sup>錦<sup>ラ</sup>旗<sup>ラ</sup>衛<sup>ラ</sup>門<sup>ラ</sup>へ

ノ<sup>ラ</sup>波<sup>ラ</sup>雲<sup>ラ</sup>我<sup>ラ</sup>天<sup>ラ</sup>皇<sup>ラ</sup>陛<sup>ラ</sup>下<sup>ラ</sup>ノ<sup>ラ</sup>詔<sup>ラ</sup>勅<sup>ラ</sup>皆<sup>ラ</sup>及<sup>ラ</sup>國<sup>ラ</sup>民<sup>ラ</sup>一<sup>ラ</sup>般<sup>ラ</sup>ノ

待<sup>ラ</sup>遇<sup>ラ</sup>等<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>洋<sup>ラ</sup>記<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>ス<sup>ラ</sup>後<sup>ラ</sup>是<sup>ラ</sup>ハ<sup>ラ</sup>倭<sup>ラ</sup>延<sup>ラ</sup>及<sup>ラ</sup>倭<sup>ラ</sup>人<sup>ラ</sup>不<sup>ラ</sup>唯<sup>ラ</sup>

未<sup>ラ</sup>而<sup>ラ</sup>禮<sup>ラ</sup>武<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>登<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>各<sup>ラ</sup>國<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>對<sup>ラ</sup>ス<sup>ラ</sup>ハ<sup>ラ</sup>外<sup>ラ</sup>觀<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>飾<sup>ラ</sup>ハ<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>也<sup>ラ</sup>

ト<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>意<sup>ラ</sup>味<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>言<sup>ラ</sup>ヒ<sup>ラ</sup>匿<sup>ラ</sup>リ<sup>ラ</sup>キ<sup>ラ</sup>爾<sup>ラ</sup>也<sup>ラ</sup>故<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>今<sup>ラ</sup>時<sup>ラ</sup>程<sup>ラ</sup>

ハ<sup>ラ</sup>實<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>我<sup>ラ</sup>カ<sup>ラ</sup>諸<sup>ラ</sup>求<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>而<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>我<sup>ラ</sup>カ<sup>ラ</sup>拒<sup>ラ</sup>絶<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>ス<sup>ラ</sup>所<sup>ラ</sup>休<sup>ラ</sup>

戰<sup>ラ</sup>争<sup>ラ</sup>約<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>許<sup>ラ</sup>ス<sup>ラ</sup>ハ<sup>ラ</sup>事<sup>ラ</sup>ノ<sup>ラ</sup>實<sup>ラ</sup>際<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>於<sup>ラ</sup>テ<sup>ラ</sup>我<sup>ラ</sup>カ<sup>ラ</sup>決<sup>ラ</sup>意<sup>ラ</sup>

ヲ<sup>ラ</sup>清<sup>ラ</sup>國<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>他<sup>ラ</sup>ノ<sup>ラ</sup>外<sup>ラ</sup>國<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>表<sup>ラ</sup>ス<sup>ラ</sup>ハ<sup>ラ</sup>不<sup>ラ</sup>可<sup>ラ</sup>也<sup>ラ</sup>書<sup>ラ</sup>據<sup>ラ</sup>事<sup>ラ</sup>カ<sup>ラ</sup>

明<sup>ラ</sup>ニ<sup>ラ</sup>彼<sup>ラ</sup>ヲ<sup>ラ</sup>シ<sup>ラ</sup>テ<sup>ラ</sup>最<sup>ラ</sup>早<sup>ラ</sup>何<sup>ラ</sup>等<sup>ラ</sup>ノ<sup>ラ</sup>口<sup>ラ</sup>實<sup>ラ</sup>

ヲ有スル能ハサラシムベク直ニ戰略上ヨリモマシモ必スシモ本ニ戰機ヲ熟シキトモ

我國整軍案ノ不行由テヲ重傷ヲ負ヒ遺憾

トナレリモ未

馬トシテ謹和ヲ申渡スル能ハサル際ニ乘シテ我

ハ自然ハ東結トヲ妨クルニ至リタルニ其機

軍ハ勝手ニ清國部内ヲ蹂躪シ居ル稍徳義

上トナリ缺欠所觀ナキ能ハズ定モ角ニハ際彼

因テ今茲ニ

スルトハ時ニ

等カ膏テ請求シタル休戦条件ヲ実行シ在休戦

如何ニシテ彼ノ傳

中々ナリシテ瘡ホ美食カ多クシタルト同ハシ諸

歸國ノ念ナキアリトスレバヲハ絶シメ速ニ

和条約ヲ締結スルノ案ヲ執ルモ然レリノ意ヲ述ベ

談判ヲ繼續得タルベシト

ケレトモ

トハ行ハシ全權ヲ具スル者ヲ選出スルニ因テ是存ナシ唯

始メテ全權ヲ選出スル

ト

ハ

割注

廣島ヲ持テ軍衛ノ意見アリ下キヤ宋大用

直ニ 渡シ

我々信ヲ得テ在廣島岡貞及大平ニ至リ車職ニ

シタリ

快議スルモ即席蒙文ヲ草シテ事敷シテ然

未シ

ハニ雲文ノ意味十分ニ貫徹セザリシカ又ハ他ニ何カ

原因アリ

知ラサレトモ

イ集議ヤリシカ在廣島岡僚及大平ニ至リ車職ニ

ノ意見ハ

多数事見<sup>ル</sup>岡僚ニ松方大藏大長西郷海軍大

重職

榎本農商務大長大平ニ至リ<sup>ル</sup>桂山軍令部長川

上冬謀次長ニ連名ナリシ<sup>ル</sup>事ノ意見ニ至リ何カ

訓述

目今<sup>目</sup>休戦ヲ行ス<sup>実スル</sup>大ニ我々不利<sup>ラシテ更ニ</sup>な故<sup>ナリ</sup>至<sup>至</sup>休

再考ヲ要ス<sup>要</sup>トノ旨<sup>旨</sup>又<sup>又</sup>より山縣陸軍大將<sup>ノ面電ニ接</sup>令ハ全

然<sup>然</sup>吾<sup>吾</sup>休<sup>休</sup>ノ意<sup>意</sup>是<sup>是</sup>ニ同<sup>同</sup>キ旨<sup>旨</sup>ノ面電<sup>面電</sup>アリ<sup>アリ</sup>事<sup>事</sup>ハ

固<sup>固</sup>リ文武<sup>文武</sup>兩班<sup>ノ議</sup>一致<sup>一致</sup>ニ決<sup>決</sup>セバ之<sup>之</sup>ヲ実行<sup>ニ難シ</sup>ス<sup>ス</sup>能<sup>能</sup>ハ

去<sup>去</sup>リナカラ<sup>スベカラ</sup>當時<sup>當時</sup>ニ決<sup>決</sup>ス<sup>ス</sup>事<sup>事</sup>体<sup>体</sup>ハ何<sup>何</sup>カ<sup>ニモ</sup>由<sup>由</sup>ニ<sup>見</sup>テ<sup>テ</sup>看<sup>看</sup>ス<sup>ス</sup>未<sup>未</sup>

能<sup>能</sup>ス<sup>ス</sup>而<sup>而</sup>シテ吾<sup>吾</sup>休<sup>休</sup>ノ考<sup>考</sup>是<sup>是</sup>ノ由<sup>由</sup>也<sup>也</sup>近<sup>近</sup>日<sup>日</sup>ハ松<sup>松</sup>尾<sup>尾</sup>長<sup>長</sup>

官<sup>官</sup>殿<sup>殿</sup>下<sup>下</sup>カ<sup>カ</sup>食<sup>食</sup>州<sup>州</sup>ニ<sup>ニ</sup>出<sup>出</sup>セ<sup>セ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>其<sup>其</sup>實<sup>實</sup>我<sup>我</sup>々<sup>々</sup>本<sup>本</sup>マ<sup>マ</sup>事<sup>事</sup>

期<sup>期</sup>尚<sup>尚</sup>ホ<sup>ホ</sup>數<sup>數</sup>日<sup>日</sup>後<sup>後</sup>ニ<sup>ニ</sup>在<sup>在</sup>故<sup>故</sup>ニ<sup>ニ</sup>令<sup>令</sup>テ<sup>テ</sup>休<sup>休</sup>ス<sup>ス</sup>事<sup>事</sup>ハ

三三

ト

文ク  
ハヨ

夕 希

國同ノ休戦ヲ約スル基ヲ軍様ニ奏上セヨ

ベシトモヒタレトモ斯ルハ

可題ハ到底

思ハレタリナラニ其ノ一ノミニ議定ヲ電信

ヲシテ其ノ能ハス異ノ其ノ他緊要ノ事件アリテ存存特ニ

ヲ決テ往復スルハ到底其ノ意ヲ達スルカ

聖裁ヲ仰カサル

往キ自

今付伊藤侯爵公島才自若カラ釐易ニ帰リ

南ノ敵艦ヲ何ニ弄ルト同時ニ國傳及軍衛ノ

重職トモ快議シ直ニ奏作ヲ以テ第ニ報告ナリ

其止何方ノ慶賀ヲ施スベシト約シ行儀總理

〇翌

夜

下

同月廿五日午後一時ヲ以テ國同ヲ告シ釐易ノ址

月  
電信ハ  
三十七日午後  
接し大體ハ  
大

中ノナリキ伊藤總理ハ薩島ノ看候文武重  
ヲ會合シ共ニ

臣ト休戦ノ得失ヲ論議スルニ許多ノ辛苦許多ノ

周旋ヲ費シ後々斷事ヲ在薩島ハ文武重臣モ

伊藤總理ノ所望ト同意シヨリテ聖裁ヲ經ルニ上

余ニ電照見ニ  
四月廿七日ヲステ伊藤全權ハ休戦條件ノ許可

セラルタル旨及ヒ其ハ以テシタリ是レ恰モ四月廿七日ノ夜半ナリシ  
至キ條件大要ヲ余ニ電報セシ直ニ本報者ハ人流

判ヲ開始セムコトヲ請フ由テ余ハ右電文ノ趣意

ヲ以テ之ヲ余約ニ成案ニ編纂スル由ヲ見テ日ノ次

ト

自ラ李鴻章ノ病體ニ就キ先ツ在魯書ヲ提ス

森

我が

李鴻章ガ部ヲ承張スルカヲ使シ木田奉國皇帝

降ル本月三日ノ多事ノ海石セシメテ宸襟ヲ固

或ハ

七給ヒ前キニ允諾セサリシ所無条件ニ休致シ云ニ其

間ノ際

引

意ニ

限年或ハ区域ノ内ニ於テ承諾スルキコトヲ其ノ全權

因テ余ノ

余理本意ニ命セシメ本在魯同僚全權乗機生員

目ノ不在中ナ

相談ハ

藤伯爵ニ現下ノ事存心ニ通体我修以テ

清国使臣

何ニ依リ何時

結スル事本在魯何時ニテ又閣下御知今次第存

且ツ此口述ノ次第ヲ一ノ覽書ニ作リテ附交シ

テ開クベシト云ヒ

開ク細目ヲ審査快筆スルモ後事ニシテ

譯文ニ

ヤト頗ル注シ

余等作主鴻章が面会スル付懸念云々

之ニ對シ

如何シ

即ヤ

何トモバ彼ヲシテ果シテ吾侪が推料スル如キ事

中臣

シ更ニ外國ノ強權ヲ云ハム

或

中臣シテ帰國スルハ必ズ今

カ内

件我多約シ訂結スルヲ才情セサハト果

ヲ最急要務トモ思フセサルベシハ自ラ

加故ニ彼ノ面ヲ待テリハ復傷者ニ命エズ

負傷中其諸氣ヲ洩ラスベト思ハレハナリ

半面端帶シテ素直裏ニ僅カニ残シハ一服

カシテ

二十分ノ歡喜ノ意ヲ呈シ我皇帝陛下仁恤聖

ト 及び 目

恩ヲ感謝シ御直ニ金ヲ對シテ御微費傷費ノ為メ

惟願会好ニ赴ク能ハス故願式彼ノ病并ニレモ此テ

ハ行時モ病ケナシト答ヘタリ

件我全信ヲ詰判セムコトヲ要メタリ困キ事節月休

我全信ヲ詰判セムコトヲ要メタリ困キ事節月休

附録第 一  
ウを看ミシ

就キ詰判ヲ開始セリ休我全信ヲ要ス其序文ニ

於テ大日本皇帝陛下ハ会面不慮ノ多事ノ為メ講和

詰判ノ進行ヲ妨碍セシヲ以テ茲ニ一時休我ヲ為シ

年々金シ

スヘキコトヲ其全權弁理大臣ニ命ヤラセタリト事始マ

重要

聲明

中二

云々休戦ハ全ク我皇土ノ任意ニ許可シ賜ヘルノ実ヲ未ダ知シ其條款ハ

日本政府ハ臺灣澎湖列島及其附近ニ於テ

交戦ニ従事スル所ノ遠征軍ヲ降参他我地ニ於

テ休戦スルコトヲ承諾ス日清兩國政府ハ本定約

存スル間ハ攻守ノ孰レヲ問ハズ其對陣ノ方面ニ於テ

集撃ヲ加ヘ援兵ヲ派シ其他一切對戦力ヲ増強セ

ルヘキコトヲ約ス然トモ現我地ニ於テ對戦ニ従事

スル軍隊ヲ増加スルノ目的ハ此レハ兩國政府ハ專

新ニ兵員ヲ配置運送スル妨ケヲ生

外務省

海上に於て兵員軍需其他戰時禁制品ノ

運送ハ戰時常規ニ依リテ規程シ而シテ此種戰

争ハ本條約調印後二十日同ラ限リテ規程シ

其ノ重要ノ度補フ之ハ次ノ數多ク規程シ

至頭章ハ本條約第三四條ニ對シテ申出ル彼

我兩利ノ未其聽キ得ル之ヲ聽キタリ又子ノ

見テ九月日伊藤總理モ亦下ノ國ニ歸着シ

先ニ因リ余方諸國使臣ト談判決スノ成案ヲ

遂に

元禄二年三月二十日ヲ以テ<sup>兩國</sup>金持大

<sup>ハ式ニ依リ</sup>

常主、<sup>ニシテ</sup>名調印<sup>ニシテ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>ト</sup>ナリ故ニ<sup>ハ</sup>休<sup>モ</sup>我<sup>ハ</sup>ハ

月二十日<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>正年迄有<sup>レ</sup>効<sup>ノ</sup>者トナレリ

下ノ開談判(下)

講和條約

休戰條約訂結ノ後李鴻章ハ荐ニ講和談判ニ取

ト懸シムコトヲ促シタリ累ニ余カ彼ト休戰條約談判ヤ

シ時ニモ彼ハ頻々方今病中自ラ公會ニ出席ス

ル能ハサレトモ若シ其旅館ニ就キ會商スルコ

トヲ得ハ病中ト虽此之ニ參會スヘク又タ旅館

ニ於テ會商スルコトニ故障アリトスレハ先

本篇は、その電文を、他、  
漢文といふ、切ルコトヲ  
依拠ス  
中田

シ時ニモ彼ハ頻々方今病中自ラ公會ニ出席ス  
ル能ハサレトモ若シ其旅館ニ就キ會商スルコ  
トヲ得ハ病中ト虽此之ニ參會スヘク又ハ旅館  
ニ於テ會商スルコトニ故障アリトスレハ先ツ

講和談判ニ取  
ル戰條約談判ヤ



講和條約案ヲ一閱シテ彼此書面ヲ以テ議定ス  
ルヲ得ヘク兩様孰ニテモ速ニ談判ヲ開始セカ  
ムコトヲ請ヘリ然ルニ講和條約案議定ノ順  
序方法ニ就キ余ハ曩ニ李經方ト打合セ置カム  
トシタル日<sup>ニ其</sup>ニ於テ恰モ李ノ遭難ニ會シ其事中  
止<sup>シ</sup>案トナリ居タリ此順序方法トハ該條約案  
全体ヲ一時ニ提出シテ可否スヘキカ又ハ其約  
案毎條各別ニ提出シテ一條毎ニ議定スヘキカ

ノ二方ニシテ斯ル會商ニハ大抵其方法豫定<sup>置シ</sup>不<sup>シ</sup>

ベキハ勿論ナ<sup>ル</sup>上ニ清國外交家ニ對シテ特ニ

其必要ナ<sup>ル</sup>ヲ覺ユ何トナレハ彼等ハ往々事實

問題ニ進入セス漠然<sup>々</sup>ニ泛論ヲ提起シテ日時

ヲ遷延スルノ癖アリハナリ故ニ四月一日余ハ

李經方ヲ招キ右ノ二個方<sup>法中</sup>何<sup>レ</sup>ニ由ルヘキカラ

相談シ余ハ寧<sup>ニ</sup>第<sup>二</sup>方即チ每條議定ノ方法ノ

簡便ナルヲ説キタレトモ彼ハ切ニ第<sup>一</sup>方即チ

條約全体ヲ一時ニ提出シテ之ヲ議定セムコト

ヲ懇請シテ已マス因テ余ハ約案提出ノ順序方

法ハ何レニテモ妨ケスト雖氏若シ右<sup>此</sup>第一方

ニ由ルトセハ清國使臣ハ約案全体ニ就キ一切

承允スルトモ又ハ其中或ハ條款ニ就キ更ニ商

酌ヲ要ムルトモ之ニ對シ漠然<sup>之</sup>論スルコトナ

ク逐次條款ニ從ヒ確答アラムコトヲ望ム<sup>自ツ</sup>我ヨ

リ講和條約ヲ提出シタル上ハ其當日ヨリ算シ

テ三日若クハ四日ノ限内ニ回答アルヲ要スト  
去ヒ李經方ハ一應歸館ノ上何分ノ返答スヘシ  
ト約シ歸去シタル後李鴻章ヨリ余カ提議ニ從  
ヒ疾シカメテ四日限内ニ回答スヘキ旨ノ通牒  
アリ是ニ由テ我カ講和條約案ハ即日之ヲ清國  
使臣ニ送達セリ該案ノ要概ハ

一清國ニ於テ朝鮮ノ完全無缺ナハ獨立國々  
ルコトラ確認スル事

一清國ハ左記ノ土地ヲ日本國ニ割與スル事

(甲)奉天省南部地但シ鴨綠江口ヨリニ又子ニ至リニ又子ヨリ北方柵樹底

下ニ亘リ同所ヨリ正西ニ遼河ニ達シ該河流ニ沿テ下リ北緯四十一度ノ線ニ達シ

同緯度ニ沿テ東經百二十二度ノ線ニ達シ北緯四十一度東經百二十二度ノ點ヨリ

同經度ニ從テ遼東灣北岸ニ至ル遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省

ニ屬スル諸島嶼

(乙)臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼及澎湖列島

一清國ハ庫平銀三億兩ヲ日本軍費賠償トシテ五十年賦メ以テ支拂スル事

一現清國歐洲各國間存在之諸條約ヲ基礎トシ日清新條約ヲ締結スル右條約締結ニ至迄清國ハ日本國政府及其臣民ニ對シ最惠國待遇ヲ與スキ事  
清國ハ右ノ外更ニ左ノ讓與ヲ為ス事

(一)從來ノ各開市港場ノ外北京、沙市、湘潭、重慶、梧州、蘇州、杭州ノ各市港ヲ日本臣民ノ住居營業等ノ為メ開クヘシ

(二)旅客及貨物運送ノ為メ日本國漁船ノ航路ヲイ  
楊子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶迄(口)楊

子江ヨリ湘江ヲ溯テ湘潭迄(ハ)西江ノ下流廣東ヨリ梧州

迄(三)上海ヨリ吳淞江及運河ニ入リ蘇州杭州迄擴張スヘシ

(三)日本國民ニシテ輸入ノ際原價百分ノ二

ノ抵代稅ヲ納メタル上ハ清國內地ニ於テ

ル一切ノ稅金賦課金取立金ハ免除スヘシ

又タ日本臣民カ清國內ニ於テ購買シタル

工作及天然ノ貨物ニシテ輸出ノ為メナル

コトヲ言明セタル上ハ總テ抵代稅及一切ノ

税金賦課金取立金ヲ免除スヘシ

(四) 日本國民ハ清國內地ニ於テ購買シ又ハ  
其ノ輸入ニ係ル貨物ヲ倉入スル為メ何等  
ノ税金取立金ヲ納メス倉庫ヲ借貸スル權  
利ヲ有スヘシ

(五) 日本國臣民ハ清國ノ諸税及手数料ヲ庫  
平銀ヲ以テ納ムヘシ但日本國本位銀貨ヲ  
以テ之ヲ代納スルコトヲ得ヘシ

六 日本國臣民ハ清國ニ於テ各種ノ製造業ニ従事シ又各種ノ器械類ヲ輸入スルヲ得ヘシ

七 清國ハ黃浦河口ニ在ル吳淞淺瀬ヲ取除クコトニ着手スハコトヲ約ス

一 清國ハ講和條約ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ日本軍隊カ奉天府及威海衛ヲ一時占領スルコトヲ承諾スヘク且ツ右駐在軍隊ノ費用ヲ支拂フ事

此ハ外重要ノ度前各項ニ  
讓ルモノハ之ヲ省略ス

同月五日李鴻章ハ右ノ日本提案ニ對シ長文ノ

覺書ヲ提出セリ茲ニ其概要ヲ挙クシハ先ツ其

緒言ニ於テ日本政府ノ講和條約案ハ詳細ニ查

閲シ其關係至重ナル條項ハ特ニ力ヲ竭シ考究

セリト雖モ到底負傷ノ後精神猶モ未々回復セ

ス

ヤルモ本覺書中ノ各辭周密ナラサハ所

アリバ實ニ傷疾未々愈ヘヌカノ心ニ從ハサル

為メナルコトヲ諒察セラレ尚數日ノ後一々詳

吞スルコトヲ得ヘシトノ意味ヲ前提トシテ

冒頭ニ置キ

該條約案ノ要領四大綱ニ別テ各節ヲ駁セリ

論

而シテ其四大綱トハ(第一)朝鮮ノ獨立(第二)割地

(第三)軍費賠償(第四)通商上ノ權利トス彼ハ(第一)

朝鮮ノ獨立ニ就テハ清國ハ既ニ數月前ニ朝鮮

ノ完全無缺獨立國タルコトヲ認ムル旨ヲ言明

セリ因テ今回講和條約中之ヲ記載スルコト異

議ナシト雖氏日本ニ於テモ均ク之ヲ認メムコ

トヲ要ス故ニ日本國提出ノ條文中修改スヘキ

モノアリト云ヒ日清兩國カ朝鮮ニ對スル權利

ノ平等ナラムコトヲ主持シ(第二)割地ニ就テハ

日本提出ノ講和條約案ノ諸言ニ講和條約ヲ締

結シテ以テ兩國及其臣民ヲシテ將來紛議ノ端

ヲ除カヌム云々トアリ然ルニ若シ今回割讓

ヲ要求スル土地ノ若キハ強テ之ヲ割讓セシメ

ハ當ニ爭論ヲ除クコト能ハサルノミナラス後

来必ス紛議續出シ西國人民子々孫々相仇視シ  
 テ底止スル所ナキニ至ルベシ我輩既ニ西國全  
 權大臣タレハ西國臣民ノ為メ深謀遠慮永久和  
 好ヲ維持シ互ニ相援助ス一キ條約ヲ締結シ  
 以テ東洋大局ヲ保持セスムハアル一カラス清  
 日西國ハ比隣ノ邦歴史、文學、工藝、商業、一トシテ  
 相同シカラサルナキニ何ソ必スシテ此ノ如ク  
 讎敵トナルコトヲ為ムヤ抑々數千百年國家歴

代相傳ノ基業タル土地ヲ一朝割棄スル時ハ其

臣民タル者恨ヲ飲ミ冤ヲ含ミ日夜復讐ヲ圖ル

ニ至ルハ必然ノ勢ヒナリ況ヤ奉天省ハ我朝發

祥ノ地ニシテ其南部ヲ以テ日本國ノ所有トシ

海陸軍ノ根據トナルトキハ何時モ直ニ北京ヲ

衝クヲ<sup>得ヘク</sup>清國臣民タルモノニシテ此條約文ヲ觀

レハ必<sup>ス</sup>云ハム日本國ハ我カ祖宗ノ地ヲ取リ海

陸軍ノ根據トシ久遠ノ仇<sup>敵</sup>ヲムト欲スル者タ

リト日本國ハ今回支戰ノ初清國ト干戈ヲ交ハ

ニ至リタルハ朝鮮ノ獨立ヲ謀リ清國ノ土地ヲ

貪<sup>ルニ非</sup>ラスト中外ニ宣言セシニアラスヤ若シ日本

國ニシテ其初志ヲ失ハサラムニハ該條約案芽

二條<sup>條是項ヲ割地</sup>及ヒ之ニ聯帶スル各條ニ酌改

ヲ加ヘ永遠和好ヲ維持シ彼此互ニ援助スルノ

條約ト成シ屹然東方亜細亞ノ為ニ一長城ヲ築

キ歐洲各國ノ狎侮ヲ受ケサハコトトスベシ若

レ計世ニ出テス徒ニ一時ノ兵力ヲ恃ミ任意謀  
求スルニ於テハ清國臣民勢必ス膏膽坐薪復仇  
是レ謀人ニ至ハヘク東方西國同室ニ戈ヲ操リ久  
永怨仇トナリ互ニ相援ケス商以テ外人ノ攘  
奪ヲ来スアルノミト云ヒ到底割地ノ要求ニ對  
シ論駁ヲ試ミ(第三)軍費ニ就テハ今回ノ戦争ハ  
清國先ツ手ヲ下シタルニ非ス又タ清國ハ日本  
ノ土地ヲ侵畧セシコトナシ故ニ論理上ヨリ云

ハハ清國ハ軍費ヲ賠償スヘキモノニ非サルカ  
如シ然レトモ昨年十月中清國ハ本國公使ノ調  
停ニ對シ軍費ハ賠償ヲ承諾セリ是レ全ク和ヲ  
復シ民ヲ安ムセムト欲スルカ爲メナリ孰テハ  
若シ其金額過當ナラサレハ之ヲ承諾スヘレ然  
レトモ元來日本國ノ宣言スル所ニテハ今日ノ  
戰爭ハ其意全ク朝鮮ヲシテ獨立國タラシメム  
トスルニ在リ而シテ清國ハ昨年十二月二十五

日ヲ以テ既ニ朝鮮ノ獨立ノ自主ヲ諾ムヘキ旨ヲ  
宣言セリ左レハ強テ清國ヲシテ軍費ヲ賠償セ  
レメムトスルモ清國カ朝鮮ノ獨立ヲ諾ムヘシ  
ト宣言セシ日迄ニ止メ其以後ニ係ル者ヲ要求  
スルノ理ナカハヘシ加之軍費賠償ノ額ヲ定ム  
ルニハ果シテ清國ノ力能ク勝ヘルヤ否ヲ酌量  
スベシ若シ清國財力眞ニ缺乏ナルトキハ一時  
強テ締約調印スルモ將來之ヲ償還スル能ハサ

ルヘシ而シテ日本ハ必ス其違約ヲ責メ兵端再  
ヒ啟クニ至ラム今回日本國ノ要求軍費賠償金  
額ハ到底清國現今ノ財力ニ於テ賠償シ得（キ  
所ニ非スト云ヒ其内税ヲ増加シ能ハサル理由  
海関税ハ各國條約ニ束縛セラレ急ニ之ヲ變更  
シ能ハサル理由又々今日清國ノ信用大ニ減却  
シテ外債ヲ募集シ能ハサル理由等ヲ列舉シタ  
ル後彼ハ日本ノ或ル新聞ヲ引用シテ日本政府

カ今日迄戦争ノ實費ハ一億五千萬圓ヨリ多シ

サハモノ、如シト云ヒ尙ホ其愚痴ノ甚キハ日本

軍ノ戦利品トシテ収容シタル清國軍艦軍需ヲ

折算シテ賠償金額ヨリ扣除セムト云ヒ賠償金

額ニ利息ヲ加フルノ非理ヲ訶ヘ要スルニ賠償

金ノ減額ヲ懇請スルニ出テス(第四)通商上ノ権

利ニ就テハ本條ハ事情極テ複雑重要ニ涉リ到

底一時ニ適ク考究シ得(キモノニ非ス故ニ略

下ニ述ハ所ハ目下觀察シ及フ所ヲ陳述スルニ  
 止メ追テ猶<sup>キ</sup>酌改シ加フルコトヲ要ス故ニ<sup>ハ</sup>覺  
 書ニ云フ所ハ清國カ既ニ承諾スル意アルモノ  
 ト又々修正ヲ加フルニ非レハ承諾シ能ハサハ  
 モノトノ二者アルコトヲ覺知セムコトヲ望ム  
 トノ前提ヲ置キ新條約ハ清國ニテモ同ク清國  
 ト歐洲各國トノ現行條約ヲ以テ基礎ト爲サム  
 コトヲ願フ但し本條首項中ニ西締盟國ノ一方

ハ互ニ他ノ一方ニ於テ最惠國待遇ヲ受クヘシ

トノ語ヲ挿入スルコトヲ要ス又ハ抵代稅減額

ニ就テハ日本國カ今回巨額ノ軍費賠償ヲ要求

スル上更ニ此減額ヲ為サムコトハ到底清國目

下ノ財力ノ堪ル所ニ非ス清國ノ財源ハ當ニ之

ヲ壅塞セサルノミナラス為メニ之ヲ開發スル

ノ方法ヲ計畫スヘシ且ツ目下日本ハ歐米各國

ト條約ヲ改正シ稅率ヲ增加セラハ、ノ際反テ

清國ヲシテ本來甚々低廉ナル税ヲ<sup>更ニ輕</sup>止減セシ

メムトスルハ甚々理ニ適セサハコト、謂フヘ

シ又外國輸入品ニ對シ一切内地諸税ヲ免除セ

ムトスルコトハ多年在北京各國公使カ要求ス

ル所ニシテ而カモ其目的ヲ達シ得サハ所ナリ

云々凡ソ各國中最モ通商上ノ權利ヲ保有セム

トスルモノハ英國ニ如クハナク又最モ善ク利

ヲ謀ルハ英國商民ニ如クハナシ而シテ英國商

民等<sup>カ</sup>屢其公使ニ勸請シテ釐金税ヲ免除スハ

コトヲ求メタレトモ、今ニ其効ヲ得サハハ不條

理ナルヲ以テナリト云ヒ、英國青書ヲ引用シテ

ル<sup>カ</sup>、<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>マ<sup>ニ</sup>ス、ウ<sup>ニ</sup>エ<sup>ニ</sup>ード<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>ノ説ヲ列舉シテ論

辨シ、第一ニ彼我對等ノ權ヲ維持シ、次ニ專ラ抵

代税減額ノ苦情ヲ鳴ラシ、而シテ<sup>ニ</sup>覺書ノ末文

ニ於テ本大臣ハ尙<sup>ニ</sup>爰ニ一言ノ忠告アリ、貴大臣

ノ諒聽ヲ乞フ、本大臣官ニ在ル殆ト五十年、今自

ラ顧フニ死期最早多年ナシ君國ノ為メ盡ス可  
 モ恐クハ今回ノ講和事件ニテ最終トナラム是  
 ヲ以テ深ク條約ノ妥當善良ニシテ毫モ指摘ス  
 ヘキ所ナキコトヲ期シ西國政府ヲシテ將來永  
 久ニ交誼ヲ鞏固ニシ彼此人民ヲシテ向後相互  
 ニ親睦ナラシメ以テ本大臣無窮ノ願望ニ副ヘ  
 ムトス今ヤ和議將ニ成ラムトシ西國臣民今後  
 數世ノ幸福命運ハ總テ西國全權大臣ノ掌中ニ

在リ就テハ宜ク天理ニ遵循シ近來各國政治家

力深謀遠慮スル所ノ心意ヲ師法トシテ以テ西

國人民ノ利益福澤ヲ保タシメテコソ各自ノ職

分ヲ盡シタルモノト謂フヘシ日本國ハ方今勢

力已ニ強大人才多ク愈々隆盛ニ赴テ已マサハ

モノナレハ今マ賠償金額ノ多寡割地ノ廣狹ノ

如キハ總テ至大ノ關係ヲ有セサルヘシト雖氏

兩國政府及ヒ臣民カ將來永遠輯睦十八ヘキカ

又夕永遠ニ仇視スルカノ點ニ至テハ日本ノ國

計民生ニ關係スハコト甚々大ナハヘシ是レ最

モ深思熟慮ヲ加ヘラレサハヘカラス(中畧)

而シテ東洋ニ大國民ノ向後永遠ニ親睦シ彼州相

安シ福澤綿長ナハコト實ニ卅一舉ニ基ク

ヘシ尚ホ貴大臣ノ熟慮シテ籌畫セラシ

ムコトラ望ムト云ヘリ覺書全文ハ縷々

數千言<sup>ニ直リ</sup>實ニ筆意精到反覆丁寧能ク其言

ハムト欲シタル所ヲ言ヒタルハ亦タ一篇ノ好

文辭タルヲ失ハス但其立論中往々誤謬アルヲ

免レサルノミナラス彼ハ勉メテ事實問題ニ入

ルヲ避ケ專ラ一般東方ハ危機ヲ概言シ日清兩

國ノ形勢ニ論及シ日本ノ國運ヲ賞揚スルト同

時ニ清國內政ノ困難ヲ説キ人ヲ激シ人ヲ悦ハ

スト共ニ人ノ憫ミヲ乞ハムトスルカ如キハ彼

カ現今立脚地ヨリ論出スルニハ誠ニ已ムヲ得

詞

サハノ言語ナルヘシ余ハ此覺書ヲ接收スルヤ

直ニ携テ伊藤全権ノ旅館ニ就キ對坐シ仔細ニ

査閲ヲ加ヘ之ヲ處理スルノ論基如何ヲ協議シ

方畧

タリ伊藤全権ハ始メ之ニ對シ精確ニ論駁ヲ加

ヘ先ツ彼ヲシテ豁然悔悟迷夢一覺セハニ非レ

セシム

ハ彼レ竟ニ方今彼我ノ位置如何ヲ了解スル能

ハス終始哀訴的ノ痴言ヲ繼續シテ談判徒ニ永

引タノ恐レアルノミナラス苟モ我ニシテ彼カ

論據ノ誤謬ヲ摘發セサレハ或ハ局外第三者ヲ

シテ日本ハ力ニ勝チタル天理ニ屈シタルヤノ

疑ヲ起サシメサハニ非スト云ヘリ余ハ伊藤全

權ノ考案其理ナキニ非ルヲ知ルト雖氏當初余

カ李經方ト講和條約議定ノ順序方法ヲ議定ス

ルニ方リ談判論局ヲ事實問題ニ限り我カ提案

全体ヲ諾否スルカ又ハ各條ニ修正スヘシト約

リ是レ

シタルトモホ本覺書ノ如キ一般ノ概論ヲ禁セ

ムト欲シタルニ外ナラス<sup>サリシ</sup>且ツ我ニシテ一國此

泛然タル概論ニ對シ論駁ノ端ヲ啓ケハ彼レ亦

カキ對シ再三反駁スルノ餘地ヲ生シ徒ニ往

復爭駁スハ間我竟ニ狂人西走不狂者亦西走ス

<sup>加之元素</sup>

ルノ噸ニ恸フニ至ルヘク集上人ヲシテ本題ニ

<sup>ルヲ得ス</sup>

立チ入<sup>テ</sup>ル<sup>ル</sup>キ岐路ニ彷徨セシムルハ特ニ清

國外文ノ慣手段ナ<sup>リ</sup>キ故ニ我ハ寧<sup>リ</sup>口前約ヲ追

ヒ我カ提案ノ全体若クハ各條ニ就キ事實問題

ヲ論決スヘシト主張シ我ニ在テハ論争的ノ位

置ヲ占ムヨリハ寧ロ指命的ノ位置ヲ取ルコ

ト得策ナラムト云ヒテ伊藤全權ヲ遂ニ余ノ

意見ヲ首肯シ轉テ翌六日ヲ以テ我ハ一ノ公文

ヲ清國使臣ニ送致シ直ニ事實問題ニ進入セム

コトヲ促シタリ其概要ニ曰ク明治二十八年四

月一日會合ニ於テ日清兩國ノ全權大臣ハ講和

條約案ヲ議定スル順序ニ関シ或ハ約案全体ヲ

承諾し又ハ各條更ニ酌量シテ回答スルコトヲ  
約定セリ然ルニ今回清國全權大臣ヨリ送附セ  
ラレタル覺書ヲ按スルニ始終清國ノ内情ヲ鑑  
陳シ日本全權大臣カ更ニ酌量ヲ加ヘムコトヲ  
求ムハ外日本政府ノ提案ニ對シ何等回答トシ  
テ見ルヘキモノナク亦タ清國カ右ノ提案ニ對  
シ如何ナル酌量ヲ加ヘムト欲スハヤモ確然言  
明セラレス抑々清國ノ内情ハ今講和ヲ議スルニ

當リ茲ニ論究スヘキ限ニアラス且ツ戦争ノ結  
果ニ係ル要求ハ固ヨリ通常或ハ事件ヲ談判ス  
ルト同日ノ論ニアラス是ヲ以テ日本全權大臣  
ハ嘗テ提出セシ講和條約案ニ向テ更ニ清國全  
權大臣カ其全体若クハ毎條ニ對シ議否如何ヲ  
確答セムコトヲ欲ス若シ條款中或ル改正ヲ望  
ム所アレハ一々之ヲ約文ノ体裁ニ具シ提議セ  
ムコトヲ望ムト

李鴻章ハ今ヤ日本ノ提案ニ對シ其全体ニ就キ  
諾否スルカ又ハ各條ニ就キ逐一ニ承諾シ若ク

ハ終ニスルカノ一ニ出テサルヲ得サルノ場合

ニ迫レリ蓋シ彼ハ初ヨリ我カ提案ニ對シ咸ク

体自前ノ意見ヲ明言スルヲ避ケ以テ其責ヲ逃

レムトセリ是ヨリ先キ李ノ負傷ノ為ニ談判進

行上渋滞ヲ致サムコトヲ恐シ彼我内議ノ未清

廷ハ李經方ヲ以テ更ニ欽差全權大臣ニ任命シ

四月六日ヲ以テ其旨ヲ我政府ニ照會セリ因テ

同月八日伊藤全權ハ李鍾方ヲ其旅館ニ招キ講

和ノ條件ニ付テハ既ニ一週日前我リ約案ヲ提

議セシニ清國使臣ハ今尚ホ何事ノ確答ヲ共ニ

サハハ何故ナルヤ本月五日清國全權大臣ノ書

翰ハ吾儕ハ視テ以テ我カ提案ノ答議トスル能

ハサハ所ナリ今ヤ休戰期限僅々十有一日ヲ餘

スノニ徒ニ時日ヲ空費シテ再ニ干戈ヲ交ユル

ニ至ハハ彼我共ニ甚ク好マサル所ニアラスヤ  
故ニ明九日ヲ期シ我提<sup>タ</sup>案ニ對シ諾否ノ確答ヲ

為スベシト詰論シタルニ答ヘテ李経方ハ即今

我等父子ノ位地極メテ困難ナハコトハ幾重ニ

モ高聲ヲ乞フ而カモ日本全權大臣ノ提案中

過半ノ部分ハ之ヲ確答シ得ヘキモノナルヲ以

テ現ニ草シテ爰ニ携帶セリ然レトモ償金及割

地ノ二問題ニ於テハ事煩ハ重大ナ<sup>ナレハ</sup>屬公然書

會見

面ヲ以テ之ニ回答ヲ為スニ先チ面晤會議シテ

更ニ幾多ノ辯論ト説明トヲ悉シ彼州酌量セム

コトヲ望ムト云ヘリ伊藤全權ハ之ニ對シ元來

講和談判ノ順序方法ニ就テハ先日陸奧同僚ヨ

リ堅約シタル如ク清國使臣ハ我提案ノ全体ヲ

諾否スルカ又ハ毎條逐一ニ其意見ヲ云フカノ

ニアラヌヤ

一方ニ依ルヘキ苦トハ今マ我カ提案中特ニ

其一部分ニ確否シ他ノ一部分ニ對シ殊更ニ面

議ニ讓ルト云フ如キ答案ハ之ヲ接收スルヲ得

ス尤モ清國使臣ハ我カ提案ニ對シ如何様ナル

修正<sup>提</sup>起スルモ固ヨリ自由タルヘシ<sup>然</sup>雖氏償

金ノ額ニ就テハ曾テ清國使臣ノ引用セシ<sup>ラ</sup>如キ

單ニ新聞紙上ニ臆想シタル費額迄ニ削減セム

ト云ヒ又々割地ニ就テハ奉天臺灣ノ中其一方

ヲ存置セムト云フカ如キ修正<sup>留</sup>ヤ<sup>留</sup>バ到底

吾儕<sup>吾儕</sup>甲本政府ノ承允スル能ハサル所ナリ償金ハ倣

令極メテ少額ノ輕減ヲ得ントスルモ決シテ多  
額ヲ減削スル能ハス割地ハ是れ奉天臺灣共  
ニ割讓スルヲ要セス是レ他日ノ誤解ヲ避クハ  
カ為メ豫メ茲ニ言明シ置ク所ナリ尚ホ且ツ清國  
使臣ニハ深ク現今兩國ノ<sup>形勢</sup>勢如何ヲ熟慮セム  
コトヲ望ム一事ヤ即チ日本ハ戰勝者ニシテ

リト云フ事是ナリ

清國ハ戰敗者ナリト論ヲ復メス曩ニ清國和  
議ヲ請フニ方リ日本ハ之ヲ承諾シテ今日ニ至

リタルモノナハニ若シ不幸ニシテ今回ノ談判  
破裂スルノ曉ニ於テハ一命ノ下ニ我カ六七十

艘ノ運漕船ハ更ニ増派ノ大軍ヲ搭載シテ舳舻

相銜之直ニ戦地ニ継發スヘキノ準備既ニ整頓

ト是リ果シテ然ラハ北京ノ安危亦タ言フニ

忍ヒサハスノアリ尚ホ酷言スレハ談判破裂シ

全權大

テ清國使臣カ一回此地ヲ退去スル後再ヒ安然

否ヤ

北京城門ヲ出入シ得ルヤ并タ保證スル能ハサ

ル程ナリ是レ豈ニ吾人議定會商ノ日子ヲ遷延  
スル秋ナラムヤ左レハ余清國使臣ニシテ先  
ヅ我カ提案ニ就キ大體諾否ノ確答ヲ為サハ  
以前假令<sup>い</sup>幾回面議スルモ亦タ何等ノ利益ナ  
キコトラ信スルナト斷言セリ李鍾方ハ此嚴  
談ニ接シ彼が主願タル償金ト割地トノ二件ヲ  
面議ニ譲リ以テ其確答ヲ延引セムトシタル方  
便ハ到底實行シ能ハサルヲ察シタルナヘシ

然レトモ彼ハ無論ニ專對ノ權ナシ故ニ云フ今

一應歸テ乃スト協議ノ上兎モ角モ答案ヲ製シ

テ之ヲ提出スヘシ但其答案ニシテ萬一ニ云日

全權大臣

本政府ハ意ニ滿タサハ廉アト本ハ天<sub>ノ</sub>力為

メ日本全權大臣ノ激憤ヲ招キ以テ余<sub>ノ</sub>回<sub>ノ</sub>談判

不調トナリ尤<sub>レ</sub>倭ノ功一簣ニ缺クカ如キ不幸ヲ

生セサル様諸事<sub>海</sub>寛容ノ考察ヲ乞ハサルヲ

得ヌトノ一語ヲ遺シテ去レリ

李經方カ伊藤旅館ヲ去ルニ臨ミ懇請シタル一  
言コソ彼カ頃日來如何ニモシテ日本全權大臣  
ヲ籠絡シ其提案ニ對シ申事多少輕減セシメ先  
シ自己ノ意見ヲ發表スルヲ避ムトシタル苦計  
ヲ到底行ハルヘカラサルヲ視テ兎モ角モ刻下  
談判ノ破裂ヲ豫防スル爲メニ彼ヨリ一ノ答案  
ヲ提出スヘシト決意スルニ至リシヲ一ナレハ  
其答案ノ決シテ我ヲ満足セシメサハキモノヲ

初ヨリ

ルハ彼モ亦々自ラキヲ知レハニ由ハナハレシ  
然レハ李鴻章ハ何故ニ斯ク造ニ自ラ其答案ヲ  
提出スハヲ憚リタルヤト云フニ彼ハ唯其責  
任ヲ逃レムコトヲ是レ努メタルニ外ナラス彼  
ハ數日前既ニ北京政府ト電信往復シ豫メ該政  
府ノ訓令ヲ乞ヒ自己專對ノ責ヲ避ムトシタリ  
然レトモ例ノ北京政府ノ事ナレハ其訓旨ハ諸  
事曖昧ニ附シ甚タ要領ヲ得ス今マ彼ハ内外ニ

對し宛然板狹ミノ姿トナリ覺オトク彼老北自身

京政府ヲ相互ニ其責ヲ譲リ合フノ内ニ彼ハ我

ヨリ荐ニ答案ノ催促ニ遭ヒ最早何ノ所為ヲ此上ノ時迄遲延スレ

ハハ談判ヲ繼續シ能ハサント察シ竟ニ破裂スベシト推時彌縫ハ計便法

トシテ竟同月九日ニ於テ我カ提案ニ對シ一ノ

修正案ヲ提出セリ而シテ其修正ノ重要ナル者

ヲ舉クレハ大略左ノ如シ

一朝鮮國ノ獨立ハ日清兩國ニ於テ之ヲ確認

事

スベシ

一 割地ハ奉天省内ニ於テ安東縣、寬甸縣、鳳凰廳、岫巖州ト南方ニ於テ澎湖列島ニ限ル事

一 償金ハ一億兩トス但無利息ノ事

一 日清通商條約ハ清國ト歐洲諸國トノ條約

ヲ基礎トシテ之ヲ締結スヘク且ツ講和條約

批准交換ノ日ヨリ新通商航海條約締結ノ日

迄ハ清國ニ於テ日本政府及其臣民ハ總テ最

憲國ノ待遇ヲ受クヘク之ト均ク清國政府及  
其ノ臣民モ亦日本ニ於テ最憲國待遇ヲ受ク  
ヘキ事

一 清國ニ於テ講和條約ヲ裁實ニ施行スル擔  
保トシテ日本軍隊ハ一時威海衛ヲ占領スベシキ事

一 將來ニ於テ日清西國間ノ紛議又ハ戰事ヲ

辟クル為メ講和條約其他通商航海條約等ノ

解釋上及ヒ其實施ニ関スル問題上西國ノ間ニ

異議アル時ハ第三友國ニ依頼シ仲裁者ヲ撰  
定シ其裁斷ニ一任スヘシトノ一新修項ヲ加  
スル事

右修正ノ要點ハ彼自ラモ我カ承諾ヲ得ベシト

ハ期望セサリシ所ナルト但彼ハ兎モ角モ一

應ノ答案ヲ提出セサレハ談判破裂ニ至ラムコ  
ヲ繼續シ能ハサ

トヲ恐レ北京ノ訓令ヲ待タス獨斷ヲ以テ之ヲ

提出スルモノナリト故ニ彼ハ此修正案ヲ我

提出ス

ニ送ルト同時ニ總理衙門ニ發電シタル文中ニ

鴻再四籌思時迫事急姑擲鄙見ト云ヒキ該修正

案ノ大畧ヲ記載シタル上尙キ其末文ニ「倘彼猶

不足意始終堅執屆時能否允添乞豫密示否則只

有罷議而歸トアリタル由彼一方ニ我催促ニ

對スルノ責ヲ塞キ他ノ一方ニハ北京政府ニ向

ヒ目下ノ形勢切迫ノ狀ヲ具陳シ一時獨斷ノ權

ヲ措置

宜ヲ施スノ已ムヲ得サリシ次第ヲ告ケ尙ホ將

奉ノ訓示ヲ乞ヒ以テ北京政府ノ決意ヲ促シタ

リ

清國使臣ノ終正案ハ我ニ在テ固ヨリ承諾シ得

ハキモノニ非ラス然レトモ抑我カ當初ノ提案

ハ元來會議ノ基礎トシテ提出シタル者ナリ故

ニ之ニ對シ秋毫モ修正ノ餘地ナキモノト云フヘ

カラス且ツ如何ニ我ハ戰勝者ノ勢力ヲ有スレ

ハトテ我カ原案ニ對シ一切變改ヲ許サズト云フ

ハ啻ニ苛酷ニ失スルノミナラス斯ル會議ニ於

テ異例ノ事ニ屬ス故ニ同十日會合ノ節此日余

ノ為ニ出席彼ノ答案ヲ反駁スルト同時ニ更ニ

我ヨリ再修正案ヲ發シ清國使臣ニ交附シタリ

其概要ハ左ノ如シ

第一、朝鮮ノ獨立ニ関シテハ我々原案第一條  
ノ字句ヲ變改スルヲ許サス

第二、土地ノ割典ニ関シテ臺灣及澎湖列島ハ原案ノ通ニテ奉天省南

部地ニ付テハ鴨綠江ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城、海城  
及營口ニ亘ル折線以南ノ地ニ減スルコト但シ前記ノ各城  
市ヲ包含ス遠東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬  
スル諸島嶼

第三、償金ハ二億兩ニ削減スル事

第四、割地住民ノ件ハ我カ原案ヲ變更スルヲ

容サス

第五、通商條約ノ件ニ関シテハ我カ原案ヲ變

更スルヲ容サス但(一)新開市港ノ數ハ之ヲ減  
シテ沙市重慶蘇州杭州ノ四所ニ限リ(二)日本  
國汽船ノ航路ハ(イ)楊子江上流湖北省宜昌ヨ  
リ四川省重慶ニ至リ(ロ)上海ヨリ吳淞及運河  
ニ入リ蘇州杭州ニ至ルト修正スヘシ  
第六、將來日清兩國間ニ起ルヘキ條約上ノ問  
題ヲ仲裁者ニ一任スル新條項ハ之ヲ加フル  
ノ必要ヲ見ス

是レ我再修正案中ノ要点ナリ伊藤全權ハ再修  
正案ヲ提出スルト同時ニ清國使臣ニ對シ今回  
ノ提案コソ實ニ我カ最後ノ讓歩ナリ清國使臣  
ハ之ニ對シ單ニ諾否ノ決答ヲ與ヘラレムコト  
ヲ望ムト云ヘリ李鴻章ハ亦ノ諾否ノ決答  
ヲ為スノ前ニハ何故ニ彼此辯論スルコトヲ許  
サハルヤト伊藤全權亦是レ我カ最後ノ提案  
ナリ之ニ對シ只管ニ辯論モ到底我儕ノ定見

カラス

ヲ翻<sup>レ</sup>田スベキ<sup>ニ</sup>非<sup>レ</sup>ハ辯論モ亦タ無益ニアラ

云ヒ

スヤト彼我這樣ノ口調ヲ以テ再四問答、後々

彼ハ竟ニ其論端ヲ三段ニ分テ(第一)償金ノ額

尚ホ甚タ過大ニシテ到底清國財力ノ支フル所

ニアラザレハ更ニ削減セムコトヲ望ミ(第二)

奉天省内割地ノ區域ヨリ營口一<sup>ノ</sup>所ヲ削除セ

ムコトヲ乞ヒ其理由トシテ營口ハ清國ノ財府

ノ一ニ係ル今マ日本ハ巨額ノ償金ヲ強求スル

ト同時ニ其財源ヲ奪フ<sup>ハ</sup>恒モ孩兒ヲ養ハムトシ

テ其乳哺ヲ奪フニ均キニ非スヤト云ヒ(第三)臺

灣ハ未タ日本軍ノ侵略ヲ經サル所<sup>ナリ</sup>係ル然ル

キ日本尚ホ之ヲ割取セムトスルハ頗ル非理ナ

リ故ニ臺灣ハ割地スベカラスト云フニアリ伊

藤全權ハ之ニ對シ逐一ニ辯駁ヲ加ヘ其償金ノ

額ニ就テハ我既ニ減シ得ベキ低度迄之ヲ輕減

シタルモノナレハ此上一毫モ減削スヘカラス

況ヤ若シ談判一敗<sup>シテ</sup>再ヒ交戦スルニ至レハ其結

果ハ更ニ鉅額<sup>又</sup>の價金ヲ要求セザルヲ得サルニ

至ルベキオヤ其ノ營口存留ノ件<sup>議</sup>ニ付テハ奉天

省ノ割地ハ深ク清國ノ内情ヲ察シ我カ最初ノ

原案ニ比スレハ既ニ大ニ<sup>縮</sup>減削シタルモノナレ

ハ此上讓歩<sup>更ニ退</sup>得ル所ナ<sup>スヘキ</sup>且ツ同地ヲ以テ清國

財府ノ一トシ孩児乳哺云々ノ比喻ニ對シオハ

清國固ヨリ孩児ニ比スヘカラストノ一冷語ヲ

シテ之ヲ推キ

下ヤル  
其臺灣事、對シテハ割地ノ索求

ハ必シモ戰取地方ニ限ルベキニ才多ス唯タ戰

勝者ノ便宜如何ヲ顧ルノニ例セハ山東省ノ如

キハ我既ニ一回之ヲ略取シタル土地ナレトモ

今回ノ割地部内ニ包有セサルニアラスヤ且ツ

清國ハ先年吉林、黑龍江地方ヲ露國ニ割賦シ

タリ是レ豈ニ露國戰取ノ地方ナラムヤ果シテ

然レハ今回我ハ臺灣、金嶼割地ノ要求ヲ為

付ソマヤ  
末モ亦タ怪々ニ足ヲサルヘシト論詰シタル後

休戦ノ期僅々十日ニ迫リ最早何時迄モ談判ヲ

遅慢スルヲ秋ニアラス因テ三日内我カ提案ニ

對シ確然諾否ノ決答ヲ望ムト切言トナリ李鴻

章ハ事苟モ彼我一致セザレバ尚ホ須ク會商シ

テ女當ノ成局ヲ望ムトナルヲ得ノ且ツ  
如是ノ重事ハ

固ヨリ北京ニ電稟シ上ヒ日ヲ請フノ後ニアラザ

レハ之ヲ決行シ能ハサル事ナレバ姑ク時日ヲ

限ルコトヲ猶豫セムコトヲ請フト云フニ對シ

ヤカラ

伊藤全權ハ然レハ北京ハ回答次第直ニ決答ア

ルベシ乍併北京ノ回電ヲ待ツモ四日ヲ以テ其

サルヲ得ス

期限トセムコトヲ望ムト述ヘ此日ノ會合終ヘ

見

タレトモ彼ハ尚ホ十分ニ我決意ヲ領會シ得

サルヤモ計リ難シ故ニ翌十一日伊藤全權ハ一

ノ半公信ヲ以テ昨日提出シタル再修正講和條

件ノ要領ヲ重論シ且ツ該提案ハ嘗テ清國使臣

ノ縷陳セシ次第ヲ十分ニ酌量シ割地償金其他

ノ條件ニ付我カ讓歩シ得ル限り輕減シタルモ

ノニシテ必竟談判ヲ調和セム  
ノ意ヲ出

ニ外ナラサル旨ヲ述ヘ其末文ニ於テ戰

爭ナルモノハ其戰鬪上ノ措施ニ於テモ亦タ其

因テ生スル所ノ結果ニ於テモ進ムコトアリテ

止マルコトナキモノナレハ今マ日本國カ幸ニ

承諾スルコトヲ得ヘキ所ノ講和條件ハ後日ニ

至テモ承諾セラルベキ者ト御思惟不相成様致

度ト附言シ以テ彼ヲシテ今日一所決セサレバ後

悔スベキコト悟<sup>ラ</sup>シメントシタリ<sup>リ然</sup>ニ李鴻章ハ

尚ホ之ニ對シ我カ要求ノ苛酷ニシテ不當ナリ

トノ意ヲ述ヘ論駁シ來レリ其概要<sup>キ</sup>ハ講和條件

ニ付テハ是迄十分ニ口頭ノ辯論ヲ許サレス直

ニ最終ノ提議ニ接シタル故ニ清國政府ノ所見

ヲ開示スヘキ機會ヲ得サリシト云フニ始コリ

償金ノ減額ヲ今一層輕減セムコトヲ望ミ割地

區域ハ

ノ要求モ幾分カ削減セラレタリト雖氏

尚ホ

其割地ノ經界ハ殆ト今日本軍カ現ニ占領ス

其上

ル全部ニ亘リ尚ホ日本軍カ未タ嘗テ足跡ノ及

ハサル土地(臺灣)迄ヲモ割讓セムコトヲ要求

切ナリ

セラル、ハ談判ノ困難ヲ調和スルノ意キ出ヲ

詰リ

トハ了解シ難シト本モ其他通商上ノ條件

等ニ論及シ縷々苦情ヲ鳴ラシナカラ今一應會

見シテ彼我ノ意見ヲ戰ハスベシトノ勇氣モナ  
ク其末文ニ於テ「以上陳述スル所ハ本大臣ヨリ  
敢テ重子テ商議ヲ盡サムコトヲ求メタル次第  
ニ無之講和條件ヲ商議スル為メ本大臣へ與へ  
ラレタル唯一面ノ會見ニ於テ最終ノ提議ヲ御  
提出相成タルニ當リ本大臣ヨリ申述タル所ヲ  
更ニ覆陳致度カ為メニシテ茲ニ開陳スル所ノ  
不同意ノ點ニ付閣下ノ御熟考ヲ求メ度ト存

候而シテ閣下カ本大臣ニ約セラレタル次回ノ  
會見ニ於テ之ニ對シ閣下ノ意見~~カ~~在ル所ヲ御  
開示相成度其ノ節本大臣ハ我皇帝陛下ヨリノ

勅許ヲ得テ以テ最終ノ提議ニ對スル確答ヲ為

スコトヲ得ヘシト存候ト云ヘリ是レ彼ニ在テ

ハ別新條奇說<sup>別案ヲ有スル</sup>ニアラズ唯々去ル十日ハ會見

ニ<sup>先チ</sup>吸々セシ<sup>コ</sup>所ヲ重覆シテ我<sup>ヲ以テ</sup>我カ要求ヲ一

層輕減セシメムト<sup>欲スルニ</sup>外ナラス之ニ對シ

見

テ徒ニ會商辯論ヲ費スモ亦タ何等ノ妥局ヲ望

得

ヘカラス

ト下キキヤサル故ニ伊藤全權ハ再ヒ半公信

ヲ發シテ断然彼ノ謬見ヲ排斥シタリ其概要ニ

云フ御來翰中一面ニハ重子テ商議ヲ盡スコト

ヲ意ナキ旨ヲ陳述セラレナカラ他ノ一面ニハ

我カ最終要求條件ヲ對シ及ヒ從來ノ談判上ノ

對シ

ノ手續ニ就キ批評ヲ加ヘラレ更ニ日本政府ノ

再考ヲ加フル様希望セラル、所ヲ見レハ或ハ

全權大

清國使臣ニハ全ク日本政府ノ意向ヲ誤解シ居

ラル、ニ非スヤトノ恐レアリ因テ貴翰ニ對ス

ル唯一ノ回答ハ本月十日會見ノ時ニ提出シタ

政府

ル日本ハ要求條件ハ最終的ノ要求ニシテ最早

何時迄モ討議ヲ許スベキモノニアラスト云フ

日本

既ニ

ノ外ナキ旨ヲ以テ下リ元來李鴻章モ十日會

見ノ時ヨリ我カ最後ノ回答ハ斯クアルベシト

ハ豫期セシコトナルベシ彼カ四月十一日總理

衙門ニ電報ヲ發シ「伊昨面談語已決絶、今又来

アルチメートム

此函似是哀的義、更應如何應付之處、伏候速

示遵辦、トアリキリト聞、又々總理衙門ハ李

ノ電票ニ回電シタル文中ニ「伊藤近日詞氣極

迫、僞事至、無可再商、應由該大臣李鴻章一面電

聞、一面即與定約、該大臣接奉此旨、更可放心爭論

無虞、決裂裂矣、トアリキリト聞、西電ヲ參較ス

レハ李ハ最早日本ノ決意ノ揺スヘカラザルヲ

悟リ北京政府ニ最後ノ訓令ヲ乞ヒ北京政府ハ  
今ハ已ムヲ得ス李鴻章ニ便宜調印ノ權  
ヲ許可シ且ツ便宜調印ノ權ヲ有スル上ハ諸  
事安心シテ爭論抗議スルモ談判破裂ニ至ルノ  
虞ナカルベシト注意シタルモノ、如シ其後談  
判ノ進行スルニ從ヒ彼ハ竟ニ我カ要求ヲ拒絕  
スル能ハサルヲ悟リ同月十四日彼ハ更ニ總理  
衙門ニ電報シテ「明日四點鐘面會定議」過期

即作罷論事關重大若照允則京師可保否則

不堪設想不敢不候電復即行定約電諭想已在

途明日午當到鴻不至失信庶無決裂トアリキ

由是レ彼力最後ノ決心ヲ確定シタル時ナル

ベシ而シテ總理衙門ハ此電稟ニ對シ「所諭各

節<sub>是レハ去ル十二日ニ總理衙門ヨリ李ニ電訓</sub>

節<sub>指トスナハルベシ各原冀爭得一分有一分之益如</sub>

竟無可商改仍遵前旨其定約欽此トアリキ

由今ヤ彼ハ最後ノ訓令ヲ領シ如何ナル條約

ヲモ訂結シ得ベキ全權ヲ有シタリ然レモ彼ハ

固ヨリ吾儕ニ對シ之ヲ露顯セシムル如キ愚者

ニアラス輒チ十五日ハ會見ニ於テ此日為余欠

席セ彼尚ホ我カ要求ニ對シ幾多ノ輕減ヲ爭ヘ

リ然レトモ到底彼我共ニ連日繼續ハ議論ヲ再

四反覆スル外國ヨリ別ニ新異ナル論端ヲ生ス

ベキ筈ナレ故ニ會見ノ時間頗ル長ク點燈ノ

其散會

ニ及ヒシ

比漸々散會スルヲ得ルモ其結果ハ彼ハ殆ト全

然我カ要求ヲ肯諾スルニ至レルノミ蓋シ李鴻

章力下ノ関ニ来航以後此日ノ會見程ニ彼カ刻

苦周旋<sup>辯論</sup>セシコトナカリシ彼ハ<sup>カ大伴</sup>我決意ノ本意

最早

最早撼動スベカラザルヲ<sup>知</sup>故<sup>悟リタル</sup>カ本日ノ談

判ニハ一向ニ其節目ニ亘リ<sup>シテ已マカリシ</sup>些少ノ利益キモ

争求セ<sup>シテ已マカリシ</sup>例セハ始メ償金二億兩内

五千萬兩ヲ削減セムト請ヒタレドモ其目的ノ

見テ

達シ得ベカラサルヲ知、更ニ二十萬兩ヲ減

セムト乞ヒ遂ニ伊藤全權ニ向ヒ此些少ノ減額

ハ吾人帰途ノ餞別トシテ贈與セラレタシト哀

告スルニ至レリ是等ノ舉動ハ彼ノ位置ヨリ云

ヘハ稍々体面ヲ汚スノ嫌ナキニ非レドモ所謂

「争得一分有一分之益」トノ趣意ニ出<sub>テタル</sub>モナラム

兎モ角モ彼ハ古稀以上ノ老齡ヲ以テ異域千里

見

ニ使命ヲ奉シ連日ノ會商<sub>見</sub>毫モ疲困ノ体ナキハ

尚ホ是レ據鞍顧盼ノ

概勢アリト云フ

十五日ハ會見ニ於テ彼我商議ノ末既ニ我カ講

和條約ニ調印スベキ事ハ豫定シタリ因テ十七

日ニ於ケル日清兩國全權大臣ハ會見ハ

此日余モ疾ヲ

力メテ出儀式的ニ之ヲ実行スルヲ以テ足レリ

抑モ李鴻章カ三月十九日下ノ関ニ着後談判數

回ヲ重子某門彼我共ニ魚量ハ苦心ヲ悉シ申折

上種

事轉外交的困難ヲ逐々排除シ竟ニ茲ニ講

ニ調印 了リ因テ以テ

民

和條約ヲ訂結シ我カ國光ヲ發揚シ我カ國福

ヲ増進シ再ヒ東洋天地ニ泰平ノ盛運ヲ開キタ

ルハ一ニ皆ナ我カ皇上ノ威德ニ由ラスムバア

ラス然<sup>而</sup>シテ今テマ當初我政府ニ提出<sup>シ</sup>講

和條約原案ヲ基礎トシ爾後双方會商ノ上更ニ

之<sup>ニ對シ</sup>斗<sup>ヲ加ヘ</sup>酌改修正<sup>ト</sup>キ<sup>ル</sup>所<sup>ノ</sup>重要ナル者ヲ

列舉スレバ奉天省ノ割地中鴨綠江口ヨリ該江

ヲ溯リ三叉子ニ至リ三叉子ヨリ北ノ方榆樹底

下ニ亘リテ直線ヲ畫シ榆樹底下ヨリ正西ニ向  
テ直線ヲ畫シテ遼河ニ達シ右直線ト遼河トノ  
交會點ヨリ該河流ニ沿フテ下リ北緯四十一度  
ノ線ニ達シ遼河上北緯四十一度ノ點ヨリ同緯  
度ニ沿フテ東經百二十二度ノ線ニ達シ北緯四  
十一度東經百二十二度ノ點ヨリ同經度ニ從フ  
テ遼東灣北岸ニ至ルト本ノ經界ヲ其東北部ニ  
於テ減縮シテ鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河

口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城、海城、營口ニ亘リ

遼河口ニ至ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城

市ヲ包含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル處ハ該

河ノ中央ヲ以テ經界トスルコト、知ルヘシト

變改シ其軍費賠償金庫平銀三億兩ヲ五ケ

年賦トシ第一回ニハ一億兩残り四回ハ各五千

萬兩ヲ支拂フベシトネトテ其總額内三分ノ一

ヲ減シテ庫平銀二億兩トシ五ケ年賦ヲ七ケ

年賦ニ延長シ其支拂ヒ期限ヲ八回トシ初回即  
 ケ本條約批准交換後六ヶ月以内第二回即ケ批  
 准交換後十二ヶ月内ニ各五千萬兩ヲ<sup>以</sup>支拂  
 ヒ残りノ金額ハ次後六ヶ年賦ニ支拂フコト、  
 シ其通商上ノ讓典ニ関シテハ開市港トスベキ  
 北京、沙市、湘潭、重慶、梧州、蘇州、杭州ノ七箇所  
 ヲ沙市、重慶、蘇州、杭州ノ四箇所ニ減シ隨テ漁  
 船航行ノ權利モ之ニ應シテ短縮シ帝國臣民

ヨリ清國ノ輸入品ニ関シ原價百分ノ二ノ抵代  
税ヲ納メタルトキ又帝國臣民カ清國ニテ購買  
セシ貨物ヲ輸出スルトキ及清國內地消費ニ  
供スル清國貨物ヲ我船舶ニテ彼ノ開港間ニ運  
送スルニ當テ沿海貿易税ヲ納メタル時ハ未  
一切ノ税金取立金ヲ免除スベシトノ要求ヲ撤  
去シテ總テ最惠國待遇ヲ得ルニ止メ清國ニ授  
納スベキ諸税及ヒ手数料ヲ日本銀貨ニテ

政府

モ納金レ得ヘシト云ヘル個條及ヒ黃浦河口

吳淞淺瀬取除ノ條件共ニ之ヲ撤去シ又々清

國ニテ誠實ニ條約実行ノ担保トシテ日本軍隊

カ奉天府ト威海衛トヲ一時占領スベシト云フ

ヲ改メテ威海衛一所ヲ占領スルコトニ止メ其

支拂ツヘキ

駐兵費トシテ清國ヨリ毎年二百萬兩ヲ束拂

ヲセヨ云フヲ五十萬兩通ニ減少シタル等

ナリ

ナレバ其他款ナキ之ヲ記載スルニ及ハズ之ヲ

要スルニ我カ提出ノ講和條件ノ大主義<sup>（体）</sup>ニ

ハ總テ我カ要求ヲ成就<sup>（ノ通りニ）</sup>シテ<sup>（殆ど）</sup>殘ル所ナシト云フ

キナリ

ベレ

講和條約已ニ調印ヲ經タリ同日午後清國使

下関ヲ發シテ

臣ハ歸國ノ途ニ就ケリ因テ吾儕ハ其翌十八日

ニ於テ軍艦八重山ニ搭シ廣嶋ニ歸着シ直ニ

行在所ニ參内シ審問<sup>（ニ）</sup>連日講和條約談判

條約調印

上ノ次第及ヒ其結果ヲ復命<sup>（セ）</sup>ト<sup>（リ）</sup>皇上ハ深ク

御満足ニ思食サル、旨ヲ以テ左ノ勅語ヲ賜ハ  
リタリ

清國曩キニ全權大臣ヲ簡派シ我ニ和ヲ請ハ  
シ、朕其切實ナルヲ認メ乃テ卿等ニ授クル  
ニ全權ヲ以テシ命シテ清使ト會商セシム  
卿等尊俎折衝数日ヲ費シ遂ニ善ク妥協ヲ  
得タリ今卿等カ奏スル所ノ梗概ハ朕カ旨ニ  
副テ洵ニ帝國ノ光榮ヲ顯揚スルニ足ル朕

卿等カ功ヲ偉トシ深ク之ヲ嘉尚ス

吾儕ハ天恩優渥ニ感泣シ微軀死ト保有シ能ハ

サル丈ケル光榮ヲ荷ヒテ御前ヲ退出セキタリ右

講和條約及別約ハ同月二十日ヲ以テ我カ皇上

御批准ヲ經タリ尋テ内閣書記官長伊東巳代

治ハ全權辨理大臣トシテ該御批准條約ヲ齎ラ

シ特ニ芝罘ニ派往シ清國皇帝ノ批准條約ト交

換ノ事ヲ行フヘキ大命ヲ拜シ五月二日ヲ以

思食サル、旨ヲ以テ左ノ勅語ヲ賜ハ

ルキニ全權大臣ヲ簡派シ我ニ和ヲ請ハ

其切實ナルヲ認メ乃チ卿等ニ授クル

ヲ以テシ命シテ清使ト會商セシム

俎折衝数日ヲ費シ遂ニ善ク妥協ヲ

今卿等カ奏スル所ノ梗概ハ朕カ旨ニ

ニ帝國ノ光榮ヲ顯揚スルニ足ル朕

功ヲ偉トシ深ク之ヲ嘉尚ス

恩優渥ニ感泣シ微軀殆ト保有シ能ハ

光榮ヲ荷ヒテ御前ヲ退出セキタリ右

及別約ハ同月二十日ヲ以テ我カ皇上

ニタリ尋テ内閣書記官長伊東巳代

辨理大臣トシテ該御批准條約ヲ膺ラ

不ニ派往シ清國皇帝ノ批准條約ト交

行フヘキ大命ヲ拜シ五月二日ヲ以

外務省

此宣讀ノ事ハ何年ニ代ハ

京都公署ノ田ヲ入レ

トナリ

中田氏

テ京都ヲ發出セリ此頃恰モ露獨佛三國改

府ヨリ下ノ関條約ニ對スル異議ヲ提起シ来

リ之カ為メ

リル際ニ該條約批准交換ノ事ヲ就テモ不

ニ出會ハシム

慮ノ障礙ヲ惹起シタレトモ幸ニ我皇上ハ銳意

ニ東洋方面ノ再々沼平ヲ擾乱スヘキハ禍機

ヲ始末究メテ

再發スルヲ好マセラレサル嚴斷ヲ動シ給ハス

内ニ在テハ政府ハ重臣外ニ在テハ特派使臣氣

ヲモ此寛決ナル聖謨ヲ服膺シ日夜勤躬盡

世間内外

困難

アリシニ相ハラス

拘

率<sup>レ</sup>チ<sup>テ</sup>許多ノ艱苦ヲ遂<sup>レ</sup>漸<sup>レ</sup>既定ノ期日タル本

年五月八日ニ於テ首尾融ク批准交換<sup>ノ</sup>事ヲ終<sup>シ</sup>

了<sup>シ</sup>茲ニ日清兩國講和條約ノ大局ヲ完成<sup>シ</sup>タ

リ



閣下 露獨佛三國干涉(上)

此事實ニ對スル政府ノ措置

下ノ閣條約調印ノ後我カ皇上ハ不日京都ニ行

幸スルベキ旨仰出サレタ廣嶋滯在ノ閣臣中

御先發トシテ京都ニ赴キタルモノアリ余ハ養

病ノ為メ暫ク暇ヲ賜ヒテ播州舞子ニ休息シ居

リ斯ノ閣臣四方ニ散在シタルヲ折柄四月二十

三日ニ於テ在東京露獨佛公使ハ外務省ニ

来リ林外務次官ニ面會シ各自其本國政府ノ訓

令ヲ以テ稱シ日清講和條約中遼東半島割地ノ

一條ニ関スル異議ヲ提出シ其露國公使カ

口述覺書ハ「露國皇帝陛下ノ政府ハ日本國ヨ

リ清國ニ向テ要求シタル講和條件ヲ査閲スル

ニ遼東半島ヲ日本ニテ所有スルコトハ帝ニ常

ニ清國首府ヲ危カスルノ恐アルヲ以テ是

ト同時ニ朝鮮國ノ獨立ヲ有名無實ト為スモノ

ニシテ右ハ将来極東永久ノ平和ニ對シ障害ヲ

興フルモノト認ム因テ露國政府ハ日本皇帝

陛下ノ政府ニ向テ重子テ其ノ誠實ナル友誼ヲ

表セムカ為メ茲ニ日本國政府ニ勸告スルニ遼

東半嶼ヲ確然領有スルコトヲ放棄スベキコト

ヲ以テス獨佛兩國政府ノ勸告ト大勸告ト異ナ意味本文露

嗟ノ間ニ成者略シタルモ獨佛三國干涉ノ聯合後段ニ咄

テ詳述スベキト雖露國東此三國ハ既ニ相提携シテ干涉スベキト約束協同シタル上其各自ノ代表

者タル在東京露獨傳各公使ノ運動無<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>一宵ニ出ツベキ苦ナルニ<sub>一</sub>彼等カ當初進退<sub>二</sub>願

十日<sub>二</sub>獨逸公使一人外務省ニ來リ林次官ニ面<sub>一</sub>

大司

シタル本國政府ヨリ其國名ヲ明言スル<sub>二</sub>訓令ヲ受<sub>一</sub>

務大臣或ハ内閣總理大臣共ニ面談シタル<sub>二</sub>付外

林次官特ニ外務大臣伊藤<sub>二</sub>病氣ナハ故ニ何事カ知<sub>一</sub>

然ラハ明白日他ノ公使ト同伴スベシト豫約<sub>二</sub>置キナ

カラ翌二十一日ニ至リ何事カ故障<sub>二</sub>日モ亦他ノ

公使同伴シテ未<sub>レ</sub>會スル<sub>二</sub>運ニ至ラズ<sub>一</sub>使打テ<sub>二</sub>延

ヒテ来者スル事トナリタハハ露佛西國公使カ其本國ノ訓令ヲ  
受クハコト遅延セシニ由ハト云フ三國政府ハ事ノ急遽ニ出  
テ其代表者ニ訓示スル手續上ホハ林次官ハ直  
致ヲ缺キタハシ察スルニ足ホハ

ニ此次第ヲ余ト在廣嶋伊藤総理トニ電稟シテ  
指揮ヲ乞ヘリ余マ此事變ノ由来スル一昨ヲ究メ

三國聯合ノ本源ヲ繹ミ且ツ之ニ對シ他ノ歐米

各國ハ形勢如何ナリシヤヲ觀察スルモハ暫

ク後章ニ譲リ茲ニ先ツ當時此出来事ニ對シ我

政府カ如何ナル措置ヲ執リシカヲ記述スヘシ

是ヨリ先キ余ハ在露國西公使及ヒ在獨國青木  
公使ノ電報ニ對シ依リ歐洲強國ノ内意ハ必ス  
下ノ關係約ニ對シ何事カ干涉シ來ルヘキ模様  
アルヲ察シタリ因テ四月二十三日ヲ以テ余ハ  
舞子ヨリ在廣嶋伊藤總理ニ電照シ青木西兩  
公使ノ電報ニ依レハ歐洲各大國ヨリ強キ干涉  
ノ來ルベキハ到底免レサルカ如シ是ハ最初歐  
洲各大國ニ對シ我カ清國ニ要求スヘキ條件ヲ

言明セサリシニ由リ彼等ハ今日初テ公然ニ之  
ヲ承知シタル次女ナル故ニ其故障ヲ申出ル機會  
ヲ得タルナルベシ即チ我政府ガ若シ當初ニ歐  
洲大國ニ對シ我カ要求條件ヲ示シタラムニハ  
其時起ルベキ問題カ今日ニ来リタルモノト見  
ルノ外ナシ乍併我政府ハ最早騎虎ノ勢ナレバ  
如何ナル危險ヲ冒スモ即今ノ位地ヲ維持シ一  
歩モ讓ラザルノ決心ヲ示スル外他策ナカルベ

置

シ貴大臣ノ御考如何御腹藏ナク御示シ置キ下

サレタシト云ヒ送り置キタル後同日間モナク林次

官ノ電信ヲ接受シ其形勢愈々容易ナラザルヲ

知レリ特ニ露國ハ昨年以来其軍艦ヲ續々東

洋ニ集合シテヤ強大ナル海軍力ヲ日本支那海

ノ間ニ有シ居ルノミナラス昨今ノ形勢ヲ視テ

世間種々様々ノ流言飛語ヲ放ツモノ少カラス

就中露國政府ハ既ニ此方面諸港ニ碇泊スル同

國艦隊ニ對シテ二十四時間ニ何時モ出帆シ得

ヘキ準備ヲ為シ置クベキ旨内命ヲ下セリトノ

一事ハ頗ル其實アルカ如シ左レバ此際我政府

ハ措置如何ハ實ニ國家ノ安危榮辱ハ上ニ重大

ナル關係ヲ有スル事ナシヲ以テ固ヨリ暴虎馮

河ノ輕舉ヲ戒ムベキハ勿論ナレドモ然レドモ

昨年以來我海陸軍カ流血暴骨百戰百勝ハ軍

政府ニ

功ヲ積ミ慘憺計營苦心ヲ極メタル外交折衝ヲ

重子内外人民ノ希望ニ副ヒ其賞賛ヲ博シ特ニ

皇上ノ御批准サヘ既ニ濟シタル條約中主要ノ

一部ヲ烏有ニ歸セシムル如キ讓歩ヲ為スニ於

テハ仮令當局者タル吾儕ハ國家長計ノ為メ心

胸魚量ノ苦痛ヲ忍ビ何事重木ナル艱難ニ堪エ

モ之ヲ避ケサル

ヘシト覺悟スルモ此變報一度ヒ外間ニ露顯ス

ルニ至レハ我カ海陸軍人ハ如何ニ激動スヘキ

ヤ我カ國民一般ハ如何ニ失望スヘキヤ外來ノ

禍機ハ之ヲ防禦シ得ルトスルモ或ハ内ヨリ發

變動如何

スル危難ハ之ヲ抑制シ得ヘキカ内外兩難ノ間

輕重何レニアルベキカト苦慮計較ノ餘余ハ尚

ホ一應ハ彼等ノ勸告ヲ拒止シテ一面ニハ其底

意淺深ヲ探リ他ノ一面ニハ我軍民カ如何ニ

趨傾スルヤヲ察スルハ今日ノ急務ナルベシト

斷案ヲ下シ居タル際恰モ伊藤總理ヨリ「三

國干涉ノ件ニ付本日四時御前會議ヲ開カルハ

由リ余ノ意見ヲモ申シ越スベシトハ電報丁  
リ因テ余ハ直ニ本大臣ノ意見ハ大抵昨日申進  
シ置キタル如ク此際今一應我カ位置ヲ維持シ  
一歩モ譲ラス更ニ彼等將來ノ舉動如何ヲ視テ  
再ビ廟議ヲ盡スガ然ルベシト思フ併シ事頗ル  
重大ナル故ニ兎モ角モ露佛獨三國政府ニ別々  
ニ回答案ヲ作り御裁決ヲ伺フベシ何卒夫迄ハ  
廟議御確定スル様ニ願ヒタシト回電シタリ

然レトモ廣嶋御前會議ハ當時廣嶋總理ノ在外

山縣西郷陸海固ヨリ余カ再度ノ電報ヲ待ツト迄

式米ハスベキニアラサレハ  
キ猶豫オナレシ其商議ヲ進行セタリ而シテ當

日伊藤總理提議ノ要領ハ(第一)假令新ニ敵國ヲ

増加ノ不幸ニ遭遇スルモ此際断然露獨佛ノ勸

告ヲ拒絶スル乎(第二)茲ニ列國會議ヲ招請シ

遼東半嶋ノ問題ヲ該會議ニ於テ處理スル乎(第

三)此際寧ロ三國ノ勸告ハ全然之ヲ聽容シ遼東

半嶋ヲ以テ清國ニ向ヒ恩惠的ニ還附スル事ノ

三策ノ中其一ヲ撰ムベシト云フニアリ出席文

武各臣ハ孰レモ精神ヲ凝テ以テ反覆丁寧ニ討

論ハ末伊藤總理ノ第一策ニ就テハ當時我征清

軍ハ全國ノ精銳ヲ悉シテ遼東半嶋ニ駐屯シ我

強精ナル艦隊ハ悉ク澎湖嶋ニ集合シ内國ハ海

陸軍備ハ殆ト空虚ナリト云フヘキノミナラス

長日月向ノ

昨年来殆ト閑月戰鬪ヲ繼續シタル我艦隊

力ハ固ヨリ人負軍需既ニ疲勞缺乏ヲ告ケ

タル今日新於夫三國聯合ノ海軍ニ論ナク露國

艦隊ハト抗戰スルモ亦甚々覺束ナキ次第ナ

リ故ニ今ハ第三國トハ到底和親ヲ破ルベカラ

ズ新ニ敵國ヲ加フルハ断シテ得策ニ非スト決

ス其第三策ハ意氣寛大ナルヲ示スニ足ル

モトシテ言ヒ甲斐ナキ嫌アリトシ遂ニ其第二

策即チ列國會議ヲ招請シテ本問題ヲ處理ス

ト  
後  
目

へ、ト一事得計ナルハ、  
廟議料一定、理伊

藤総理ハ即夜廣嶋ヲ發シ翌二十五日曉天余ヲ

舞子旅第ニ訪ヒ御前會議ノ結論ヲ示シ尚ホ余

ノ意見アラハ之ヲ聽カムト云ヘリ此時在京都

ノ松方野村兩大臣モ忼モ舞子ニ來會セシニ

由リ孰レモ余カ病床ヲ繞リテ鼎坐シ茲ニ再ヒ

審議ヲ開キ、  
余ハ車論一昨日來兩回伊

藤総理ニ發電シタル趣意ヲ再演シ兎モ角モ露

獨佛三國ノ勸告ハ一應之ヲ拒絶シ、上彼等  
カ将来如何ナル運動ヲ為スヘキヤヲ視察シ深  
ク彼等ノ底意ヲ搜究シタル上尚ホ外交上一轉  
ノ策ヲ講スヘシト云ヒタレドモ伊藤総理ハ此  
際豫メ其結果如何ヲ推究セスシテ魚目ハ三大  
強國ハ勸告ヲ拒絶スルハ事頗ル危險ナラスヤ  
且ツ露國カ昨年以來ノ舉動ヲ視ハ今更ニ其  
底意ノ淺深ヲ探ル迄モナク甚ク明白ナルコト

ナリ然ルニ殊更ニ我ヨリ之ヲ挑撥シテ彼等ニ

適應ノ口實ヲ與フルハ其危險甚々多ク況ヤ危

機特ニ幾微ハ際ニ暴發セムハトスルニ所謂外交上一轉ノ

策モ亦之ヲ講スルノ餘地ナカルベキ論於テオ

ヤト本日余ノ直説ヲ駁論シ松方野村ノ兩大臣

モ均ク伊藤總理ノ論旨ニ左袒シタリ余オモ

余ノ所説ハ萬々危險ナル結果ヲ生セサルベシ

ト保証シ能ハサルコト勿論ナリハ衆論右ノ如

クナル上ハ余ハ素論ヲ撤回スヘコトニ答  
テラサレト天然トモ事ハ伊藤総理カ御  
前會議ノ結論トシテ齎ラシ来レハ列國會議  
云々ヲ説ハ建ヲ學ビ来ナレトモ思ハリ

ハ其理由ハ今茲ニ列國會議ヲ招請セムトセバ  
當局者タル露獨佛三國ノ外少トモ尚ホ二三  
大國ヲ以テナク加ヘサルベカラス而シテ此五  
六大國カ所謂列國會議ニ參列スルヲ承諾ス

ルヤ否ヤ疑ハキ事ナル上良シヤ孰レモ之ヲ  
 承諾シタリトスルモ實地ニ其會議ヲ関ク迄ニ  
 尙許多ノ日月ヲ要スヘク而シテ日清講和條約  
 ノ批准交換ハ尙日ハ既ニ目前ニ迫リ居ル際和  
 戰未ダハ裡ニ久ク彷徨スルハ徒ニ事局ノ困難  
 ヲ增長スヘク又凡ソ此種ノ問題ニシテ一度ヒ  
 列國會議ニ附スルニ於テハ列國各、自己ニ的  
 切ナル利害ヲ主張スヘキハ必至ノ勢ニシテ

會議ノ問題果シテ遼東半島ノ一事ニ限り得  
ベキヤ或ハ其議論上枝葉ニ枝葉ヲ生シ各國互  
ニ種々ノ註文ヲ持テ出シ遂ニ下ノ関條約全体  
破滅スルニ至ルノ恐レナキ能ハス是レ我ヨリ  
好ムテ更ニ歐洲大國ノ新干涉ヲ導クニ同シキ  
非策ナルヘシト云ヒタリ伊藤總理及ヒ松方野  
村兩大臣モ亦余ノ説ヲ然リト首肯シタリ  
扱引キ残リテ然レバ此緊急問題ヲ如何ニ處理

スベキカト云フニ至リ  
中岡啓臣ノ建議、廣嶋  
御前會議ニ於テ既ニ方今ノ形勢新ニ敵國ヲ増  
加スルコト得計ニアラスト決定シタル上ハ露  
獨佛三國ニシテ其干涉ヲ極度迄進行シ来ルベ  
キモノトセバ兎ニ角我ハ彼等ノ勸告全部若ク  
ハ其一部ヲ承諾セザルヲ得ザルハ自然ノ結果  
ナルヘシ而シテ我國今日ノ位置ハ目前此露獨  
佛三國干涉ノ難問題ヲ控ヘ居ルハ外尚ホ清國

トハ和戦未了ノ問題ヲ貼シ居ル場合ナレバ若

シ今後露獨佛三國トソ交渉ヲ延長スルハ清國

或ハ其機ニ乘シテ講和條約ノ批准ニ故障ヲ起

シ遂ニ東下ノ關係ヲ實地ニ改紙空文ニ歸セシ

ムルヤモ計ラシム故ニ我々兩國間ニ問題ヲ

分割シテ彼此相牽連スル所ヲ可カクシムベキ様

努力セサルベシカラス之ヲ約言スレバ三國ニ對

シテ全然讓歩セサルヲ得サルニ至ルモ

ト

清國ニ對シテハ一步モ譲ラサハヘシト決心シ  
眞直ニ其方針ニ追進スハコト目下ノ急務ナヘ

シトノ結論ニ歸着シ野村内務大臣ハ即夜舞子ヲ發

シ廣島ニ赴キ右決議ノ趣ヲ聖聽ニ達シ尋ニ裁可ヲ經タ

リ然レトモ此結論ハ必竟今後百方計畫ヲ盡シタハ上萬々巴ヲ

得サハ時機ニ及ムテ施スヘキ最後覺悟ナレトモ夫レ迄ニハ尚

々ノ談判ヲ懸引モアハヘキ事ニシテ且ツ五月八日即チ講和條約

批准交換ノ期日迄ハ尚ホ十有餘日ヲ存スレ先ツ一方

信於テハ三國ノ勸告ニ對シ我ヨリ確然諾ス  
田舎ヲ集ナル以前再三理ヲ悉シ情ヲ述ヘ其勸  
告ヲ撤回セシムルカ或ハ之ヲ寬和セシムルカ  
ノ方策ヲ講シ試ムベク斯クスル間ニ彼等カ將  
来如何ノ舉動ヲ出ツルカヲ視察スベク復タ他  
ノ一方ニ於テハ我若シ此際他ノ二三大國ノ強  
援ヲ誘引シ獲クハ或ハ三國干涉ノ勢力ヲ牽  
制シテ其熱度ヲ幾分か冷却シ得ヘク亦仮令

ヒ遂ニ干渉相見ルハ不幸ニ陥ルモ尚ホ我獨力

ヲ以テ危難ヲ冒スル勝ルコト萬々ナルヘシ最

モ此事ヲ行フニハ時會餘リニ短促ニシテ成功

（内閣）ヘカササルコト論セシ

甚々覺束トシト雖トモ兎モ角モ我總テ計策

ヲ試験シタル上ニ非レハ容易ニ最後ノ決心ヲ

發表セサルベシト協定セリ因テ先ツ今度ノ干

渉張本者タル露國ノ意向ヲ確知スルコト最モ

肝

必要ナリトシ直ニ西公使ニ向ヒ一ハ電訓ヲ發

シタリ其概要六日清講和條約に既ニ我カ皇上  
ノ御批准迄相済ミタル今日ニ及ヒ遼東半嶋ヲ  
抛棄スルハ頗ル至難トスル所ナリ是ヲ以テ貴  
官ハ露國政府ニ於テ從來露兩國永年親密  
ナル善隣ノ關係ヲ傷クルハ得策ニ非ルコトヲ  
思ヘトナラハ今テ四ノ勸告ヲ今一應再考セム  
コトヲ望ムト要求セラルヘシ且ツ日本カ將來  
遼東半嶋ヲ永久占領スルモ露國ノ利益ヲ危殆

ナラシメサルハ勿論朝鮮ノ獨立ニ関シテハ日

本政府ハ如何様ニモ露國政府ヲシテ充分満足

セルムベシトノ意ヲモ附言スベシト訓令レタ

リ抑モ露國政府ハ既ニ十分決意ノ上ニ必要ノ

準備ヲ整ヘ茲ニ獨佛ヲ誘<sub>引</sub>シテ干涉ノ端ヲ啓

キ来リタルコトナレハ我ヨリ單ニ彼等ノ再考

ヲ求メタレバトテ容易ニ其初志ヲ翻スベキ筈

大體ノ

スヘキウチナ

ナカルベキハ余モ亦豫測セザリシニ非レドモ

野のセカレハ

スルニ由ナリ

第一ニハ露國政府ノ底意深淺ヲ確知セナレハ

從テ

事

我將來ノ決心ヲ決定スルコト難ク第二ニハ斯

ル

ク彼我往復ノ間ニ於テ我若シ第三者タル英國

測

得

其他諸大國ノ意向如何ヲ推識スルノ機會ヲ發

誘伴ニ來

見セバ或ハ意外ナル強援ヲ得ルコトアルヘシ

スル後

ト思ヒ存ノ如ク西公使ニ發電シ置キタルコト

カレハ更ニ余ハ加藤公使ニ電訓シ英國政府

ニ向ヒ今般露獨佛三國干涉ノ事實ヲ覆藏

ナク暴露セシメタル以上滿州東北部及ヒ朝鮮ノ

北部ニ對スル露國カ包藏シ居ル覬覦ハ此度露

國ノ干涉ニ因テ之ヲ察スルニ足ル日本政府ハ

此事ニ関シ英國ノ利害ハ決シテ他ノ歐洲各國

ト同一ナラサル事實アルヲ認メ居リ目下

形勢頗ル切迫ノ際我政府ハ如何ナル程度迄ニ

英國ノ助力ヲ期望シ得ヘキカハ意味ヲ以テ内

密ニ英國政府ノ意見ヲ聞クベシト命ジ復々同

時ニ栗野公使ニ電訓シ日本政府ハ友邦ノ正當  
ナル異議ヲ無視スルモノニアラス然レドモ遼  
東半島ノ割地ハ清國ヨリ我ニ讓與シタル所ニ  
シテ其條約ハ既ニ我皇上ノ御批准済トナレハ  
今日ニ在テ之ヲ拋棄スルハ甚タ至難ナル所ナ  
ルノミナラス日本政府ハ實ニ之ヲ拋棄スヘキ  
必要アルヲ認メス若シ米國カ是迄平和恢復  
ノ爲メ盡力サレタル友誼ヲ今一歩進メラレ特

ニ該半嶋ノ割地ニ對シ異議ヲ抱キ居ル露國ニ  
向テ其再考セムコトヲ勸告スルノ勞ヲ取ルコ

トヲ肯セラルレハ或ハ此未了問題ヲ満足ニ妥

了スルヲ得ヘシ且ツ日本政府ハ露獨佛三國ノ

運動カ或ハ清國ヲ誘引シテ條約ノ批准ヲ拒止

セシノ遂ニ再ビ砲火相見ルノ已ムヲ得サルニ

陥ラムコトヲ恐ルスル出来事ハ成ルベク未發

ニ防戢スル為メ内密ニ米國ノ友誼協力ヲ望マ

サルヲ得ストノ旨ヲ米國政府ニ告クベシト命

露京

シタリ然ルニ同月二十七日發西公使ノ回電ニ

云フ四月二十五日ノ電訓ニ基キ本官ハ昨日露

國外務大臣ト長時間辯論ヲ爲シ力ヲ盡シテ

露國政府ヲシテ我請求ニ對シ都合善キ回答ヲ

為サシメムト欲シタリ同大臣ト其顔色稍々動

動

見受テタリ

キ頗ル感發スル所アルモノ、如ク今一應露國

皇帝ノ叡慮ヲ伺フベシト約セリ然ルニ今日ニ

至リ露國皇帝ハ日本ノ請求ハ露國ノ勸告ヲ翻

回スベキ

文ク

十分理由ナシトノ故ヲ以テ之ヲ容納

シ給ハストノ旨ヲ述ヘタリ目下露國政府ハ運

漕船ヲ「オデッサ」ニ派遣シ軍隊廻漕ノ準備中ナ

リト風聞ス故ニ露國ノ干涉ハ重大ナルベキモ

ノト豫期シテ覺悟シ置カル、方安全ナルベシ

ト余ハ露國ノ回答ハ大概斯クナルベシトハ豫

如キモノナリ

期セシ所ナリ而シテ英國ハ如何ニ我カ請求ニ

回答セシ

對シ其意見ヲ發表セリ  
カ此時恰モ西公使ハ回

電ト同日倫敦發加藤公使ノ電報  
ハ此時到來セリ  
不得ナリ加藤

公使ノ電報ヲ得タ  
加藤公使ハ曩ニ余ノ電訓

ニ接スルヤ直ニ英國外務大臣ニ面見ヲ求メ具

ニ我政府ノ希望ヲ述ヘタルニ「キムベリ」伯爵

ハ頗ル日本ニ對シ好情ヲ抱キ居ル様子ナレド

モ該大臣ハ此事件ニ関シ英國政府ハ一切干渉

セザルコトニ決定シ居リ而シテ今英國カ

日本ニ協カスルコトハ抑モ亦一ノ干涉ニ外ナ  
ラズキカ爲ハ事体一新面目ヲ関クコトナルヲ  
以テ内閣總理大臣コロスベリト伯爵ト相談ノ  
上ニアラザレバ何事モ回答シ難シトノ旨ヲ述  
ヘ且ツ露獨佛三國ハ果シテ何程迄其異議ヲ主  
張スルヤハ確知セサレドモ形勢頗ル容易ナラ  
サル故ニ日本ハ之ニ對シ十二分ニ覺悟表ルコ  
ト得策ナラム英國ハ平和ヲ望ムヲ以テ日本カ

歐洲各國ト交戦ニ至ルヲ欲セサルハ勿論日清  
戦争ハ繼續スルコトモ亦甚タ好ミサル所ナレ  
ハ目下ノ葛藤ヲ解除スベキ機會アレバ必ス盡  
力スルコトヲ急ラザルベシ但英國ハ日本ニ對  
シ友情ヲ抱クト雖モ露獨佛三國モ亦友邦ノ事  
ナレバ英國ハ此際彼是酌量シテ其威嚴上自己  
ハ決斷ト責任ヲ以テ運動スルノ外ナシト附言  
シタリ加藤公使ハ此時既ニ在伊國高平公使

ノ電照ニテ伊國政府ハ意見ヲ推知シ居タルニ  
 依リ英國外務大臣ニ向ヒ暗ニ此際事局ヲ結了  
 スベキ好案ナキヤト問ヒタルトモ同大臣ハ否  
 ト答ヘタルノニ尚ホ我請求ニ對スル英國政府  
 ハ確答アリ次第更ニ電稟スベシト云ヒ越シ来  
 ヲ尋テ二十九日倫敦發同公使ノ電報ニ依レハ  
 英國外務大臣ハ同公使ニ對シ英國政府ハ曩ニ  
 局外中立ヲ守ルコトニ一決シタルハ今回モ亦

同一ノ意向ヲ維持セムト欲ス英國ハ日本ニ對  
シ最モ懇篤ナル友情ヲ抱キ居レドモ同時ニ自  
國ノ利益ヲモ考ヘザルヲ得ス故ニ今日本ノ提  
議<sup>英</sup>協同シテ日本ヲ助力スル能ハス但露國ハ  
真實ニ決心スル所アルカ如シ<sup>ト云ヒ</sup>深ク注意ヲ與ヘ

タリト<sup>報ニ来レリ</sup>云々越レタレトモ之ヲ要スルニ英國ハ

半吞半吐ノ間ニ我請求ヲ謝絶シタルニ過キス

又同日栗野公使ハ來電ニ依レバ米國國務大

臣ハ局外中立ノ主意ト矛盾セザル限リハ日本

ト協カスルコトヲ承諾セリ而シテ講和條約ノ批

准ハ<sup>件</sup>在北京米國公使ニ電訓シテ速ニ實行スル

コトヲ清國ニ勸告セシムベシト云ナ<sup>ヘリト</sup>キアリ米

國<sup>襲</sup>元来ノ政綱ヨリ云ヘハ此答<sup>四</sup>詞ハ實ニ相當ノ

辭令ニシテ其我國ニ對スル友情ノ薄ヲサルヲ

視<sup>ル</sup>キドモ去リトテ局外中立ノ範圍内ニ於ケル

協カト云ヘハ其極端ノ援助ヲ望ムニ足ラス然

ルニ此間吾人ヲシテ稍、意外ナハ事ナリトノ感覺ヲ起サシメタルハ此  
事件ニ関スル伊國政府ノ舉動ナリ此事ニ付在伊國高平公使ノ來電ハ  
後章ニ記述スル所アルヘシ蓋シ伊國ハ近來我國ニ對シ頗ハ好情ヲ  
抱キ居ハコトハ歐洲大陸諸國中率先シテ我條約改正ノ提議ヲ容シ會  
商僅數回此一大事業ノ終局ヲ告ケタラ以テ之ヲ知ハ足ル然トモ露獨  
佛三角干涉ノ案未スルニ方リ伊國ハ自ラ奮テ英米兩國ト合縱シテ此大強  
國ノ連衡ニ反對スル位置ニ立ツヲモ憚ラストノ決心ヲ示スニ至シ特我國ニ  
對スル好情ノミ外何事カ別ニ歐洲的政畧ノ關係上斯ハ運動ニ出スルノ

必要アリシコトナハヘシト思ヒタレドモ伊國ノ中情如何ヲ問フニ

又ハス今伊國々我國ノ味方タルノ位置ニ立タトスルハ我ニ在テ意外ノ

僥倖ト云ハサヲ得ス之ヲ要スルニ今回ノ事件ニ関シ伊國政府々我國ニ

對スル意向ハ初ヨリ英米西國比較スル頻ハ積極的ノ傾向アリシ疑ヒ

ナレ然レモ美國既ニ局外中立ノ範圍外ニ奮出シテ我ニ援助ヲ能ハ能

ハスト云フ以上ハ伊國米國カ何程我ニ對スル好意ヲ表スルモ危機一

發ノ際我背後ノ強援トシテ依頼スヘカラサハヤ明白ナリ

以上歐米強國々ノ顯象ハ我在外各外交官カ僅

々数日ノ間一生懸命ノ力ヲ盡シ百方周旋シタ

ル結果ニ出テタルモハ多カルベシ然レドモ今

其現跡ニ就キ之ヲ云ヘハ之カ為メニ露獨佛三

國ヲシテ其干涉ノ方向ヲ轉遷セシメタルニモ

アラス亦自餘ノ第三國ヨリハ多少ノ好意同情

ヲ博シ得タルカ如シト雖モ其實行的ノ強援ヲ

獲タルニモアラス畢竟各次電報ノ吉凶ヲ由

ヲ察ヘル

リ當時僅ニ我政府ニ向ヒ一擧一笑ノ材料ニ集

トタルニ過

ギズヤト云フモハアラハ然ルモ

抑モ三國干涉ノ来リレハ實ニ急遽ノ事ニ心テ

其之ニ對スル計畫モ亦咄嗟ノ間ニ處辨セザル

ベカラサル事タリト分論斯ル重大事件ニ就キ

彼此豫メ何事ノ相默諾モナキ邦國ニ向ヒ突然

其援助ヲ求ムルコトナレバ國ヨリ其必成ヲ期

スベキコトニアラヌ即チ僅ニ上來云フ如キ結

果ニ止リタルモ亦誠ニ已ムヲ得サルハ次第

ト云ハサルヲ得ル事ノ成敗ハ兎モ角モ此

際我々在外各外交官ノ苦心盡力ハ決シテ徒勞

ニアラザリシ吾人ハ因テ以テ露獨佛三国聯合

カ如何ナル原由ニ成立セシカラ知得シ

非ヤ因テ以テ其干涉ノ程度ハ如何ニ強勢ナ

ルカラ知得シ非ヤ亦他ノ第三者タル

諸國カ此事件ニ関スル意向如何ヲ確知シ且ツ

便令ヒ其實力上ノ強援ヲ獲ル能ハサリシモ

尚ホ其德義上ノ聲援ヲ博シ隱然露獨佛三國ヲ

牽制シ得タルハ亦之カ為メニアラスヤ此頃露國公使

杜政府ハ餘リニ多林ノ次官外各國ト本問題ニ就キ事

ト云ノ困難ヲ增長セザル様ニ希望スル私語ヤ否ヤ

難之ヲ其間極ニ達シハス當時ヲ我ニ增長スベキ事餘地ノ困

ロナケレ在ハ事務局ノ困難ヲ増長ヲ知ルベキ恐レハ寧

況ヤ政府ハ初ヨリ百方計畫ヲ盡シタル上萬々

已ヲ得ザルノ時機ニ至ラザレバ最後ノ覺悟ヲ

發表

實施セサルベシトハ既ニ舞子ニ於テ議定シ居

タル事ナルオヤ歐米各國ノ事情ハ右ニ述フル

カ如ク露獨佛三國干涉ノ實情ハ既ニ半ヲ確知

セリ第三國ヨリ實力上ハ強援ハ得

カズルハ

キ道ニ明ナリ今ヤ最早三國ノ勸告

ニ對シ其全部若クハ幾部ヲ容レ事局ノ妥結ヲ

謀ルハ外他策ナシ而シテ秋ニ此頃恰モ西公

使シ來電ニ依リ一層露國ノ事情ヲ詳ニスルヲ

ルモウ

得たり  
西公使概要電報ハ東洋ニ於ケル露佛獨京同盟ニ

艦隊ノ全カ使ハ已ニ戰端ヲ開クノ認識セラルル危險ヲ所々

顧為メス得策ナル提議否ヲ排却知スルニコト果シテ我國

如我ノ依カ其較上貴大臣ニ於ケレ到底彼ニ抵抗ハ

ス電稟シタル如ク朝鮮ニ御接續スル土壌本使カ嘗

本使目下意見難問此事件結スルコト得策ナル為ノ結局

遠テ一遼東半島ヲ占有スルヲ器メ大償ニ其金額保ト

増加シ清國ヲナレベ永シ然ラド皆濟シテ露國ハ尚

ハ思フ

ホ其勸告ノ日本ニ容シラレサハヘキ  
ヲ恐レ且ツ佛國カ其企圖ヲ貫徹シ得  
サハハヤト懸合シ是ハ様子ナハカ故ニ  
我ハ最後ノ場合ニ立至ハ迄禮ヲ盡シ  
テ彼ノ勸告ヲ拒絶スハモホ一策ハ露  
ハトアリ然ハニ拒絶スハ末段ニアラ  
佛公使ニ係内ニ執テハ在美獨逸大使カ  
藤公使ニ係内ニ執セシ所ニ據ルハ佛國ハ最  
早露國ト分離シモハハサハ因テ政府ハ四月三十  
形勢既ニ成レハモハハサハ因テ政府ハ四月三十  
日西公使ニ電訓シ露國政府ニ向ヒ左ノ覽書ヲ  
提出セシメタリ「日本帝國政府ハ露國皇帝陛  
下ノ政府ノ友誼ノ勸告ヲ熟考シ且ツ茲ニ再ヒ

而國間ニ存スル親密ノ關係ヲ重視スル證據ヲ  
表彰セムト欲スルカ故ニ下ノ関條約ノ批准交  
換ニ依リ日本國ノ名譽ト威嚴トヲ完フシタル  
後ニ於テ別ニ追加定約ヲ以テ該條約中へ左ノ  
修正ヲ加フルコトニ同意ス(第一)日本政府ハ其  
奉天半嶋ニ於ケル永代占領權ハ金州廳ヲ除ク  
外ハ總テ之ヲ拋棄ス但日本國ハ清國ト商議ノ  
上其拋棄シタル領土ニ對シ其報酬トシテ相當

ノ金額ヲ定ムルコトアルベシ(第二)然レドモ日

本政府ハ清國ニ於テ講和條約ノ義務ヲ全然履

行スルマテハ前記ノ領土ヲ擔保トシテ之ヲ占

領スルノ權アルコト、知ルベシ同時ニ青木、曾

訓本文ニ獨佛兩國政府ニ提出セシメタル覽書ハ全

略ス省然ルニ西公使ハ五月三日露京發ノ電

報ヲ以テ左ノ如ク回電セリ「本使ハ本月一日我

政府ノ覽書ヲ露國政府へ提出シカヲ極メ

タ  
チ

テ我カ提議ヲ貫カムト論辨セリ本日ニ至リ露

国外務大臣云フ露國政府ハ我覺書ニ對シ満足

スル能ハスト言明シ且フ昨日内閣會議ヲ開キ

タルニ  
徹頭徹尾

露國ヲ扨チハ日本國カ旅順口ヲ所領スルヲ障

害ト認ムル故ニ尚ホ當初ノ勸告ヲ主張シテ動

カザルベシトノ旨ヲ決議シ而シテ此決議ハ露

國皇帝ノ裁可ヲ經タリト本ト本件ニ関シ本

苦言

使ハ滿腔精神ヲ瀝キ痛論シタレドモ遂ニ露國

夕  
系  
シ

府人猜眼ヲ以テ我國ヲ視ルヤ其臆測頗ル過大

ナレドモ兎モ角モ今回干涉ノ口籍如何ヲ問ハ

ス其内心ハ日本ヲシテ清國大陸ニ於テ寸土尺

壤タリトモ侵略セシメサルニアルハ炳然火ヲ

觀ルカ如ク<sup>シニ此以テハ我ニ於テ</sup>分明ナル砲火以テ其曲直ヲ決ス

ルノ覺悟ナクシテ徒ニ甲古以來ノ尊俎ノ間ニ折

衝<sup>ニ負スルコト</sup>ト頗ル無益ノ事ニ屬シ且ツ此頃清國ハ

三國干涉ノ事ヲ口實トシ批准交換ノ期限ヲ

府人猜眼、以テ我國ヲ視ルヤ其臆測頗ル過大

ナレドモ兎モ角モ今回干涉ノ口籍如何ヲ問ハ

ス其内心ハ日本ヲシテ清國大陸ニ於テ寸土尺

壤タリトモ侵略セシメサルニアルハ炳然火ヲ

觀ルカ如ク、シニ此以上ハ我ニ於テ分明ニ砲火以テ其曲直ヲ決ス

ルノ覺悟ナクシテ徒ニ甲古以來ノ尊俎ノ間ニ折

衝キ、ト頗ル無益ノ事ニ属シ且ツ此頃清國ハ

三國干涉ノ事ヲ口實トシ批准交換ノ期限ヲ

延引セムコトヲ提議シ来ル<sup>レ</sup>而シテ清國ガ

此提議ヲ為セシハ全ク露國ノ教唆ニ出タルコ

トハ頗ル信據スベキ事實アリ斯ル形勢ヲ何

時モ繼續スル<sup>ニ</sup>トキハ茲ニ外交上兩個未定ノ間

題ヲ混雜セシメ<sup>錯ニ</sup>俗<sup>俗ニ</sup>所謂虻<sup>モ</sup>蜂<sup>モ</sup>捕獲シ得ス

トハ不利ヲ招クハ虞アリ<sup>リ</sup>余ハ最早當初<sup>ハ</sup>廟

議ニ基キ露獨佛三國ニ對シテハ全然讓歩スル

モ清國ニ對シテハ一步モ讓ラズトハ趣意无實

時機ナリ

行スルノ外決シテ他策ヲ以テ断定シ五月四日

ヲ以テ余が京都ノ旅寓ニ於テ當時滯京ノ閣僚

及大本營重職ヲ會合シ

此日來會者ハ伊藤總理  
外松方正大臣西郷

海軍大臣野村內務大臣  
樺山樺令部長

今ハ唯三國ハ勸告ナハ

全然之ヲ聽容シ先ツ外交上此一カハ葛藤ヲ

割断シ他ノ一カニ於ケル批准交換ノ事ハ毫モ

猶豫セズレテ之ヲ斷行セシムルハ得策タルベ

重

キコトヲ縷陳シ出席文武官孰モ刻下危機

ニ對スル措置トシテ余ノ提議ノ大体主義ニ於

テハ固ヨリ異議ヲ容ハ、モノナカリシモ斯ハ重要會

議ノ常態ナカラ其大体主義ニ就キ既ニ一致協同シタ

ハ後モ尚ホ之ニ附帶スル末條細目ニ至テハ徃々各自

ノ意見相符合スルニ能ハサハ野アリ其為メ會議殆

ト終日ヲ費シタリ今其一例ヲ舉レハ三國干涉

ノ結果トシテ遼東半島ヲ清國ニ還附スルハ實

ニ已ムヲ得サハ事トシ之ヲ還附スルニモセヨ

其之ヲ還附スル條件トシテ若干償金ヲ要求ス

ベキカ或ハ全ク無條件ニシテ恩惠的ニ還附ス

若干

ベキカ若シ其條件トシテ償金ヲ必要トスルナ

ラハ豫メ露國ハ勿論他ノ二國ニモ之ヲ表明シ

復々

其内諾黙認ヲ取り置カサレバ他日再々許多

面倒ヲ惹起スベシト云フ類ニシテ將來ノ事局

ヲ遠慮スルノ議論トシテハ一應尤●ナル次第

ナレドモ余ハ本問題ニ関シ今日迄露國ニ對シ

手ヲ盡シ品ヲ換ヘテ再三談判モシ懸引モシタ  
レトモ彼ハ頑乎其初志ヲ動カサス毫モ我希望  
ヲ容レタハコトナキニ今日我ハ全然彼等ノ勸  
告ニ從フ旨ヲ云フト同時ニ更ニ或ハ條件ニ付彼  
等ノ内諾默認ヲ得ムコトヲ求メ車子テ彼等ヲ  
シテ我衷情如何ヲ疑ハシムハハ得計ニアラス且ッ  
豫メ彼等ノ内諾默認ヲ得ムトスハニ方リ若シ  
彼等カ尚ホ押強クモ遼東半島還附ニ就キ何

等ノ條件ヲモ付スベカラスト云ハ、今日ノ場

合我ヨリ<sup>復</sup>之ニ抗議スル能ハサルベシ故ニ三

國ニ對スル回答ハ、奇麗ニ全ク其忠告ヲ納ル、

ト、  
一事ニ止メ遼東半嶋還附ノ條件有無ニ言

ヒ及ボサス以テ他日外交上自由ノ餘地ヲ存シ

置ク方然ラムト述ヘタルニ伊藤總理ハ最初ヨ

リ余ト同説ヲ主持シ居タルニ由リ他ノ閣僚モ

遂ニ其議ニ協同シタリ斯ク衆議漸ク纏マリ

タル時余ハ三國ニ對スル回答案トシテ日本帝  
國政府ハ露獨佛三國政府ノ友誼アル忠告ニ基  
キ奉天半嶋ヲ永久ニ一町領スルコトヲ拋棄スル  
ヲ約ストノ單純ナル覽書ヲ草シ閣議決定ノ上  
伊藤總理ハ直ニ右回答案ヲ携帶シ宮中ニ伺  
候シ聖裁ヲ抑キ再ヒ余ノ旅寓ニ來會セシ時ハ  
既ニ夜ニ及ヘリ因テ余ハ直ニ露獨佛三國駐劄  
ノ我公使ニ電訓シテ各自ノ駐劄國政府ニ向ヒ

該覽書ヲ提出セシメタリ之ニ對シ五月九日在  
東京ノ露國公使ハ其政府ノ訓令ヲ奉シ外務省  
ニ來リ露國皇帝ノ政府ハ日本國カ遼東半島ノ  
永久占領權ヲ拋棄スルノ通告ヲ得日本皇帝ノ  
政府カ此措置ニ依リ重子テ其高見ヲ彰表セラ  
レタルヲ認メ宇内ノ平和ノ為メ茲ニ其祝辭ヲ  
述フト云ヒ三國干涉ノ難問題モ茲ニ一先ソ其

結ヒ

太局ヲ終ラレタリ此日獨佛兩國ノ公使モ各ハ其政府ノ訓令ヲ奉シテ宜言

本條以下  
字下ゲ

略ル所アリ其意露國公使ノ所言ト大  
略相同シキヲ以テ茲ニ之ヲ省略ス

本篇ノ全記事ハ本年四月二十三日露獨佛三  
國政府ヨリ下ノ関條約ニ對シ異議ヲ申シ  
タルニ始リ五月九日右三國政府が我政府ノ

回答ニ對シ満足スル旨ヲ宣言シタルニ終ハ

レリ然ハニ此時恰モ皇上ニハ既ニ廣島大本

營ヨリ京都ニ行幸アラセラルハヘキ御豫定ア

リ四月二十七日廣島ヨリ京都ニ遷ラセラル

伊藤總理ハ四月二十四日ノ夜廣島ヲ發シ二

十五日拂曉ニ舞子ニ來リ同所ニ滞留スハコ

ト西日兵庫ヨリ鳳輦ニ扈從シ京都ニ赴キ余

ハ下ノ関條約調印ノ事ヲ復命セシ後四月二

十二日ヨリ養病賜暇ヲ得テ播州舞子ニ滞在

シ皇上海都御着輦後四月二十九日京都ニ赴

キ松方野村ノ西大臣ハ廣島御發輦前御先發

トシテ京都ニ滞在シ四月二十五日伊藤總理

カ舞子ニ来會スハトキ右大臣モ亦京都ヨ

リ同所ニ来リ松方大臣ハ即日歸京シ野村大

臣ハ舞子ノ決議ヲ上奏シ裁可ヲ乞フ為メ即

夜舞子ヨリ廣島ニ赴キ尋テ御先發トシテ京

都ニ還リ西郷大臣ハ此間始終廣島ニ滞在シ

聖駕ニ扈從シテ京都ニ赴キ山縣大臣ハ舞子

ノ決議御裁可ノ後直ニ旅順口ニ出發シテ小

松總督宮始メ帷幕ノ重臣ニ舞子ノ決議ニ関

スハ勅命ヲ傳達シタハ上直ニ京都ニ歸来シ

タリ右ノ如ク僅々十七日ノ間皇上ニハ廣島

ヨリ京都ニ御動坐遊ハサレ其前後閣臣ハ各

所ニ散在シ居タハ故ニ本篇託事中重要ノ因

議ハ或ハ廣島ニ舞子ニ又ハ京都ニ開カレタ

ハコトナレトモ本託事中逐一其場所及人名

ヲ詳記スハ能ハサハ所アリ故ニ茲ニ記述セ

ハ此間閣臣ノ去就往復ノ日時ヲ見テ本篇中

ノ重要事件カ何所ニ於テ何人ノ間ニ評議セ  
シカラ参考スベシ  
供テ人爲ノ茲ニ附言ス人ス

ナリ

露獨佛三國干涉(中)

三國干涉ノ由来



露國ハ明治二十七年六月三十日同國公使「ヒト

ロヴラ」ヲシテ朝鮮國駐在ノ日清兩國軍隊ハ均

ク同國ヨリ撤去スベシト勸告セシメ以來今回

ノ勸告ヲ提起スル<sup>シ来</sup>近東洋局面ノ利害ニ對シ一

日モ其注目ヲ忽カセニセザリシヲ<sup>ハ</sup>然レド

モ余カ嘗テ云ヘル如ク露國ハ始ヨリ我國ヲ敵

同情ヲ表シ居タリトハ見

視シ清國ニ味ナシタリトハ決意ナリシトハ思

ハレヌ但彼等カ動モスレハ其我國ニ對スル論

鋒ノ清國ニ對スルニ比スレバ稍々嚴厲ナル情

況アリシハ我國カ常ニ戰勝ノ餘威ニ乘シ彼等

ニ對シテモ清國ヨリハ比較的ニ強情ナリシニ

由ルナルベシ蓋シ元來露國ノ欲望ハ遠大ナル

ベケレトモ即今未タ其準備ノ整頓セザル折

柄ナル故ニ目下ノ急務ハ東方ノ此区域ヲシテ

スタチウコー

兎モ角モ現形勢ヲ存續セシメ置キ他日<sup>其</sup>彼<sup>其</sup>

大望ヲ達スヘキ局面ニ何等ノ障礙ヲモ貽サ

ラム

サルコトヲ期シタルカ如シ而カモ日清兩國ノ

爭議起リタル當初ニ於テハ露國モ亦自餘ノ歐

米各國ト均ク此爭議ヲ以テ格別ノ大事ニ立テ

至ラザルベク最後ノ勝利ハ清國ニ歸スヘク東

上

キ

更ニ生

事ナカ

方<sup>上</sup>現形勢<sup>キ</sup>著<sup>キ</sup>變スヘキ程ノ結果ハ生<sup>キ</sup>ガ

ルベシト思ヒ居タルナラム因テ彼等ハ初ヨリ

朝鮮領土ノ安固ヲ主張シ日清兩國ノ間一日モ

速ニ平和ノ恢復セムコトヲ切悞シタルハ強ク

ノ外他

事アラサリシハ強ク

彼等ノ一時外見好キ假面ヲ掩ヒタルニ非ス中

心實ニ斯ク希望シ居タルナルベシ故ニ「カシニ

」伯爵カ李鴻章ノ頼談ヲ受ケタルトキ露國政

府ハ直ニ其請求ヲ容レ「ヒトロヴラ」ヲシテ頻ニ

頃ノ

東京ニ於テ周旋スル所アラシメタル時進ハ露

國ハ尚ホ純然タル普通外交上ノ行徑ニ由リ

日清兩國ノ爭議ヲ息止セシメノ居ヤトモ平壤

ト欲シタルナルヘキ

黃海ノ役後日清ノ戦争ハ彼等カ豫期セシヨリ

モ更ニ重大ナル結果ヲ生スベキヲ察レ最早尊

以テ其効ヲ奏シ

俎ノ間一時ノ調停ヲ件速ク得ヘカラザルヲ悟

リ此頃ヨリ彼等連リニ其艦隊ノ勢力ヲ東洋

ニ増加シ多少ノ陸軍ヲ浦潮斯德ニ運送トモ

シ

有事ノ機會ニ於テ口舌ノ外腕力ノ準備必要ナ

リト感覺シタルカ如シ之ヲ約言スレバ露國カ

奉勅ハ

日清事件ニ對スル意志ハ始終不變ナリ

雖其前半期ハ純ラ普通外交ノ手段ニ依リ

其目的ヲ達セムト欲シ其後半期ハ或ハ多少ノ

強力ヲ使用スルヲ避<sup>モ</sup>ケストノ決意ヲ有シタ

ルカ如シ而シテ其目的ハ斷<sup>ハ</sup>固ヨリ目前

小利ニ汲々スルニ非スレテ将来ノ大望ヲ成

就スベキ位置ヲ占メント欲スルニ在ルハ勿論

ナレトモ目下ノ問題トシテ暫ク東方ノ此局面

ニ於ケル現形勢ヲ存續セムト欲シタルニ外ナラス

以上ノ推斷ニシテ誤謬ナシトスレハ日清事件ノ前半期ニ於テ

一時世間ニ奇異ナル推想ヲ起サシメタル英露聯合ノ或ハ成ラムト

スル顯象ヲ呈出シタルモ亦怪ムニ足ラハナリ抑モ英露兩國ノ東

方ニ於ケル利害ハ其極度ニ至リ必ス相逕庭スル所アルヘキハ何人

モ之ヲ疑ハサレトモ目下ノ事情ヨリ云ハ英國ハ所謂隣國無事ノ

主義我ニ基キ東方ノ平和ハ何時迄モ之ヲ維持セムコトヲ欲スル

ナルハ露國ハ固ヨリ英國ノ如ク永久平和ヲ維持スル必要ナシト

スハモ今後數年ノ間尚ホ此局面ニ於テ現形勢ノ變換スハラ好マサ  
ヘシ是レ今日ニ在テ英露ノ間尚ホ同軌ニ出テ、暫ク東洋ノ平和ヲ  
維持セムト欲シタム所以ナレバ昨年十月八日英國公使「トレンチ  
カ各強國ニ於テ朝鮮ノ獨立ヲ保護シ及ヒ清國ヨリ償金ヲ拂ハ  
シタル二事ヲ條件トシテ戦争ヲ息止シテハ如何ト勸告シ来リ  
シ時此件ニ就テハ露國ニ使ヨリモ同様ノ勸告ヲナスベシト明  
言セリ此事ヲ聞キ莫ク當時露國政府ハ餘リ執心ニ英國ノ提議  
ヲ贊助ヤサリシ如キモ英國ハ其後尚ホ露國ヨリテ相共ニ提携シテ

日清事件ニ干涉セシメト望ミ居タル形跡歴々リ而シテ余ハ

ヤ明カナ

元来日清文戦ノ結果ハ或ハ早晚歐洲各國中ニ多少ノ干涉ハ

免レサルヘシトノ觀念ヲ抱キ居タルモ一日タリトモ東方ノ局面ニ

於テ英露聯合干涉ノ成立ハ當ニ目下戰局ニ著キ不便ヲ招

クノミナラス實ニ東方將來ノ大不幸タルヘシト思惟シ當時屢

ノ意見ヲ持シタルハ

西公使ニ發電シテ露國ノ事情ヲ探ラシメタリ乃チ同公使ハ十二

月一日露京發ヲ以テ左ノ電報ヲ余ニ送リ曰ク十一月六日

露國外務次官ハ内務ニ本使ニ告ケタルニ一週前ニ在露清國ニ使戰

事ノ仲裁ヲ露國政府ノ依頼ニ及ヒリ因テ同次官ハ諸強國皆同一方針ヲ執ヘトニアサレハ露國政府ハ之ニ同意ヲ表ス能ス而シテ各強國ノ協同ハ殆ト望ム可シカントナリ故ニ講和事ハ直接ニ日本國ト交渉スハニ若カハシト清國公使ニ勸告シタル由然ハニ本使カ十月三十日外務大臣ヲ訪問セシ時ニ同大臣ハ露國政府ハ今ノ戰爭ニ就テ英國及其他諸國ト共ニ協同運動ヲ為スコトヲ約シタリト云ヘリ因テ本使ハ今ヤ戰爭現ニ繼續中ナルニ露國政府ハ如何ナル問題ニ就キ協同運動ヲナサムトスル積リナリヤト質問セシニ同大臣ハ答ヘテ露國政府ハ今直ニ運動ニ着手スルニ

アラス然レトモ必要ノ場合ニ戦争終局ノ曉ニ諸國互ニ其  
利益ヲ侵害セラレサリシヤ否ヲ吟味シテ自衛ノ為メ相協力スヘシ  
何トナレハ日本政府ハ軍ニ朝鮮ノ獨立及償金ノ支拂ヲ  
以テ満足セサハカ如ク思ハルレハナリト云ヘリ因テ本使  
ハ更ニ一步ヲ進メ本使ハ未タ我國ノ要求ノ如何ヲ  
承知セズト雖氏日本國ハ必ス相當ノ戰勝結果ヲ要  
求スハニ相違ナカハレシ然レテ若シ其要求ニシテ他國ノ利益ニ  
影響及ボスト雖氏露國ノ利益ニ關係ナキ時タリトモ露國政府

ハ尚ホ英國ト提携シテ之ニ反對スヘキヤト質問シタルニ露國外  
務大臣ハ暫シ躊躇シタル後是レ其時ノ機會ニ由ルヒト云ヘリ又  
本使カ最モ信用スヘキ筋ヨリ聞ヒタル所ニヨルバ當國先帝ノ  
崩御以來此地ニ滞在セス、英國皇太子ハ熱心ニ露國政府ニ説キ  
英國ニ協同セムコトヲ勸メ露國政府モ終ニ之ニ同意スルニ至リト  
云フ又他ノ風説ニヨルハ當地ニ於ケル二三ノ新聞紙ハ近頃其筋ノ内命ヲ  
受ケ右ノ意味ヲ記載シ俄ニ其筆法ヲ變シテ戰爭防止論ヲ唱メ  
リ此項日本國ニ對シテ熱心ニ同情ヲ抱キ居本使ノ朋友タル露國人某々ノ意

見ヲ聞クニ日本國ニ為メヲ謀ハニ一日モ早ク戦争ヲ收局シ多額ノ償金ヲ  
得ハヲ以テ得策トス蓋シ割地ヲ要求スルトキハ恐ル他國ノ干涉ヲ誘  
導シテ事煩ハ困難ニ陷ハシト云ヘリ本使ハ今固ク戦争ヨリ過當ノ結  
果ヲ無碍ニ收ムトハ甚ク疑ハシ然レモ我國ノ利益ヲ謀ハトキ清國ト和  
ヲ結ビ及フ可クムハ軍事報酬中ニ速ニ臺灣ノ讓與ヲ加スハ機ヲ作  
置クモ得策ナハシ露國政府ハ臺灣ノ讓與ニ付テハ異存ヲ抱カサ  
ハヘシト思考ストアリ余ハ斯ク英露ノ關係漸ク親密ナラムトスルヲ視テ  
時情ノ許ス限り百方手ヲ盡シ之ヲ應防ス計爾ヲ施シテ結果多ク

其結果多ク

ト  
タ  
ハ

少其功ヲ奏シタハカ否ヤ亦知ヤ他トモ東モ南モ歐洲強國ノ事情カ容

易ニ彼等ノ聯合ヲ成立セシメナリシカハ知ラサレトモニ至ラズ其後露國ハ何トナク英國ト相離シ別ニ

自己單獨ノ方針ヲ定メタハカ如ク見ヘタリ蓋シ余カ所謂露國カ日

清事件ニ對スハ前半期ト後半期トノ差異ハ此頃ヨリ起リタハ

ニアラサハ乎露國ハ到底英國カ普通外交的ノ提議ニ賛

同スハモ其目的違スハラスト悟リ寧ロ外交後有ニ多

少ノ強カヲ控ヘ萬已ムヲ得サハノ時ニ際會

スレハ果斷ノ行動ニ出ツハモ辭セスト決心

シタルニアラサル<sup>子</sup>本年東亞問題三日莫斯科新聞

干涉ノ提議ハ獨逸ニヨリ出テ紛疑ヲ生セシメタ

同運動ハ提議ヲ露國ハ決<sup>レ</sup>テ西歐諸國ニ向<sup>レ</sup>共

昨<sup>年</sup>ノ秋<sup>ノ</sup>ヨリ日本ノ講和條約ニ條<sup>件</sup>ハ<sup>必</sup>ス非常

要ナキヲ豫想メシタル方策ニ其利益ヲ保護スルニ露

國ハ他<sup>ノ</sup>列國ト事<sup>ヲ</sup>共<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>權<sup>ヲ</sup>ケル他<sup>ノ</sup>ヲ輕<sup>ニ</sup>視<sup>ス</sup>ル<sup>ノ</sup>シ

風<sup>レ</sup>氏<sup>ル</sup>其<sup>ハ</sup>該<sup>ニ</sup>新聞紙<sup>ニ</sup>從來<sup>ノ</sup>利益<sup>ヲ</sup>保<sup>テ</sup>當<sup>ル</sup>然<sup>ニ</sup>事

露國<sup>ノ</sup>政府<sup>ト</sup>認<sup>メ</sup>タ<sup>ル</sup>方<sup>ヲ</sup>策<sup>ヲ</sup>執<sup>レ</sup>東<sup>洋</sup>ニ<sup>ハ</sup>增加<sup>シ</sup>頃<sup>ハ</sup>一

準備ヲナシタル單獨ノ行動一班ヲ執ラムトシル 昨年

十二月二十三日余ハ會々露國公使ヲ尋訪セシ

時ヒトロヴラハ余ニ内話シテ露國皇帝ハ日清

兩國講和談判ノ端緒將ニ開カレムトスルヲ聞

食シ最モ欣喜セララル、所ナリ露國ハ一日モ早

ク日清戰爭ノ妖雲ヲ排除シ速ニ平和ヲ恢復ヲ

望ムコト切ナリ而シテ日本カ清國ニ要求スベ

キ講和條件ニシテ嘗テ日本政府ヨリ明約セラ

タル如ク朝鮮ノ獨立ヲ危惧ナラシメサルノ一

ニ求ムル所ナ

事確然タルニ於テハ露國ハ其他何事ノ條件ヲ

カル

トモ敢テ異議ヲ唱ヘザルベシト云ヘリ因テ余ハ

話

彼ノ懇言ヲ謝スルト同時ニ右ハ果シテ露國政

府ノ意向ニ相違ナカルベキカト推問セシニ彼

ハ之ニ對シ實ハ唯今本國外務大臣ヨリ電訓

ニ接シタルニ由リ具ニ其電訓ノ意味ヲ述ヘタ

ルノミ且ツ同電訓中ニ露國ハ兩交戰國人所行

動

為ニ對シ敢テ局外國ガ之ニ干涉スルコト莫ク

ラムコトヲ希望スルニ由リ此際日露兩國政府

ノ間ニ於テ互ニ其意見ヲ交換シ置クコトハ諸

外國ノ干涉ヲ豫防スル利益アルベシト信ス露

國ハ何時ニテモ日本ノ利益ノ為メ周旋盡カス

ルニ躊躇セサルベシ復タ講和ノ條件ニ関シテ

ハ露國固ヨリ日本ノ願望ニ對シ猜疑ノ念ヲ抱

テ

キ居ルモノキ非ストノ旨ヲモ日本政府ニ申シ

ハレ置ウヘシトアリト云ヒ更ニ特ニ彼レ一

已ノ考トシテ露國ハ多分日本カ臺灣ヲ占有

スルコトニハ決シテ故障ヲ書ハサルベシト云

對シ柯等ノ

モナカ

ヒ最後ニ彼ハ余ニ對シ貴大臣ハ未タ英國カ清

質問

國ノ或ル嶋嶼<sub>舟山嶋</sub>ヲ指ヲ擔保トシテ公債ヲ

スナラム

引受ケタリトノ説ヲ御聞及ヒナキヤト質問セ

云ハ

ルニ由リ余ハ未タ何等確報ヲ聞カス然レバ

今後此事ニ関シ何事ニテモ見聞スル所アレバ

之ヲ報道スヘシト云ヒ此日ノ談話ハ終レリ余

ハ此時~~既~~彼カ露國ハ東方ノ平和速ニ恢復セ

ムコトヲ切望スト云ヒ日露兩國互ニ意見ヲ交

換シ置クハ第三國ノ干涉ヲ防クニ便利ナルベ

シト云ヒ又特ニ英國カ舟山嶋占領ノ疑問ヲ起

シ来リタルヲ~~中~~視テ露國ハ他ノ歐洲各國ヲ交ヘ

スレテ單ニ日露兩國ノ間ニ於テ何事カ内議點

諾シ置カムトノ意志アルニアラスヤト疑ヒタ

種 議論

レトモ彼ノ一言ハ必竟一個ノ主義ニ止リ未タ

何等

認ムヘキ

テ

何等事實問題トオヲサルモノナハバ我ヨリ進

ムテ

ニ立

外日将来無数ノ關係ヲ生スルカ如キ問題ヲ提

キ入ルコト

起スルハ得計ニ非スト思惟シタル故ニ大抵上

来記スル如キ問答ニ止メ置キタリ然ルニ其後

本年二月十四日ニ至リ「ヒトロヴ」ハ余ヲ外

務省ニ訪ヒ「時」上諸次再ヒ日露兩國ノ意見

ヲ交換スルハ兩國ノ為メ頗ル有益ナル旨

ヲ説キタルニ由リ此機ニ乘シ少ク事實問題ノ

余

端緒ヲ開キ彼カ如何ニ應對スルヤヲ試シムト

思ヒ今日ニ至リタル上ハ我國ハ戦争ノ結果ト

シテ清國ヨリ土地ノ割譲ヲ要求セサルヲ得サル

場合トナレリト思フ然レドモ日本政府ハ之カ

為ニ他ノ第三國ニ關繫スル利害ノ有無ハ前以

テ承知致シ置カムコトヲ欲ス左スレバ其特ニ

モ

露國ノ利害ニ關スル者ニ就チハ何事ナリト

モ腹藏ナク申シ聞ケラレタシト述ヘタルニ露

國公使ハ今ヤ日本ハ清國ヨリ割地ヲ要求セラ

ルベキハ勿論ナリノ事而シテ露國ハ太平洋沿岸ニ

就キ自由ハ通路ヲ得ムト欲スルコト亦一

目ニ非ス故ニ當テ貴政府ニテ宣言セラレタル

如ク朝鮮ハ國獨立ヲ障害セスト一人事確然タ

ルニ於テハ他ニ敢テ言フベキコトナレト云ヒ

本文露公使カ朝鮮ノ獨立ノ確固ナラムヲ望ム本  
如カ尚ホ露國カ太平洋海岸ニ不凍港ヲ

リ入  
左用  
レス  
バル  
他望  
日ア  
三カ  
國如  
干ク  
渉云  
起フ  
リハ  
タル  
領  
際ル  
西矛  
公盾  
使ノ  
言ナ  
露ナ

國外  
務大  
臣臣  
コバ  
向ナ  
ヒ露  
國ノ  
朝鮮  
ハ補  
潮斯  
於德  
ケル  
モ近  
來害  
割ヲ

米器  
械ト  
云依  
ヒテ  
冬時  
鮮全  
ク交  
通不  
凍港  
タリ  
望ト  
ハ云  
フ意

思ヲ  
裁シ  
テ明  
言セ  
ザ洩  
リシ  
タ程  
ルナ  
レ蓋  
シ今  
ヒト  
ロウ  
ラ

ルノ  
失言  
ナ而  
シテ  
彼ハ  
復タ  
私話  
ノ体  
ヲ以  
テ臺  
灣

ノ割  
地ハ  
露國  
ニ於  
テ固  
ヨリ  
異存  
ナレ  
然レ  
トモ

若シ  
日本  
カ嶋  
國ノ  
位置  
ヲ棄  
テハ  
大陸  
ニ版  
圖

ヲ擴  
張ス  
ルハ  
決シ  
テ日  
本ノ  
得策  
モ一  
アラ  
ザル

ベシト思フ云ヘリ因テ余ハ今日御相談ニ及  
フ所ハ露國ノ利害如何ヲ聞カムト欲スルモノ  
ニシテ日本自己ノ利害得失ニ至テハ我輩自ラ  
考量スル所ナルト云ヒタルニ彼ハ其詔頭

ヲ一変シ兎ニ角大陸ノ割地ニ関シテハ歐洲各

國中ニ異議ヲ唱ヘルモノアラムト云ヘリ余

ハ更ニ果シテ然ラハ他時或ハ其利害ニ關繫ア

リト云フ邦國ト直接ニ相談スルコトアルヤモ

計リ難ケレトモ茲ニ之ヲ論究シ置ク必要ナカ  
ルヘシ。兎モ角モ事ノ大小ニ拘ラズ露國政府  
ハ朝鮮ノ獨立ニ関スル問題ノ外別ニ露國ノ利  
害ニ關係スヘキ問題ナキヤト問ヒタルニ彼ハ  
目下別ニ何も言フ程ノコトナシ但向後若シ日  
本軍カ直隸地方ニ進攻スルニ至レハ之カ為メ  
ニ大ニ露清兩國ノ茶葉貿易ヲ妨害スルヤモ計  
ラレス此茶葉貿易ハ露國ノ或ル一部ノ人民

ノ為メニ

林手ハ殆ト生命的ノ事業ナル故ニ此事ハ豫メ充分ニ注

意アラムコトヲ望ムト云ヘリキ止リ其後二月十六日余カ米

國公使ヲ經由シ清國政府ニ向ヒ償金及朝鮮ノ獨立ヲ確認ス

ルノ外尚ホ割地及ヒ通商條約ノ基礎ヲ議定シ得ヘキ全權ヲ有

スハ使臣ヲ再派スルニ非レハ其使事復タ無効ニ歸ス

本文電信ニテ閣議  
判上篇ニ載セリ

トノ豫告ヲ與ヘタル時キ特ニ林外務次官ヲシテ露國公使ニ面

會シ該電信ノ意味ヲ告ケシメ置キ尙其次第ヲ西公使ニモ電訓

シテ露國政府ニ内告セシメタリ其後同月二十四日「ヒトロヴラ」ハ

余ヲ外務省ニ訪ヒ一紙ヲ取出シ是レ露国外務大臣ヨリノ電訓ナ

リト云ヒ之ヲ朗讀シタリ其電文ニ云フ閣下ノ電信ヒトロウツアーカモハ十六日  
林次官ヨリ閣下ヲ呼フ本

國政府ニ發電セシ  
モノヲ云フナハベシ及西公使ノ直話ニヨルモ日本政府ハ朝鮮ノ獨立、償金、土地ノ

讓與及將來兩國ノ關係ニ関スル條約ヲ締結シ得ヘキ全權ヲ有スル清

國使節ノ派來ヲ望ムカ如シ且ツ西公使ハ此事ヲ通知スルト同時ニ

他ノ強國ヘ洩レサハコトヲ請ヘリ就テハ若シ日本政府ニ於テ名

義上及事實上朝鮮ノ獨立ヲ認ムヘキコトヲ宣言スルニ於テ我

政府ハ上文ニ記スル各條件ヲ帶有スル全權使節ヲ派出スヘキコトヲ

清國政府ニ勸告スルコトヲ得ヘク亦他ノ強國ヘモ尚  
我政府ト同一ノ方針ニ出ツルコトヲ勧誘スヘ  
コトヲ得ヘシ我政府ハ日本カ既ニ戰勝ノ後尚ホ無  
期限ニ戰爭ヲ繼續スルコトハ其利益ニアラスト  
信ス因テ余本件ニ関シ日本政府ノ面答ヲ求メ速  
ニ返電アラムコトヲ望ムトアリ此宣言ハ其意味  
稍ハ曖昧ニシテ未ダ露國ノ真意底ハ未ダ測ハレカ  
ラサレトモ彼ハ恰モ日本カ朝鮮ノ獨立ヲ名實共

ニ保託スルニ於テハ露國ニ於テ他事ニ異議ナ  
シト云フ如シ兎ニ角我ニ在テハ斯ク解釋スル  
方煩ハ便利ナレハ余ハ此意味ヲ確定シ置カム  
為メ同月二十七日特ニ露國公使ニ送ハニ左ノ  
覺書ヲ以テシタリ「本月二十四日露國公使閣下  
ヨリ口頭ニテ開陳セラレタハ所ニ依リテ帝國  
政府カ西公使ヘ發送セシ電信中ニ記載セシ所  
ノ講和ノ基礎ハ若シ日本國ニテ露國政府カ單

ニ属望シ居ル如ク見ユル所ノ朝鮮國ノ獨立  
ヲ認ムルニ於テハ右ノ基礎ヲ肯諾スベキコ  
トヲ清國ニ勸告シ且ツ其他ノ強國ヲ勸誘シ  
テ清國政府へ同様ノ勸告ヲ為サシムルコトニ  
片露國政府ノ賛助ヲ得ヘキコトヲ知悉セシ  
ハ帝國政府ノ欣悦スル所ナリ。露國公使閣下  
ヨリ此宣言アリタルニ付テハ帝國政府ハ茲ニ  
日本國カ朝鮮國ニ對スル政略方針ハ更ニ

變

更セシ所ナク帝國政府ハ名實共ニ朝鮮國ノ  
獨立ヲ認メ居ルコトヲ宣言スル。躊躇セサル  
ナリ

抑モ露國政府カ兩國迄彼我ノ意見ヲ交換セム  
提起ノ

口トモ要求シ来リタルハ決シテ外交上一片ノ

儀式ニ非ザルハ疑ヲ容レス若シ我ヨリ今一

層進ムテ胸襟ヲ披キ百事打テ開ケ内議ノ端緒  
ヲ啓キタラムニハ或ハ將來東方ノ局勢上頗

ル面白キ結果ヲ得タルヘキ手或ハ彼我ノ利害早クモ衝  
突シテ因テ以テ當時既ニ外交上ノ葛藤ヲ生シ噬臍ノ悔  
ヲ貽シタルヘキ手共ニ未ダ知ハヘカラサハ事ナレトモ今ニ至  
リ之ヲ推測臆斷スルハ必竟葬後ノ醫評ニ對スハ業ナルヘシ

類

當時余ハ既定ノ廟議ニ從テ可成丈ヶ事務局ヲ日清兩國外ニ  
逸出セシメサルノ主義ヲ持シ露國公使ニ對シテモ勉メテ他日  
ノ實言トナハ如キ言語ヲ避ケタリ然レトモ二月十四日會談  
ノ時ノ如キハ彼ヨリ進テ内議スル所アラムト欲セハ十分ニ之ヲ

喚起スヘキ機會アリシナレトモ彼ハ例ノ通り朝鮮國獨立云々ノ  
外何等ノ新說ヲ提出セサリシ所ヲ見テ露國政府モ此時  
未タ自己率先ノ位置ヲ執リ行動スハ丈ケノ準備アラサリシ  
ニ由ハナハヘシ然レトモ「ヒトロヴラ」ハ勿論露國政府ニ於テモ西面  
會見ノ結果ハ痒所ニ手指連セサル如キ感アリシニ相違ナシ

一國干渉ノ起リタル後「ヒトロヴラ」ハ頻ニ内外ノ人ニ向ヒテ元來  
日本政府ハ他ノ強國ヲ除外シ諸事隱微ニ專斷獨行シタル力故  
ニ彼州ノ情實相通セズ茲ニ許多ノ誤解ヲ生シタリト云ヒ特ニ余ノ所為ヲ  
非難シタリト聞ク蓋シ彼カ士々スハ所ハ即チ此西面會見ノ事ヲ指スナハベシ

然レトモ本文ニ述ヘル如ク二月十四日ノ會見ノ如キハ余ハ寧ロ彼ヨリモ多ク開陳  
ノ談ニ亘リタレトモ彼ハ竟ニ何等事實問題ヲ提出セシコトナカリシ然

ハニ却テ後日ニ至リ露國カ獨佛ノ同盟ヲ得タルニ由リ俄然從來表面公事ニ居タル所ニ着キ  
宸調ヲ生シタル政畧ヲ執リミカ爲メ之ヲ辯護セムト欲シ誤解去々ノ口藉ヲ假ラサルヲ得サ

ルニ至リタルハニシ是亦爾来露國ノ舉動ハ唯々其外交ノ後備

々ハヘキ強力ヲ支那日本海ニ集合スハコトヲノミ是レ急ト

之々ハカ如シ而シテ三月二十四日ニ至リ粟野公使ハ米國國務大

臣ト内話ノ顛末ナリト之々金急電ヤシ所ニ依ル「未國

國務大臣ハ其聖彼得斯堡駐劄米國公使ノ電報大要ヲ

内岳ニ本使ニ告ケタリ近來露國ノ欲望

ハ非常ニ騰昂シ露國ハ現今ノ葛藤ニ乘シ

其勢力ヲ清國ニ加へムトシ清國ノ北部及滿  
州ヲ占領セムコトヲ希望シ日本カ同地方ヲ占  
領スハコト又朝鮮ノ保護者トナハコトニ反對  
スベシ。三萬ノ露兵ハ既ニ清國ノ北部ニ駐屯  
シ漸次其數ヲ増加スハノ形勢アリ。露國ノ  
軍人ハ頻ニ該政府カ日本ニ對スハ友誼的ノ意  
向ヲ翻回ヤシメムト企テ居ハラ以テ遂ニ日露  
兩國ノ利害衝突スハニ至ハコトアラムト云フ

余ハ此電報ヲ接手スル以前ヨリ露國ノ情況

就其甚々不安心ナルコト多キニ由リ屢々西

密ニ

公使ニ電訓シ時々露國ノ意向ヲ探報セシメ

同國

タレドモ當時政府力西公使ニ對シテ云フ所ハ

ヒトロウラシ

タセシ

在東京露國公使

カ當日テ余ニ對シテ云フ所ト

略々同一ニシテ未々何等ノ異狀ヲ見出し得ス

曰ク

三月二十日露京發西公使ノ電報ニ依リル露

國外務省亞細亞局長ノ談話ヲ聞クニ過般

ト

タ

タ

露國政府へ清國ヨリ申込ミタル請望及ヒ之ニ

對スル同政府ノ回答ハ其ニ其意味頗ル迂遠

ニシテ不確<sup>実</sup>ナルモノ、如シ。又本使カ清國大陸

ノ割地ニ關シ新任露國外務大臣ニ向ヒ其意見

如何ト問ヒタル時モ同大臣ハ本件ニ對シ露國

政府ノ意見ハ未タ之ヲ吐露スル能ハザレドモ

該割地ニ對シテハ他ノ強國ヨリ抗議出ツルノ

恐アルベシト云ヘリ右ノ外同大臣ノ談話ノ

模様及亞細亞局長ノ言語ニ依リ之ヲ推察スレ

向ハ異議アリ

ハ露國政府ノ意變セシ所ヲ見ス若シ我カ割

地ノ要求ニシテ臺灣及ヒ金州半島ノ外ニ出

テザレバ露國ハ之ニ對シ敢テ異議ヲ提出セ

ザルベシト信ス要スルニ露國ノ熱望スル所ハ

目下ノ談判ヲ以テ速ニ平和恢復シテ戦争ノ

アリ

終局ヲ見ルニ在リトナシ其後四月十一日

同公使ノ來電ニモ「露國外務大臣ハ今回

日清ノ談判ヲ以テ一旦永續ノ平和ヲ討結スル

一旦

モ其條件ヲ履行レ能ハサルカ為メ再ヒ平和破

裂スルニ至ル如キコトナキヲ望ムトホトニ

言フ

由リ本使ハ我國ヨリ要求スル條件過重ナリト

思ハル、ニヤト問ヒタリ同大臣ハ之ニ答ヘテ

清國公使ハ大陸ニ於ケル割地ハ清國ノ最モ難

澁スル所トシテ又償金ノ額ハ餘リニ過大ナリト

云ヒ居レリ然レドモ露國政府ハ未タ其事情

ヲ詳意<sup>ニ</sup>セサルヲ以テ何等ノ意見ヲ述フル能ハ

スト云ヘリ。本月九日本使カ露國駐劄ノ英國

大使ト面談ノ節同大使<sup>本</sup>目下東洋ノ事件

ニ関レ露國外務大臣ハ稍ハ當惑レ居ルモノ、

如レ日本國ノ要求ハ固ヨリ至當ナリ多分英國

政府ハ之ニ對シテ何等ノ抗議ヲ為サルベシ

ト。<sup>又</sup>本使カ近頃傳聞スル所ニ依<sup>テ</sup>ハ此程露國

陸海軍協同委員會ニ於テ若シ必要ノ場合ニ

降シ

●露國陸海軍ヲ以テ日本軍隊ノ北京ニ進入ス

ルコトヲ防止シ得ルヤトノ疑問起リタリ

該委員會ハ之ヲ陸上ニ防止スル能ハザルモ露

佛兩

國艦隊ヲ佛國艦隊聯合スル時ハ之ヲ海上ニ

於テ防止スルヲ得ベシト決議セタル趣ナリ。本

使ハ露國カ兵力干涉ヲ企ツルコトハ多分乏レ

無カルベシト思ヘトモ之ヲ豫防スル為メ十分

盡カレテ怠ラサルヘシ最モ萬一ノ場合ノ為メ

我海軍ニ於テ必要ノ準備ヲ立テ置カレムコト

最モ肝要ナラムトアリ以上栗野西兩公使ノ來

電ハ何レモ李鴻章派來ノ事既ニ世界ニ發露

シタル比ナレハ歐洲各國就中露國カ熱心ニ

事局ノ進行<sup>ニ</sup>注視<sup>目</sup>シ居タルナルベク特ニ露國

ノ如キ國柄ニ於テ其軍人社團ノ勢力カ如何ニ

其政府ヲ動カシ得<sup>タル</sup>トキヤ<sup>ハ</sup>推察ニ餘リアリ左レ

ハ露國政府ハ其軍人敵愾ノ氣<sup>盛</sup>日々旺盛ナルト

竟ニ

用時、日本力清國大陸割地ノ要求ヲ絶念スヘ

事諸國輿情皆人ノ聲ヲ容ルヤキ

キ色ナキトヲ視テ中心甚タ不安ナキハ感覺ヲ抱

ナルシ

キ居タルベキモ然レドモ此時迄ハ之ニ對シテ

未タ

執ルベシトハ確

未、何等確案ノ方策ヲ決定シ居ラザリレカ如

シ現ニ四月九日西公使が露國駐劄ノ英國大使

面晤ヤシ時ニ同大使カ西公使ニ告ケテ目下

東洋ノ事件ニ對シ露國外務大臣ハ稍々當惑レ

居ルモノ、如シト云ヘルハ幾分カ其消息ヲ窺

フニ足レリ

斯ク露國政府ハ内、其軍人ノ熱動ヲ鎮靜スルニ兩難シ外、當ニ東方局  
面ノ危勢逼迫スルヲ視ハノミナラス、尚ホ歐洲強國ノ關係如何ニ顧ミサ  
ハヘカラス内外事情互ニ相制シテ彼等ヲシテ尚ホ其真意底ヲ隱  
蔽セサルヲ得サリシメタリ故ニ我國ニ對シテ遼東半島割地ノ故障  
ヲ云ハトスルニモヒトロヴラハ余ニ向テ諛半島ノ割地ハ日本ノ為メ  
不利ナルヘシトカ或ハ歐洲強國中ニ異言アルヘシトカ云ヒ又「ロバノ  
公爵カ西云使ニ對シテ歐洲強國中ニ故障アルヘシトカ露國駐劄

ノ清國公使カ難波シ居リトカ云ヒ其故障ノ理由ヲ以テ全  
ク他人ノ事ニ推委シ勉テ自家ノ本心ヲ發露セサリシ  
ニ下ノ關係約カ一面世上ニ顯ハレ獨佛兩國トノ提挈成ハヤ  
彼等ハ其  
事ヲ猛然假面ヲ脱却シ爪牙ヲ發露シ来リタル次第如何ト云  
ヘハ  
其事情ハ五月八日露京發西特命全權公使ヨリ余ニ  
報告シタル機密信ニ於テ頗ハ明詳ナリ故ニ今其書ノ長  
文ナハニ拘ハラス左ニ之ヲ登錄ス

此間當國ノ佛獨ト共同シテ我ト清國トノ戰

争、結局ニ干渉シタル事件ニ付テハ拙官ニ

モ此地ニ於テ出来ル丈ケノ力ヲ盡シテ我權

利ヲ維持スルニ勉メ候得共遂ニ其意ヲ達セ

サリレ義ハ追々電信ヲ以テ申進置候通り

ニテ甚々遺憾ニ存候然レ一國運ノ興隆ニ

當リ百事進歩ノ際斯ル困難ヲ見ルモ亦珍事

ニ非ス且我ニ於テハ進マル、處迄進ミ居テ

ル、處ニ止リ既ニ餘念ナキ義ニ候得ハ今更

不出来ノ往事ヲ説クモ無用カト存候得共當

國ノ邊ニ此干涉ニ決シタルハ金ヲ獨逸ノ同

盟ヲ得タルニ由リシモノト被存候譯ハ夫迄

ハ英既ニ干涉ノ意ナク佛亦事已ニ還シトシ

テ遂巡シ當國政府部内ニ於テモ威海衛ノ陷

ル迄ニ干涉スヘキ筈ナリレニ今日ニ至テハ

假令ヒ佛ト共ニ海軍ヲ以テ日本ニ迫ルトモ

之ヲ支持スルノ陸兵ナキ以上ハ如何トモス

ル能ハサルヘシトノ説ヲ持スル人多カリシ  
ハ事實ニテ現ニ其連中タル拙官ノ知人等モ  
我ノ大陸ニ就テ土地分割ノ義ハ幾ント既定  
ノ事ト認居又外務大臣「ロバノフ」氏トテモ當  
時ハ同様ニテ例ヘハ我要求條件ノ大略ニ関  
シタル閣下ヨリノ電報此地ニ達シタルハ四  
月四日ニテ有之候處之ヲ同氏ニ示シテ御訓  
令ノ趣ヲ傳ヘシ時ノ如キハ同氏モ幾ント納

得シ地圖ヲ取出シテ金州半嶋ト云ヘハ何程  
ノ區域ナルヤト問ヒシニ依リ拙官ハ金州廳  
ノ印アル北ノ方ノ入海ニナリシ所ヨリ東ノ  
方ヘ指畫シ凡ソ此位モノナルベシト其南部ノ  
一部ヲ示レタルニ同氏ハ弥々安心シタル風  
ニテ然ラバ其趣ヲ添ヘテ帝ヘモ示スヘキコ  
由リ是程ノ區域ナリト拙官ヘ手記シ呉レト  
ノ事ナリシモ拙官ニハ内實其ヨリモ多カル

ベシト思ヒ居候故右ハ逐付確定ノ報ヲモ得  
ヘキニ依リ其時ノ事ニ致スベシトテ差扣ヘ  
タル事有之候處（後々金州一部ヲ爭フ時ニ  
之ヲ引用レタルモ「ロバノ」氏賛成ハセサリ  
シト答ヘレニヨリ黙諾ニハ相違ナカリシト  
詰メタルモ事言辭ノ爭論ニ終レリ）是等固  
ヨリ同氏ノ故意ニ出テレ事ニモ非スレテ全  
ク當時同氏モ既ニ致方ナシト諦メ居タルヲ

示スモノト思ハレ候然ルニ其時分ノ電報、  
猶干涉アルベシト申添ヘ置タルハ海陸軍部  
内ニハ依然干涉説アルヲ聞居候故念ノ為  
メ報シ置候次第ニテ有之何ニセ下ノ関條約  
ノ成リシ電報達スル迄ハ當地ニ於テハ別ニ  
変リシ模様モ相見ヘス候然ニ右ノ電報達ス  
ルト間モナク獨逸モ露佛ニ共同シテ此條約  
ニ抗スヘシトノ説亦傳ハリ諸新聞紙ハ勢力

ヲ得テ同音ニ干涉必要ヲ說出シ愛國の感心

情ヲ刺戟シテ反對說ヲ攻撃シ拙官ノ調和策

モ之ニ對シテハ何ノ効モ見サルニ至レリ然

シ四月十九日迄ハ政府ニ於テハ猶ホ三國相

談中タリト見ヘ外務大臣モ未タ決定スル所

ナカリシ趣ハ當日電報致置タル通りノ趣

右ノ相談モ急ニ纏マリシモノト見ヘ其日カ翌

日カニハ遂ニ各其在東京公使ニ訓令ヲ傳フ

ルニ至リシ由ニ候

右干涉ニ関シテ拙官ノ當國外務大臣ト談判

中拙官ヨリ若シ當國ニ於テ日本ヲシテ大陸

ニ土地ヲ得セシメサル決定ナリレナレハ是

迄幾回モ之ニ関シテ話シタル事アリレニ何

故ニ豫メ早ク之ヲ言ヒ出サバリレヤトノ拙

官ノ詰問ニ對シテハ大臣「ロバノフ」氏ハ實際

日本ノ彼土地ヲ押領スヘシトハ思料セラレ

サリシト答へ垂細垂局長ハ右ニ付テハ「ヒト  
ロヴヲ」公使ヲレテ公然之ヲ問ハレノタルモ  
東京ニ於テハ其時ニ當テ自ラ之ニ答フベシ  
トテ之ヲ言フヲ欲セサリシト申居候得共右  
ハ孰モ後日ノ口實ニ過ギスレテ其内實彼等  
モ自ラ獨逸ノ共同シテ干涉ノ勢力ヲ得ヘキ  
ヲ思料セサリシ故事ノ結果如何ヲ顧慮シテ  
答ヘルヲ得ス隨テ之ヲ言フヲ得サリシモノ

ニテ有之候義ハ拙官ノ今ニ信シ居ル所ニ候  
右獨逸ノ舉動ノ意外ナリシニハ當國人迄モ

驚キ候次第ニテ有之候處今其此ニ決シタル

所以ト云フ一説ヲ聞クニ同國ニ於テハ兼テ

露佛同盟ノ親密ナルヲ嫌ヒ居ル處ニ本年夏

獨國ヲキルニ於テ催ス新溝渠ノ開業式ニ

モ佛ハ其軍艦ヲ派スルニ意ナキヨリ益々之

ヲ憂ヒ居タルニ露之ヲ周旋シ遂ニ獨ヲシテ

其所望ヲ達セシメタリ折シモ日清戦争結  
局難問起リ英退キ露窮スルヲ見獨之ヲ好  
機會トレテ還カニ之ニ投シタルハ東西洋利  
害關係ノ大小ニ應シ露佛ニ謝意ヲ表シテ仲  
間入りノ策ヲ行ヒシニ外ナラスト其真偽ハ  
審ナラス候

目下ノ處此地ニ於テハ日本政府ノ英斷ニ由  
テ東方ノ一大問題モ魚異ニ決セシトテ上下

安心ノ状況ニ候得共政事家連中ハ日本ニ於

テ遼東半島ノ代リニ何ヲ要求スヘキヤ且ツ

之ヲ放棄シタルハ名計リニテ實ハ其土地ヲ

永久ニ占領スルノ策ヲ行フニ非スヤトノ問

題ニ猶懸念シ居リ且ツ我ニ對スル三國共同

ノ關係モ未タ全ク了レリトセザルノミナラ

ス前文「ギリシ」ニ於ケル各國ノ軍艦會同式

ノ噂モ追々話頭ニ上ル際ナレハ或ハ獨逸ノ

仲間入午段ノ前説モ事實ニテ善ク其意ヲ達

シ一旦共ニ乘出シタル東方論ニハ三國終始

相提携シ遂ニ朝鮮獨立ノ實行論迄ニモ立

入ル様ナル事ナレトモ云ハレサルニ付テハ

若シ我ニ於テ弥々遼東半島ヲ占領スルニ意

アリ朝鮮モ何處迄モ我勢威ヲ以テ之ヲ固

ムル積リトセハ我ニ於テハ更ニ必要ナル軍

備ヲ為スヘキハ勿論可成ハ今テニ迄ニテ英國

ニ結托シ他日其助力ヲ得候様ニ致シ置度モ  
ノト存候

今般ノ談判中拙官最後ノ手段トシテ露國ノ  
東方ニ於ケル將來ノ利害ニモ論及シ何カ他  
ニ所望ヲモ云ハレメント試ミ候得共大臣「ロ  
バノフ」氏ハ「ウラジホストック」トテモ近來割氷  
器械出来冬中海陸交通全ク絶ユル譯ニモ非  
レバトテ目下朝鮮ニ於テ凍ラザル港ヲ所望

スル事モナキ様ナル意味ニテ答へ之ニ乘ラ  
ス候右ハ真面目ニハ受ケラレス候得共仮リ  
ニ目下其所望ナレトシテモ日本ニ於テ表面  
朝鮮ノ獨立ヲ唱へ内實自己ノ威勢ヲ其國內  
ニ固ムルハ亦露ノ好マサル所ニシテ且ツ目  
下別ニ計畫スルニ非ルモ追々ハ露國自カラ  
滿州ノ東北部ヨリ南部ノ海岸迄モ其威勢ニ  
服屬セシムルノ企望アルハ今回ノ事件ニ由

テ判然シタル義ニ付若シ朝鮮獨立ニ付何カ  
露國ニ不利ナル個條ヲ有之候ハゞ其委細見  
ハル、ニ隨ヒ必ス苦情可申立ト存候條此段  
モ御參考ニ供レ置候故具

<sup>此</sup>右面公使 書面ハ昨年五月廿日我政府ヨリ最

後ノ回答ヲ露獨佛三國政府ニ與ヘタル後僅

西公使ヨリ

ニ面三日間ニ郵送シタルモノナレトモ書中ノ

所論明晰詳密ニシテ其推測臆量ニ係ルモ

ノト雖也今日尚ホ歴々其見頭ノ誤チサリシヲ

証スルハ流石ニ同公使外交ノ練熟ヲ視ルベキ

ナリ

獨逸カ何故ニ此表面上餘、自己、利害、關係

トモ問題ニ就キ他人ノ為メ火中ノ栗ヲ拾フ如ク

キ行動ニ出テ而シテ

宿

國ヲレテ遠然其異志隱謀ヲ無遠慮ニ暴暴ニ發

俄

蓋シ

セシムルニ至リタルヤトホト其原由ハ前記

西公使ノ書中ニ言フ所ニ外ナラサルベレ而シ

追ヒ 夕 示

時 歩武 詳

テ今マ少々事局ノ源頭ヲ論述スルヲ要ス

ルモノアリ抑モ獨逸政府ハ日清事件ノ破頭ヨ

劈

リ其拳動頗ル曖昧模稜ナリレ彼等ハ屢々我國

表 比十カラ

ニ對シ同情友誼ヲ存スト云ナリ雖モ其臣民カ

續々清國ニ向ヒ戰時禁制品ヲ輸入シ其非職士

官カ公然清國軍事ニ加勢カシ居ルモノアルモ

獨逸政府ハ之ヲ見テ視サルカ如キ風ヲ裝日其

シ

間唯々自己ノ利益ノ一是レ計リ居タルモノ

而シテ

ノ如シ昨年十一月ノ比英國政府カ聯合干涉ノ

事ヲ歐洲各國ニ提議スルニ方リ獨逸ハ首トシ

テ之ヲ拒絶シタリトテ其後類ニ我國ニ對シ德

シ然

色アリタハドモ英國ノ聯合干涉ハ英國ノ輿論

ニ於テスラ之ニ反對セレ程ナレハ到底實際

ニ成立ツベキモノニ非

ラス

獨逸カ此時英國  
ノ提議ヲ拒絶レ

リタルハ彼等カ公言スル如ク單ニ日本ノ為ニ計  
モノナルカ將タル別ニ自ラ為メニスル可

アリレカ其痕疑フベキモノナキニ非ス近來獨  
逸ハ東洋ノ通商上類ニ英國ト競争スハレドモ

國ヲヨリ未タ英國ニ駕凌シ得ヘキ地位ニ達セザルヲ以テ英國カ東方ノ局面ニ其勢力ヲ增長セ

ムトスル事ハ何事ニ自然ノモ勢ナリ然レハ今モ速ニ英

國カ恰モ東方問題ニ來主ムタル如キ位地ヲ占テ日清ノ戰局ニ容喙シ來

嫉妬ノ念ヲ起スベキハ關係ニ當リ然ノ事ナリ之ニ及シテ露國カ政治的ノ關係ヨリ其勢力東方ニ

震ナハラスト露國一ヲモ獨逸存ニ為東方ノ事ノ障害ナキナ

ラシ抱ムカサル却ニモ其歐洲サル均勢ニ上得策ナリト曩

ニ英國附隨スル議ニ反對ルセ所以ハ正ニ今日露國ノ驕

彼此共ニ自利的動機ニ發シ來レルモ勤ニシテ其間我國ニ對スル恩怨ノ感情アリテ勤キタル

モノニアシ又本年三月八日在東京獨逸公使ハ林

外務次官ニ面晤シ

當時余ハ旅行中ナリシニ由リ其政府  
林ニ面晤シタヘコトト知レシ

其政府

ノ訓令ト稱シ左ノ口上書ヲ朗讀セリ曰ク「獨

逸帝國政府ハ講和ヲ締結シ且ツ其條件ノ

適度ナラムコトヲ日本政府ニ勸告ス、清

國ハ歐洲諸強國ノ干涉ヲ請求シ居レリ

二三強國ハ大体上之ニ同意シ且ツ互ニ

約束スル所アルカ如シ而シテ是等諸國

カ其干涉ノ報酬トシテ清國ニ要求  
スルモノ、廣大ナクハ日本ニ得ハ  
所僅少ナルハ故ニ日本ハ右等干涉ヲ  
受ケサハ間ニ相當ノ締結ヲ為スコト最  
モ得策ナラヘシ。獨逸政府カ接受シタル  
報告ニ依レハ日本ハ清國大陸ニ於テ  
割地ヲ要求スルカ如シ是レ必ス干涉  
ヲ惹起スルノ媒ナラヘシ。因テ余ハ

直ニ林ニ電訓シ獨逸ニ使ニ對シ其好意

ヲ謝ヤシメ置キタシトモ此時我廟議ニ於テ

日清講和ノ條件ハ既ニ確定シタルノ後ナレハ

亦容易ニ之ヲ變改スヘカナハノミナス從來日清事

件ニ關ス獨逸政府ノ言行往々依信シ難キ感覺ヲ有シ

居ス際ナレハ其勸告ニ對シ實ハ餘ニ事ヲ措カサリシ是レ

彼等カ他日ニ至リ日本カ此勸告ニ有ハ所ナク自儘ナレ

振舞ヲ為シタル故ニ遂ニ三國ノ干涉ヲ招キタリト喋々セ

リ然レトモ當時我政府ニ向ヘテト類似ノ勸告ヲ爲シタルモノ  
 豈ニ獨リ獨逸ノミナラムヤ且ツ假令我ニ在テ獨逸ノ勸告ニ  
 對シ或ハ謝意ヲ表スコト不足ナリシトスハ之カ爲メ獨逸  
 フニテ俄ニ三國干涉ノ首唱者トナリ露國ハ兎テ角テ其舊  
 怨源キ佛國トサヘテ相聯合シテ日本ニ反對スル迄ニ豹變  
 セシムルノ理由ヲナキ事ナハ故ニ余ハ初ヨリ獨逸ノ  
 豹變ハ必ス別ニ歐洲政略ノ關係ヨリ所謂背腹ニ代ヘ  
 難シトノ俗諺ニ均キ事情ノ存スルナキ非スヤト疑ヘリ且ツ此豹

変スルニ至リタル事頗ル急遽一閣ニ成立シ

タルモノト見ヘ四月六日ヲ以テ青木公使ハ余

電稟シテ

ニ對シ講和條件ハ已ニ決レタリ獨逸政府ハ

云ヒ

別ニ重要ナル異議ナシト電稟シ又同月十二日

ニモ尚ホ同公使ハ講和條約ノ條件ハ歐洲新聞

上評判宜キ方ナリ特ニ償金ニ付テハ仮令其金

額

額今一層鉅大ナリシモ決シテ異議ナカリシナ

ルヘシ又割地ノ要求モ貴大臣ハ固持シテ勳カ

レサル方宜シカラムト電報シタル程ナルニ其

翌日十三日ニ至リ同公使ハ余ニ急<sup>ハ余ニ急ニミテ</sup>電ヲ曰ク「若シ

日本政府ニシテ清國ヨリ特別ナル經濟的利益

ヲ求ムルニ於テハ獨逸ト雖<sup>凡</sup>亦之ニ反抗スベ

シ獨逸ノ懇切ナル意思ニ對シ日本ハ諸事詳

カニ獨逸政府ニ通知スベキ責務アリ因テ一

般ノ激昂ヲ和クル為メ本使へ報告ヲ與ヘラレ

タレトアリテ僅々一日ヲ隔テモ前後電信ノ

意味斯く追ニ矛盾スルハ抑モ何故ナルヤ是レ

将々獨逸カ其政略<sup>上機</sup>變轉ハ必要ヲ生シタル一南

ラスミテ何ソ而シテ

北ニ非ヤ<sup>ヤ</sup>ヤ右電文中ニ特別ナル經濟的利

益云々ハ此頃恰モ彼ノ「フアン、フラン」ド一流ノ

輩カ清國ノ為メ獨逸政府及社會ノ或ル部分ニ

其

ヲ露布シ居タル際ナレハ

對レ頻ニ遊説シ<sup>其</sup>屢々<sup>ヲ</sup>謬説<sup>ヲ</sup>トシテ同政府ハ取

トシテ之

敢ヘス其説ヲ利用シ以テ一時假面ヲ掩ヒタル

ナルベシ

過キザル<sup>ト</sup>元來東方亞細亞ニ於テ常ニ高

業ノ壟斷ヲ是レ謀ルキハ英國ニ若クモノナ

シ而シテ<sup>カモ</sup>英國スラ今回ノ講和條件ヲ見テ頗ル

好感<sup>内</sup>情ヲ抱キ居リシ程ナレバ獨逸ノ通商上

何等ノ妨障<sup>害</sup>アルベキ筈ナキハ勿論ノ事ナリ因

テ余ハ同月十九日ヲ以テ青木公使ニ向ヒ日本

カ清國ヨリ得タル通商上ノ利益ハ最惠國條款

ニ依リ各國ノ均霑スル所ナリ故ニ他ノ邦國ハ

頗ル好感<sup>内</sup>情ヲ抱キ居ルモノアリト聞ケルニ

獨逸ニ於テム却テ之カ為メ一般ノ驚惧ヲ惹  
起シタリトノ貴電ニ接シ余ハ甚々疑訝ニ堪  
ヘスト回電シタリ果然獨逸カ通高上云々ノ  
苦情ハ一片ノ口實タリシ同月二十日伯林發  
青木公使ノ來電ニ「貴大臣ノ電信ヲ接受シ  
タル後獨逸外務大臣ニ面見セシニ該大臣  
ノ意向ハ俄ニ豹変シタルカ如シ同大臣云フ日  
本ハ旅順口ヲ押領スル為メ必ス巨大ノ障害

故

ヲ受クテ奉ルヘシト因テ本使ハ奉天省南部ヲ占領スルハ朝鮮國ノ獨立ヲ鞏固ナラシムル為メ必要ナルノミナラス若シ日本カ其軍人ノ鮮血ヲ以テ略取シタル領土ヲ保持スル能ハサレバ大ニ失望スヘシ且ツ獨逸ニ於テハ日清交戦中常ニ日本ニ對シ表彰セラレタルト同様ナル懇篤ノ政略ヲ此際ニモ取ラレムコトヲ望ムト述ヘタリ同大臣更ニ其語ヲ進メ獨逸

ハ昨秋以來已ニ日本ニ對シテ充分ノ厚意ヲ彰表

シ歐洲諸國干涉ノ企圖ヲ打破シ其他種々ノ方

法ヲ以テ日本ヲ助ケタリ然レモ日本ハ之ニ對

シ何等ノ報酬ヲ為サス獨逸ノ利益ヲ増進セ

ス刺ヘ獨逸及其他歐洲諸國カ清國ニ對スル

通商上ノ關係ヲ顧ミスレテ擅ニ平和ノ條件ヲ

專定セリ因テ獨逸ハ最早歐洲諸國共同運

動ノ外ニ立ツ能ハス、、、、且ツ日本ハ

平和條約中通商上ノ條件ニ依リ不當ノ利益ヲ

得タルカ如<sup>シ</sup>ト云ヘリ本使ハ各國共ニ最

惠國ノ待遇ヲ享有スルカ故ニ清國ニ於テ日本

ト同一ノ利益ヲ有スルコト勿論ナルベシト答

ヘタルニ同大臣ハ唯ニ日本<sup>ハ其</sup>ノ勞働賃銀低廉

ノ利ヲ有スルノミナラス其國境相接近シ居ル

故ニ此度ノ條約ニ據レハ日本ハ竟ニ清國ニ於

ケル歐洲諸國ノ通商貿易ニ對シ實際無比

ノ競争者トナルヘシ且ツ日本ハ元來外交上ノ

慣例ニ背キ自儘ノ處置ニ出テタリト云ヒ大ニ

之ヲ非難シ世界ハ決シテ日本國ノ希望ト命令

トニ依テ左右セラル、モノニ非スト云ヘリ。本

使以為ク日本政府ハ我獨逸ノ厚意ニ答フル是迄

コトヲ忌リタル為メ今ヤ獨逸ヲレテ日本ニ反

對レテ他ノ強國ト共ニ運動スヘレト言明スル

ニ至ラレメタリ加之獨逸ハ曩ニ已ニ平和ノ

條件ヲ輕減セムコトヲ日本駐劄ノ獨逸公使

ヲ以テ貴大臣ニ勸告シ以テ清國ヲ保護セリ

今日獨逸國ノ姿勢甚タ容易ナラス故ニ之ニ

對シ相當ノ處置ヲ執ラレムコトヲ希望スルト云

フ右電文中日本ノ勞力ハ低廉ナリ日清兩國ハ

境土相接近セリ以テ歐洲各國ノ商業ヲ妨害

ルベシ

ト云フ如キ苦情ハ殆ト見戲ニ類シ一顧ノ値

ナレ而シテ獨逸カ昨秋以來我國ニ對スル好意

ニ對シ我ヨリ十分ナル報酬ヲナサ、リシト云

ヒ我國カ獨逸及ヒ歐洲各國ノ清國ニ於ケル通

商上ノ關係ヲ顧ニス平和ノ條件ヲ專定セリ

ト云フヲ口實トシテ最早歐洲諸國ト共同運動

ノ外ニ立ツ能ハスト之ヲ力如キハ其論據頗ル

是

議論

矛盾シ薄弱ヲレテ取ルニ足ラザル

議論

抑

彼等カ歐洲諸國聯合干涉ニ反對セリト

云ヒ在東京獨國公使ヲシテ日本政府ニ勸告セ

シメタリト云フハ上来既ニ論破シタル如ク深

ク獨逸ノ恩義トシテ之ヲ感謝スヘキ程ノ事ニ

モ非ス良シヤ我國ニテ之ニ對シ感謝スル一可一輕

分ナラヤ

カリシトスルモ之カ為メ獨逸ハ露佛ト提契

ヲシテ

シ兵力ヲ以テ我ニ迫ル迄ニ憤怒スヘキ筈モナ

セシム

キコトナルニ青木公使スラ尚ホ我政府ノ怠慢

解シ難キ

ヲ咎ムル如キ口氣アルハ甚タ疑詬ノ事タリシ

余カ右青木此電信ヲ接手シタルハ怏モ下ノ関

東の詳ニ

條約調印後廣嶋ニ歸來セシ時ニシテ歐洲各國

ノ近況キ付未レ詳表サシ事情ヲ采心サリリシモ

スト要ト

獨逸カ斯ク俄ニ豹変スルト事ニハ其表面云

己ムノ

々スル所外必ス別ニ何事カ自ラ回避シ能ハ

サルノ事情ノ存スルアルベキナラムト疑ヒタ

レバ此際獨逸ニ對シ其決意ヲ翻ヘサセシメ

ムトスルモ其詮ナカルベシ寧ロ暫ク將來彼

等カ如何ニ運動シ來ルヲ待ツニ如カスト思ヒ

タリ果然余ノ疑團ハ平素獨逸ト最モ親密ナ

ル他ノ歐洲ノ一國ヨリ暴露レ来レリ即チ四月

二十七日在伊高平公使ハ余ニ電稟シテ申ク「本

スル所ニ依レバ

使ハ講和條件ニ反對スル獨逸ノ意向ニ関シ伊

國外務大臣ト長時間會晤セリ其ト即同大臣ハ

ロシヤ

内密ニ本使ニ告ケテ「ロシヤ獨逸ハ初メ伊國ノ協

同ヲ望ミタレドモ伊國ハ之ヲ謝絶シタリ今更

獨逸ヲレテ斯ク變動セシメタル同國ノ底意

ハ全ク因テ以テ歐洲大陸ノ政略上佛露ノ同盟

ヲ遮断シ遂ニ佛國ヲレテ孤立ノ位置ニ立タシ

メムト欲スルニ在リ然レモ獨逸カ餘リ深ク露

結托

國ト合同シテ威カヲ逞クスルニ至ルハ亦之ヲ

ス

默視スヘカラサルコトナレバ或ル程度ニ於テ

スルヲ要

其勢力ヲ制限セサルヤカラス斯ル事情ナルヲ

同

以テ若シ英伊米ノ三國ヲ結合シテ日本ニ味方

スルニ至ラシムルコトヲ得ハ干涉問題モ亦

由々敷大事ニ至ラス、終局ハ心ヲ得ヘシ然

レ氏輩、此事ヲ為サムトセハ日本ヨリ先ツ英

伊米三國ノ協同ヲ請求セザルベカラス然ル時

ハ伊國ハ欣然英米兩國ヲ引誘スヘシ元來今回

ノ事件ハ頗ル狂言的ノ出来事ナル故ニ獨國ト

トリプルアリセス

伊國ハ毫モ三國同盟ニ抵触セスレテ彼此

反對ノ位置ニ立ツヲ得ベシト云、伊國外務大臣

ノ言諾ハ甚々明瞭ナリ獨逸ノ豹変ハ實ニ露

佛國係ノ益、熱度加ハラムコトヲ恐レテ躬自

ラ其間ニ投シテ之ヲ冷却セムト欲シタルニ在

リ

率口

死結

ト↓是レ自家半命的ノ事情ニ驅ラレテ亦他

顧スルニ違ナカリシナルベシ畢竟獨逸國ノ露

佛ト結合シタルノ底意ハ所謂狂言的ノ出来事

ト左レハ伊國外務大臣カ毫モ獨擅伊三國

同盟ニ抵觸セズ彼此反對ノ位置ニ立ツヲ得ヘ

シトノ一言ハ外見甚タ奇異ニシテ且ツ餘リニ

大膽ナルニ似タレドモ歐洲外交上虚々實々ノ

間是等ノ方略ハ亦<sup>久勢</sup>有<sup>出来</sup>得ヘカラザルコトニ非

ルベシ

獨逸カ露國ニ同盟シタル狂言的外交ハ伊國外

ノ為メ者

務大臣ノ古頭<sup>獨逸</sup>ヨリ説破セラレタルノシナラス

獨逸

更ニ同國皇帝ノ代表者タル英國駐劄獨逸大使

ノ古頭ヨリ

セハラレタリ

カ自ラ本ヲ白状スルキ事<sup>セハラレタリ</sup>レリ四月三十日加藤

公使ノ來電ニ依レハ英國駐劄獨逸大使ハ其

書記官ヲ派シ本使ニ面晤ヲ求メリ因テ本使ハ

昨二十九日獨逸大使ヲ訪問セリ其節同大使

ハ露國ノ感覺益々激昂シ佛國ハ今トナリテ

ハ最早同盟ヲ去ラムト欲スルモ之ヲ為シ能

ハサルノ位置ニ陷レリ獨逸ハ是迄ハ勿論今

尚ホ  
雖先日本ニ對シ常ニ友情ヲ懷キ居ル

カ故ニ圓滑ニ本件ヲ結了セシメムト欲スル情

甚タ切ナリト云ヘリ本使ハ若シ獨逸キレテ斯

ク迄ニ日本ニ對シ友情ヲ存セラル、コトナレ

干渉ニ加セラレ

バ何故ニ今回ノ同盟ヲ布トタルヤト詰問セ

シニ同大使ハ夫レトハ明言シ得ザレドモ暗ニ

歐洲關係ノ政略カ獨逸ヲレテ此同盟ニ加ハラ

サルヲ得サラシメタルハ真實ノ原因ナリト云

之ニ加シ

ヒ同時ニ獨逸カ此同盟ニ加トタルハ日本ノ

為ニ僥倖ナリト何トナレバ獨逸ハ露佛兩國ニ

説キテ大ニ彼等ノ要求ヲ輕減セシメタルコト

あに

アレバナリト告<sup>ル</sup>且ツ同大使ハ日本ハ兎モ角遼

東半嶋ヲ一時占領スルヲ以テ満足シ置クヘシ

勸告<sup>シ</sup>而シテ一時ノ占領ハ將來何時モ永遠

ノ占領ニ变换スルヲ得ヘキモノナリト云ヒ其

幾多ノ先例ヲ示シ若シ日本カ該半嶋ヲ永遠占

ヲ

断念シ

其他

領スルコトサヘ止メタル上ハ何等ノ條件カニテ

モ

處分ニ就テ

日本カ承諾シ得ヘキ取捌方ヤ<sup>ハ</sup>同大使ハ此

之ヲ

ニ

事ヲ本使ト共ニ結了スルコトヲ盡力スヘキ旨

ヲ本國政府へ申し立ツベシト附言セリトアリ

電文中ノ言詰ハ決シテ獨逸大使一己ノ私言ニ

非ルコト甚タ明ナリトモ獨逸政府カ何故ニ適

當ノ行徑ニ由ラス其駐英外交官ヲシテ駐英

日本外交官ト遼東半島ノ問題ヲ協議セシムト

シタルカ頗ル疑斷スヘキ事ナヲ不<sub>レ</sub>加之彼ハ

夫トハ明言セザレドモ暗ニ歐洲關係ノ政略カ

獨逸ヲシテ此同盟ヲ加サルヲ得サラシメタ

ル眞實ノ原因ナリト洩ラシ又日本ハ兎モ角モ  
遼東半嶋ノ一時占領ニ満足シ置クベキナト

勸告シ一時占領ハ何時モ永久ノ占領ニ交換ス

助言ノ

巧逸

ルヲ得ヘシトノ前例迄モ示シタル如キハ彼等

商軍

ハ露佛リ同盟シテ遼東半嶋割地ニ抗義ヲ起シ

アル間ニ尚ホ且ソ日本ニ對シ多ク少ク歎心

ヲ博セハ其底意甚ホ奇怪ナルヲオモ

當時

キヤニテ露國ノ一同盟者タルノ位置ヨリ云ヘ

ハ真<sup>ル</sup>ニ獅子身中ノ蟲ニ<sup>類セ</sup>アザサル乎

佛國モ亦歐洲閥係ノ政略上否ナ<sup>是コソ</sup>邪ト其國家ノ

生存上一日モ露國ト離睽シ能ハサル<sup>位置</sup>

ハ固ヨリ今日ニ始リタルニ<sup>コト</sup>非ス而シテ日清

交戦ノ初時佛國カ我國ニ對スル好情ハ敢テ獨

逸ニ讓ラス余ハ佛國ノ言行或ハ獨逸ヨリモ更<sup>寧ロ</sup>

ニ真摯ナリシカ如クニ見受ケタリ佛國公使ア

ルマシハ屢々日佛<sup>將來</sup>將來ノ同盟ヲ説<sup>必要</sup>キ居リシノ

しナラス嘗テ余ニ對シ露國軍艦カ續々斯蘇

海峽ヲ經過シ東方ニ集合スル意底甚々注意ス

ベキ事ナラント忠告シタルコトアル程ナレバ

今回ノ三國干涉ニ於テモ佛國政府ハ獨逸ノ

如ク露國ノ意ヲ迎ヘテ率先ヤス其始ハ稍躊

躇シ居タリシハ西公使ノ書面中ニモ見ヘタレ

ドモ今ヤ獨逸カ突然トシテ露國ト聯合スルカ

アルヲ見テ固ヨリ冷眼ニ傍觀スル能ハザリシ

ハ誠ニ當然ノ事ナルヘシ其後「アルマン」カ余ニ

對シ日本政府ハ今回佛國ノ舉動ニ関シ其真底

意

ヲ推察セラレ居ルナラムト云ヒシハ真ニ彼ガ

真話ナルベシ

實情ヲ知ルヲ疑フベカキト

斯ク露國ハ意外ニモ獨逸ソ同盟ヲ得之ニ加フ

ルニ從來ノ關係淺カラザル佛國ヲモ誘引シ得

タリ此聯合干渉ノ相談ハ實ニ就シタリ中旬ヨリ始

ヒルコトハ青木、西公使ノ電信及是ニ於テ露國ハ  
ヒ書簡ニ依リ之ヲ知ルベシ

自巳ノ  
營ニ其東方ニ於ケル勢力ヲ増加シタルノ如ナ

ニ至リ  
ラス歐洲ノ關係上亦毫モ内顧ノ虞ナキヲ感シ

ヲ即テ四月二十三日ヲ以テ我政府ニ異議ヲ

提起シ來リタルニ至リタルヤ前日ノ姿勢頗ニ

一変シ亦果ハ才ヲ藏ナキ其節ヤ短其勢ヤ險ニ

シテ傍若無人ニ猛然示威運動ヲ始メリ當時

日本各港ニ滯泊スル露國軍艦カ二十四時間何

時モ出帆スル準備ヲ為スヘシト命ヲ受クル

ヤ各艦ハ孰レモ昼夜共ニ濃煙ニ着火シ其乗組

恰モ

員ノ上陸ヲ禁シ戰鬪作<sub>レ</sub>刻下ニ起ルカ如キ形

示

勢ヲ顯シ又浦潮斯德ニ於テハ急ニ豫備兵ヲ召

論セス之ヲ

集シ其高賈農民ヲ驅テ盡ク軍伍ニ復役セシメ

相シ

東部西伯利亞總督ノ管下ニハ現役豫備人合セテ

軍ヲ集メヨシ

去ニ

五萬ノ兵ハ何時モ出師準備整正ヘリト誑<sub>レ</sub>キ<sub>レ</sub>

特ニ同港軍務知事ハ二橋貿易事務官ニ通

牒シテ浦潮斯德港ハ臨戰地境ト看做スヘキ

旨本國政府ヨリ命令<sup>アリ</sup>セラルタリ因テ同地方在

留ノ日本人ハ三「ウエルスト」以内ニ歸住シ再度

ノ通知次第何時モ立退クヘキ準備ヲ為シ置ク

ベシト傳ヘ又其頃獨逸ノ或ル新聞ニ載スル風

説ニ依レハ獨逸皇帝ハ特ニ露國國皇帝ニ

發電シ露國海軍中將「チート」ハ海軍ニ於ケ

ル技術經驗ハ朕之ヲ知ルカ故ニ太平洋ニ於

ケル獨逸艦隊ノ司令ヲ同人ニ依托セムコトヲ

欲スト告ケタリト聞ヘヌ其虚實固ヨリ知ルヘ

カラザルモ兎ニ角露國ハ最早騎虎ノ勢何寺  
阻障アルモ之ヲ排却シテ

ノ危險ヲモ避ケヌ一直線ニ進行スヘシトノ決

アルコトヲ顯ハシ  
心オ未レタリ

三國干涉ノ由来ハ右ノ如ク其張本ハ露國タ

ルコト勿論ナレドモ露國ヲシテ斯ク迫急激

ニ其猛勢ヲ逞クスルニ至ラシメタルハ實ニ獨

逸ノ變豹ニ基因レタルコトハ事アラバカラザ

ハノ事實アリ 諸テ獨逸カ斯ク苦肉ノ計策ヲ實

行スル為メ亦如何ニ内外ニ向ヒ種々ノ苦衷キ

計畫ヲ旋シタルカ 彼等ハ流石ニ其當日迄何等

ノ違言モナカリシ日本ニ對シ忽然反目スルハ

隨分心苦キ業ニテアリケム當時同國ノ各新聞

ハ頻ニ獨逸カ元來日本ニ對スル好情ハ今ニ尚

シトモ

已ムヲ得サル

ホ保有ス唯々實際上ノ必要メ為メ他國ト共

ニ日本ニ忠告セサルヲ得サル場合ニ迫リタル

ノミトカ又ハ獨逸カ露佛二國ニ加盟シ因<sup>る</sup>テ以

才他國ヨリ今一層嚴重ニ日本ニ誅求スル所

アラムトスルモノヲ輕減シタリトカ其他之ニ

類似スル口調ヲ以テ暗ニ我國ノ怨恨ヲ慰メム

トレタルノミナラス駐英獨國大使カ加藤公使

ニ内話セシ所亦獨逸外務大臣カ青木公使ニ對

シ日本カ遼東半嶋還附ノ條件トシテ償金ヲ請

求スルハ當然ノ事ナリ獨逸政府ハ何時モ之ヲ

清國ニ勸告スルノ勞ヲ取ルベシト云キタル所  
在東京同國公使ハ林外務次官ニ對シ若シ日本  
カ本問題ヲ以テ列國ノ會議ニ附セムトスル意  
アレバ獨逸政府ハ居仲周旋ノ勞ヲ執ルベシ  
ト云キタル所ハ皆露佛兩國ノ敢テ言ハサル所  
ナリシ彼等ハ我國ニ對シテスラ既ニ右ノ如シ  
其露國ニ對スル苦計ニ至テハ更ニ極甚ナルモ  
ノアリシハ推知スルニ餘アリ此頃莫斯科新

聞カ比斯麦公ノ舉動ヲ評論シタル一節ノ如キ

ハ頗ル奇拔ニシテ面白ク獨國ノ皮肉ヲ穿テタ

リ同新聞ハ比公久来ノ政策ニ對シ略々褒貶

ノ評ヲ下シタル後<sup>上</sup>比公カ今回ノ舉<sup>成</sup>ヲ贊<sup>シ</sup>裏<sup>不</sup>

ルハ決シテ極東ニ於ケル獨逸ノ通商貿易上

ノ利益ヲ保護セムト云フ如キ陳說<sup>高</sup>ニ非ス<sup>耳</sup>

真ニ獨逸國ノ幸福存在其物ノ為メ必要ナ

リト認メタル露獨ノ親交ヲ恢復シテ爾後相

提携スルニ至ルベキ楷梯ヲ作ラムカ為メナ

リ故ニ公ハ断言セ<sup>ヘリ</sup>非~~キ~~ヤ獨逸ハ露國ノ

太平洋面ニ不凍港ヲ得ムトシ朝鮮ヲ經テ鉄道

ヲ貫通セムトスル希望ニ對シ一モ故障ヲ云フ

ヘキ理由ナシ乃チ獨逸ハ佛國ノ「チユニス」印度

亜弗利加ニ對スル政略ニ同感ヲ表シタル如ク

露國ノ東洋政略セモ同感ヲ表シテ可ナリ黑海

スラモ今テハ既ニ獨逸ニ取テハ利害ノ關係甚

夕深カラス況ヤ朝鮮海ニ於テヲヤ獨逸ノ改略  
ハ今頃ク一定不同タルベシ即チ其要從來ノ方  
針ヲ執リ終局マデ露國ト共同一致ノ運動ヲ為  
サバールベカラスト、流石ニ公ハ老練ノ外交家ナ  
リ此大事ニ對スル改略ヲ決スルニ自己カ露國  
ニ對スル好情ト英國ニ對スル惡感トヲ標準ト  
セス一意唯々獨逸ノ利益ノミヲ標準トセリト  
褒稱シタル後蓋シ獨逸カ危殆ノ場合ニ際シ

其興亡全ク露國ノ向背ニ依テ決スヘシ獨

逸ハ國本ノ堅牢ナルヲ欲セハ獨リ露國ヲ恃ム

ノ外ナシト云ヒ高ク自家ノ地歩ヲ占メ而シ

テ又比公カコライプナヒノ會ニ於ケル演說中獨

逸帝國ハ本世紀ノ初時ニ復歸スヘキヲ勸告ト

セシ言語ニ對シ同新聞ハ露國ハ今テ既ニ他國

ノ利益ノ為メニ自國ノ民力ヲ疲ラスモノニ非

ルコトハ比公モ亦能ク之ヲ知ラムト嘲リ竟

ニ露獨兩國ハ決シテ互ニ嫉視スヘキ謂ハレナ

シ然レドモ獨逸ハ之ニ就テ自國ノ利益上露國

ノ政略ニ容喙シ露國ヲシテ自國特種ノ政略ヲ

変シ舊友ト絶交シ再ヒ獨逸ノ利益ノ為ニ助力

セレ<sup>望山</sup>メムコトヲ要求スヘカラスト豫戒シテ獨

國政府及ヒ比斯麦ノ胸秘ヲ剥出シ併テ自家ノ

本面目ヲ無遠慮ニ露出スルニ至テハ獨逸政府

モ比斯麦モ滿背ノ冷汗ヲ發シタルナラム是

レ特ニ露國一新聞カ比斯麦ニ對スル評論ノ一  
固ヨリ以テ直ニ露國政府ノ真意トシテ視ルベ  
カラザレドモ元來露佛同盟ノ成立ハ其年所  
頗ン久キハ世人ノ疑ハサル所タルニ拘ラス未  
タ曾テ兩國共ニ之ヲ明言シタルコトモアラ  
サリシ然ルニ本年六月十日ニ於テ佛國外  
務大臣「アノトリ」ハ議會ノ質問ニ對レ日  
清戰爭ニ関シ佛國カ露國ト其方針ヲ一ニ

シタルハ全ク從來兩國同盟ノ結果ニ因ルト

何ノ憚ル所ナク之ヲ公言セリ露佛兩國政

府ニ於テ兩國同盟ノ事實ヲ公然言明シタル

ハ蓋シ此時ヲ以テ權輿トスト獨逸カ露佛

密接ヲ遮欄セムトシタル狂言的加盟ハ會々以

テ露佛同盟ノ實ヲ堅牢ナラシメタルニ非サ

ル乎而シテ同月十七日露國皇帝ハ特ニ佛國

大統領ニ贈ルニ其最貴至重ノ「サンタレドレ」

ノ勲章ヲ以テシタルハ唯ニ莫斯科新聞カ

比斯麦ヲ調敷スルノ比ニアラスシテ實ニ佛

國外務大臣カ公然露佛同盟ノ事實ヲ言明

シタル謝意ヲ表彰シタルニアラザル乎其後露

佛兩國カ清國ノ外債ニ就キ合同協力スル所ア

リシト云ヒ獨逸カ歟々苦情ヲ鳴ラシタルハ抑

モ亦遲キニアラザル乎之ヲ要スルニ獨逸政府

カ狂言的ノ外交積日ノ苦計ハ果シテ能ク其

目的ヲ達スベキ乎是レ将来ノ問題ニ属シ特ニ  
本書ニ就テハ寧ロ餘事ニ且ルヲ以テ暫ク之ニ  
論及セズレテ可ナリ

露獨佛三國干涉（下）

本篇ノ結論

明治二十八年四月二十三日露獨佛

二十四

三國干涉ノ突來スルヤ其翌日廣嶋御前會議ニ

於テ第三國トノ和親ハ到底破ルベカラス新ニ

敵國ヲ生スルハ斷シテ得策ニ非スト廟議確定

レタリ而レテ當時社會一般ノ情況如何ト云ヘ

ハ恰モ一種ノ政治的恐慌ニ襲ハレタルカ如ク

驚愕極リテ沈鬱ニ陥リ憂心忡々今ニモ我國ノ

小  
察  
省



要所ハ三國ノ砲撃ヲ受クルモノ、如ク誰一人

トシテ目下ノ大難ヲ匡救スベキメ策アリト高

談スルモノナク現ニ其頃對外硬派ト稱スル一

京都に在り

派ニ属スル重立タル輩カ伊藤總理ニ面晤シ談

次三國干涉ノ事ニ及ヒシ時伊藤ハ彼等ニ向ヒ

今ハ諸君ノ名案卓説ヲ聞カムヨリ寧ロ軍艦大

砲ヲ相手トシテ熟議セザルベカラスト云ヘル

好謔冷語ニ對シテ彼等ハ平日ノ多辯ニ類セス

唯々諾々敢テ一言ノ以テ之ニ抗スルナク亦其

胸中何等ノ成策アリトモ言フ能ハス  
此輩

ニレテ且ツ然リ況ヤ他ノ一般人民オヤ只管速

ニ時艱ノ平穩ニ歸着スルヲ默禱スルノイ斯克

テ十有餘日ヲ經過スル内遼東半島ノ還附ハ露

獨佛三國ニ盟約セラレ日清兩國ノ講和條約ハ

芝罘ニ於テ首尾能ク批准交換ヲ了シタリ世人

始テ事変ノ卒發スベキ虞ナキヲ知リ漸ク華  
續日

怒眉ヲ関クニ至ルト同時<sup>共</sup>ニ嘗テ彼等カ胸裡ニ

鬱積シタル不平不満ノ怒氣ハ一時ニ發動シ昨

日迄非分ノ高慢ヲ抱キタルニ反シテ今日無極

ノ屈辱ヲ蒙リタル如ク思ヒ各々其高慢心ヲ挫

折セラレタル度合<sup>ニ從ヒ</sup>ニ非常ノ不愉快ヲ感覺シ

悲怒氣惡感覺トシ

向テ

早晚何レノ所ニカ之ヲ洩シテ自ラ慰メサルヲ

得サルニ至ルハ亦是レ人情必至ノ勢ナリ而シ

テ平素政府ニ反對スル黨派ハ如是社會ノ趨勢

ヲ視テ敢テ之ヲ<sup>・利用</sup>捕捉スルコトヲ怠ラ<sup>ス</sup>シ<sup>ス</sup>彼

等ハ總テノ屈辱總テノ失錯ヲ以テ一ニ政府ノ

措置ニ基クモノトシ大ニ政府ノ外交ヲ非難シ

戦争ニ於ケル勝利ハ外交ニ於テ失敗セリト云

ハ<sup>ヘル</sup>攻撃ノ<sup>ハ</sup>吶聲<sup>ハ</sup>四方ニ起<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>其反響<sup>ハ</sup>今尚ホ囂然

タリ抑モ余カ本書ヲ起艸スル目的ハ昨年朝鮮

ノ内乱以來延テ征清ノ役ニ及ヒ竟ニ三國干涉

ノ事アルニ至ル迄其間困難<sup>・複雑</sup>魚量ノ外交顛末ヲ

概記シ以テ他年ノ備忘ニ供セムト欲スルノミ

今テ豈ニ世間滔滔ノ輩ト其是非得失ヲ辨論爭議

スルコトヲ思ハムヤ然レモ政府力斯ル非常ノ

時ニ際會シテ非常ノ事ヲ斷行スルニ力ヲ深ク

内外形勢ノ安危ニ確酌シ遠ク國家將來ノ利害

ニ較量シ審議精考苟モ當時ニ於テ試施シ得ラ

ルベキ計術ハ之ヲ試施セサルナカリシモ遂ニ

危機一髪ノ間時艱ニ及ビヲ匡救シ國安民利ヲ維持ス

ルノ道此外ニアラスト自信シ之ヲ断行スル

ニ至リタル事由ハ亦之ヲ蒙昧ニ附スルヲ得

ズ

如今列國ハ形勢此ノ冀フ所ニ彼ノ忌ム所利害

互ニ相出入ナル際所謂戦争ノ勝敗ナル者ハ單

ニ交戦國ノ砲火劍戟ノ外他事ノ以テ之ヲ左右

スルモノアリ存スルキイナキ之ヲ要スル

兵力

ニ軍隊ハ後援ナキ外交ハ如何ナル正理モ其極

スルコトアリ

掛引キ敏活ナラサル

度ニ至テ失敗シ外交ノ警備戒ナキ戦争ハ問々意

コトアリ

外ノ危険ニ陥ル抑モ今回三國干涉ノ突来スル

ニ方リ我カ外交上背後ニ強援ノ特ムベキモノ

アリシカ如何ト本オキ現ニ下ノ閑談判ノ進行

過半ニ達シ講和條約ノ調印モ既ニ完成ノ期望

於テ

アル場合ニ際シ小松總督官ハ帷幕ノ謀臣ト共

ニ殆ト全國ノ精銳ヲ盡シテ旅順口ニ進軍セラ

ルニ至リタリ軍機戰略ノ得失ハ固ヨリ茲ニ

論スル所ニアラス但當時軍人社團ノ氣燄ハ躬

一回黃海ノ波濤ヲ度ラス脚一回愛新覺羅氏

非レハ亦軍人ノ社會ニ齒セラサル如キ

ノ地ヲ踏ムニヤチサレハ止マサルハ勢アリキ

世勢力ハ恐ル

所ナル

何人モ之ヲ抑制スル所能ハサリレハ當時ノ事

ニ於テ然リトス世時既ニ我

情<sub>↑</sub>況<sub>↓</sub>ヤ優勢ノ艦隊ハ殆ト内海ノ守備ヲ

空

虚ニシテ數百千里ノ外ニ出征シ居タルオヤ斯

ル形勢ハ四月二十四日御前會議ノ廟謨ヲ決

一原由ニシテ

セシメタル亦何人ノ過失トモ云フ可カラス唯

之ヲ

ト

及

歸

々時運非ナリト悟道スルノ外ナカルベシ而カ

モ昨年秋冬ノ交ヨリ歐洲強國カ動モスレハ日

シ来ラ

清戦局ニ干涉セムトシタルハ帝ニ一回ノナ

ラス若シ夫レ平壤黃海戦争ノ際或ハ旅順口

威海衛陥落以前歐洲強國ノ干涉ヲシテ突来セ

シメタリキハ當時ノ戦局如何ナル変態ヲ生

スベカリシ乎幸ニ昨年七月牙山豊嶋ノ海陸

戦以後数閱月ノ間特ニ清國カ連ニ歐洲強國ノ

居仲干涉ヲ誘招セレニモ拘ハラス竟ニ敵國ヲ

シテ低頭平身割地賠償以テ和議ヲ乞フニ至

ラシムル迄我征清軍ヲシテ毫モ他顧スル所ナ

ク一意専心北<sup>ハ優ニ</sup>奉天山東ノ山河ヲ蹂躪シ今ニモ

直隸地方ニ直進セシメ南ハ<sup>スルノ道ヲ得</sup>優<sup>遙</sup>ニ澎湖諸嶋ヲ占

有レ臺灣金嶋ノ住民ヲシテ扶擔而立ツ<sup>シテ</sup>到<sup>達</sup>ラ

シムル迄<sup>抑モ</sup>倭ノ歐洲強國ヨリ何等ノ障害ヲ蒙ラ

サリシハ<sup>シメ</sup>峯<sup>抑モ</sup>亦偶然ノ好運ナリ<sup>リト云フヲ得</sup>イニオラムヤ

夫し然り然しトモ征清戦後ニハ竟ニ歐洲強國中

多サノ干涉アルハ免レサハヘシトハ吾儕ノ豫

期ヤサリニ所ニアラス本年一月二十七日御前會議ニ於テ

伊藤總理ノ奏聞中略ク既ニ其意ヲ減シタリ特ニ遼東半

島ノ割地ニ関ス露國ノ意向ハ昨季以來彼我默々ニ

之ヲ推測スルニ餘リアリシ而カモ既ニ之ヲ推測シ得タルハ

何故ニ將來豫ニ放棄ヤサハカラサハニ至ルヤ又計ラサハ割地ヲ故ニ要

求セシヤト云フ者アラム余ハ普通答辯者ノ如ク我ハ豫メ外國ノ鼻息ヲ

窺ヒ先ツ屋敷遠

トノ陳言ヲ

慮スル必要ナカリシキ申レ云ハサルベシ

何トナレハ鼻息ヲ窺フトノ一語ハ其語弊アレ

トモ列國ノ間飛耳長目自他ノ利害ヲ計較シ互

ニ功名ヲ競ヒ妬氣ヲ逞スルノ今日ニ於テ我若

シ他國ノ心意ヲ忖度シ彼我相當ノ交渉ヲ悉レ

豫、其猜忌スル所ヲ避ケ他日ノ紛議ヲ免ル、

ノ地ヲ為スハ亦外交上重要ノ權宜タルベシ然

レトモ該時我國內部ノ大勢ハ果シテ吾儕ヲシ

テ毫モ内顧スル所ナク斯ル權宜ヲ試施シテ

来ノ外難ヲ豫防シ得セシメタル乎余カ前篇和講

端ノ發ニ於テ述ヘタルカ如ク當時國民一般ニ論

ナク政府部内ニ在テスラ清國ノ讓與ハ唯々其

大ナラサラムコトヲ惟レ欲シ帝國ノ光輝ハ多

々益ハ揚ラムコトヲ欲シ現ニ樺山川上ノ南中

廣嶋

將ノ如キモ御前會議ニ於テ余カ提出セル講和

條約案ヲ視テ其遼東半嶋割地ノ外尚ホ山東省

大部分ヲ添加セムコトヲ希望スト演ヘタル程

イアリシ程ナレハ

ヲオラス、其他奉天、吉林、両省ハ未未ニ割

ハ廣大ナラムコトヲ望ムモノ固ヨリシカラズ況ヤ

地ニシムベシト本日或ハ大森ヲ金州半嶋ニ進

メ給、皇師北京城ヲ陥ル、迄ハ決レテ和議ヲ

シルニ於テオヤ

許スベカラスト主張セシモノサヘアリ、戦勝

ノ熾熱ハ社會ニ充満シ空望浮誇殆ト其絶頂ニ

達シタルノ最中若シ講和條約中特ニ軍人ノ鮮

キヲ

血ヲ濺テ略取シタリト稱ス、遼東半嶋割地ノ

軍民ノ

一條ヲ脱漏シアラムニハ如何ニ一般社會ヲ失

望セシメタルベキ乎豈ニ帝ニ失望スルノミナ

ラムヤ到底如是ノ條約ハ之ヲ實施スルヲ許シ

タルベキ乎斯ク内外ノ形勢而々相容レス之ヲ

調和スルコト甚タ難ク若シ強テ之ヲ調和セム

トセハ當時必然内ニ發シタル激動ハ其危害却

テ他日或ハ外来スベシト推度スル事變ヨリモ

常ニ

更ニ重大ナルニアラサリシ乎政府ハ此内外而

難ノ間ニ處シ時局ノ緩急ト情勢ノ輕重トヲ

較量シ往々其重且ツ急ナハモノ、爲メ輕且ツ緩

ナハモノヲ犧牲ニシテ顧ミサハノ方針ヲ取ルト同時ニ内

難ニ成丈ケ之ヲ融和シ外難ニ成丈ケ之ヲ制限シ遂ニ之ヲ

制限シ能ハハモ尙ホ其禍機ヲ一日モ遲ク發起

セシメムコトヲ努メタハハ外交ノ能事亦甚

ク明如シタリト云フ可カラサハカ如

シ蓋シ如是外交ノ困難ハ世界各国亦必スレモ其先例ニ之

ス

カラ ~~レ~~ ~~ト~~ 譬へハ千八百七十八年露土戦争

ノ結果トシテ其三月三日ヲ以テ「サン・ステファ

」條約ハ調印セラレタリ該條約ハ「オオオオ

中將軍カ筆ト劍トヲ雙手ニ提テ瞬間ニ訂結シ

タルモ「オオ」英墺兩國ハ此條約調印ノ以前ヨ

リ他日ノ斤涉先觸ト云フベキ口氣ヲ以テ若シ

露土條約ニシテ巴里條約及倫敦條約ノ精神ニ

抵觸スル廉アレバ之ヲ正當ノ條約ト認ムルヲ

得スト露國政府ニ宣言シタリ左レハ露國ハ無  
論ニ英墺ノ意向如何ハ疾ク之ヲ推知シ居タル  
ナルベレ然ルニ尚ホ該條約ヲ批准スルニ至リ  
タルハ何ノ為ナルヤ恐クハ露國政府モ當時内  
外ノ形勢ニ制セラレ亦之ヲ奈何トモスル能ハ  
サルニ出テシナルベシ史家「ゴルヂヤコフ公爵  
カ此際ノ苦心ヲ寫シ公ハ國民一般ノ激動ヲ来  
サムコトヲ是レ恐レ之ニ反抗スルコトハ尚ホ

更ニ憚カレリトアルヲ視テ同公苦心ノ状ハ之

ヲ察スルニ餘リアリ然レ英埃兩國ノ異議アルハ必

ニ比トハ豫期スルヲ同時ニ從來露獨ノ關係上陰

ナル如キ結果斯アルカベ該條約ハ思料セザリ距離ナラム

前ノ演説ヲ明ルバ地ニ魚視比スバトハ更ニ意外

八年二月十九日即ニケサン、以テフ、條約獨逸國會

ニ開演説スル迄ノ一節ニ何故乎或ル國ハ露國ニ對

権カ勝利ヲ得シタリトサルモ彼等ハ到底土耳其國ノ

カ本問題ニ関スル定案ニ代フルニ更ニ彼等ノ  
定案ヲ以テセサルベカス而シテ彼等ハ今如何

ナル定案ヲ有スルヤ若シ或ル定案アリトスル  
モ何人カ其實行ノ任ニ當ルベキヤハ、ハ、スル

露國ハ若シ今日ニ於テ千八百五十六年ノ多條約  
ニ調印セル諸強國ノ兼允ヲ得サルトキハ多條約

現在占領ベシト地アリ其儘ニ當時英澳カ露國ト満足  
スルナルベシト

戰スルモ其異議ヲ貫徹セント云フ意氣込アリシ  
ヲ見テ之ヲ冷評シ且ツ獨逸ハ露國カ戰勝ノ結果

トシテ現在占領地シタ其儘占有スルコトニ對シ  
異存ナキ現在意ヲ暗示シタルモノナリ然ルニ其後

露國ハ預期ナラス英國ナ既ニ獨逸ノ傾向ル奇  
異ナルハ預期ナラス英國ナ既ニ獨逸ノ傾向ル奇

異議アリ唱ヘ柏林會議ニ列スルヲ拒ミタル  
ニ由リコトナルヤコソハ更ニ其駐英大使コト

ワロフ伯爵ト豫ニ内訓シテ英國外務大臣ヲサリスベ  
リ候爵ト豫ノ協議セシメザン、ステファノス條約

タルヲシ

上修タリスベキ諸款ヲ秘密書ニ記載シ  
十、修正ス故ニ伯林會議ノ結果ハ其實風ニ倫敦ニ

於テ英露内約ニ成左レバ今回下ノ関條約ノ変  
ルモノ多シト云フ

改ノ如キモ事後ノ今日ニ於テコソ政府ハ外ニ

屈從シタルノ状アレトモ事前ノ大勢ニ於テハ

其實内ニ顧慮スル所アリシニ由ルト云フモ亦

甚シ

リタルモノト云フベカラス

多ク事ノ真相ヲ誤テサルベシ之ヲ要スルニ今

回三國干涉ノ突来スルヤ方ニ日清講和條約ノ

批准交換ノ期目前ニ迫リ政府ハ此兩個至難ノ  
問題ヲ一時ニ處理セム為メ百方經畫ノ後遂ニ  
乱麻一束ヲ兩分シ彼此各々錯乱セシメサルノ  
方策ヲ取り其清國ニ對シテハ戰勝ノ結果ヲ全  
収スルト同時ニ露獨佛三國ノ干涉ヲシテ東洋  
大局ノ沿革ヲ再乱スルニ至ラシメス必竟我ニ  
在テハ其進ミ得ヘキ地ニ進ミ其止ラサルヲ得  
サル所ニ止マリ外リルモノナ余ハ當時何人ヲ以テ此局

ニ當ラレハルモ亦決シテ他策ナカクシテ信セ

ムト欲ス是レ余カ嘗テ三國干涉概要ニ於テ此

糾錯<sup>紛</sup>雜ナル外交事務局ヲ僅々二週目ノ間ニ結了

シ危機一髮ノ厄運ヲ將ニ發セムトスルニ防キ

百戰百勝ノ結果ヲ將ニ失ハムトスルニ收メタ

ルハ一ニ廟議其機ニ投シ事ノ宜キヲ得タルニ

職由セスムバアラス是レ即チ大詔ニ所謂今ニ

於テ大局ニ顧ミ寛洪以テ事ヲ處スルモ帝國ノ

光榮ト威嚴トニ於テ毀損スル所アルヲ見スト  
ノ聖意ヲ奉體シタルニ外ナラスト謂ヒレモ亦  
之カ為メナリ

明治二十八年除夜脱稿 伯爵陸奥宗光記

余ハ本書ニ於テ朝鮮内政ノ改革ヲ三期ニ分  
テ各々其適當ノ順序ニ於テ之ヲ記述セムコ  
トヲ期セリ而シテ其改革第一期及第二期ハ  
既ニ之ヲ記了シタルモ第三期ハ竟ニ之ヲ省

略スルコトヲ決シタリセリ其理由ハ朝鮮内政ノ改革

ナル者ハ其後種々外来ノ事情ノ為メニ阻障

セラレ今尚ホ完成シタリト謂フヲ得ス故ニ

筆端或ハ将来ノ政略如何ニ波及セサルヲ得

サルニ至ルヲ恐ル是レ寧ロ早計タルヲ免レ

スト思ヒ故ラニ之ヲ闕如スト云フ

256274

2-7

昭和27年11月11日

一 蹇蹇錄原稿目錄

內譯

一 緒言及篇次

一 下関談判 (上)

一 下関談判 (下)

一 露獨佛三國干涉(上)

一 露獨佛三國干涉(中)

一 露獨佛三國干涉(下)

一 蹇蹇錄印刷原本

一 蹇蹇錄印刷本

六綴

一綴 一綴 一綴 一綴 一綴 一綴

一部

一部

以上



名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	宋 秉 峻 書 翰

分 類 番 号	73
	1 了

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

256816

1~8

昭和26年1月9日

韓國施政要了意見

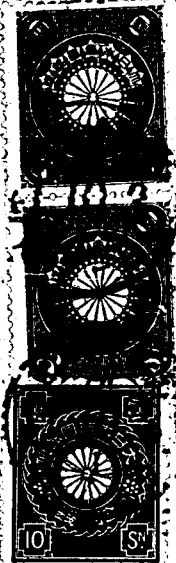
四十二年十月三日

東京芝三田綱町

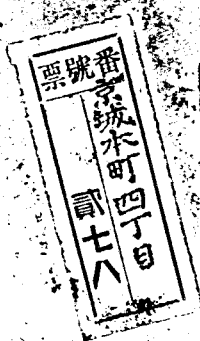
桂侯爵閣下

書留

親展



造幣局刷印



250816
W
昭和(年)月(日)

謹封



京城南山町

宋秉峻



水原行幸御模様

▲**鹵簿皇居出門**　韓國皇帝陛下には既報の如く豫定時間より十分間を繰上げ午前六時四十分昌德宮御出門左の鹵簿（第二公式）しうしやう七南大門停車場に向はせらる。ふくかん

警都（乘馬）呼（ビロリ）響視（ビロリ）具警視副監（乘馬）高禮式官金掌典官（人力車）閱宮內大臣（小宮宮內次官同乘）馬車騎兵正校二皇帝旗文車馬監（乘馬）

御馬車（尹侍從院卿陪乘）李侍

從武官長、侍從武官三(人車)侍從三(人車)完陽君義陽君同乘(馬車)朴典醫、趙奎章閣廳(人車)永宣君、李總理大臣同乘

(馬車) 警部三(騎馬)  
偷距他に日本騎兵一個中隊儀仗として供奉  
し列外供奉員として宋内相、任度相、高法  
相、趙農相、金中樞院議長、趙承寧府總管

李允用、李址鎔、閔泳綺、李載克、閔泳徽、閔泳徵、成章禮院卿、佐藤大韓院長、韓膏記官長、倉富、岡、俄、韓の各部次官、金京畿觀察使、崔內藏院卿、俞法制局長、金典膳司長、李侍從副卿、李侍從、多田宮內秘書官、金軍部副官、上村學部事務官、朴、李兩禮式官等扈從し統監府よりは會通副統監を始め石塚參典官、村田武官、國分通譯官、佐竹秘書官等陪從したるが沿道には各學校生徒及び一般拜觀者堵の如く兩側に整列して奉送し警官は各所に配列されて警戒をなす斯くて鹵簿は豫定の御道筋により盛砂の上を肅々として通過し七時二十分南大門停車場に着せらるゝや軍樂隊は國歌を吹奏し陛下には玉車を降らせられ豫め設けられたる便殿にて御少憩あり同停車場には日韓文武百官、及有志者多數奉送迎をなし鹽川京畿觀察道書記官は同驛迄御出迎申し上げたり

▲列車南大門發　六臺を連絡されたる宮廷列車には第一車室は親任官並に勅奏任官及同待遇者**第二玉車**には各皇族並に曾禰副統監、侍從院卿及び女官二名陪乘し第三車には勅奏任官及同待遇者、次には判任官搭乗し午前七時三十分列車は進行を始めた

▲鐵道沿線光景 南大門より大皇橋  
 假停車場に至る鐵道沿線の各民家は各戸國  
 旗を掲げて敬意を表し龍山驛にては文武官  
 民團議員並に吏員、愛國婦人會員等停車場  
 構内に整列し特に民團にては烟火數發を打  
 揚げて敬意を表し構外には砂湖養英學校生  
 徒其他一般有志者奉迎送をなし、漢江砂原  
 には多數の韓人團排列、寶梁津驛にては多  
 數の韓人黃歲を唱へて奉迎し永登浦驛には  
 慢幕を張り始興驛にては殊に多數韓人の奉  
 迎送者あり水原停車場にては日韓各官吏有  
 志者日韓各學校生徒等構内に充塞し立錫の  
 餘地なき程にて盛んに奉迎したるが玉車は  
 豫定の如く午前八時四十五分大皇橋假停車  
 場に着陛下は御降車あり

▲玉車内の陛下 玉車内にては各士臣代るく奉伺したるが陛下には御機嫌等に麗はしく常に車窓より風光を御覽ありて種々の御下問あり之々是に奉答したるが玉車の軍浦場を過る頃金觀察使は本年農作の状況等に就き聖聴に達したるに陛下は沿道の稻作を御覽ありて「本年の稻

作は極めて豊穰なり  
と聞きしが此附近の  
稲作は餘り良好なり

さる様に見受く軍浦  
場の農民は斯くては  
困り居る事を「（困窮）」その  
御誼あり並居る人々陛下の國民の状況に御

心を迷がせ給ふ事に感泣したりと尙宋内相  
 に向はせられ四方の山峯は禿瓦たれば植林  
 の要は急なりと仰せられたりと承る。

▲天皇橋御發 變て陛下は第三公式車  
簾(前記席列)にて大皇橋 停車 塲を御發  
轡あり韓國驍兵一個中隊儀仗の任に當り午  
前九時三十五分御陵に着御 御休憩所(健  
陵齋室)に入らせられ禮袍 翼善冠 烏犀  
帶 白皮靴の御裝束に御召換へありて隆陵  
丁字間に入詣あらせられ展謁の御拜事あり

此間前刻より同陵紅門内石階の兩側に控へ  
つゝある陪從官は一齊に最敬禮を爲せり懸  
て陵上の御親間あり御小憩後御辭陵の御拜  
事ありて健陵に入詣隆陵と同く御拜事畢て  
再び御休憩所に入御正装に改めさせられ御  
晝餐供奉員一同にも晝餐を賜ひたり

所御出發以前の鹵簿にて二時〇六分大皇橋  
臨時停車場御着之より先き鹵簿外の供奉員  
其他副統監等は陵地を發し約三十分間前  
着して陛下を停車場外に奉迎し又な同地  
官民も玆に再び奉送迎を爲し同地方官民中  
高等官父老會總代及日本人會總代等二十  
四五名は

四十八分玉車は西湖假停車場に着す  
 ▲勸業模範場御成 陛下は西湖停車場にて御降車後玉歩を祝萬堤より放水路迄運せられ途中湖畔なる杭屋亭に御小憩釣魚を御覧あり再び御徒歩にて勸業模範場に成らせられ同場階上便殿に御休憩模範場及水

原地方廳高等官守備隊憲兵隊將校父老會及  
日本人會總代等三十餘名に謂を賜ひて後果  
物、豚、鶏、山羊、兎其他模範場にて作り  
たる米及韓人の作りたる米を御覽に供し終  
りて同四時五分陛下は同場を出御今回新に  
設けたる田圃内の新道路を御徒歩にて西湖  
停車場に着せられたり

▲森林調査書献上 農商工部林業事務所よりは御陵所在地なる華山森林を詳細に調査したるものを献上したるが其中には同森林の面積は一千三百餘町步にして林中には八九十年乃至百年を経過したる大樹多数なりと記載し終りには先皇の御心を殖産

ありとて、  
 ▲鐵道局員の陪乗 鐵道管理局より  
 は特に長官代理として遠藤剛太郎氏其他岡  
 運輸部長岡村龍山出張所長小原矢野の兩車  
 務官、竹田、野崎の兩技師は列車に乗り以  
 る行幸地まで扈從したり  
 ▲公の御手直 陛下は、  
 下り、は、勅使、長官、

臨御の際同場前に記念として松の御手植  
 たり  
 ▲御下賜金  
 陛下より左の如く下賜  
 五百圓 勸業模範場  
 三百五十圓 京畿道内各學校  
 二百圓 水原父老會  
 二百圓 水原韓民  
 百五十圓 農林學校

百圓 日本銀行  
百圓 水戸日本小學校  
百圓 水戸普通學校  
百圓 水戸私立學校  
百圓 農林學校  
の等なり。じも勅使を差遣らせられたりと

▲陛下の御傳勝 陛下は終日諸所御  
巡覽ありたるにも拘らず毫も御疲勞の御模  
様なく至極御健勝にて尚ほ各所巡覽したし  
この御詔ありしも侍臣等は時間の都合等に  
より強て御諫止申上げし次第なりと承る  
(以下大略)

[illegible]

### 水原行幸御模様 (續)

韓皇陛下水原行幸の御模様は昨紙水原電話にて報道し置きたるが多少の遺漏未載の點を記して行幸記を終らむ(昨紙參照を要す)

#### 白衣黒冠の奉迎者

余は南大門停車場に於て大坂毎日新聞の橋本桂園子と共に宮廷列車に乗り込みたるが正七時三十分發車し八時四十五分大皇橋假停車場に着しぬ此日天氣快晴にして漢江の水長く韓山野の秋色發ける霞と共に一段の趣味多き感催さしめたり白衣黒冠の韓人は老幼男女の別なく沿道は云ふ迄もなく遠く田畔岡丘より奉迎し各戸國旗を掲げて敬意を表したるが鐵道沿線なる奉迎者が或は萬歳を唱へ或は韓國式最敬禮を爲し喜欣の情滿面に溢れ居たるは油然として一種の感概湧き出たり

#### 鐵道管理局の用意

事中鐵道管理局矢野事務官と語りたるが宮廷列車の準備に就ては昨年我 東宮殿下行啓の御先例有れ共唯裝飾其他に就き日本と韓國とは趣きを異にし一例を擧ぐれば玉車の窓掛け、テーブル掛け等の如き総て黄色のものを用ひざる可らず紫色は韓人に取つては不吉の色にして絕對に使用する能はざるが故に此等の點に至るまで注意を要したりしかば粗忽無からむが爲め多少の苦心を爲したりとの事なるが西湖及大皇橋假停車場設備の如き頗る完全にして殊に岡運輸部長矢野事務官等列車發着の際に勿論運輸中の一方ならぬ心勞を爲し居たるを見受けり

#### 韓皇の御軫念

陛下には昨紙所載の如く軍需場附近に於て地方農作の不作及山林荒蕪に關し難有御言葉有りし由なるが玉車の大皇橋に着するや宋内相を召させられて沿道の農作等

の事からさるは何故なりやと御下問相成りしかば内相は金京農道觀察使をして本年稻苗植付けの際早なりしが爲め再度の挿秧を爲したるが其後は又過度の降雨有り天候不順の爲め斯かる不作を見たるもコハ唯京畿道而已にして全國地方本年の秋作は頗る好良なるが故に陛下幸に宸襟を安ぜ給はむ事を」と奏上せしめたる由なるが陛下が故

#### 例を奉じて斯御軫念あらせ給ふは

感泣の外なしと宋内相は語り居たり

#### 天覽の花山林概要

御陵地たる花山林に關し農商工部林業事務所が概要調書及地圖を上覽に供したる事は昨紙所報の如くなるが之に依れば花山林の面積は實測の結果一千三百四十一町歩にして林齡は九十年乃至百年樹種は赤松單純林にして稀に櫟櫟等を混す一町歩平均材積概一千尺にして全山の材積實に百三十四萬尺に達す韓國に於ける此の稀有の大美林は今を距ること百十餘年前正祖宣皇帝十三年己酉より壬戌に至る十四年間に附近十邑に命じ力を併せ植栽せしめられたるものにして舊記を按ずるに當時植栽したる苗木松及雜木を併せて五百五十三萬七千八百八十八株播植したる數量松子七十五石七斗七升、柏子(海松)九十三石五斗五升、柏葉(海松の球實)一千六百九十二顆、橡實(橡)二千七百二十四石五斗、楸子(胡桃の類)八十四石、檜實(檜)十九石四斗、楓實二斗、栗子七石、胡桃五斗、榧七十八石、草種三百七十九石なりしと云ふ是れ全く先皇の聖心を殖産に注がせ賜ひたる結果にして眞に仰慕すべきの至りなり

#### 林業事務所の近況

陛下が模範場に入らせられ御休憩中同場の精細なる地圖及び同場役員一覽表と共に上覽に供したりと云へる農商工部林業事務所の概況書を見るに同所は光武十一年の創設にして面積二十町歩事務所長技師一人所員技師六人造林、林苗養成、森林調査保護等に盡くし現在の苗木は二百五十萬八千〇三十七株外に挿木五千七百四十八株有りとの事なり

#### 模範場入御

兩院御展調を終らせられ大皇橋假停車場に御還御再び玉車に召されて西湖假停車場に着し給ふや西湖堤上を黄色の輦輿に召させられ皇帝旗を先導としてイムサン(日傘)を翳して供奉百官を従は杭肩亭に入御暫時湖上の風光を賞し給ひて後御徒歩模範場に入らせられ

布を以て覆ひ用意し有りし紀念松の御手植有つて御坐室に入御あらせられたり

#### 拜謁と献上品

模範場に於て陛下は本田場長其他干係各高等官一同及金觀察使、川書記官向井大佐其他武官三輪日本人會長(水原農林學校職員)同地父老會長金宗漢等に拜謁仰付けられたるが本田博士は一家、家藏日本種小石丸一、家藏韓國種日本種歐洲種一、葉卷煙草當場産日本專賣局製一、炸醬、醬生糸一、家藏の經通を父老會は一、西湖の餅一、并各一籠を水原日本人會は一、水原寫眞帖一冊一、水原生梨一籠を水原村民は一、銀製杯三臺を各献上したるに陛下御感銘ならざりしと

#### 勅使と勅語

宋内相の語る所によれば陛下は斯の行幸に些の御疲勞を御見受け申さすいと御健勝に渡らせられ農林學校にも行幸の旨仰せ出されしも時間等の都合にて侍臣等御練止申上げ農林學校へは勅使を御差遣相成りしが同校生徒は範模範場に整列して敬意を表し居たるに陛下は輜輿を止めさせられた

#### 農業獎勵の勅語を賜ひ農相

趙重應氏之を傳へたるに一同感泣したり又模範場長本田博士に對しても難有御説を賜はりたりと承る御下賜金中昨紙所報中日本人會は二百圓在水原各私立學校は四百圓なり

#### 陛下の御聰明

鐵道沿線農作惡しきにつぎ陛下が軫念を憐まし給ふ事は別項の如くなるが尙内相に對し之が救済方法を講せよとの仁慈なる御言葉有りしのみならず模範場に成らせられ一々説明を聴取あらせられ還幸の途上玉車中に於て京城より御陵に至るの間一の森林たに見ずと仰せられ趙重應相は御陵の如く韓國の森林を茂がらしむるに勉勵すべきを奏上すれば陛下は又模範場の隣畝は井々たるに他は然らずと仰せられ農相が漸次韓國を新模範場の如くせむと復奏したりと

御還幸 玉車西湖驛を發し還御の途に就かせられしは午後四時四十分にして沿道各停車場の奉送者は非常に盛にして聖旨により列車は特別に簡便したるが五時五十分發の南大門驛に着し日韓文武官民學生等數の附乗を受けさせられ農商工部林業事務所長(隨從記者山道亞川謹誌)

謹テ白ス秉峻夙歲志ヲ立テ敢テ自ラスシテ  
 西勢東漸、逆浪ニ抗セント欲シ死生ノ境ニ出  
 入シテ二十餘星霜ヲ經タリ日露戰役、結  
 果日韓協約ノ締結セラル、ヤ秉峻心竊ニ謂  
 ラク此レ以テ東洋ノ頽勢ヲ挽回スルノ保障タ  
 ルニ足ルヘシトカヲ極メテ其成立ニ贊同セリ然レ  
 トモ其實行ニ及ヒテハ終ニ言ナキ能ハス昨年ニ  
 至リ之レニ申スルニ新協約ヲ以テスルニ至リシモ其  
 實行ニ及ヒテハ終ニ亦言ナキ能ハス言ナキ能ハ

サルハ事情ノ扞格ニ因ル唯タ東洋ノ頽勢ヲ  
 挽回スルノ基礎ハ閣下總理ノ任ニ在リテ保  
 護條約ヲ以テ之レヲ立テラレタリ其責任ハ在  
 ル所ハ伊藤公ニ在ルニ非スシテ却テ閣下ニ  
 在ルナリ今又東洋拓殖會社ノ成立ヲ見ル其  
 任ニ當ルモノハ閣下ニ非サルモ實ニ閣下  
 ニ在ルコトハ此レ亦タ必ス閣下ノ自認シタマフ  
 所ナラン之レヲ先ニシテハ保護條約ナリ之レ  
 ヲ後ニシテハ拓殖會社ナリ蓋シ伊藤山縣兩  
 公ノ玄猷ノ在ルアルヘキモ責任ノ衡ニ當ラセラ

ルハ實ニ閣下ナリ東洋ノ大勢ハ姑ク敢  
テ白サス韓國ノ事ハ此ニ大事業ヲ以テ  
閣下實ニ韓國ヲ雙肩ニ負ハセラルモノト謂  
ハサルヘカラス然ラハ則チ不肖兼峻カ言アルモノハ  
先ツ統監閣下ニ言ハスシテ先ツ閣下ニ言アル  
ニ至ルハ勢ノ自ラ然ラシムル所ナリ

當面ニ先ツ陳ス韓政府ハ無算ナリ朝夕ヲ保ツ  
コト能ハス何トナレハ韓國何ノ收入カアル收入  
ナクシテ二十萬圓ノ豫算ヲ立ツ此レ果シテ  
豫算ト云フヘキカ一郷ハ一郷ヲ以テ計ヲ立テサル

ヘカラス一郡ハ一郡ヲ以テ計ヲ立テサルヘカラス  
日本富ノリト雖モ年々二十萬圓ヲ裂カハ  
日本國民ハ果シテ永ク韓國ノ保護ニ言ナ  
キヲ得ルカ而シテ其之レニ處スルノ方略ハ全ク  
閣下ノ責ニ在リ此レ一ナリ

現下ノ施設ヲ以テスレハ當路者各新生面ヲ  
開カント欲シ爭ヒテ豫算金ヲ攫取シテ新事  
業ヲ擴張ス熙々トシテ春臺ニ登ルカ如シ然  
レトモ其本ニ就カスシテ其末ヲ治ム故ニ一モ成ル  
ナクシテ隨テ成レハ隨テ壞ル之レヲ例セハ大ニシ

テハ貨制改革、無期限延期ニ終リシ如キ政  
府ハ鉅貲ヲ糜セシメ人民ハ荼毒ヲ受ケシ  
ノミ之レヲ小ニシテハ衛生、如キ食フコト能ハサ  
ルカ故ニ惡食シ衣ルコト能ハサルカ故ニ垢弊シ  
居ルコト能ハサルカ故ニ陋居ス飢寒、民ヲ驅リテ  
富人ノ胥ヲ強フルモノハ今ハ衛生、天ヲ助ケテ  
虐ヲナセルナリ殖林ノ如キモ亦然リ寒、キカ故ニ  
煖ヲ取ル一夕ノ保ツ能ハサル虫氓誰カ百年ノ  
後ヲ思ハン頻死、病婦ヲ起シテ新粧ヲ凝ラ  
サシムルハ早ク藥ヲ興フルニ若カス醫齒ノ童ヲ

シテ大學ニ入ラシメント欲セハ先ツ小學ニ就カシ  
ムヘシ冗官薨然トシテ文明ヲ糊塗シテ相誇  
ルモ十三道未タ一民ノ東方ニ聖天子アルヲ  
知ルモノナシ唯タ之レヲ知ラサルノミナラス怨毒禁尉  
結シテ竟ニ將ニ解クヘカラサルニ至ラントス現勢カラ  
以テ推移セハ日本ハ毎年二十萬圓ヲ投シテ  
韓民ノ怨ヲ購ハサルヘカラス而シテ韓民ハ自ラ暴  
棄シテ穢惡ノ民俗ヲ馴致センノミ若シ東洋  
ノ形勢ニシテ風雲一タニ動クアラハ保護條約ハ  
或ハ空紙トナリ拓殖會社ハ白馬江ニ陷ルノ

責ナキヲ保セス此レ兼峻カ殷憂スル所ニシテ  
責ハ全ク閣下ニ在リ此レニナリ

閣下ノ聰明睿知ナル兼峻カ言フ所ハ必ス既  
ニ的知セラレ之レニ處スル所以ノモノモ必ス既ニ確  
定セラレン然レトモ兼峻カ敢テ言フ所以ノモノハ  
之レヲ閣下ノ責任ニ放置シテ敢テ自ラ免レント  
スルモノニ非サルコトヲ明ニセントスレハナリ山海阻絶  
シテ電話電信ノ能ク細故ヲ通スヘキニ非ス故ニ  
粗ホ現下ニ處スル鄙見ノ在ル所ヲ筆シテ  
覽ニ供ス亦唯タ苟モ自ラ免レサルノミ

夫レ天下ハ天下ノ天下ニシテ一人ノ天下ニ非ス  
德アレハ興リ德ヲ失ヘハ亡コトハ韓國上下ノ  
通論ニシテ頑冥不靈ノ徒ハ殊ニ此主義ヲ  
固持ス故ニ政ヲ爲スノ本ハ君ヲ輕シトシ民ヲ重  
シトスルノ方針ヲ執ラサルヘカラス然ルニ日本官  
吏ハ日本カ萬國無比ノ國體ヲ成セルニ教練  
セラレ日本臣民ノ精神ヲ以テ直ニ韓民ニ泣ム  
故ニ爲政ノ機關ハ日ニ益ス完備スルカ如クナ  
ルモ其運用ヲ實ニスルコト能ハス人民ヲシテ感  
觀興起セシムルニ途ナシ此レ本ヲ立テサルノ過ナ

リ故ニ現下ノ形勢ニ處スルニハ官吏ヲシテ先ツ  
本ヲ立ツルコトヲ知ラシムルニ在リ

秉畯カ農商工部ヨリ内部ニ轉セシヤ當時  
既ニ一タヒ辭意ヲ決シタリ然ルニ辭意ヲ翻セシ  
所以ノモノハ具本ニ就キテ大ニ為ス所アラント欲  
セシニ由ル故ニ就職ノ後地方行政ノ刷新ニ銳  
意セルモ未タ萬分一ノ冀望ヲモ達スルコト能ハス  
今大綱ヲ擘ケテ就本ノ方法ヲ論スレハ尤、改  
革ヲ斷行セサレハ決シテ地方政治ノ刷新ヲ  
實行スル能ハス

一二曰ク内閣書記官長法制局長官ヲ日本  
有數ノ人物ヨリ撰任シ統監府ノ權域ヲ縮少  
シテ更ニ之レヲ最高ノ地ニ立テ行政ノ指導監督  
ハ閣員タル書記官長法制局長官躬ラ其任ニ  
當リ統監タルモノハ批准ニ俾シキ認許ヲ與ヘラ  
ルヘシ今ヤ日韓合同政府ヲ組織セルヲ以テ韓國  
内閣ハ即チ統監内閣ナリ内閣外ニ内閣ヲ設ク  
ルノ必要ヲ認ソス唯々兩國民ノ未タ合心ノ實ヲ  
擘クルコト能ハサル現状ニ徴シ統監府ヲ存シテ  
眞ニ韓國ヲ統監セシメサルヘカラサルノミ

之レヲ斷行セサレハ制度紛錯シテ多頭相爭ヒ  
弊砒之レヨリ生シ冗費ノ端之レヨリ繁興ス今テノ  
法制局長官ハ法制ノ人ニ非ス書記官長ハ内  
閣ヲ代表セシムルニ足ラス故ニ内閣ハ統府ニ礙ア  
リ而シテ内部ハ内閣ニ礙アリ百務叢脞墮怠シ  
テ官人倦ミ民庶慢ル此レ元頭ノ革新セサルヘカ  
ラサル所以ナリ

二ニ曰ク日韓合同ノ政府既ニ成ル而レハ日本居  
留民ハ居留民ニ非スシテ居住人ナリ既ニ理事  
廳ノ用ナキコトハ勿論ナリトス京城理事廳ハ宜ク

漢城府ト合シ乃至東萊府ハ宜ク金山理事  
廳ト合スヘシ今警察ハ居留民警察ヲ別置  
セス日韓人共ニ警察ノ下ニ立テリ習慣ノ異ア  
ルヲ以テ一行政下ニ置ク能ハスト謂ハ、合同政府  
ヲ組成セシハ既ニ非ナリト謂ハサルヘカラス拓殖會  
社モ合同制ヲ用キサラン抑モ合同政府ノ組成  
ハ何ノ精神ニ出テシヤ名ハ合同タリ實ハ兩民ヲ阻  
隔セシムルハ既ニ合色ノ式ヲ擧ゲテ夫妻ヲ隔室  
セシムルニ倖シキニ非スヤ若シ頑民ノ排日スルヲ云ハ  
セハ先ツ居留民制ノ排韓セルヲ云フセサルヘカラス

三ニ曰ク繁ヲ避ケテ簡ニ就カシノ難ヲ避ケテ易ニ就  
カシノ虚ヲ崇ハスシテ實ヲ取ラシムルハ蓋シ治道ノ  
要ナリ今韓政府ハ徒ニ虚名ヲ設ケテ實行ナラ易  
ヲシテ難ナラシメ簡ヲシテ繁ナラシメ外觀ノ美名ハ  
小日本ヲ模倣セルモ其實ハ蠻境ニ彷徨セリ故ニ  
今ノ緊要トスル所ハ痛ク又割ヲ加ヘテ冗ヲ汰シ  
蕪ヲ淘汰スルニ在リ此レ一ハ費ヲ省テ所以ニシテ一ハ多  
端ヲ統率シテ遵則スル所アラシムル所以ナリ之レヲ  
淘汰スルコト如何陸子部及農商工部ヲ廢シテ  
之レヲ内部ニ合スルコト是ナリ

韓ノ文化ノ日本ニ後ルハコトハ止テ百年ナルノミ  
ナラス故ニ民心ヲ定メテ其向フ所ヲ一ニセシムル  
ニハ先ツ其政令ノ出ツル所ヲ一ニセサルヘカラス其為  
政ノ情素ヨリ日本ト迥異セリ故ニ農商工部  
リト雖モ内部ノ其令ヲ幫助スルニ非サレハ農商工  
部ノ命令ハ徒法ニ屬ス此レ現状乃チ然ルナリ陸子  
部モ亦タ然リ然ルニ各部ノ豫算ヲ爭ヒ權域ヲ膠  
守シ相頡頏シテ相下ラサルコトハ黨錮ノ如ク然ルモ  
ノアリ人ノ為メニ官ヲ設ケ無用ノ人ヲ養育ヒテ豫  
算ノ不蝕賊ト化セシム今日ノ民度ヲ以テ之レヲ論

スレハ學部ハ宜ク學務局ヲ開キテ内部ニ直系  
スヘシ農ヤ商ヤエヤ宜ク各其局ヲ開キテ内部  
ニ直系スヘシ未タ一部ヲ獨立セシムルノ時ニ非ス眞  
ニ民心ヲ定メント欲セハ決シテ分立ノ尙ホ早クシテ  
徒ラニ事端ヲ繁クスルヲ見ルナリ此レ韓ノ民情ニ  
通スルモノニ非カレハ共ニ論シ難キモノアリ唯ク

閣下ノ深ク淵鑑シテ治民ノ本ヲ立テラレンコトヲ請  
フミ

凡ソ韓民ニ臨キハ法制ニ非スシテ威嚴ニ在リ  
命令ニ非スシテ德化ニ在リ專制ノ遺民ヲ御

スルニハ率然自由ノ精髓ノミヲ施スヘカラス國  
民ヲシテ先ツ合同政府ノ德ヲ頌セシメ而ル後  
始メテ治ヲ道フヘシ眞ノ文明トハ相距ルヤ尙ホ  
遠キナリ

今テヤ學部、方針ハ内部ノ施設ト相戾リ觀察  
郡守適從スル所ヲ知ラス況ヤ細民ヲヤ農商  
工部ノ施設ハ内部ノ方針ト相衝キ觀察郡  
守遵則スル所ヲ知ラス況ヤ細民ヲヤ身内部ニ  
在リテ眞ニ地方行政ノ實ヲ舉ゲントスルニハ決シ  
テ現状ヲ以テ遂行シ得ヘキニ非ス

以上ノ三綱ノ大刷新ヲ實行セラレハ秉峻カ新  
協約ニ翼賛セシノ真意貫行セラルヲ得既ニ  
骸骨ヲ乞ヒテ再ニ内部ニ留マリシ實情モ徒為  
ニ屬セサルヲ得テ秉峻幸ニ尸位ノ主貝ヲ免ルヲ  
得ン

統監閣下ハ精力神ノ如シ其事ニ必泣マルヤ滿  
ヲ持シテ放クス端拱シテ機ヲ鑑セラル若シ閣下  
此間ニ處シテ宏謨ヲ畫セラルニ非サレハ他人敢  
テ玄樞ヲ轉ヌヘキニ非ス區々誠願クハ東  
洋ノ為メニ韓國ヲ負荷シ合同政府ヲシテ  
速ニ其實ヲ交サシメタマハンコトヲ懇款ノ至ニ  
任フルナシ

十月三日

宋秉峻再拜

桂老侯閣下

名 称	小 川 平 吉 文 書
標 題	朴 三 永 考

分 類 番 号	

389-1

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

東京市麹町區

内幸町一丁目五番地

小川平吉殿

京城府崇仁洞八  
朴泳孝

得微歲令の候  
當りて清穆の  
世に孝賢の  
相繼日粗永少く  
市邊に上りて父  
老の寧ろき書物  
膝下にし孩穉を  
抱きて是れ不願  
却りて恐海に坐す  
る所故に書中  
に孝厚神皇及

所為遠年不頌

却為恐海不深

而為敬書中

反為厚禮上

如此之佳

明初為斗主月平

朴詠春

小川平老殿

名称	小川平吉文書
標題	朴 三永 考

分類 番号	

389-2

登録 番号	
----------	--

東京市麹町區

內幸町一、五

小川平吉殿



京城府崇仁洞公  
朴泳孝

漢臣徽在候

益之懷勝被

如所之知之

其下拙者幸也

其果之知之

下地之知念被

下地之陳有過日

佳漢氏亦上之

松渡五仙誼六瓶

下血下陳有過日

性寒或赤上ノ砂

松液五仙酒六瓶

拔逆以唐書ノ安

目酒ハ筋肉硬化

防止ハ効能有之

ト帰バ試飲ヲ

得ハ幸甚ト云リ

存下

此ハ昔々ノ自覚

神遊反ハ多ク飯

ハ米肉近ハ此等ハ

名実

存

此書自

神遊反

業內

吳

昭和四年一月

朴

小川平吉殿

名称	小川平吉文書
標題	朴 三永 考

分類 番号	

389-3

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



東急市口右馬場

小川平甚閣下





新城府崇仁公

朴泳孝

お啓光輝ある年の始めに  
常り閣下の清健康と清奮  
闘とを祈り併せて倍舊の清  
厚誼を幸希上に陳るなり  
茲稱ある清品の清想贈に際し  
取調に店多く厚く清禮申  
上書先は石所故右清挨拶  
清少部清庭書 敬呈

昭和九年一月四日

朴泳孝

小川平吉閣下

名称	小川平吉文書
標題	朴 永 考

分類 番号	

389-4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



東東市銀道省  
八川平吉閣下



秋

忠南儒城溫泉

朴泳孝

十二月

お形もあえ

枝家と云

邊りともお形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

お形もあえ

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

長

致すことには、中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

長

中書省新書院に有之

中書省新書院に有之

稍老軍士迎致

老翁

先心故主德壽堂

高上高如些

有具

二月十日

杜泳老

可利長閣

名 称	小 川 平 吉 文 書
標 題	朴 三 永 考

分 類 番 号	

389-53

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--



東京麹町區昆比谷公園前  
小川平吉殿

東府堂  
公  
和  
派  
子

後無意と云

其文其言其

事其世其

名其行其

却然其

涌然其

神に

眉の上

可也

承然

近

照

朴

小川

名称	小川平吉文書
標題	朴重陽

分類 番号	

390-1

登録 番号	
----------	--

東京麹町内幸町

小川國勢阮總裁閣下



朝鮮海州

朴重陽

(黃海道封筒甲第參號)

拜啓政務多端御繁忙之事ト御察之申  
上候就テ最近当地方格別度別タル  
コトモ無之候地方人民ハ誠ニ質朴太  
古ノ民トモ見テハ一部青年輩安想  
誤解シタル様ニ至ル迄自覺スル處  
リ外部ヨリ煽動ヲ受ケテ此以前  
少ク又警察力伸張スルニ共ニ地方  
静穏ニ歸シ候但シ朝鮮人タル者殊ニ  
官海ニ游泳シタル者及其子弟或ハ外  
國ニ遊ビタル者或ハ新教育ヲ受ケタ

拜啓政務多端御繁忙之事ト御察之申  
上候就テ最近当地方格別度別タル  
コトモ無之候地方人民ハ誠ニ質朴太  
古ノ民トモ見テハ一部青年輩安想  
誤解シタル様ニ至ル迄自覺スル處  
リ外部ヨリ自覺煽動シ受ル所ニ非比前  
少ク又警察力伸張スルト共ニ地方  
静穏ニ歸シ候但テ朝鮮人ヨリ者殊ニ  
官海ニ游泳シタル者及其子弟或ハ外  
國ニ遊ビタル者或ハ新教育ヲ受ケタ

總督政治ヲ謳歌ス可シ如何ニ祖國思  
想ヲ有スル朝鮮人ト雖モ二十年三十  
年經過スル内ニ内鮮一家ト作ルニ  
務メタルハ此ノ在ニ立決行ヲ能ハシ  
テ東ヲ知ルニ至ルハ所望ニ候ハ生  
リ去ル年月尙黃海道ニ赴任以來道行  
政ニ全力ヲ注グコトハ時局ニ對スル  
誤解ヲ解リ去ル及産業政策ニ有之候  
尙ホ將來朝鮮發達ノ時點ニ朝鮮以財  
源ヲ以テ母國政府ヲ助ケ時期熟スル

ルモノト信シ候うへ共今日ニ於テハ  
朝鮮ヨリ收穫ヲ望ム時期ニアラサル  
ハ謂フ迄モナク出来得ル限りハ多ク  
ノ種子ヲ蒔ク可キ時期ニ有之候何卒  
朝鮮事情御洞察ノ上朝鮮ニ對シ産業  
教育其他へ御同情御扶救アラント  
シ偏ニ願上候去ル八月中管内巡視狀  
況一部御参考迄ニ差上候 敬具

大正十年十月府早

拜

朴重陽

...如...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

少川國勢院總裁閣果

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

名称	小川平吉文書
標題	朴重陽

分類 番号	

390-2

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

東京麴町内幸町

小川平吉

親友

閣下



信

郵  
局  
大  
郵  
站  
山  
重  
陽

謹啓上京中御指道等。

蒙、候段深、感銘智力

、足、限、其効果、々顯

致度心等、御座候等

名古屋、京都、大坂等、地

、經、無事歸鮮致居候

御、意被下度御願申

上候滞京中、朝野政客

、接、治鮮意見、交復

御公意被下度御願申

上候滯京中、朝野政客

接、治鮮意見、交授

期會少ナキヲ遺憾

存候

朝鮮統治、空想、理論

具體的、實行、以、信、天

下、示、外、良策無之、存

候

政務多端、除偏

閣下、御健康ヲ祈上候

敬上

下ニ示ス外ニ良策無シト存

候

政務多端之際偏

閣下御健康ヲ祈上候

敬上

大正九年十一月八日

朴重陽 拜上

小川閣下

名称	小川平吉文書
標題	朴重陽

分類 番号	

90-3

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

東京麴町西一五

小川平吉殿

侍史

武

名

鮮

大

少

石

山

木

重

滿

相至先四之御

清業敬与望

候今度志慶

去上道達成

御中李鍾國

是内務省に於て

地官に政務司

と云ふ心算の名

地官以政講習

志心張之

上無慮

御名介事上候

次御祭所

御來威御座

是乃宜敷

御指傳賜

度御所

是乃宜敷

御指厚賜

度御所

候李尉

伊藤乙統

代小生推薦

依々書仕

手有候

敬具

二 依、書、仕、之、心

三 有、之、候

敬具

大正九年九月十日

於大邸 朴産陽

小川 夫人

乙 机、下

名称	小川平吉文書
標題	朴重陽

分類番号	

320-4

国立国会図書館

登録番号	
------	--



小國勢院總裁閣下

黃河為利毒在陽

謹啟

識會無子孫之

為邦家之憂

內外之禍

此其所以

也

當盡海通之

統緒

當重海道三卦任事

執紼後名多少時局

標榜元不逞徒存

為不愧為得志事情

知見者云如大眾

年之氣候治安保持

狀況之今觀之韓必

政府時代比較之今日

先聲時代之所謂候

何也其中不逞之思想

先聲時代，亦可謂候

何也？中不逞之思想，

清掃之今，自信之月，

何年？此其被下度也，

卦位，後部守之集，名記

收況，輕取之，又去，有月，平

目，天，載，亨，安，長，風，山

黃州，第一，浦，道，津

長，訓，松，木，銀，粟，各，如

黃州黃浦黃浦

長洲松木銀粟老翁

追慕終身受地方食

詩：淳朴之民之

黃州黃浦黃浦

沈明望地之有之

必西鮮之寶厚之

信終在湛既水利

計之天雨之待之

甲為之分臨細

計其天雨之待之龍田之  
用爲之方臨細舞  
水用爲之箇所一望雁  
有上言外無之不知水  
利阻店所之組織之  
一言之爲也授之也  
二十倍字倍富之增  
難之元可之之要之金  
人向終始胡餅產  
爲物之爲之應物之  
爲物之爲之應物之

今商部擬朝鮮產業

為物產調查處附設

該部中所有各地境

內所調查第一冊調查

之調查所及調查之

朝鮮現狀之付中

子多之調查所及

朝鮮現狀之付中

有之調查所

商部下所健康

快如拍即響

有定理

偏閣下御健康

奉新上候 敬白

大正九年四月十日

河州智智堂

朴金陽

再拜

小川國雄院飯裁

閣下

再錄

小川國銘院飯裁

閣下

近于小官來二十日過

知事屬議為東坂一也

張鶴定三區在

名称	小川平吉文薈
標題	朴重陽

分類 番号	

390-5

登録 番号	
----------	--

東京麴町内幸片

小川平吉閣下

書  
親展

11号



大郎砧山

一本  
宜陽

謹啓電報難有虔感謝

致候山梨總督、社風、

送、候、  
來月四日入京

親、面談致、心算、御

座候總督未確定、時、人

新聞紙上等、不遜、人記事

見、今日、新總督、迎

入、可、御世辭多、有、候

新聞紙上、我等、總督、迎、

ヲ見んを今日ニ新總督ヲ迎  
へん可き御世辭多々有し候  
新聞紙上ニ我等、總督ヲ迎へ  
ル云々、題下、極度ニ讚辭ニ  
ラフルヲ散見致し人々、アサハカ  
ナル殊更ニ感候小梨氏ハハ  
車中ニ於テ左ノ如ク注意申置  
候

廣く人士ニ接せんコト

來訪者ヲ謝絶せんコト

赴任早初ヲ忌カラ減じ主義ヲ執ルコト

言質ヲ與ヘサルコト

殊ニ人事行政ニ云々スルコトヲ避ケンコト

人事整理ヲ先キニ着手スルコト

言質ヲ與ハサルコト

殊ニ人事行政ニ至ルニハコトハ通ルコト

人事整理ヲ先キ着手スルコト

人事行政ニ失敗セバ前途困難ナルヘシ

右ノ通り候

朝鮮人政務總監ヲ置ルニ差支

ナキ御意向ニ御座候ハズ此際

カキ御詮議被下度御願申

上候又々其時期アラバトノ議論

アリテ朝鮮人ノ政務總監ニスルコ

トハ見込ナシトスレバ前申上候

通官ノ内務局長ニ御推舉

ラサシ度御願申上候 少々ハ二十

餘年勤任ヲ繼續シ今更一局

アリテ朝鮮人の政務總監ニシテ

トハ見込ナシトスレバ前申上候

通<sup>少</sup>省、内務局長、御推舉

タリサシ度御願申上候<sup>少</sup>ハ二十

餘年勅任ヲ繼續シ今更一局

長任ヲ要望スル自ラ顧ミテ感

懷<sup>ナキニ</sup>アラズ候也<sup>ト</sup>朝鮮統

治、大切ナル思ヘル官位、高下

ハ<sup>少</sup>省、問、蒙<sup>ニ</sup>アラズ候新總督

ヲ迎ヘル今日是非トモ總督ヲ補

佐<sup>少</sup>、理想、幾分ナリトモ實

現ニテ見度希望ニ堪ヘズ候

特別御配慮ヲ御願申上候

「近人今日是非」之總督の神

佐<sup>サ</sup>、理想、幾分、ト、實

現ニテ見度希望ニ堪ハス候

特別御配慮ノ御取申上候

敬上

昭和二年十月二十日 相上

朴重陽

小川 閣下

名称	小川平吉文書
標題	李 容 九

分類 番号	

394-1

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

大兄  
年  
境  
作

海山

敬頌

病寧也度南

道未堅地記呈

而若過今春

過限取消之境

信速回愛切

企矣朝鮮美

術工場所製造

銀面一雙印

企羨朝鮮美  
術工場所製造  
銀盃一隻併  
呈笑顧復以  
作紀念美好  
不具禮

百才天、李新  
九

梁川大兄啟

名 称	小 川 平 吉 文 書
標 題	李 容 九

分 類 番 号	

394-2

登 録 番 号	
------------------	--

四十三

韓愈

李密

宋伯

了

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

辯護士 小川平吉法律事務所

電話長距離新橋五五二

明治四十年

月 日

卷九  
 卷十  
 卷十一  
 卷十二  
 卷十三  
 卷十四  
 卷十五  
 卷十六  
 卷十七  
 卷十八  
 卷十九  
 卷二十

[illegible]

林森路東

進分長木の宗九と号す書西柳  
明治十年一月九日  
松平屋

二  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

拜啓小弟去書

謙倉店開商告漢移店出有

數日子平子如

芳翰接一先以

而壯健愈々令瘳子

少快欣新小回飲すれは

熱海之客舍之置酒

高備す一子年已一関

年今や千里袂をあ

き亦當る歡を尽すと

得ると懽む然れど小貴

兄四面道里之立る

都令邦之大義を

道一毅至了る處

兄「四面<sup>萬ん又抗不有</sup>達<sup>て</sup>る裡<sup>に</sup>立<sup>ち</sup>る

部~~連~~合邦<sup>に</sup>大義<sup>を</sup>

唱<sup>な</sup>遣<sup>は</sup>し<sup>て</sup>教<sup>を</sup>玉<sup>に</sup>る<sup>を</sup>屈<sup>く</sup>

す小<sup>こ</sup>弟<sup>てい</sup>亦<sup>また</sup>遙<sup>とほ</sup>かに之<sup>の</sup>小<sup>こ</sup>と

和<sup>わ</sup>し東西<sup>とうせい</sup>呼<sup>よ</sup>應<sup>おう</sup>し<sup>て</sup>將<sup>まさ</sup>に

霜<sup>しも</sup>昔<sup>むかし</sup>も素<sup>す</sup>衣<sup>い</sup>を<sup>を</sup>送<sup>おく</sup>り

其<sup>その</sup>多<sup>た</sup>し<sup>に</sup>則<sup>すなは</sup>ち千里<sup>せんり</sup>袂<sup>たもと</sup>を

分<sup>わ</sup>つと<sup>い</sup>つ<sup>も</sup>も亦<sup>また</sup>一<sup>いつ</sup>塵<sup>ちん</sup>に<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>

望<sup>のぞ</sup>し<sup>て</sup>時<sup>とき</sup>月<sup>げつ</sup>を把<sup>と</sup>り<sup>て</sup>歎<sup>かな</sup>談<sup>だん</sup>す

唯<sup>ただ</sup>

當<sup>あた</sup>さに相<sup>あ</sup>共<sup>い</sup>に

自<sup>みづか</sup>愛<sup>あ</sup>し<sup>て</sup>努<sup>つと</sup>力<sup>りき</sup>其<sup>その</sup>人<sup>ひと</sup>の

來<sup>きた</sup>書<sup>しよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>高<sup>たか</sup>誨<sup>へ</sup>ハ悉<sup>しつ</sup>

皆<sup>みな</sup>我<sup>われ</sup>意<sup>い</sup>を<sup>を</sup>得<sup>と</sup>たり<sup>に</sup>抑<sup>おさ</sup>へ

日<sup>に</sup>韓<sup>かん</sup>合<sup>が</sup>邦<sup>ぱう</sup>に<sup>に</sup>議<sup>ぎ</sup>の自<sup>みづか</sup>我<sup>われ</sup>

に大<sup>だい</sup>勢<sup>せい</sup>に<sup>に</sup>恰<sup>ただ</sup>ハ旭<sup>あつ</sup>日<sup>にち</sup>に

東<sup>とう</sup>より上<sup>かみ</sup>より西<sup>せい</sup>す<sup>に</sup>か如<sup>ごと</sup>く

張<sup>ちやう</sup>大<sup>だい</sup>陣<sup>じん</sup>を<sup>を</sup>布<sup>ふ</sup>く

日韓合邦の議、自強

の大勢、一に恰も旭日に

東より上り、西より如

張人、勝る者、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢

誰か、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢、其勢

一家といふ邦に得たるや

一 <sup>吾人か</sup> 向学ありて一

速かに其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

当に成る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

又 <sup>目録</sup> 其の書に到る

[illegible]

丁巳年  
冬  
人  
之  
誠  
語  
也

徳環すの如く  
常人之如く

淫女淫行、状を觀む

不七然  
運  
然  
移  
一  
田  
味

其五  
何人  
あ  
ち  
す  
ん  
は  
あ

彼、時亡國に  
て

果然令人  
心老  
口

九月十八日  
 夜に  
 遊す

預  
く  
は  
加  
製  
白  
二

世  
人  
之  
終  
始  
并  
世

一  
西  
可  
員  
福  
商  
儒  
生  
家  
長

現代正書局之書

色  
所  
、  
年  
六  
所  
更

功  
次  
三  
年

下  
百  
血  
強  
氣  
平

卷二

李仁孝

名称	小川平吉文書
標題	李容九

分類 番号	

394-3

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



うふいひにあらん

たそ 子 二 月 八 日

(17) 二

一 謹 啓 本 宅 大 以 下 書 列

謹啓。日月逾邁、歲聿其暮。高堂觴耆、  
西窓燭剪、疇昔の懽、今果して何如や。伏して  
以みるに、臺下明德を信崇し、寔々匪躬、果して當に復  
手を握り相慰むべし。葵向の情、遙に東風を望む。一陽  
萬福を祝するのみ。日韓合邦の議、たゞ出づるや、貴邦  
新聞謬て訛説を傳へ、底止する所を知るなし。兩國  
關係に於て、最後の最大最重事、或は將に兩國の耳目を  
眩惑し、大事をして蹉跎扞格して通ぜざるを致さるべし  
とす。夫れ敝邦の輿論、容九微なりと雖、一容九あらば亦  
以て之を一定するに足る。唯好爵の徒を縻ぎ、上は内閣を  
走り下は觀察郡守に至る迄、輿論一朝の榮を懷ひ、萬

大東文化協會

代の計を遺こす、極力民意を塗抹し、以て新聞の力を  
原燎を撲滅すべしと。何ぞ其の此に嚮導すべからざるを  
知らんや。唯恐る之を鄙吝に失するを、寧ろ怒りて之を  
憫まざるのみならんや。然りと雖合邦の事、利敝邦に在りて  
而して貴邦は與らず、敝邦●農に豐産無く、工に巧  
技無し、商は以て世界に通ず可からず、士は以て千里を致  
すべからず、江山一塞を見ず、海島一艦を浮べず。之を  
以て貴邦に合す、まさに以て貴邦の貧弱を加ふるのみ。甚  
しいかな、貴邦輿論の揚らざるや。而して貴邦人京城新  
聞記者團に存りて、絶對併吞云々を決議するに至る。夫  
れ容九志を蓄ふこと五年、首を回して此大事に遇ふ。將に  
以て社稷人民を萬安の地に置き、永く一家翕樂の慶に賴

名称	小川平吉文書
標題	李容九

分類 番号	

394-4

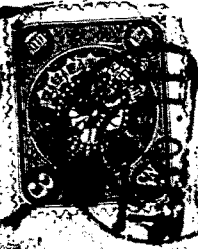
国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

不承 麵町内幸町一五

外川平吉殿

親父長



引石

未時南無阿彌陀佛

未時南無阿彌陀佛

六日

漢唐公傳世

關子親賜回答

此上時

其甚道是并任

如仙唯多福生

自狂唱合弄

後民道中至

久昨新持在

天帝而止之

好見福氣運

久唯祈禱在時

天帝而止之至

好見祥風送帆

瑞年之望東來

九

其海山下日道昭

力乎風候昌

唯祈之聲了官

致助于大自所

道之能味其

止祝候

道神如而西時

局午字書復也

致盼于大自所必  
達之能味其  
止祝候

道紳各為西時  
向午字德詩

消月車家九

小川平告

大書下

謹啓者錦城

花開子親觴

幽香正此時

幸甚幸甚

何如伏唯

福生自極

郭之復

半歲之久

福生自極唱合  
邦之後矣適  
半戲之令人  
唯於待新待  
天命而已之  
近好見和風  
送風瑞平之  
呈芳文也卷  
世  
春是下回送  
唱和之力乎  
感射易已佳

九

其是下回是

唱和力平

感谢已佳

祈方静会

力转于大目的

必達令敢陈

系象上祝

通能亦西

时与千会根

後

六月

李安九

通曉 東亞

時 千 家 根

後

六月

李 家 九

平 夫

老 皇 下

名称	小川平吉文書
標題	李容九

分類 番号	

394-53

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

謹誌者日月逾邁歲事云暮矣高  
堂舉觴西窓剪燭疇昔之懽今果何  
如哉伏以臺下信崇明德臺上匪躬果  
當復握手相慰葵向之情遙望東風  
祝一陽萬福早日韓合邦議一出也貴邦  
新聞謬傳訛說靡知所底止於兩國  
係最後之最大最重事或將眩惑於兩  
國耳目使大事致蹉跎起扞格不用夫  
叔邦輿論雖名九微矣有一客九亦足以一  
定之唯靡於好爵之徒上自內閣元老下至

觀察郡守舉懷一朝之榮遺萬代之計  
極力塗抹民意以為新聞之力可以撲滅  
原燎何知其不可嚮導乎此唯恐失之  
鄙吝寧不怒而愀之而已雖然合邦之事  
利在敵邦而貴邦不與焉敵邦農無豐  
產工無巧技商不可以通世界士不可以致  
千里江山不見一塞海島不浮一艦以之合于  
貴邦適足以貴邦貧弱而已甚矣貴邦  
輿論之不揚也而至貴邦人在京城新聞記  
者團決謝絕對曰併吞以夫容九世萬志五

李容九  
人名

年四省遇此大事將欲置社稷人民於萬  
安之地永賴一家翁樂之慶也非將欲以四千  
載故國一千五百萬韓民族為貴邦奴隸也  
容九為奴而生字不若其一百萬金負七十三  
萬金者祇負商及儒生外教徒自經耳  
瀆而死矣胡為汲汲乎復論國利民福哉  
容九熟思之往且之與年觴勇燭也其臺下之  
志決無欲奴容九之意也轉將有加弟撫之  
情也然則京城記者團之決議非貴國輿論  
而何貴邦輿論之不揚由有未喻乎利也容

景仰

業為叔邦友四千年負弱之病卒為世界立  
前絕後之鴻謨非待貴今上天皇陛下  
而誰乎待貴容九嗟呼唯此不及時是為此  
也其陛下請毋偏貴邦小不利厲發貴邦與  
論必起斯開無前之洪業若其合邦  
條保唯貴今上陛下聖謨之所不顯容九等  
唯家同慶三就光而已敢茲披瀝肝膽唯  
下察知時惟嚴老常祈道性為國得重

陸熙三年十二月

李容九再拜

小川平吉

老其下